

岐阜県文化財保護センター

調査報告書 第126集

岩田西遺跡

(第1分冊)

2013

岐阜県文化財保護センター

いわ た にし
岩 田 西 遺 跡
(第1分冊)

2013

岐阜県文化財保護センター



遺跡遠景（東から）



C地点1面遺構（南から）



B 地点出土 漆器 (1552)



E 地点 NR001 出土 須恵器 (78~80)



C 地点出土 緑釉陶器 (711)



刀・刀装具



C 地点出土 須恵器火舍香炉蓋 (799)



D 地点出土 摺漢式鏡 (1781)



B 地点出土 青磁鉢 (1149)



E 地点出土 銅鈴 (1783)

E 地点出土 銅鈴 (1784)

序

清らかな長良川が市域を西流し、緑豊かな金華山がそびえる岐阜市は、斎藤道三や織田信長にまつわる岐阜城や、古来から受け継がれてきた鵜飼漁など、豊かな歴史的民俗的景観に恵まれ、情緒ある文化を守り育てている町です。

このたび、国土交通省中部地方整備局岐阜国道事務所による 156 号岐阜東バイパス建設事業に伴い、岐阜市岩田西に所在する岩田西遺跡の発掘調査を平成 20・21 年度に実施しました。

今回の調査では、古墳時代の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝跡、中世の畦畔・溝跡・水田遺構などを発見しました。特に明治の字絵図とほぼ同位置に畦畔や水田遺構を発見しました。これは室町時代から昭和の区画整理前までほぼ同区画の水田面を使用していたことになり、貴重な発見になりました。本報告書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査及び出土遺物の整理・報告書作成に当たりまして、多大な御支援・御協力をいただきました関係諸機関並びに関係者各位、岐阜市教育委員会、地元地区の皆様に深く感謝申し上げます。

平成 25 年 3 月

岐阜県文化財保護センター

所長 丸山 和彦

例言

- 1 本書は、岐阜県岐阜市岩田西に所在する岩田西遺跡（岐阜県遺跡番号 21201-08610）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、156 号岐阜東バイパス建設事業に伴うもので、国土交通省中部地方整備局岐阜国道事務所から岐阜県が委託を受けた。発掘調査及び整理作業は、財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター（平成 21 年度から岐阜県文化財保護センターに改組）が実施した。
- 3 宇野隆夫国際日本文化研究センター教授の指導のもとに、発掘調査は平成 20・21 年度に、整理作業は平成 21～24 年度に実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当は、本書第 1 章第 2 節に一括掲載した。
- 5 本書の執筆は第 1 章第 2 節を小林が、それ以外を近藤が行った。また、編集は近藤が行った。
- 6 発掘調査における作業員雇用、現場管理、掘削、測量、景観撮影などの業務と、出土遺物の洗浄・注記は、株式会社ユニオンに委託して行った。平成 24 年度の二次整理作業は図版作成等を株式会社イビソクに委託して行った。
- 7 遺物の写真撮影は、アートフォト右文、株式会社イビソクに委託して行った。
- 8 花粉分析、プラント・オパール、胎土分析は、株式会社パレオ・ラボに委託して行った。第 4 章に掲載した。執筆は株式会社パレオ・ラボによる結果をもとに近藤が行った。
- 9 発掘調査及び報告書の作成に当たって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略・五十音順）
朝田公年、井川祥子、伊藤英晃、内堀信雄、久保智康、寒川旭、説田健一、千藤克彦、高木和宏、中野晴久、長屋幸二、野澤則幸、八賀晋、藤澤良祐、溝口彰啓、戸下浩、山田昌久、吉田真由美、渡邊博人、
岐阜市教育委員会、財団法人岐阜市教育文化振興事業団
- 10 本文中の方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標系第Ⅷ系を使用している。
- 11 土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄 2006『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。
- 12 調査記録及び出土遺物は、岐阜県文化財保護センターで保管している。

目 次（第1分冊）

序

例言

第1章 調査の経過.....	1
第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 調査の経過と方法.....	4
第2章 遺跡の環境.....	15
第1節 地理的環境.....	15
第2節 歴史的環境.....	17
第3章 調査の成果.....	21
第1節 基本層序と遺構確認面.....	21
第2節 遺構概要.....	25
第3節 遺物概要.....	43
第4節 水田関係以外の遺構（古墳・平安時代等）.....	49
第5節 水田関係遺構（中世以降）.....	127
第6節 遺物（古墳～江戸時代）.....	203

報告書抄録

第2分冊目次

第3章 調査の成果

 遺構全体図分割図、遺構観察表、遺物観察表

第4章 自然科学分析

 第1節 B・E地点のプラント・オパール

 第2節 B・D・E地点の花粉分析

 第3節 岩田西遺跡・中屋敷遺跡出土古代瓦の胎土分析

第5章 総括

 第1節 岩田西遺跡のまとめ

 第2節 岩田地域のまとめ

参考文献

写真図版

挿図目次

図 1	遺跡位置図	2
図 2	調査区位置図	2
図 3	試掘坑位置図	3
図 4	グリッド設定図	5
図 5	A・B地点グリッド設定図	6
図 6	C・D地点グリッド設定図	7
図 7	E地点グリッド設定図	8
図 8	遺跡周辺の地質概略図	15
図 9	発掘調査区周辺の地形	16
図 10	周辺遺跡位置図	19
図 11	地籍図	20
図 12	基本層序図(1)	23
図 13	基本層序図(2)	24
図 14	遺構分類模式図	27
図 15	調査区全体図(1)Ⅲb層	28
図 16	調査区全体図(2)Ⅲc層	29
図 17	調査区全体図(3)V層	30
図 18	遺構全体図(A地点 1面)	31
図 19	遺構全体図(A地点 2面)	32
図 20	遺構全体図(A地点 3面)	33
図 21	遺構全体図(B地点 1面)	34
図 22	遺構全体図(B地点 2面)	35
図 23	遺構全体図(B地点 3面)	36
図 24	遺構全体図(C・D地点1面)	37
図 25	遺構全体図(C・D地点2面①)	38
図 26	遺構全体図(C・D地点2面②)	39
図 27	遺構全体図(E地点 1面)	40
図 28	遺構全体図(E地点 2面)	41
図 29	遺構全体図(E地点 3面)	42
図 30	瓦の部分名称・計測位置	46
図 31	木製品細部分類	46
図 32	S D 1～4 遺構図	65
図 33	S K 3～11 遺構図	66
図 34	S K 12～21 遺構図	67
図 35	S K 13・22・23 遺構図	68
図 36	S A 2 遺構図	69
図 37	S D 25～28 遺構図	70
図 38	S K 25・26・S U 1 遺構図	71
図 39	S K 27・28 遺構図	72
図 40	S A 3 遺構図	73
図 41	S A 4 遺構図	74
図 42	S B 1 遺構図	75
図 43	S B 2 遺構図	76
図 44	S B 3 遺構図	77
図 45	S H 1 遺構図(1)	78
図 46	S H 1 遺構図(2)	79
図 47	S H 2 遺構図(1)	80
図 48	S H 2 遺構図(2)	81
図 49	S D 35～37・50・63～65 遺構図(1)	82
図 50	S D 35～37・50・63～65 遺構図(2)	83
図 51	S D 38・39・48・49・52 遺構図	84
図 52	S D 40～43 遺構図	85
図 53	S D 44～47 遺構図	86
図 54	S D 51 遺構図	87
図 55	S D 58・59 遺構図	88
図 56	S D 60～62 遺構図	89
図 57	S D 60・61 周辺出土状況	90
図 58	S I 1・2 遺構図	91
図 59	S K 34～37 遺構図	92
図 60	S K 38～45 遺構図	93
図 61	S K 48～52 遺構図	94
図 62	S K 53～55 遺構図	95
図 63	S K 56～64 遺構図	96
図 64	S F 1・2・S K 65～69 遺構図	97
図 65	S K 74～76 遺構図	98
図 66	S K 70・77～79・81 遺構図	99
図 67	S K 46・84 遺構図	100
図 68	S K 47・71・80・82・83・85 遺構図	101
図 69	S K 88～93 遺構図	102
図 70	S K 94～102 遺構図	103
図 71	S K 103～106 遺構図	104
図 72	S K 107～111 遺構図	105
図 73	S K 112～114 遺構図	106
図 74	S K 115・S X 2 遺構図	107
図 75	S P 1～9 遺構図	108
図 76	S X 1 遺構図	109
図 77	S T K 1～47 遺構図(1)	110
図 78	S T K 1～47 遺構図(2)	111
図 79	S T K 1～47 遺構図(3)	112
図 80	S D 81・82・85・86・N R 2・3 遺構図	113
図 81	S D 70～80 遺構図(1)	114
図 82	S D 70～80 遺構図(2)	115
図 83	N R 1 遺構図(1)	116
図 84	N R 1 遺構図(2)	117
図 85	S K 117～123 遺構図	118
図 86	S K 1 遺構図	119
図 87	S D 5・7・8 遺構図	120
図 88	S K 24 遺構図	121
図 89	S D 32 遺構図	122
図 90	S D 33 遺構図	123
図 91	S K 29～33 遺構図	124
図 92	S K 87 遺構図	125
図 93	S K 116 遺構図	126
図 94	遺跡周辺小字名	134
図 95	S M 2 遺構図	143
図 96	S M 1・S T 1～3 遺構図	144

図 97 S T 4・5 遺構図	145
図 98 S A 1 遺構図	146
図 99 S D21 遺構図 (1)	147
図 100 S D21 遺構図 (2)	148
図 101 S D22・23 遺構図	149
図 102 S D 6・9、SM17 遺構図 (1)	150
図 103 S D 6・9、SM17 遺構図 (2)	151
図 104 S D19・20、SM30 遺構図 (1)	152
図 105 S D19・20、SM30 遺構図 (2)	153
図 106 S D29、SM43 遺構図	154
図 107 S D30、SM41・42 遺構図	155
図 108 SD11・14~16・24、SM5・32・39 遺構図 (1)	156
図 109 SD11・14~16・24、SM5・32・39 遺構図 (2)	157
図 110 SM 3~24、S T 6~20 遺構図 (1)	158
図 111 SM 7~10・13~16、SD17 遺構図	159
図 112 SM18~21・23、SD13 遺構図	160
図 113 S S 1、S D 6、STR 1 遺構図	161
図 114 SM 3~24、S T 6~20 遺構図 (2)	162
図 115 SM 3~24、S T 6~20 遺構図 (3)	163
図 116 SM25~38、ST22~34、STD4~6 遺構図 (1)	164
図 117 S M31・33~38、STD 1 遺構図	165
図 118 SM25~38、ST22~34、STD4~6 遺構図 (2)	166
図 119 SM25~38、ST22~34、STD4~6 遺構図 (3)	167
図 120 S T D 2~5 遺構図	168
図 121 S D24・29・30、SM39~44 遺構図	169
図 122 C D地点 1面 南水田遺構図	170
図 123 S M48~54 遺構図	171
図 124 S M73~76・80~83 遺構図	172
図 125 S T D 9 遺構図	173
図 126 C D地点 1面 中央水田遺構図 (1)	174
図 127 S M45・46・55・59~61・71 遺構図	175
図 128 SM72・77~79・85・86 遺構図	176
図 129 S S 2、STD 7・8 遺構図	177
図 130 C D地点 1面 中央水田遺構図 (2)	178
図 131 C D地点 1面 中央水田遺構図 (3)	179
図 132 D地点 1面 北水田遺構図 (1)	180
図 133 S M69~71・84・87 遺構図	181
図 134 D地点 1面 北水田遺構図 (2)	182
図 135 D地点 1面 北水田遺構図 (3)	183
図 136 S T D10~12、SK86 遺構図 (1)	184
図 137 S D56・57、SM85・86 遺構図	185
図 138 S T D10~12、SK86 遺構図 (2)	186
図 139 S D68 遺構図	187
図 140 S D66~69 遺構図 (1)	188
図 141 S D66~69 遺構図 (2)	189
図 142 S D66~68 遺構図	190
図 143 S D69 遺構図	191
図 144 E地点 1面 北水田遺構図 (1)	192
図 145 E地点 1面 北水田遺構図 (2)	193
図 146 SM87~93・101・102 遺構図	194
図 147 E地点 1面 南水田遺構図 (1)	195
図 148 E地点 1面 南水田遺構図 (2)	196
図 149 S M97~100・106 遺構図	197
図 150 S M110~118、S T91~100 遺構図	198
図 151 S M110~112・114~116 遺構図	199
図 152 S M117~121、S T100~103 遺構図	200
図 153 S D69、S M117~121 遺構図	201
図 154 E地点足跡平面図	202
図 155 土器 遺構出土 (1)	211
図 156 土器 遺構出土 (2)	212
図 157 土器 遺構出土 (3)	213
図 158 土器 遺構出土 (4)	214
図 159 土器 遺構出土 (5)	215
図 160 土器 遺構出土 (6)	216
図 161 土器 遺構出土 (7)	217
図 162 土器 遺構出土 (8)	218
図 163 土器 遺構出土 (9)	219
図 164 土器 遺構出土 (10)	220
図 165 土器 遺構出土 (11)	221
図 166 土器 遺構出土 (12)	222
図 167 土器 遺構出土 (13)	223
図 168 土器 遺構出土 (14)	224
図 169 土器 遺構出土 (15)	225
図 170 土器 遺構出土 (16)	226
図 171 土器 遺構出土 (17)	227
図 172 土器 遺構出土 (18)	228
図 173 土器 遺構出土 (19)	229
図 174 土器 遺構出土 (20)	230
図 175 土器 遺構出土 (21)	231
図 176 土器 遺構出土 (22)	232
図 177 土器 遺構出土 (23)	233
図 178 土器 遺構出土 (24)	234
図 179 土器 遺構出土 (25)	235
図 180 土器 遺構出土 (26)	236
図 181 土器 遺構出土 (27)	237
図 182 土器 遺構出土 (28)	238
図 183 土器 包含層出土 (1)	239
図 184 土器 包含層出土 (2)	240
図 185 土器 包含層出土 (3)	241
図 186 土器 包含層出土 (4)	242
図 187 土器 包含層出土 (5)	243
図 188 土器 包含層出土 (6)	244
図 189 土器 包含層出土 (7)	245
図 190 土器 包含層出土 (8)	246
図 191 土器 包含層出土 (9)	247
図 192 土器 包含層出土 (10)	248
図 193 土器 包含層出土 (11)	249
図 194 土器 包含層出土 (12)	250
図 195 土器 包含層出土 (13)	251
図 196 土器 包含層出土 (14)	252

図 197 土器	包含層出土 (15)	253
図 198 土器	包含層出土 (16)	254
図 199 土器	包含層出土 (17)	255
図 200 土器	包含層出土 (18)	256
図 201 土器	包含層出土 (19)	257
図 202 土器	包含層出土 (20)	258
図 203 土器	包含層出土 (21)	259
図 204 土器	包含層出土 (22)	260
図 205 土器	包含層出土 (23)	261
図 206 土器	包含層出土 (24)	262
図 207 土器	包含層出土 (25)	263
図 208 土器	包含層出土 (26)	264
図 209 土器	包含層出土 (27)	265
図 210 土器	包含層出土 (28)	266
図 211 土器	包含層出土 (29)	267
図 212 土器	包含層出土 (30)	268
図 213 土器	包含層出土 (31)	269
図 214 土器	包含層出土 (32)	270
図 215 土器	包含層出土 (33)	271
図 216 土器	包含層出土 (34)	272
図 217 土器	包含層出土 (35)	273
図 218 土器	包含層出土 (36)	274
図 219 土器	包含層出土 (37)	275
図 220 土器	包含層出土 (38)	276
図 221 木製品	遺構出土 (1)	277
図 222 木製品	遺構出土 (2)	278
図 223 木製品	遺構出土 (3)	279
図 224 木製品	遺構出土 (4)	280
図 225 木製品	遺構出土 (5)	281
図 226 木製品	遺構出土 (6)	282
図 227 木製品	遺構出土 (7)	283
図 228 木製品	遺構出土 (8)	284
図 229 木製品	遺構出土 (9)	285
図 230 木製品	包含層出土 (1)	286
図 231 木製品	包含層出土 (2)	287
図 232 木製品	包含層出土 (3)	288
図 233 木製品	包含層出土 (4)	289
図 234 石器・石製品	遺構出土	290
図 235 石器・石製品	包含層出土 (1)	291
図 236 石器・石製品	包含層出土 (2)	292
図 237 石器・石製品	包含層出土 (3)	293
図 238 石器・石製品	包含層出土 (4)	294
図 239 石器・石製品	包含層出土 (5)	295
図 240 金属製品	遺構出土 (1)	296
図 241 金属製品	遺構出土 (2)	297
図 242 金属製品	遺構出土 (3)	298
図 243 金属製品	遺構出土 (4)	299
図 244 金属製品	包含層出土 (1)	300
図 245 金属製品	包含層出土 (2)	301
図 246 金属製品	包含層出土 (3)	302

表目次

表 1 岩田西遺跡周辺の試掘確認調査結果	3
表 2 調査体制表	14
表 3 周辺遺跡一覧表	18
表 4 基本層序	22
表 5 検出遺構一覧表	25
表 6 出土遺物等点数一覧表	43
表 7 編年対応表	47
表 8 木製品出土一覧表	48
表 9 石器・石製品一覧表	48
表 10 金属製品一覧表	48

插入写真目次

写真 1 平成 20 年度 C 地点調査前風景	4
写真 2 平成 21 年度 E 地点調査前風景	4
写真 3 平成 20 年度 D 地点重機表土掘削	9
写真 4 平成 20 年度 B 地点人力包含層掘削	9
写真 5 平成 20 年度 C 地点包含層	9
写真 6 平成 20 年度 C 地点遺構検出	9
写真 7 平成 20 年度 B 地点実測作業	10
写真 8 平成 20 年度景観空中写真撮影	10
写真 9 平成 20 年度現地説明会	10
写真 10 平成 20 年度 SM17	10
写真 11 平成 21 年度 E 地点表土掘削	11
写真 12 平成 21 年度 E 地点包含層掘削	11
写真 13 平成 21 年度 E 地点遺構検出	12
写真 14 平成 21 年度 E 地点遺構掘削	12
写真 15 平成 21 年度 E 地点実測作業	12
写真 16 平成 21 年度 E 地点空中写真撮影	12
写真 17 平成 21 年度現地説明会	13
写真 18 平成 21 年度 SM99 完廻	13
写真 19 平成 21 年度 NR 1 遺物出土	13
写真 20 調査区周辺の地形	16
写真 21 B 地点双魚文青磁出土状況	142
写真 22 B 地点茶釜蓋摘み出土状況	142
写真 23 C 地点目貫出土状況	142
写真 24 E 地点銅鉈出土状況	142

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

岩田西遺跡（以下、当遺跡と記載する。）は岐阜市岩田西地内に所在する（図1・2）。今回の発掘調査は、岐阜市を通過する156号岐阜東バイパス建設事業に伴い実施した。

156号岐阜東バイパスは、羽島郡岐南町八剣から関市山田までを結ぶ13.4kmの道路である。これまでも国道156号は通勤時に断続的な渋滞が発生しており、平成17年4月1日に国道156号と並行していた名鉄美濃町線が廃止され、代替手段としてバスの増加や新規バス停が設置されるなど、国道への依存がさらに増大した。そこで、交通混雑の解消やバスの定時性の確保等のため、岐阜東バイパスの建設事業が計画された。

国土交通省中部地方整備局は、平成6年度から当遺跡を含む岐阜東バイパス3工区の事業を開始した。そして、道路建設区域内における埋蔵文化財の有無及び内容等を確認するため、平成18年度に試掘・確認調査を岐阜県教育委員会に依頼した。

試掘・確認調査は平成18年11月13日から11月21日までと平成19年11月7日から11月28日まで岐阜県教育委員会が実施した。試掘調査坑は、岩田西遺跡の事業予定地内に、平成18年度にTP9～15、平成19年度にTP16～21の2箇年で合計13箇所を設定した。（図3：試掘坑番号は試掘・確認調査時の名称を記載した）そして、重機により表土以下を掘削し、必要に応じて人力により遺構検出及び遺構掘削等を実施した。その結果、TP9～21において、中世末の水田畦畔・耕作土を検出し、土層断面の観察から、2面以上の遺構面が存在することを確認した。遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗や瀬戸美濃陶器などの中近世陶磁器や土鍤、瓦、煙管が出土した。そのうち、土師器皿と山茶碗の出土が多く、中世の水田跡であることが想定された。

これらの結果を踏まえて、平成18年12月7日及び平成19年12月20日に岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討委員会を開催し、岩田西遺跡の14,067m²の本発掘調査が必要であると判断した。

平成20年度の発掘調査は、平成20年3月21日に文化財保護法第92条による埋蔵文化財発掘調査の報告（財文保第83号の2）を岐阜県教育委員会に提出し、4月2日に岐阜県教育委員会より埋蔵文化財発掘調査についての通知（社文第3号の3）を受けて、岐阜県文化財保護センターが実施した。

平成21年度の発掘調査は、平成21年5月18日に文化財保護法第99条による埋蔵文化財発掘調査の報告（文財セ第17号）を岐阜県教育委員会に提出し、6月12日に岐阜県教育委員会より埋蔵文化財発掘調査の報告についての通知（社文第14号の9）を受けて、岐阜県文化財保護センターが実施した。

本書は、平成20・21年度に国土交通省中部地方整備局から岐阜県が委託を受け、財團法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター（平成21年4月1日に岐阜県文化財保護センターに改組）が実施した岩田西遺跡14,067m²についての本発掘調査成果の記録である。

2 第1章 調査の経過

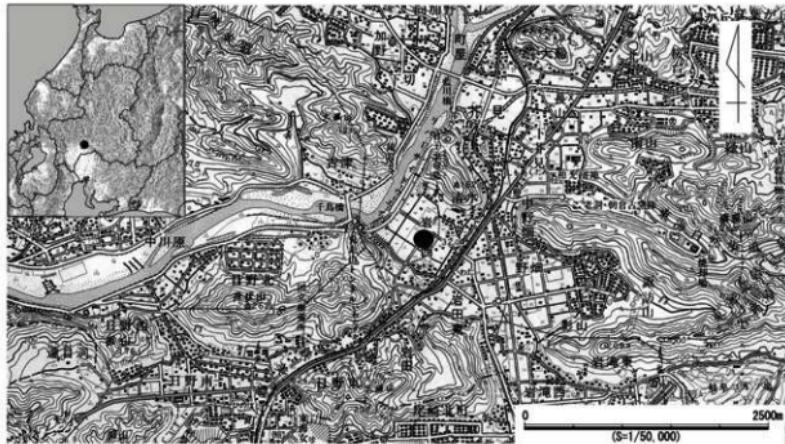
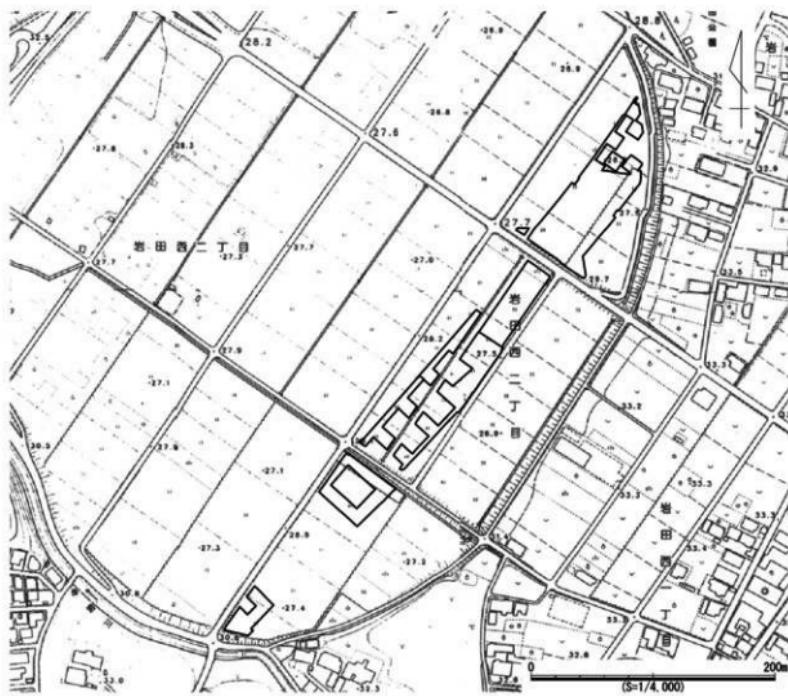


図1 遺跡位置図（国土地理院発行1:50,000地形図「岐阜」）



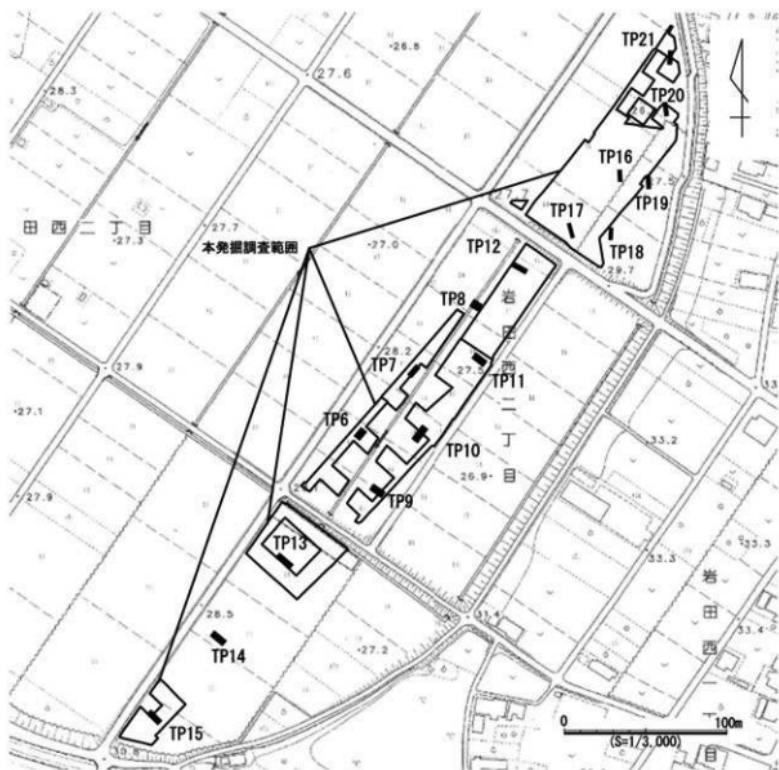


図3 試掘坑位置図

表1 岩田西遺跡周辺の試掘確認調査結果

時期	試掘坑	検出遺構	調文土器	弥生土器	須恵器	灰釉陶器	山茶碗	土師器皿	古窯戸大甕	中近世陶器	その他	合計
平成18年度	TP9		0	7	3	0	37	57	5	1	2	112
	TP10		0	19	4	2	20	43	0	2	1	91
	TP11 杭跡1		0	4	3	2	37	19	1	17	2	85
	TP12 眼窓1		0	1	1	0	4	11	0	6	0	23
	TP13		0	4	0	0	11	12	2	12	2	43
	TP14		0	1	0	1	1	0	0	8	0	11
	TP15 杭跡1 眼窓1		0	5	2	1	14	9	0	4	2	37
平成19年度	TP16 眼窓1 土坑1		0	2	0	0	1	7	1	7	0	18
	TP17 眼窓1		0	3	0	2	3	8	1	1	0	18
	TP18 眼窓1		0	1	0	0	1	11	0	6	0	19
	TP19 眼窓1 土坑1		0	0	0	4	3	2	1	6	0	16
	TP20 眼窓1		0	0	0	0	1	4	0	0	0	5
	TP21 眼窓1		0	0	0	0	3	3	0	2	1	9
	合計	眼窓8 杭跡2 土坑2	0	47	13	12	136	186	11	72	10	487

4 第1章 調査の経過

第2節 調査の経過と方法

1 発掘調査期間

平成20年5月1日～平成20年12月18日
平成21年4月30日～平成21年12月18日



写真1 平成20年度C地点調査前風景

2 発掘調査の経過と方法

当遺跡の発掘調査は、平成20・21年度に実施した。平成20年度は当遺跡と中屋敷遺跡・中屋敷古墳の発掘調査を、平成21年度は当遺跡と岩田東A遺跡の発掘調査を併行して実施した。そして、調査を効率的に進めるために、人力掘削作業や景観撮影等の日程を調査の進捗状況に応じて調整した。また、調査区画は当遺跡と中屋敷遺跡・中屋敷古墳、岩田東A遺跡との関係を把握しやすくするために、3遺跡を包括して設定した。すなわち、世界測地系座標をもとに100m四方の大グリッドを設定し、北から南へAからH、西からEへ1から6とした。そして、大グリッド内に5m四方の小グリッドを設定し、北から南へaからt、西から東へ01から20とした(図4)。そのため、当遺跡の北東隅のグリッドはB5s15、南西隅のグリッドはG2f08となる。なお、本書においても、大グリッドと小グリッドを併用して表記する。

表土を重機により除去した後グリッド杭を打設した。遺物包含層掘削、遺構検出、遺構掘削はねじり鏟等を用いて人力により行った。遺構掘削は遺物の出土状況等の記録を写真と図面で作成し、最終的に遺構埋土をすべて取り除いた。記録写真是35mmカメラ、中判カメラ、デジタルカメラで撮影した。遺構番号は検出順の通番とし、二次整理作業時に遺構種別ごとに振り替えた。遺構全体配置図と発掘調査区全体の平面図は、電子平板システムを用いて作成した。出土遺構は、原則として1/10、1/20の縮尺で手測り実測及びデジタル測量により図化した。遺構出土面の空中写真撮影はラジオコントロールヘリコプターによって行った。

遺構から出土した遺物は、トータルステーションで出土位置を測定して取り上げた。遺構出土以外の遺物は5m×5mのグリッドと層位ごとに取り上げた。

遺物の取上層位は、包含層は基本層序、遺構内は遺構埋土断面で確認した層序を基本とした。ただし、遺構内の断面を確認する前に取り上げた遺物については検出面から5cmごとの人工層位(a, b, …)で取り上げた。岩田西遺跡はA地点からE地点までの5地点において発掘調査を行った。その際、A地点を除くB地点からE地点のすべてで、調査区から出る土量の関係で反転調査を行っている。そのため、同じ地点であっても南・北と表現している。



写真2 平成21年度E地点調査前風景

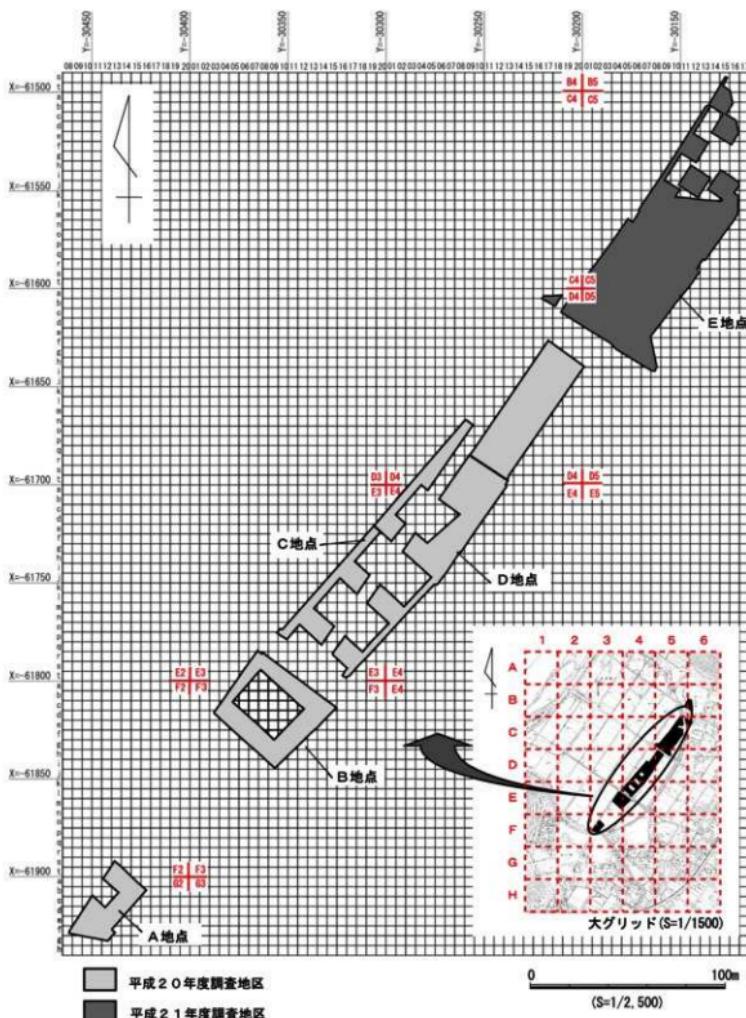


図4 グリッド設定図

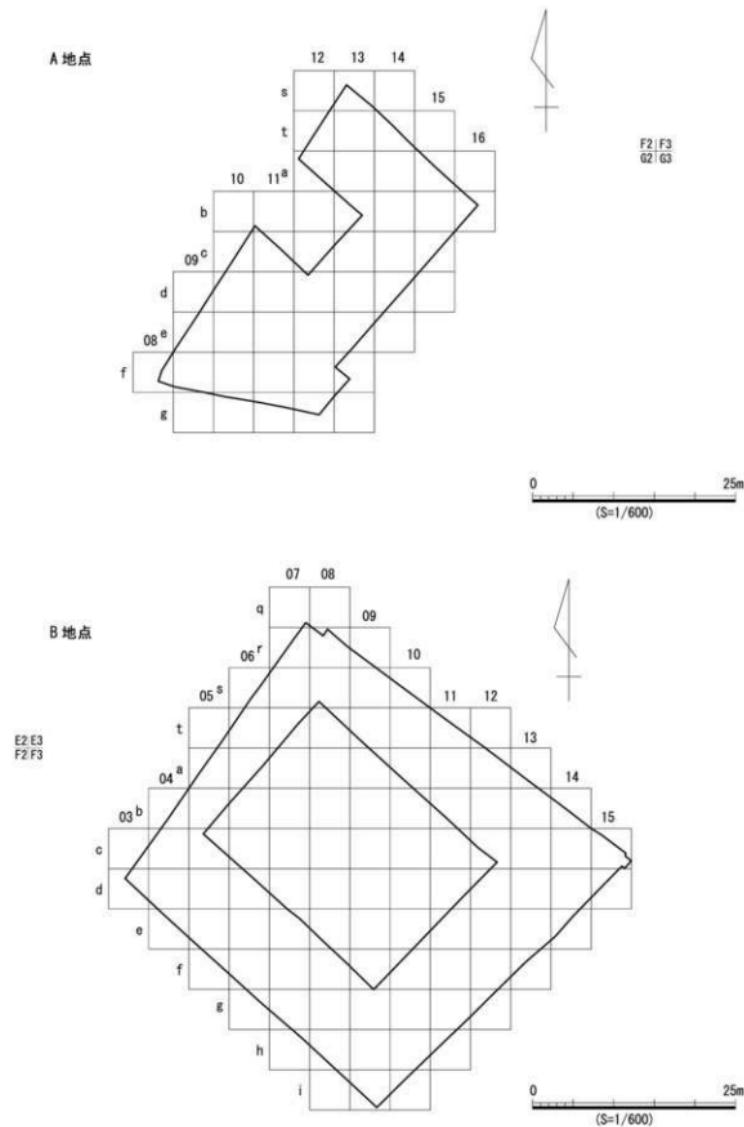


図5 A・B地点グリッド設定図

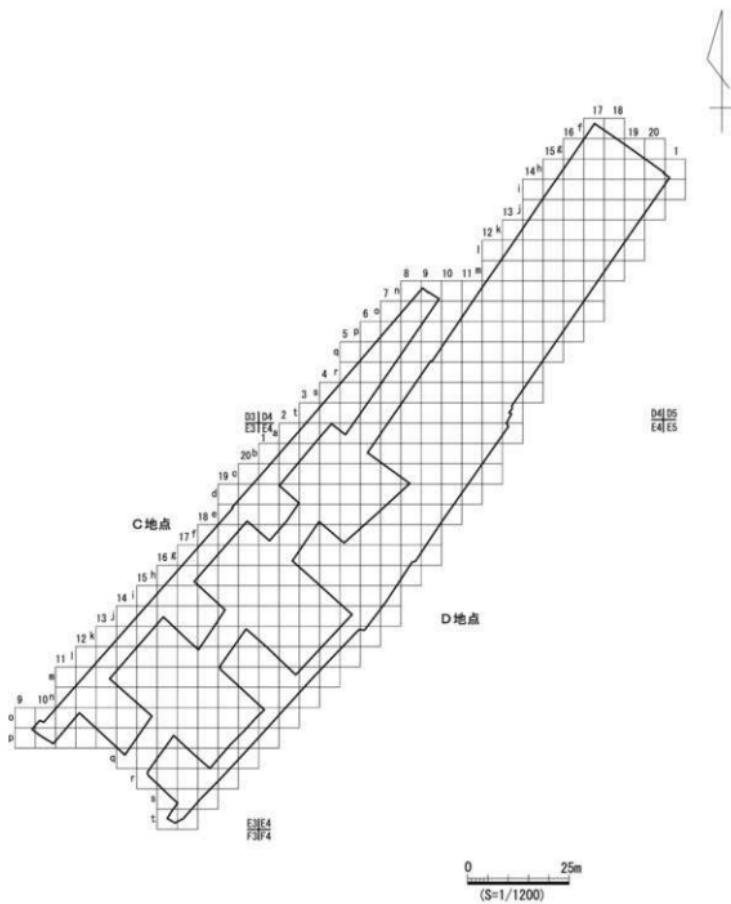


図6 C・D地点グリッド設定図

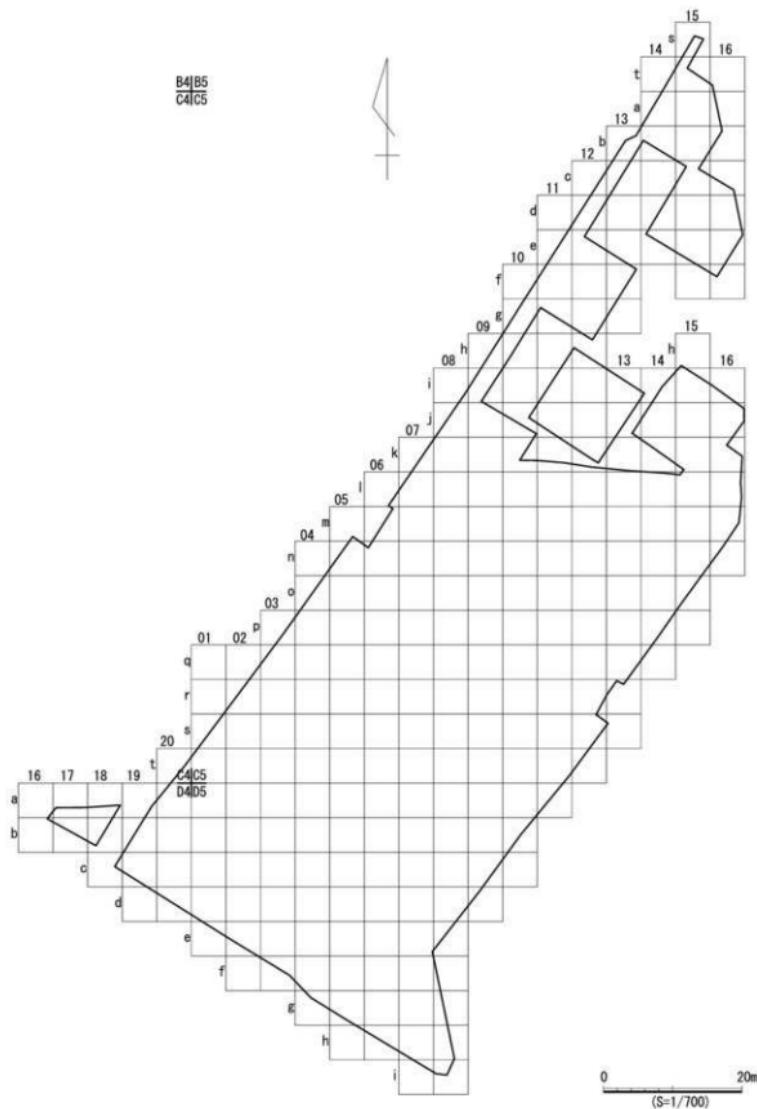


図7 E地点グリッド設定図

現地での調査経過は以下のとおりである。

平成 20 年度

- 第 1 週(5/1～5/2)表土掘削開始(5/1)
- 第 2 週(5/5～5/9)C 地点表土掘削終了(5/9)
- 第 3 週(5/28～5/16)D 地点表土掘削終了(5/16)
- 第 4 週(5/19～5/23)作業員による遺物包含層掘削作業開始(5/19)B 地点
表土掘削終了(5/19)
- 第 5 週(5/26～5/30)B 地点にて大畦畔(SM17)上
に取水溝確認(5/27)
- 第 6 週(6/2～6/6)C 地点南で波板状凹面
(SK30～33)を確認(6/6)
- 第 7 週(6/9～6/13)降雨(6/9)C 地点南第 1 調査
面景観撮影実施(6/11)
- 第 8 週(6/16～6/20)C 地点で焼土を確認(6/17)
- 第 9 週(6/23～6/27)B 地点、D 地点南第 1 調査
面景観撮影実施(6/25)
- 第 10 週(6/30～7/4)一次整理作業開始(7/1)
C 地点の搅乱穴から湧水。
砂が吹き出し、調査区が
抉られる(7/2)
- 第 11 週(7/7～7/11)D 地点で擬漢式鏡片
(IIIb) が出土(7/7)
A 地点重機掘削開始
(7/9)
- 第 12 週(7/14～7/18)B 地点にて陶錘(IIIb)出土
(7/14)
- 第 13 週(7/22～7/25)A 地点重機掘削終了
(7/23) C 地点南第 2 調査
面景観撮影実施(7/23)
- 第 14 週(7/28～8/1)B 地点で大畦畔(SM30)上
に暗渠を確認(7/30)
- 第 15 週(8/4～8/8)SD060 で古墳時代後期の
須恵器が出土(8/5)
- 第 16 週(8/11～8/15)夏期作業休止
- 第 17 週(8/18～8/22)藍川中学校生徒職場体験



写真3 平成20年度D地点重機表土掘削



写真4 平成20年度B地点人力包含層掘削



写真5 平成20年度C地点遺構検出



写真6 平成20年度C地点遺構掘削

10 第1章 調査の経過

(4名) (8/20) B地点にて
漆器碗出土(8/21)

第18週(8/25～8/29) B地点・D地点南第2調査
面景観撮影実施(8/26)
集中豪雨のため調査区冠
水(8/29)

第19週(9/1～9/5) A地点で大畦畔(SM2)検
出(9/1)プラントオパール
分析試料、花粉分析試料採
取(9/5)

第20週(9/8～9/12) B地点で双魚文が施された
青磁(IVb)出土(9/9)
A地点第1調査面景観撮
影実施(9/10)

第21週(9/16～9/19) D地点北重機掘削開始
(9/16)伊藤秋男南山大学
名誉教授來訪(9/17)

第22週(9/22～9/26) C地点北重機掘削開始
(9/24)C地点北重機掘削
終了(9/26)

第23週(9/29～10/3) D地点北重機掘削終了
(9/29)八賀晋三重大学
名誉教授現地指導(10/1)

第24週(10/6～10/10)長森中学校、岩野田中学校
生徒職場体験9名(10/7)
B地点の大畦畔(SM43)底
面で古瀬戸四耳壺の底部片
出土(10/9)

第25週(10/14～10/17) A地点第2調査面、B地点
第3調査面景観撮影実施
(10/16)

第26週(10/20～10/24)三輪中学校生徒職場体験
(2名)(10/21・22)
C地点北から天目茶碗と
掛分湯呑(II)出土
(10/23)



写真7 平成20年度B地点実測作業



写真8 平成20年度景観空中写真撮影



写真9 平成20年度現地説明会



写真10 平成20年度SM17

- 第27週(10/27～11/1) C地点北・D地点北第1調査面
景観撮影実施(10/30)
現地説明会実施(参加人数213人)(11/1)
- 第28週(11/4～11/7) C地点北Ⅲb層から畦畔(SM61・62)検出
- 第29週(11/10～11/14) 岐北中学校生徒職場体験(5名)(11/11)
C地点北にて古墳時代の掘立柱建物跡を確認
- 第30週(11/17～11/21) C地点北堅穴住居跡(SB1)床面で多数の炭化物・焼土を確認
(11/20)
- 第31週(11/25～11/28) 宇野隆夫国際日本文化研究センター教授現地指導(11/28)
- 第32週(12/1～12/5) C地点北の堅穴住居(SB1)床面で炉跡を検出
- 第33週(12/8～12/12) D地点北で堅穴住居跡(SB3)を確認(12/10) A地点第3調査面、
C・D地点北第2調査面景観撮影実施(12/11)
- 第34週(12/15～12/18) 発掘調査作業終了(12/18)

平成21年度

- 第1週(4/30～5/1) 調査区内の構造物撤去
開始(4/30)
- 第2週(5/7～5/8) E地点南第1調査面表土
掘削開始(5/12)
- 第3週(5/11～5/15) E地点南第1調査面表土
掘削終了(5/15)
- 第4週(5/18～5/22) 作業員による遺物包含層
掘削作業開始(5/18)
- 第5週(5/25～5/29) 明治の字絵図と同位置の
構状遺構(SD66)完掘
(5/29)
- 第6週(6/1～6/5) E地点南第1調査面景観
撮影実施(6/3)水田造構の
覆土掘削、トレンチ掘削
開始(6/4)
- 第7週(6/8～6/12) E地点南第2調査面遺物
包含層掘削開始(6/10)
- 第8週(6/15～6/19) E地点南第1調査面畦畔の掘削完了 E地点南第2調査面重機掘削
開始(6/15) 遺物包含層から銅錘と銅製の鈴(Ⅲb層)が出土
(6/18・19)
- 第9週(6/22～6/26) E地点南第2調査面遺構検出、遺構掘削の作業を開始(6/25)



写真11 平成21年度E地点表土掘削



写真12 平成21年度E地点包含層掘削

12 第1章 調査の経過

- 第 11 週(7/ 6～ 7/10) E 地点南第 2 調査面景
観撮影実施(7/10)
- 第 12 週(7/13～ 7/17) 水田遺構の覆土掘削、
トレンチ掘削開始
(7/13)
- E 地点南第 3 調査面
重機掘削開始(7/15)
- 第 14 週(7/27～ 7/31) 湫水のため作業中止
(7/30～)
- 第 15 週(8/ 3～ 8/ 7) 湫水のため作業中止
- 第 16 週(8/10～ 8/14) 夏期作業休止
- 第 17 週(8/17～ 8/21) E 地点南第 3 調査面
遺物包含層掘削開始
(8/17)
- E 地点南第 3 調査面
遺構検出、遺構掘削開始
(8/20)
- 第 18 週(8/24～ 8/28) 岐南工業高等学校イン
ターンシップ(2名)
(8/26・8/27)
- 宇野隆夫国際日本文化
研究センター教授現地
指導(8/27)
- E 地点南第 3 調査面景
観撮影実施(8/27)
- 第 19 週(8/31～ 9/ 4) E 地点北第 1 調査面表土
掘削開始(8/31)
- E 地点北第 1 調査面遺物
包含層掘削開始(9/2)
- E 地点北第 1 調査面表土
掘削終了(9/3)
- 第 20 週(9/ 7～ 9/11) E 地点北第 1 調査面遺構
検出、遺構掘削開始(9/8)
- 第 23 週(9/28～10/ 3) E 地点北第 1 調査面
景観撮影実施(10/1)
現地説明会実施 (参加人数 242 人)(10/3)



写真 13 平成 21 年度 E 地点遺構検出



写真 14 平成 21 年度 E 地点遺構掘削



写真 15 平成 21 年度 E 地点実測作業



写真 16 平成 21 年度 E 地点空中写真撮影

- 第 24 週(10/ 5～10/ 9) 台風接近のため作業
休止(10/5～8)
長森中学校、岩野田中学校生徒職場体験
(9名)(10/7)
- 第 25 週(10/13～10/16) 水田遺構の覆土掘削、トレンチ掘削開始(10/12)
一次整理作業開始
(10/14)
岩小学校現地見学
(38人)(10/14)
E 地点北第 2 調査面
遺物包含層掘削開始
(10/15)
プラントオパール分析
試料、花粉分析試料採取(10/16)
- 第 26 週(10/19～10/23) 三輪中学校生徒職場
体験(6名)(10/20・21)
E 地点北第 2 調査面遺構
検出、
遺構掘削開始(10/21)
- 第 27 週(10/26～10/30) 岐北中学校生徒職場体験
(4名)(10/27)
- 第 28 週(11/ 2～11/ 6) 八賀晋三重大学名誉教授
現地指導(11/4) E 地点
北第 2 調査面景観撮影実施(11/4) 水田遺構の覆土掘削、
トレンチ掘削開始(11/5)
- 第 29 週(11/ 9～11/13) E 地点北第 3 調査面重機掘削開始(11/9) E 地点北第 3 調査面遺物
包含層掘削開始(11/9) 提瓶、平瓶(IV 層) がほぼ完形で出土
(11/10)
- 第 30 週(11/16～11/20) E 地点北第 3 調査面遺構検出開始(11/20)
- 第 31 週(11/24～11/27) E 地点北第 3 調査面遺構掘削開始(11/24)
- 第 32 週(11/30～12/ 4) 藍川中学校生徒現地見学(12/3)
- 第 33 週(12/ 7～12/11) E 地点北第 3 調査面景観撮影実施(12/10)
- 第 34 週(12/14～12/18) 発掘調査作業終了(12/18)



写真 17 平成 21 年度現地説明会



写真 18 平成 21 年度 SM99 完掘



写真 19 平成 21 年度 NR1 遺物出土

3 整理作業の経過

出土遺物の洗浄・注記等の一次整理作業は、平成20年度は平成20年7月1日から平成21年1月16日まで実施した。平成21年度は平成21年10月13日から平成22年1月29日まで実施した。また、出土遺物の接合、実測、トレース、写真撮影、挿図・表の作成、本文執筆等の二次整理作業は平成21年度から平成24年度に実施した。

4 調査体制

発掘調査及び整理作業の体制は以下のとおりである。なお、平成21年4月1日に、財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センターから、岐阜県文化財保護センターに改組した。

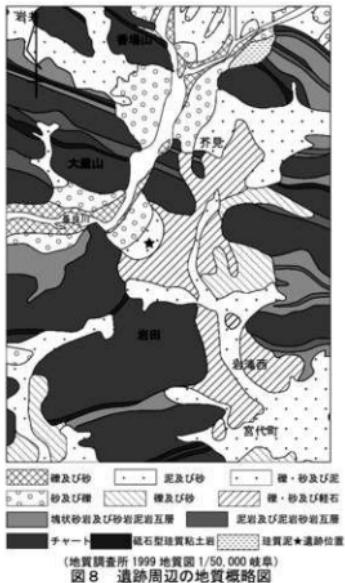
表2 調査体制表

職名	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度
理事長	広瀬利和				
副理事長	伊藤克己 吉田康雄				
常務理事兼センター所長 (H21からセンター所長)	梅村恒男	後藤 満	高橋照美	高橋照美	丸山和彦
経営課長 (H21から総務課長)	加藤美好	長屋忠司	長屋忠司	村瀬誠三	村瀬誠三
調査部長 (H21から調査課長)	北村厚史	小谷和彦	小谷和彦	小谷和彦	小谷和彦
調査課長 (H21から調査担当チーフ H24から調査係長)	谷村和男	谷村和男	春日井恒	春日井恒	春日井恒
担当調査員 石井照久 北村昌弘 柏木賢一 小野木学	石井照久 北村昌弘 小林郁夫 小野木学	小林郁夫	近藤正枝	近藤正枝	
整理作業員	家岡久美 石原美帆 坂井田照子 丹羽香 林浩美 堀三恵 藪下賀代子	家岡久美 石原美帆 坂井田照子 知本俊美 丹羽香 山本秀典	石原美帆 坂井田照子 知本俊美 丹羽香	石原美帆 坂井田照子 知本俊美 丹羽香	二次整理作業 支援業務委託

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

当遺跡のある岐阜市の地形は北部から東部にかけて急峻な美濃山地がせまつた山地部と、西部から南部にかけて沖積低地が広がる平野部との二つに分けることができる。岩田西は長良川左岸の金華山・権現山などの美濃山地北側に位置し、長良川によって形成された低位段丘面に位置する。この段丘面は長良川左岸に広く展開している。この低位段丘面は、長良川の堆積によって形成された扇状地性の平地であったことは、下芥見で標高が約35mの同段丘面が、野畠付近で約32m、岩瀬で30mと低下しながら各務用水に向かって南下していることからも分かる。このような堆積平地が形成された後、水面の低下を含む地盤の相対的な上昇によって浸食作用が進み、堆積平地面すなわち低位段丘面は谷によって刻まれた。その後、沖積土に入つてそれらの谷が再び埋め立てられ、今日みるような段丘面より一段低い低湿な平地になった。沖積低地と低位段丘面との比高は、北部の芥見あたりでは約5mに及び、長良川の洪水の難からのがれうる高さにある。一方で末端部の長森前一色あたりでは比高が1m内外にすぎなくなる。しかし、沖積平地との高度差がこの程度であつても、遺跡の立地にとつて重要な条件であったことが伺える。下芥見の低位段丘面上には、芥見町屋遺跡や芥見長屋遺跡など連続的な居住地域になつてゐることを示し、清水山北側には蓑笠山古墳群がある。同じことが清水山南の岩田についてもいえる。ここには岩田東A遺跡があり、清水山南側には岩田古墳群がある。山地部として分けた地域には、長良川流域の小盆地も含まれているが、その付近の地形を見ると、中央部に平坦な洪積台地があり、まわりには一段低い沖積低地が形成されている。当遺跡は周囲を低位段丘に囲まれた一段低い沖積低地に位置している。当遺跡の東側には高さ約3mの段丘崖があり、段丘崖に沿い南に向かって清水川が流れている。段丘崖の下には畑地と水田が広がる。これらは、それぞれ長良川によって形成された自然堤防と後背湿地に造成されている。当遺跡の北東部には、標高162.9mの清水山が位置している。清水山の南側、当遺跡に面している山を通称「八幡山」という。現在の住宅地は段丘崖上に広がり、当遺跡のある段丘崖下には水田や畑地が広がつてゐる。



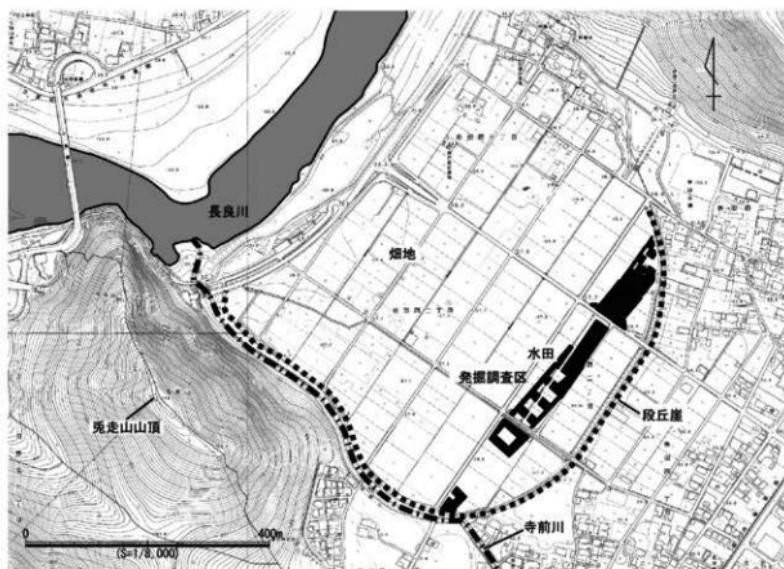


図9 発掘調査区周辺の地形

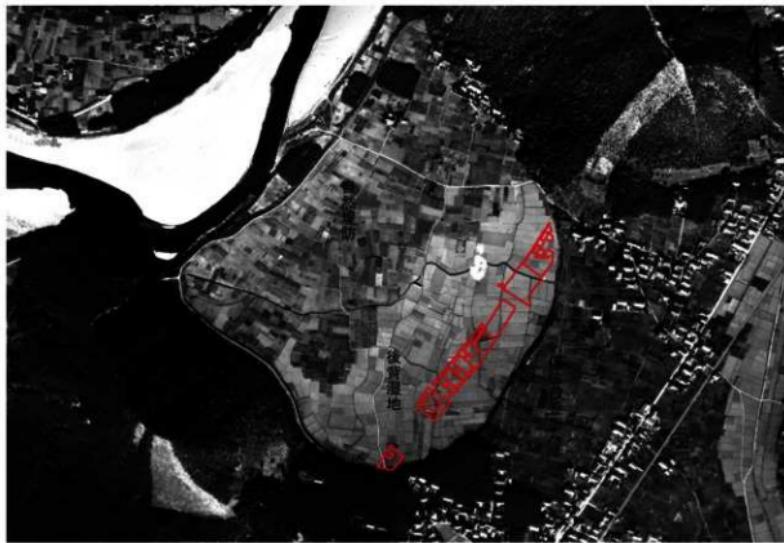


写真20 調査区周辺の地形 (昭和23年11月1日米極東空軍撮影写真)

第2節 歴史的環境

当遺跡周辺には数多くの周知の埋蔵文化財包蔵地が登録されており、その中には発掘調査によって性格等が明らかとなった遺跡もある。本節では、それらの概要及び当遺跡との関連性が想定される神社の沿革等を中心に、時代順に記す。なお、図6は『改訂版岐阜県遺跡地図』(岐阜県教育委員会 2007)を基に作成し、本文中の遺跡名に続く括弧内の番号は、表3、図10と一致する。

旧石器時代 岩瀧A遺跡(28)では、昭和53年の発掘調査によりナイフ形石器や有舌尖頭器などが出土した。また、寺田遺跡(47)、日野遺跡(49)では、昭和60・61年、平成5年の発掘調査により後期旧石器時代から縄文時代草創期の礫群や配石、土坑等を検出し、ナイフ形石器や角錐状石器などが多数出土した。

縄文時代・弥生時代 芥見町屋塚遺跡(14)では、昭和47年の発掘調査により弥生時代後期の堅穴住居跡5軒を検出し、1号住居跡からは鉢、器台、高坏、壺、甕など、残存状況の良好な一括資料が出土した。岩田東A遺跡(19)では、平成20・21年度の発掘調査により弥生時代中期の堅穴住居跡や弥生時代中期後葉と後期と後期末～古墳時代初頭の方形周溝墓8基と前方後方型周溝墓1基を検出した。岩瀧A遺跡(28)では、縄文中期後半から後期の土器数点と石鎌19点、打製石斧、石錘などが出土した。また、弥生時代後期の隅丸方形を呈する堅穴住居跡を検出した。

古墳時代 七反田番場山古墳群(7)は、平成15年に7・10・11号墳の発掘調査を実施した。その結果、7号墳は直径約13.8mの円墳、10・11号墳は墳形、規模ともに不明であった。7号墳の内部主体は両袖式横穴式石室で、石室規模は全長6.0m、玄室長3.2m、奥壁幅1.3mであり、須恵器や土師器が出土した。また、11号墳の内部主体は木棺直葬で、須恵器や土師器、鐵鏃等が出土した。岩田古墳群(18)は、7基の円墳から成るとされている。そのうちの1号墳(智照院古墳)は昭和53年に部分発掘調査が実施された。墳丘は直径約16m、高さ約2.5mで、内部主体は片袖式横穴式石室である。石室規模は全長7.9m、玄室長4.9m、奥壁幅1.2m、石室最大幅1.9mで、須恵器、金環、銀環等が出土した。また、『岐阜市史史料編考古・文化財』の岩田古墳群6号墳は中屋敷古墳(21)に該当し、須恵器高坏が採集されている。中屋敷古墳は平成20年度の発掘調査により、7世紀前半から中頃に構築された古墳で、横穴式石室を有する墳丘規模15m以上の古墳であることがわかっている。

飛鳥・奈良・平安時代 芥見長山遺跡(16)では、昭和55年の発掘調査により堅穴住居跡12軒、掘立柱建物跡3棟、土坑43基、溝跡2条などを検出した。その時期は概ね8世紀中葉から9世紀初頭と考えられ、三彩が出土している。また、平成15年の試掘調査でも、古代には埋没していたと考えられる堅穴住居跡2軒を検出した。中屋敷遺跡(20)では堅穴住居跡から飛鳥時代の瓦が出土している。生産遺跡としては、国史跡老洞・朝倉須恵器窯跡(老洞窯跡群(22)・朝倉窯跡群(24))があり、美濃国刻印須恵器が出土し、官窯的な性格を持つことが明らかになった。日野古窯跡群(51)は5基の窯の存在が知られており、1~4号窯は灰釉陶器窯、5号窯は瓦窯で丸瓦と平瓦が採集されている。奥洞古窯跡群(37)、岩坂古窯跡群(39)は、いずれも灰釉陶器窯である。

なお、養老年間(西暦717~723年)の駅伝制で定められた駅路のうち、岐阜市内を通過するのは東山道である。その道筋の全容は定かでないものの、長良古津遺跡(13)付近から岩田西遺跡(1)付

近で長良川を渡河したとする説もある。また、岩田古墳群（18）の範囲内には伊波乃西神社が位置する。伊波乃西神社は、延長5年（西暦927年）に奏進された『延喜式』に各務郡七座のうちの一つとして、また天慶年間から天暦・天徳年間（西暦938～960年）に成立したと推定されている『美濃国神名帳』に各務郡座二十三社のうちの一つとして記載されている。^{いわのにし}

鎌倉時代以降 芥見長山遺跡（16）では、平成10年の試掘調査により戦国時代の溝跡3条や方形堅穴1基を検出した。また、岩田東A遺跡（2）では、平成21年度の発掘調査により、安土・桃山時代の土器皿が出土した布掘の区画溝が検出され、区画内からは掘立柱建物跡が検出されている。中屋敷遺跡（20）では、平成20年度の発掘調査により、中世の区画溝と掘立柱建物跡4棟、16～17世纪初頭頃に築造された地下式坑3基が検出されている。また、中屋敷遺跡の南側に位置する墓地内には15～16世纪頃の五輪塔数基が、岩田古墳群（18）の範囲内に位置する林陽寺の墓地内には15～16世纪頃の宝篋印塔と五輪塔数基が存在している。

このように、当遺跡周辺には旧石器時代から室町時代にかけての遺跡が数多く分布している。古窯跡などの生産遺跡、集落遺跡、古墳という生産域、集落域、墓域という村落景観が、この岩という地域の中で連続と続く様子がこの周辺遺位置図からも読み解くことができる。

表3 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	岩田西遺跡	散布地	古代・中世	27	岩瀬古墳群	古墳	古墳
2	番場山第3古墳群	古墳	古墳	28	岩瀬A遺跡	集落跡	旧石器～中世
3	番場山第4古墳群	古墳	古墳	29	岩瀬西B遺跡	散布地	旧石器～中世
4	北長塚古墳群	古墳	古墳	30	岩瀬西A遺跡	散布地	旧石器～中世
5	北長塚遺跡	散布地	縄文	31	岩瀬西C遺跡	散布地	旧石器～中世
6	番場山第2古墳群	古墳	古墳	32	北洞遺跡	散布地	弥生～近世
7	七反田番場山古墳群	古墳	古墳	33	宮代遺跡	散布地	旧石器～近世
8	七反田番場山2号古墳	古墳	古墳	34	南洞古墳群	古墳	古墳
9	七反田番場山1号古墳	古墳	古墳	35	尾崎大平古窯跡群	生産遺跡	古代
10	加野西畠遺跡	散布地	古代・中世	36	南洞古窯跡群	生産遺跡	古代
11	加野南遺跡	散布地	古代・中世	37	奥洞古窯跡群	生産遺跡	古代
12	大藏山古墳	古墳	古墳	38	鍋坂古墳	古墳	古墳
13	長良古窯遺跡	散布地	古代・中世	39	岩田坂古窯跡群	生産遺跡	古代
14	芥見町屋遺跡	散布地	古代・中世	40	岩田坂古墳群	古墳	古墳
15	大船山古墳群	古墳	古墳	41	尾崎古墳群	古墳	古墳
16	芥見長山遺跡	集落跡	古代～中世	42	鏡音寺古墳群	古墳	古墳
17	養笠山古墳群	古墳	古墳	43	桐野遺跡	散布地	旧石器～近世
18	岩田古墳群	古墳	古墳	44	雨池東遺跡	散布地	旧石器
19	岩田東A遺跡	散布地	古代・中世	45	雨池遺跡	散布地	弥生
20	中屋敷遺跡	散布地	古墳・古代・中世	46	山手古墳群	古墳	古墳
21	中屋敷古墳	散布地	古代・中世	47	寺田遺跡	集落跡	旧石器～弥生
22	老洞古窯跡群	生産遺跡	古代	48	寺田轟遺跡	散布地	旧石器
23	朝倉古窯跡群	古墳	古墳	49	日野遺跡	集落跡	旧石器～弥生
24	朝倉古窯跡群	生産遺跡	古代	50	日野北石神遺跡	散布地	縄文
25	朝倉遺跡	散布地	縄文	51	日野窯跡群	生産遺跡	古代
26	岩田東B遺跡	散布地	旧石器	52	船伏山古墳群	古墳	古墳

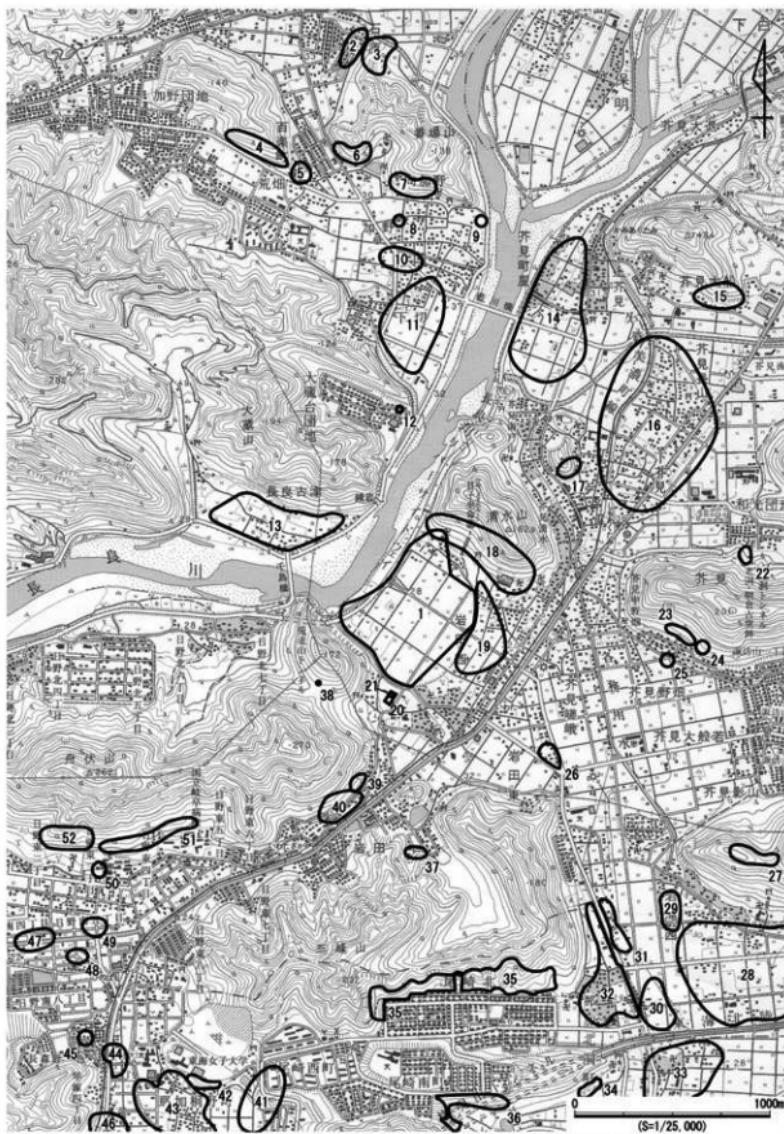


図10 周辺遺跡位置図（国土地理院発行1:25,000地形図「岐阜北部」）

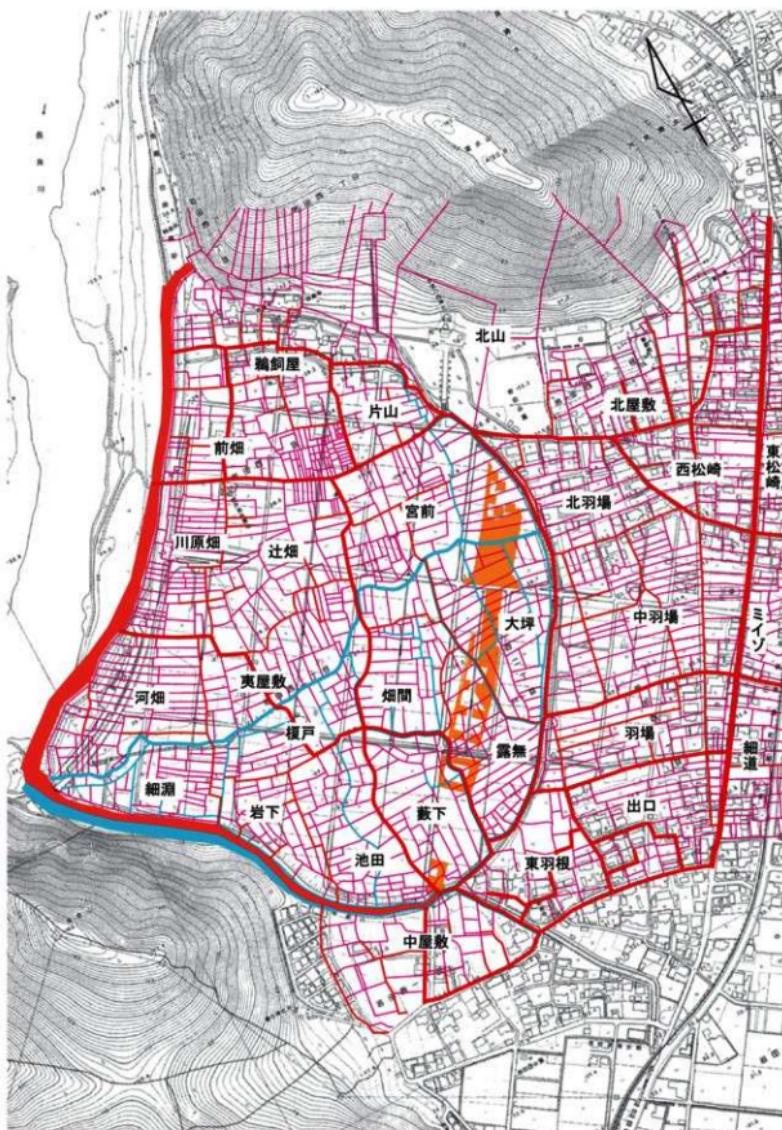


図11 地籍図

第3章 調査の成果

第1節 基本層序と遺構確認面

当遺跡は長良川によって形成された河岸段丘下に位置し、基盤となる面は自然堤防の後背湿地にある。また、明治時代の地籍図では、当遺跡周辺は水田として記載され、明治時代以降も水田耕作地としての土地利用があったとのことである。そのため、層序は比較的安定していた。調査区南（A地点）が標高26.7m、調査区北（E地点）が26.0mで、南から北へ低くなる。AからE地点の各地点はほぼ平坦である。A・B・E地点では空中写真測量を3回行い、C・D地点では2回行っている。それぞれ測量を行った面を第1～3面として遺構全体図を掲載している（表4参照）。

以下、基本層序のI層からV層までの詳細及び遺構確認面について記載する。

I層 2.5Y5/2 暗灰黄色土～2.5Y3/2 黒褐色土 表土

調査区全面で確認することができた。近代から現代の水田耕作土と床土などをまとめてI層とした。層厚は約0.30m～0.55mである。古墳時代から現代までの遺物を含む。

II層 5Y3/1 オリーブ黒色土～5Y2/2 オリーブ黒色土 遺物包含層

調査区全面で確認することができた。近世から近代の水田耕作土をII層とした。層厚は約0.05m～0.15mである。古墳時代から近代までの遺物を含み、層除去後に、中世の水田跡や溝状遺構、畦畔を確認した。

IIIa層 2.5Y3/2 黒褐色土 遺物包含層

調査区全面で確認することができた。中世の水田耕作土で、D地点では暗褐色土を確認している。全体的に黒色土である。層厚は約0.05m～0.20mである。古墳時代から近代までの遺物を含む。

IIIb層 5Y5/1 灰色土 遺物包含層

調査区全面で確認することができた。中世の水田耕作土で、A地点では黒褐色土を確認している。全体的に白色土である。層厚は約0.05m～0.20mである。古墳時代から近代までの遺物を含む。

IIIb'層 5Y3/2 オリーブ黒色土 遺物包含層

調査区のE地点の西側のみで確認することができた。中世の水田耕作土である。全体的に黒色土である。層厚は約0.10m～0.15mである。古墳時代から近代までの遺物を含む。

IIIc層 2.5Y4/1 黄灰色土 遺物包含層

調査区のB地点北・西側と、E地点全面で確認することができた。中世の水田耕作土である。全体的に白色土である。層厚は約0.10m～0.15mである。古墳時代から近代までの遺物を含む。

IVa層 5Y3/1 オリーブ黒色土～5Y2/2 オリーブ黒色土 旧表土、遺物包含層

調査区全面で確認することができた。中世以前の遺物包含層であると考えられる。また水田耕作土でもあると考えられる。全体的に黒色土である。層厚は約0.15m～0.30mである。古墳時代から近世までの遺物を含む。

22 第3章 調査の成果

IVb層 5Y6/1灰色土 旧表土

調査区のA・B・C・D地区の全面で確認することができた。IVa層からV層にかけて漸移層であるか、水田耕作土であると考えられる。全体的に白色土である。層厚は約0.10m～0.20mである。古墳時代から近世までの遺物を含む。

V層 5Y7/1灰白色土 地山、無遺物層

調査区全面において認められ、層厚は表土から約1.20m～1.40mであった。全体的に白色土である。V層中に遺物は含まれない。古墳時代の遺構を確認した。

表4 基本層序

平成20年度調査							平成21年度調査							
A地点	空撮面	備考	B地点	空撮面	備考	C地点	空撮面	備考	D地点	空撮面	備考	E地点	空撮面	備考
I層			I層			I層			I層			I層		
II層	(B180)		II層	(B180)		II層	(B180)		II層	(B180)		II層		
IIIa層	(B180)		IIIa層	(B180)		IIIa層	(B180)		IIIa層	(B180)		IIIa層	(B180)	
IIIb層	(B280)		IIIb層	(B1-280)		IIIb層	(B180)		IIIb層	(B180)		IIIb層	(B280)	
			IIIc層	(B280)	部分のみ									
IVa層	暗灰黄色土	IVa層	(B280)	黒褐色土	IVa層		黒オーブ土					IVa層		
IVb層	黄灰色土	IVb層		灰色土	IVb層		灰色土	IVb層				IVb層	(B380)	
V層	(B380)		V層	(B380)		V層	(B280)		V層	(B280)		V層	(B380)	

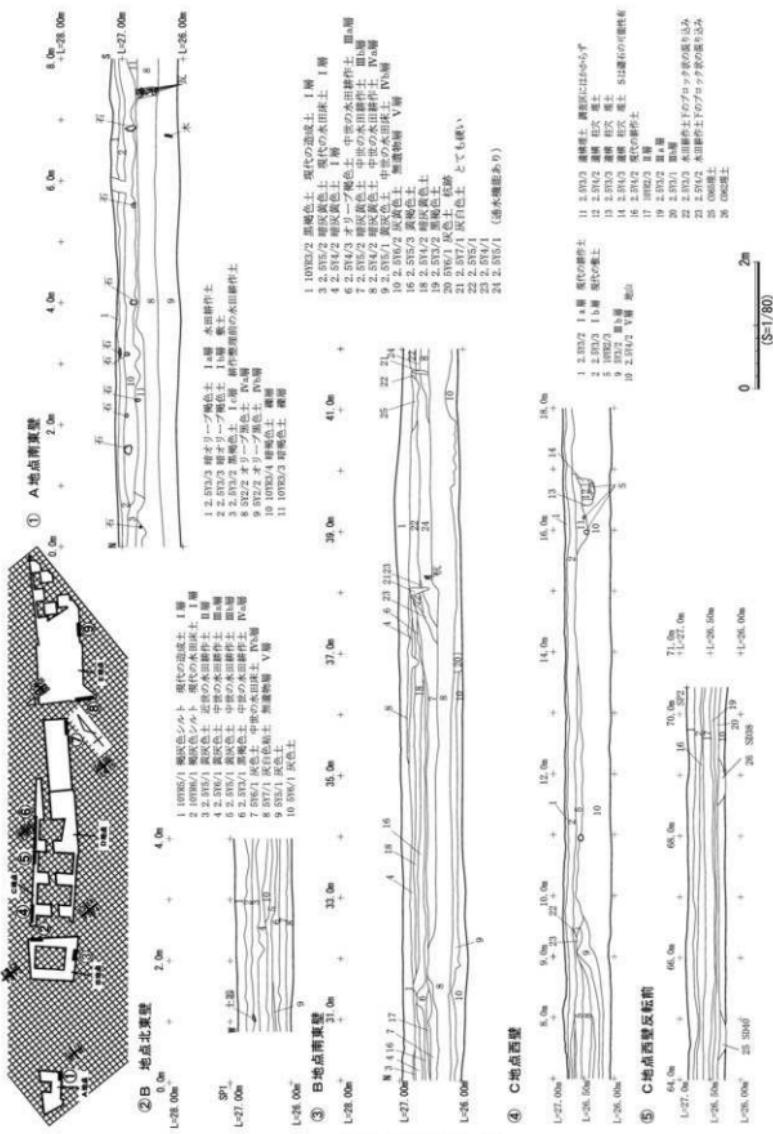
水田畦畔を確認した位置

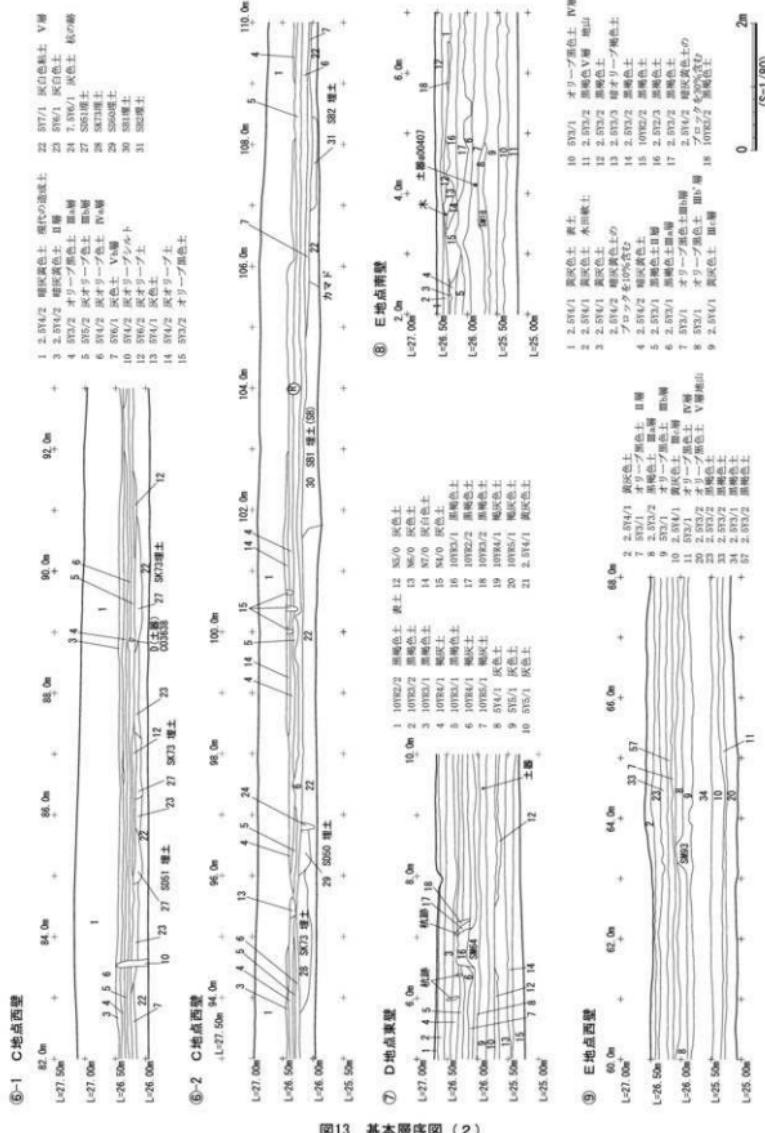
A地点	B地点	C地点	D地点	E地点
IIIa層上	IIIa層上	IIIa層上	IIIa層上	
IIIb層上	IIIb層上	IIIb層上	IIIb層上	
IVa層上	IVb層上			

基本層序は、以下のとおりとして、文章を記載する。

層名	内容
I層	調査区全面で確認した、近代から現代の水田耕作土と底土。
II層	調査区全面で確認した、近世から近代の水田耕作土。
IIIa層	調査区全面で確認した、中世の水田耕作土。（室町～安土・桃山時代）
IIIb層	調査区全面で確認した、中世の水田耕作土。（室町～安土・桃山時代）
IIIb'層	E地点のみで確認した、中世の水田耕作土。（鎌倉～室町時代）
IIIc層	B・E地点のみで確認した、中世の水田耕作土。（鎌倉～室町時代）
IVa層	調査区全面で確認した、中世以前の遺物包含層。水田耕作土か。
IVb層	IVa層とV層の漸移層または水田耕作土。
V層	地山。無遺物層。（古墳時代の遺構面）

※各地点の最終遺構面は、IVb層上面かV層上面である。





第2節 遺構概要

今回の調査では、第1調査面と第2調査面の全域において中世の水田遺構を検出した。（図15・16・18・19・21～24、27・28）また第3調査面において古墳時代から平安時代までの遺構を検出した（図17・20・25・26・29）。遺構の種類と検出数は、表5のとおりである。そのうち、単独の柱穴跡（S P、以下、括弧内のアルファベットは遺構略号を示す。）は、遺構内の堆積土中で柱痕跡を確認したもの、もしくは遺構底面にて柱当たりの痕跡を確認したものである。これは合計9基を数え、なかには掘立柱建物跡や堅穴住居跡の柱穴跡（P）である遺構も存在する可能性がある。しかし、発掘調査時から整理等作業にかけて、同一規模の柱穴跡のまとまりや並びを確認できなかつたため、今回は単独の柱穴跡として報告する。

表5 検出遺構一覧表

遺構の種類	略号	古墳時代	飛鳥時代	平安時代	鎌倉時代	鎌倉～室町	室町～安土・桃山	室町～江戸	江戸時代	合計
樋跡	S A	3					1			4
堅穴住居跡	S B	3								3
溝状遺構	S D	45		4	6		6	9	16	86
焼土	S F	2								2
掘立柱建物跡	S H	2								2
集石遺構	S I		2							2
土坑	S K	111		2				7	3	123
畦畔	S M				6	33	14	43	24	120
単独の柱穴跡	S P	9								9
杭列	S S						1	7		8
水田跡	S T					13	13	56	21	103
水口	S T D						3	8	3	14
畑地跡	S T K	47								47
水口砂	S T R							2	2	4
遺物集積	S U	1								1
不明遺構	S X	2								2
自然流路跡	N R	2	1							3
掘立柱建物跡の柱穴跡	P	16								16
樋跡の柱穴跡	P	13					5			18
堅穴住居跡の柱穴跡	P	9								9
堅穴住居跡内土坑	S K	8								8
堅穴住居跡内カマド跡	S F	1								1
堅穴住居跡内構	S D	1								1
合計		275	3	6	12	46	43	132	69	586

以下本書における遺構の分類、計測方法について述べる。

1 遺構の分類

今回検出した遺構は地面に掘りこまれた遺構（ピット・土坑等）と上部構造を持つ遺構の残欠（カマド跡等）に分けられる。遺構の種類は堅穴住居跡、掘立柱建物跡、樋跡、溝状遺構、ピット・土坑跡、集石遺構、畦畔、杭列、耕作地跡、水口、畝状遺構、自然流路跡に分け、各遺構の分類は、形状と規模、構造から判断した。なお本書では、堅穴住居跡や掘立柱建物跡のように複数の遺構の組み合わせによるものは、S B 1 P 1 のように併記した。

以下に各遺構の分類基準を概述する。

堅穴住居跡（略号S B）

カマド跡などの生活用の炉跡を備える遺構を堅穴住居跡とした。住居の底面において柱穴を備えている。

掘立柱建物跡・柵跡（略号SH・SA）

規則的に並んだ複数のピットによって構成される遺構を、掘立柱建物跡・柵跡とした。両者の違いは、前者が方形に配置されるもの、後者が線状に配置されるものの違いである。

溝状遺構（略号SD）

地面を掘りくぼめた遺構の内、上端の短軸（幅）に対して長軸（長さ）が3倍以上の長さを有する遺構を溝状遺構とした。

被熱・焼土堆積遺構（略号SF）

被熱した痕跡のある遺構及び多量に焼土・炭が混入する堆積がある遺構を被熱・焼土堆積遺構とした。この遺構群は、さらに以下のように内容別に分類した。

カマド跡

粘土や礫を用いて構築された、主に煮炊きに使われる炉の跡をカマド跡とした。今回の調査で検出したカマド跡は、堅穴住居跡の北壁に設置されている。

焼土

堅穴住居跡等の床面にあるものや検出面で検出したもの、単独で存在するもの等がある。

ピット・土坑（略号SP・SK）

地面に掘りくぼめた遺構の内、前述した各分類に当てはまらない比較的規模の小さい遺構群をここに分類した。ピットは、柱穴跡もしくは柱穴状の掘形、柱痕を持つ穴とし、土坑はそれ以外の穴を示す。上端の長軸が80cm未満の遺構をピットと分類し、80cmより大きい穴を土坑とした。穴の中でも、①柱痕跡・根石・礎盤があるもの、②柱の加重による底面硬化がみられるもの、③堅穴住居跡・掘立柱建物跡・柵跡等の柱穴であるもの、のいずれかに該当する遺構については、規模に関わらずピットとした。

土坑は、形が隅丸方形でほぼ真っ直ぐに掘り下げた穴で、掘立柱建物跡にならなかったものとした。

集石遺構（略号SI）

人為的に集められた石の集合体を示す。集石遺構は、溝内の配石で水流に関係したもので、水路の分岐点には水流を制御する石があるとされているが、当遺跡においてはその性質が異なると考えられる。明治の字絵図と比較すると、集石遺構が坪の境に位置している。このことから、この配石は坪境であると考えられる。

畦畔（SM）

土等を盛り水田を区画したものを示す。杭や矢板などで補強するものもある。畦畔には水田を大きく区画する大畦畔と、その大区画内をさらに小さく区画する小畦畔がある。

杭列（略号SS）

畦畔の水路側へ等間隔に打ち込まれた杭が列状になっているものを示す。

耕作地跡（略号ST）

土中に埋没し保存された過去の水田跡のことを示す。

水口（略号STD）

水田に水を取り入れる口のことを示す。

畝状遺構（略号S T K）

畝の耕作地跡のことを指し、土を盛り上げた畝のことを示す。

水口砂礫層（略号S T R）

水田に水を取り入れる口に堆積した砂礫層の広がりのことを示す。

遺物集積（略号S U）

遺構検出面上において、ほとんど掘り込みを伴わない状態で遺物が集中的に出土する遺構を遺物集積とした。

不明遺構（略号S X）

性格不明の遺構を示す。

自然流路跡（略号N R）**2 遺構の計測**

各遺構の規模は遺構一覧表に示した。柱痕の大きさが分かるものは計測を行った。明らかに搅乱や他の遺構によって破壊されたり、調査区外に伸びたりしている場合は括弧書きで残存値を示した。

竪穴住居跡

長軸と短軸は、方形遺構の各辺中央に直交する軸を結んだ線の長さを測定した。

被熱・焼土堆積遺構

竪穴住居跡と同様に、焼土・粘土が散布する範囲について計測を行った。

溝状遺構

上端の幅は最大幅で計測し、深さは一番深い位置で計測した。

ピット・土坑

方形の遺構については、竪穴住居跡の計測に準じた。それ以外については、長軸と短軸を計測した。深さは最も深い位置で計測した。

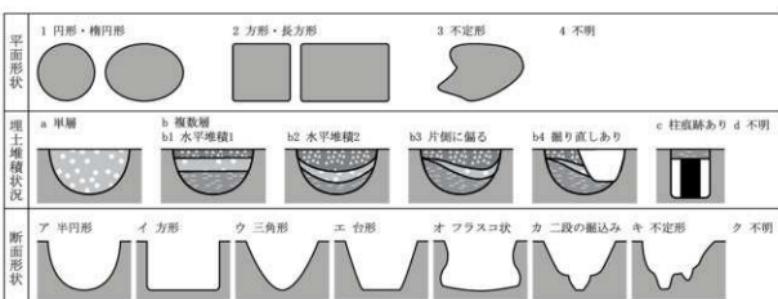


図14 遺構分類模式図

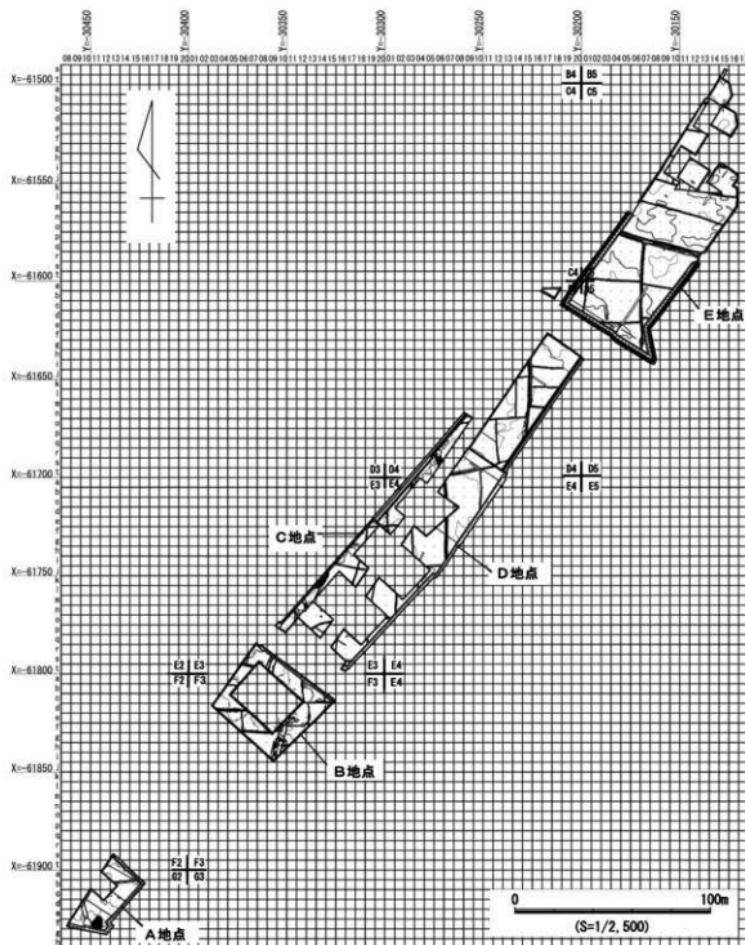


図 15 調査区全体図 (1) IIIb 層

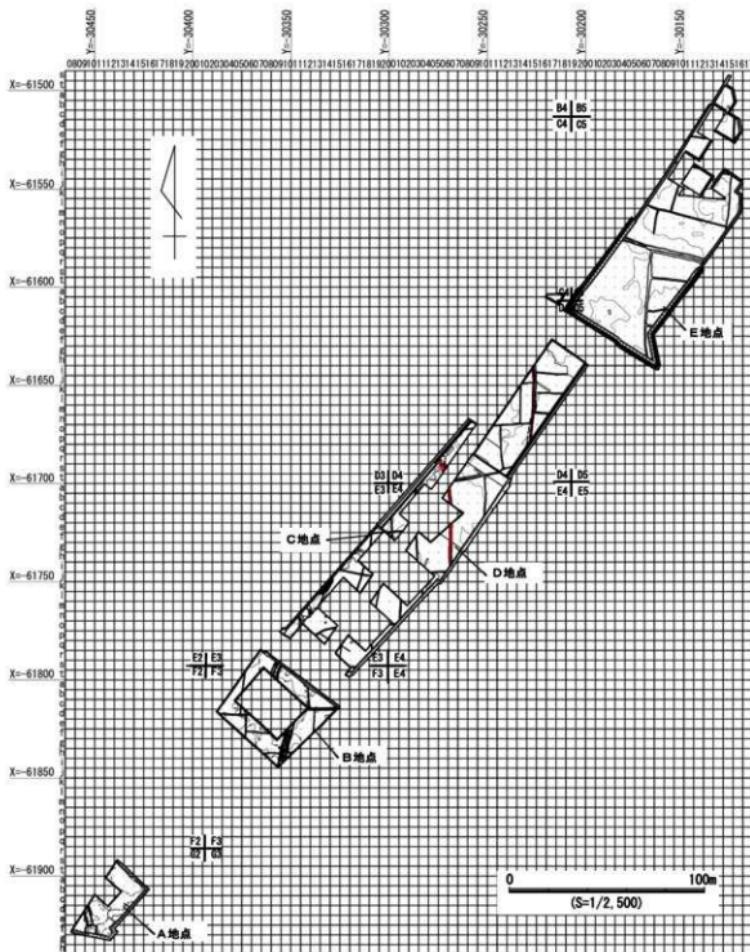


図 16 調査区全体図（2）IIIc層

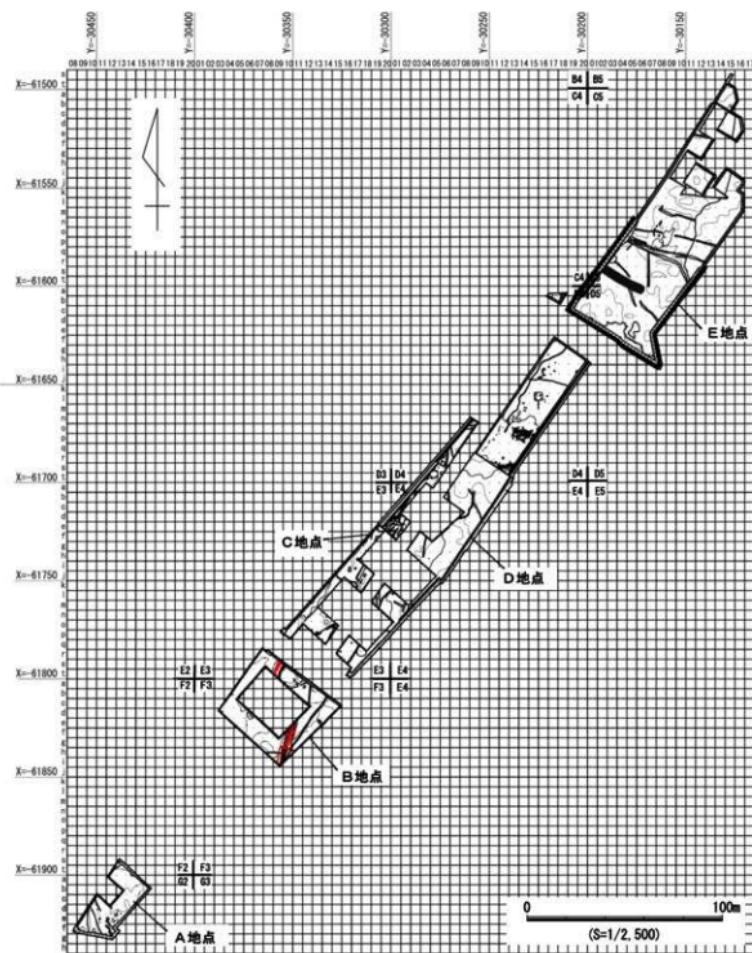


図 17 調査区全体図 (3)V層

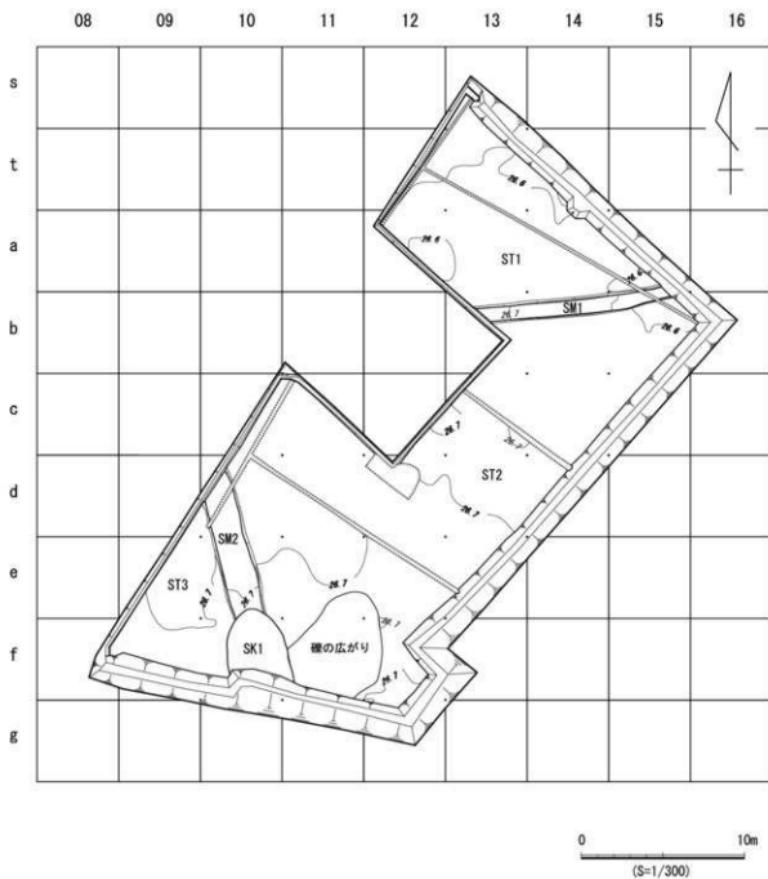


図18 遺構全体図（A地点 1面）

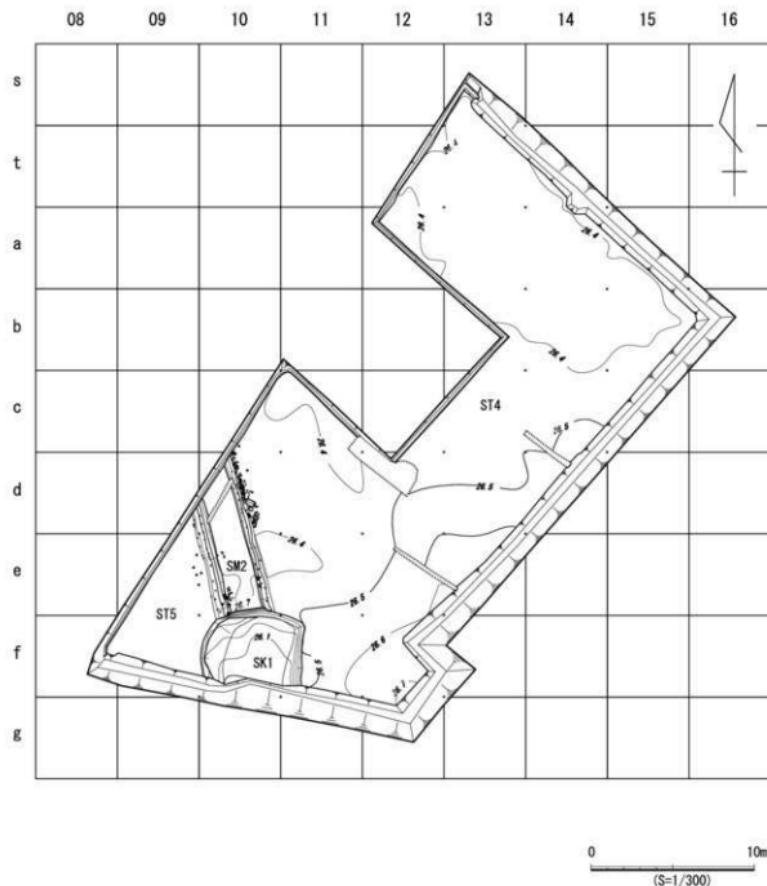


図19 造構全体図（A地点 2面）

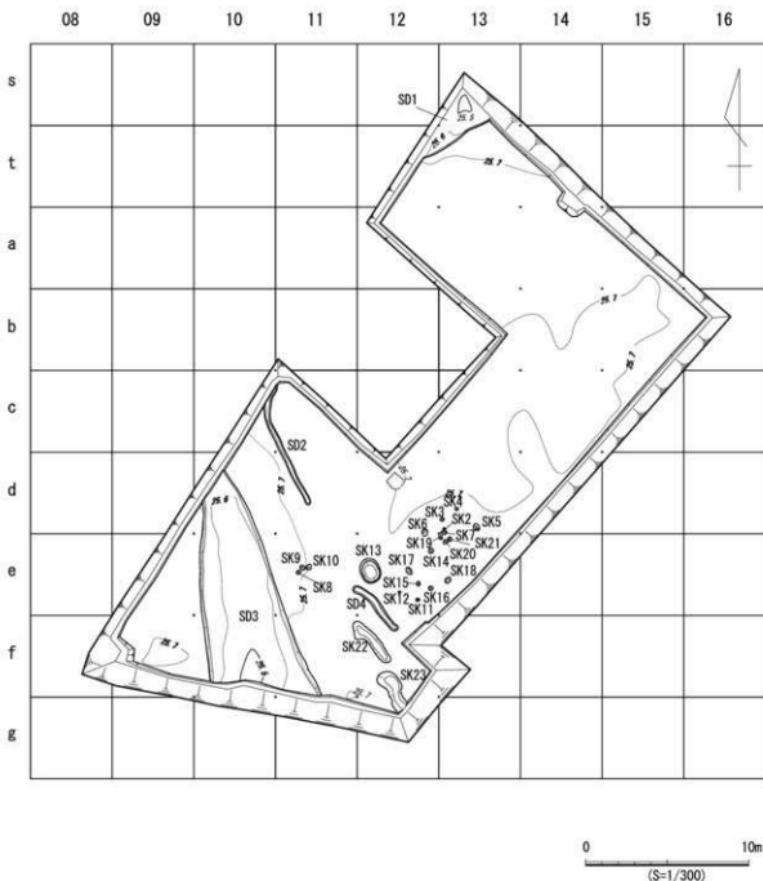


図20 遺構全体図（A地点 3面）

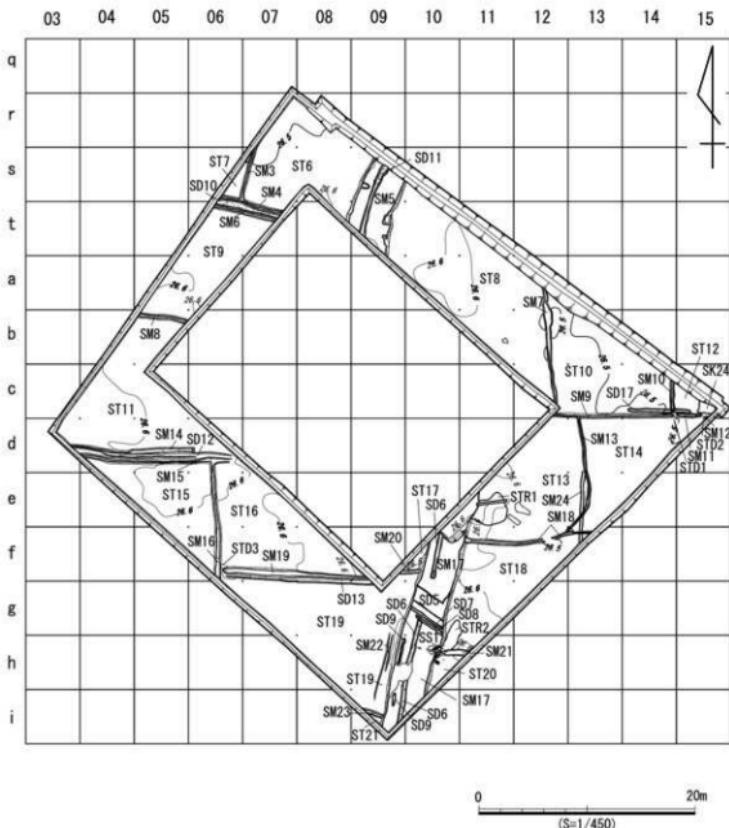


図21 造構全体図（B地点 1面）

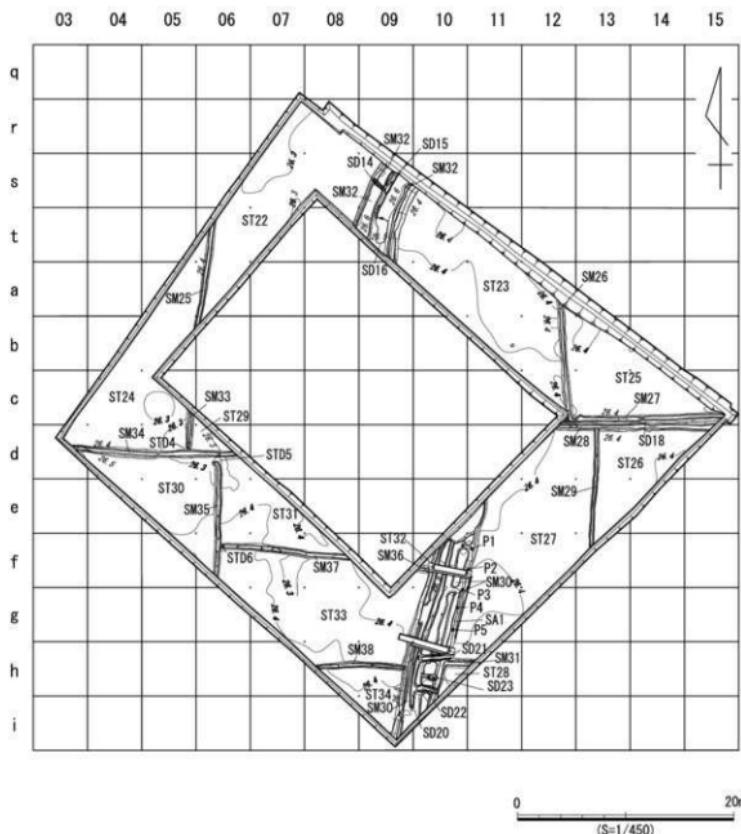


図22 遺構全体図（B地点 2面）

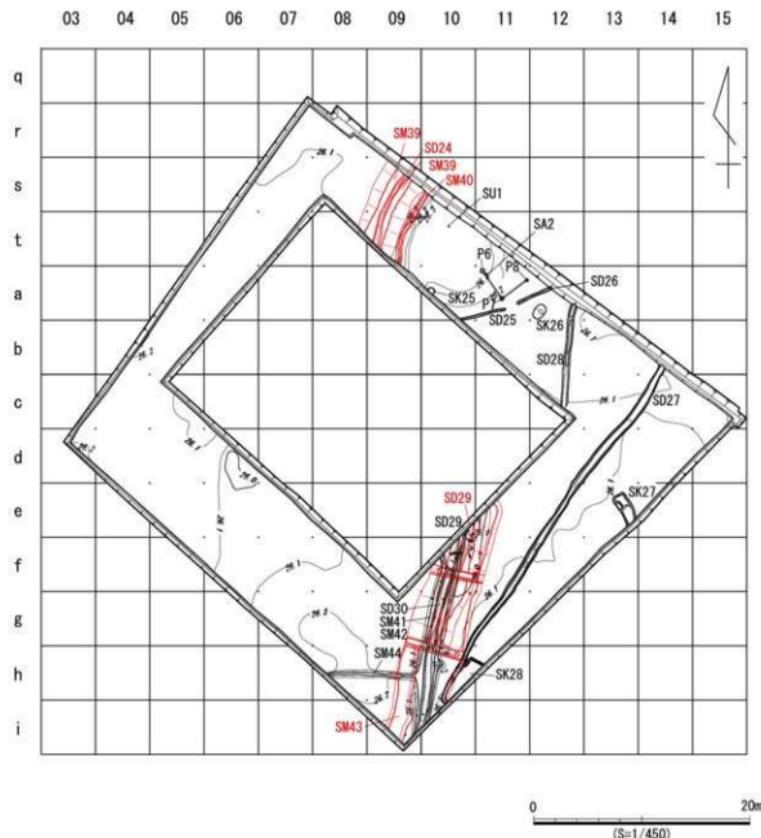


図23 造構全体図（B地点 3面）

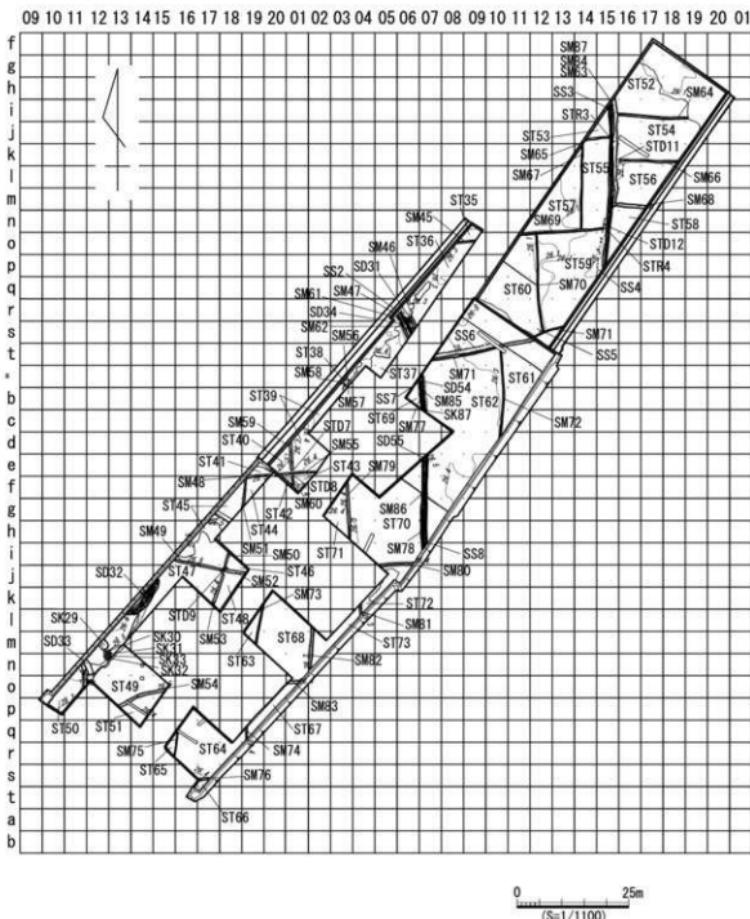


図24 遺構全体図（C・D地点 1面）

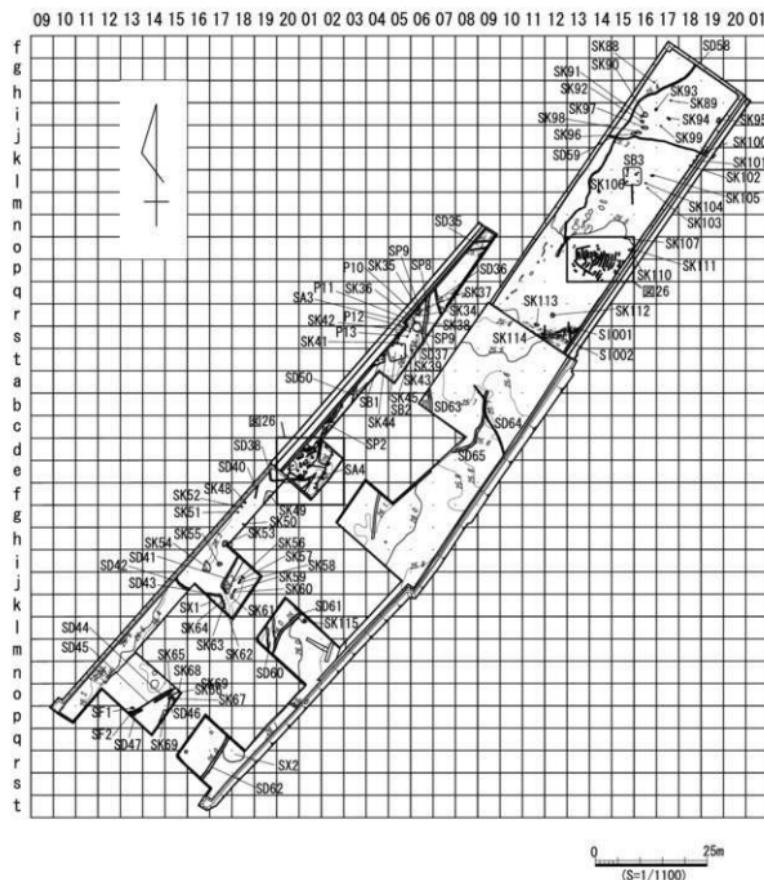


図25 遺構全体図（C・D地点 2面①）

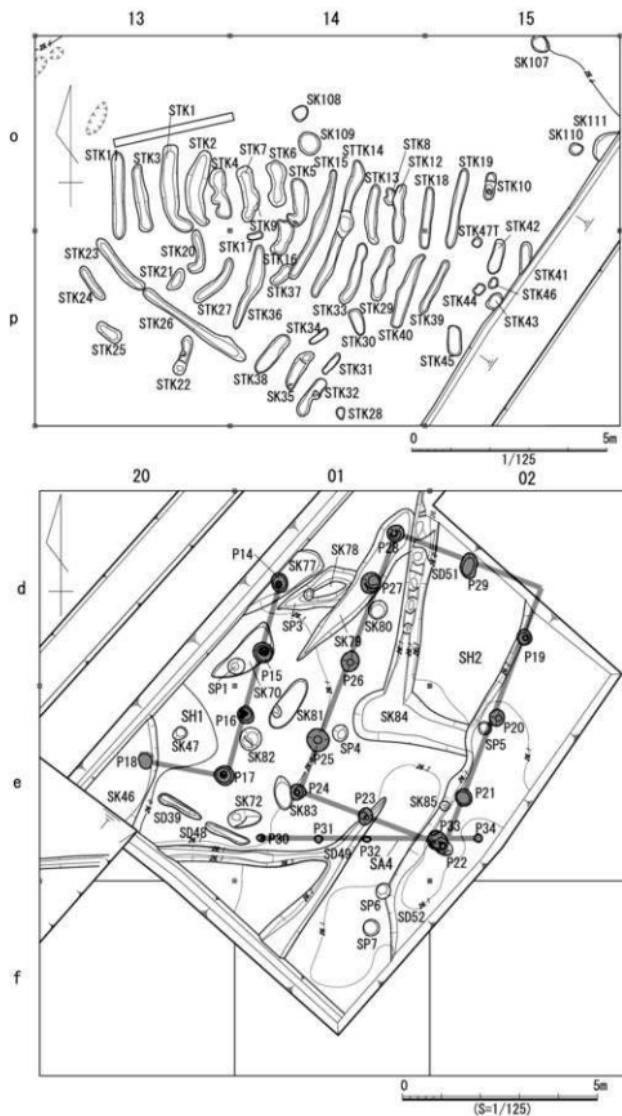


図26 遺構全体図(C・D地点 2面②)

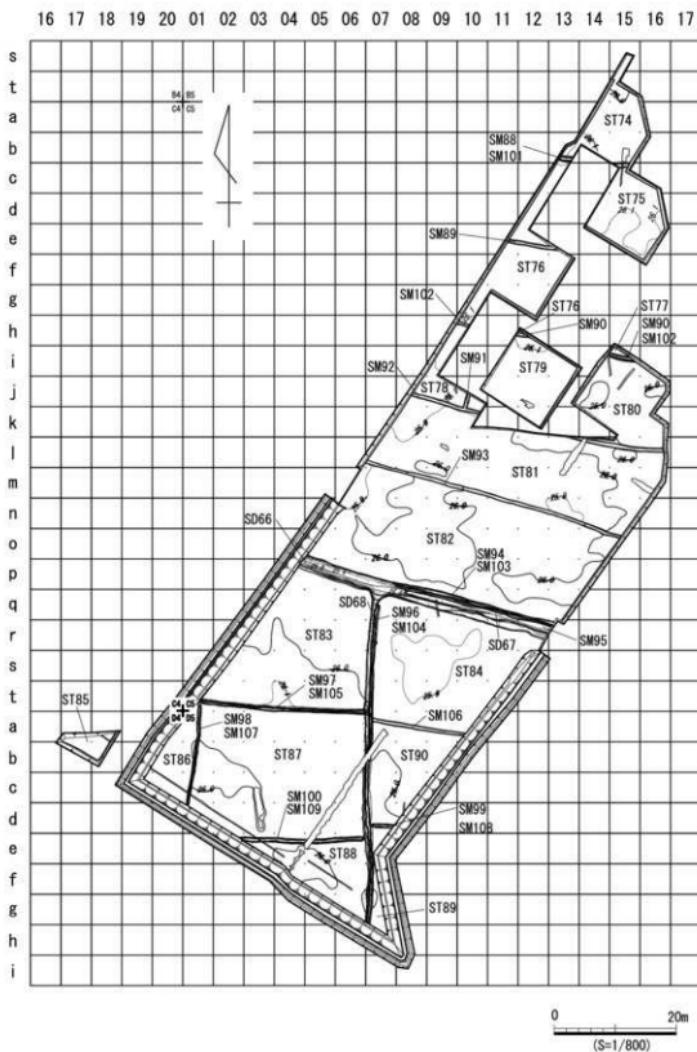


図27 遺構全体図 (E地点 1面)

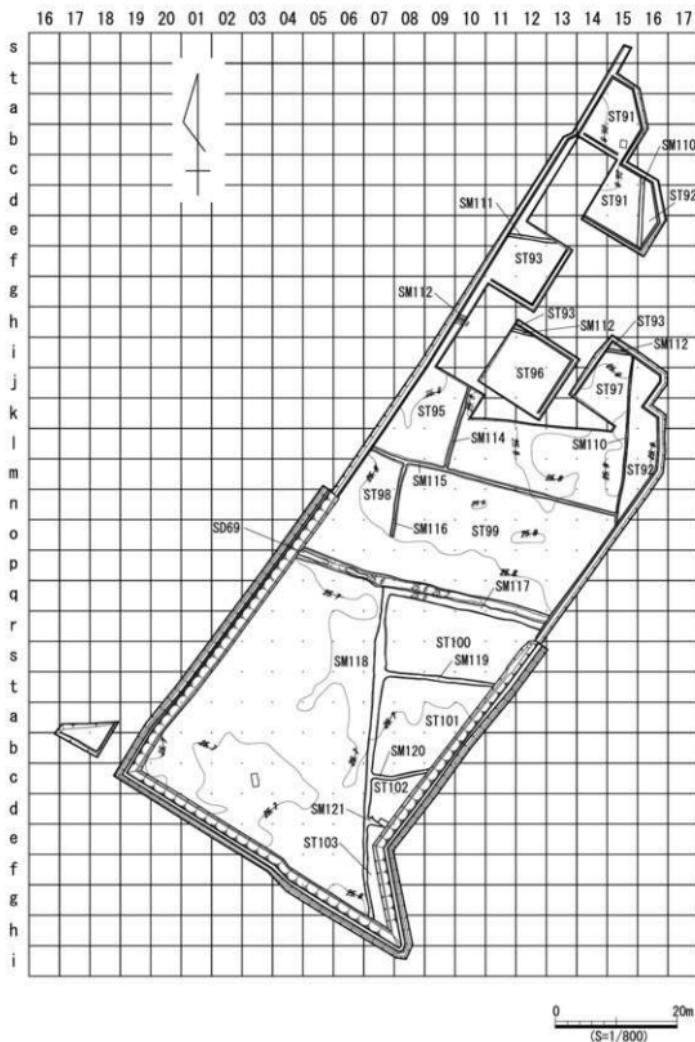


図28 造構全体図(E地点 2面)

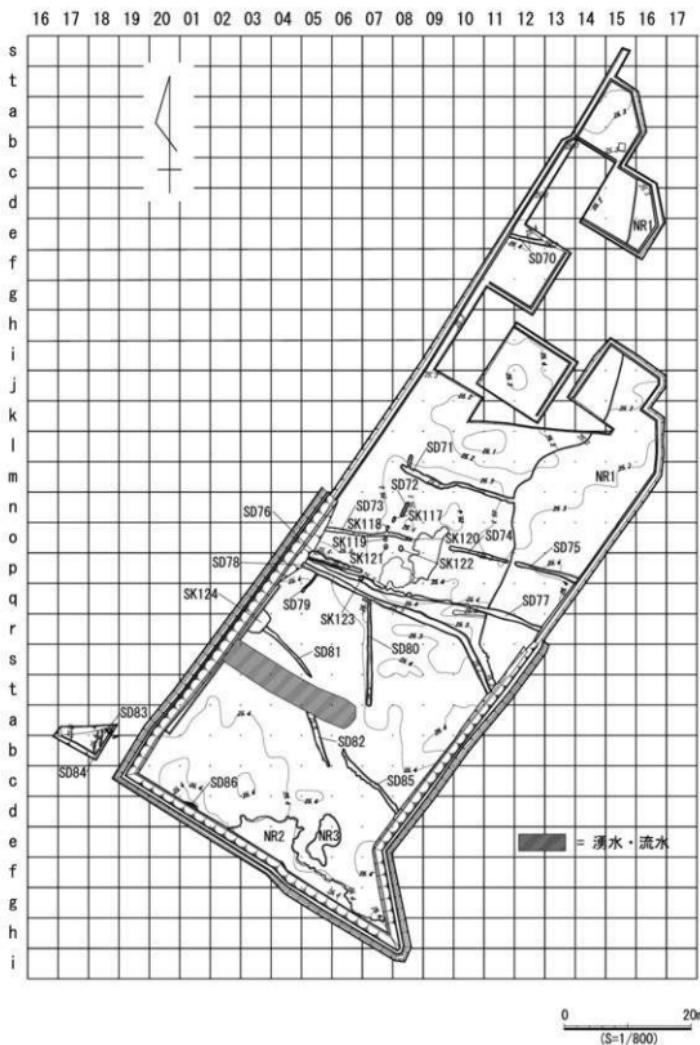


図29 造構全体図(E地点 3面)

第3節 遺物概要

1 出土遺物数と掲載遺物数

出土遺物は、接合前の破片数で合計 100,592 点である（表 6）。そのうち、主に鎌倉時代から江戸時代までの中近世陶磁器は、全体の出土遺物数に対する割合が約 22.7%と最も多く、次いで中近世土師器（土師器皿、鍋、釜等）、須恵器、土師器などが多い。また、その他の種別として飛鳥時代と奈良時代の瓦（以下、古代瓦と記載する。）や金属製品などが出土しているものの、全体の出土遺物数に対する割合はいずれも 10%以下である。なお、接合比率は全体に低い。

表 6 出土遺物点数等一覧表

種別	A地点	B地点	C地点	D地点	E地点	岩田西遺跡：合計					
	接合後 破片数 b	接合後 破片数 b	接合後 破片数 b	接合後 破片数 b	接合後 破片数 b	接合前 破片数 a	接合後 破片数 b	接合比率 b/a	bの全体 に対する 割合(%)	掲載 点数 c	c/b
縄文土器	0	0	9	1	0	11	10	9.09	0.0	0	0.000
土師器	52	137	883	625	323	20732	2020	—	2.1	62	0.031
中近世土師器	781	3483	2252	4575	5622	16713	—	17.4	104	0.006	
須恵器	213	639	2452	1802	245	5839	5351	8.36	5.6	189	0.035
古代瓦	16	5	5	11	1	48	38	20.83	0.0	9	0.237
灰釉陶器	100	276	604	484	102	1689	1566	7.28	1.6	84	0.054
白瓷系陶器	697	2655	2212	3252	6252	15704	15068	4.05	15.7	340	0.023
他陶磁器	412	1604	675	2257	1649	7133	6597	7.51	6.9	580	0.088
近世瓦	33	226	37	269	82	659	647	1.82	0.7	0	0.000
石製品	3	68	24	53	34	182	182	0.00	0.2	61	0.335
金属製品	17	105	28	189	136	500	475	5.00	0.5	107	0.225
土製品	57	185	114	248	367	1078	971	9.93	1.0	126	0.130
木製品	130	900	77	656	247	2012	2010	0.10	2.1	160	0.080
種子	43	216	17	180	121	577	577	0.00	0.6	0	0.000
炭化物	27	273	79	412	200	1017	991	2.56	1.0	0	0.000
骨	0	1	8	6	0	15	15	0.00	0.0	0	0.000
細片	2009	7106	12701	16146	4803	43396	42765	1.45	44.6	0	0.000
合計	4590	17879	22177	31166	20184	100592	95996	4.57	100.0	1822	0.019

掲載遺物数は合計 1,822 点であり、接合後破片数の 1.9%である。その抽出方法は、遺構出土遺物のうち、遺構の性格や時期等の検討する上で必要なものや、遺物包含層出土遺物のうち、遺跡の性格を端的に示すものや分類別の代表的なものをを中心に選択している。

2 時期区分

本報告書における時期区分は一般的に使用されている時代呼称を用い、その年代観に対応する土器様式等は既存の研究に従った（表 7）。また、本報告書における中世はおよそ平安時代後半から安土・桃山時代、近世はおよそ江戸時代に対応する。なお、出土した遺物について、以下の方々から土器様式名、产地、時期などの指導を得た。しかし、本書における記載内容の責任は編集者にある。

須恵器・灰釉陶器：渡邊博人（各務原市役所）、土師器・土師器皿：井川祥子（岐阜市教育委員会）

中近世陶磁器：藤澤良祐（愛知学院大学）、木製品：山田昌久（首都大学東京）

石器・石製品：長屋幸二（岐阜県博物館）、金属製品：久保智康（京都国立博物館）

3 遺物概要

ここでは種別ごとの所属時期、分布などについて記す。

(1) 縄文土器

出土点数は3点と少なく、しかも大半は細片である。

(2) 弥生土器・土師器

出土遺物の所属時期は、弥生時代中期中葉・中期後葉・後期・終末期（古墳時代早期）及び古墳時代前期・中期・後期・終末期、8~10世紀である。土師器は7世紀前半（古墳時代終末期）の伊勢型甕が最も多い。土師器の出土位置はC・D地点が最も多く、B地点S U 1・S A 2、E地点N R 2からは数点出土している。少数であるが、濃尾型平底甕や清郷型甕・瓶が出土している。弥生土器は段丘崖上の方形周溝墓からの転落と考えられる。遺物の接合は、古墳時代のものがS B 1・S U 1の遺構内及びその周辺において確認できた。

(3) 須恵器・縁軸陶器

出土遺物の所属時期は、5世紀末~6世紀初頭、6世紀代、6世紀末~7世紀初頭、7世紀前半、7世紀後葉~8世紀前葉、8世紀後半~9世紀前葉、10世紀である。7世紀前半代と7世紀後葉~8世紀前葉のものが多い。その出土位置は調査区全体に広がっているものの、C・D地点から最も多く出土している。7世紀前半~後半のものには提瓶・平瓶・横瓶など水辺の祭祀に伴うものがあり、8~9世紀のものには円面鏡、転用硯、佐波理写しの坏類、縁軸陶器碗1点（C地点包含層出土）があり官衙遺構がそばにある可能性も考えられる。また、7世紀末~8世紀初頭の土塔相輪の根元、8世紀後半代の火舎香炉の蓋、8世紀末の伊勢産の壺、焼台等の特殊品も出土している。二次焼成を受けた7世紀代の壺もある。S D60、S I 1・2から多く出土している。美濃須衛産8世紀末の碗に墨書き「口」、9世紀前葉の摘み蓋にも墨書きがある。10世紀の灰釉陶器の窯で生産した碗が1点出土している。須恵器の生産地は猿投窯と美濃須衛窯、伊勢産、产地不明などがある。陶錘が数点出土している。

(4) 古代瓦・中世瓦

古代瓦は斜格子目叩きのある飛鳥時代のものと、縄目叩きのある奈良時代のもので、ともに包含層からの出土になる。重弧文軒平瓦1点、丸瓦2点、平瓦4点である。当遺跡の南西にある中屋敷遺跡S B 1において飛鳥時代の瓦が須恵器・土師器と共に出土している。中世瓦は軒丸瓦が1点あり、B地点の包含層から出土している。

(5) 縁軸陶器

出土遺物の所属時期は猿投編年の9世紀前葉K-14から百代寺窯式併行期である。その出土位置は調査区全体に散在しているが、C地点から最も多く出土している。少数であるが、深碗、輪花碗、段皿、瓶子、花瓶、片口鉢がある。10世紀前葉のものに加工円盤、転用硯が多い。折戸53号窯式期の碗に墨書き「大」があるものが出土している。11世紀後半の美濃須衛産の輪花碗が最も新しい。出土遺物の生産地は猿投窯が多く、美濃須衛窯、美濃窯が少數ある。

(6) 中近世陶磁器・土師器

出土遺物の所属時期は、鎌倉時代から江戸時代までほぼ連続してほぼ同量出土しており、特に鎌倉時代の中国製磁器（青磁・白磁・染付）が多い。

中国製磁器の出土位置は調査区全体に広がっているものの、E地点に多い。水田遺構からの出土と

包含層からの出土である。碗がほとんどであるが、合子、小鉢、鉢、盤、香炉、四耳壺等もある。断面を漆継ぎしているものがある。加工円盤が数点あり、中でも龍泉窯の鉢の底部にある双魚文を意識して作っているものが1点ある。

白瓷系陶器の出土位置は調査区全体に広がっているものの、D・E地点から多く出土している。所属時期は、猿投窯産が第3～10型式で第5・6型式のものが最も多い。第10型式のものはほとんどが片口鉢である。美濃窯産は谷迫間2号窯～生田2号窯まで連続しており、特に明和1号窯のものが多い。美濃須衛窯のものは12世紀のものが少數ある。出土遺物の生産地は猿投窯、美濃窯が多く、美濃須衛窯が少數ある。内面に漆の付着したものや、内外面に煤が付着しているものがある。すべての時期の碗・皿に墨書のあるものが多い。墨書には花押と思われるものもある。転用硯や加工円盤もある。碗・皿以外には六器・入子・仏供・片口鉢等がある。

古瀬戸・大窯・登窯の陶器はほぼ同量出土している。磁器は肥前のものが多い。古瀬戸はD・E地点に多い。四耳壺、天目茶碗、燭台、合子の蓋、入子、梅瓶、袴腰形香炉、祖母懐茶壺、豆天目茶碗等がある。大窯はB・D・E地点に多い。天目茶碗、志野鉄絵皿、志野皿、志野小天目茶碗、志野向付、黄瀬戸向付等がある。被熱で変色しているもの少數ある。加工円盤も少數ある。登窯はB・D・E地点に多い。織部中皿、織部向付、黄瀬戸皿、黄瀬戸鉢、菊皿、志野皿、志野菊皿、志野丸皿、志野鉄絵皿、志野小碗、天目茶碗、白天目茶碗、尾呂茶碗、蟹型、火入、水滴、筒形香炉、灰落し等がある。漆が付着しているもの、漆継ぎのあるもの、内外面に煤が付着しているもの少數ある。加工円盤が数点あり、底部高台部分を使用し穿孔があるものや、天目茶碗や徳利・捕鉢の体部を使用しているものがある。墨書のあるものが数点ある。

瓦質陶器の火鉢が数点、瓦質土器の鍋の脚が1点出土している。

中世の土師器にはロクロ土師器皿、土師器皿、伊勢型鍋、羽釜がある。土師器皿は15世紀前半～16世紀前半のもので、接合前で18,064点出土している。口縁部にタールが付着しているもの、穿孔のあるもの、トリベとして使用し変色し付着物があるものも出土している。

近世の土師器には内耳鍋、熔熔鍋、茶釜がある。中世の土師器に比べると点数は少ない。

(7) 近世以降の瓦

出土遺物の大半は、江戸時代後期から末頃の陶磁器とともに出土している。

(8) 石器・石製品

出土遺物の所属時期は、縄文時代から弥生時代と室町時代から江戸時代に分かれる。前者は有舌尖頭器、槍見製品、石鎌、有溝砥石、打製石包丁、粗製刃器、打製石斧、滑石製管玉等であり水田跡や包含層から出土している。後者は砥石・火打石・墓石等であり水田跡からの出土である。特に砥石の出土が多く、その石材同定は実施していないものの、鳴滝砥に類似する石材が多い印象を受ける。なお、石器・石製品の器種及び石材は表7のとおりである。

(9) 金属製品

出土遺物の所属時期は室町時代から江戸時代である。中世のものは短刀、切羽、目貫、筈、小柄、大刀の鞘尻金具などの刀・刀装具、擬漢式鏡、銅鈴、銅錘、水滴、毛抜き、鑲台、飾り金具、古錢、溶けた銅等が出土し、近くに中世城館がある可能性が高いといえる。近世のものは煙管、古錢がほとんどである。

(10) 土製品

出土遺物の所属時期は古墳時代、中世、江戸時代であり、土鈴・土玉・土丸・土製模造品・土人形・土錐などがある。土玉は紐を通す穴があるもの、土丸は穴が無いものとした。土鈴が99点、土錐が830点と出土数が多い。土錐は形状と長さで分類し、法量で分布図を作成した(図321)。土錐はE地点から多く出土している。土錐には瀬戸内式のものが1点D地点の包含層から出土している。

(11) 木製品

出土遺物の所属時期は古墳時代、中世、近世である。掘立柱建物跡の柱穴から出土した建築部材・護岸材、中世のものと思われるものには壁材・柱などの建築部材、漆器、食事具、容器、織機関係具、器具部材、柵串等があり、西に接する城館跡に関係するものである可能性もある。中世～近世の水田跡に伴うものには杭、板材、田下駄等がある。杭の先端加工には刃こぼれ痕がある。漆器は赤漆一色の小杯で、木質はほとんど残存しておらず漆部分が多く残存している。

(12) 種子

水田跡から多く出土している。ほとんどがスモモの種である。NR1から出土した須恵器平瓶80の内部からも1点出土している。

4 掲載した遺物実測図の凡例

本報告書で掲載した遺物実測図の詳細は、以下のとおりである。

- 付着物などのトーン表記は、アミ40%が墨・炭化範囲、アミ20%が漆等付着物、アミ10%が樹皮範囲・石器使用痕範囲・縫合範囲を示す。
- 瓦の部分名称及び計測位置は図30、木製品の細部分類は図31のとおりである。
- 次節以降では、表7の時代呼称、土器様式・土器型式に従い、中世以前の遺構と遺物、中世以降の遺構と遺物に分けて記載する。

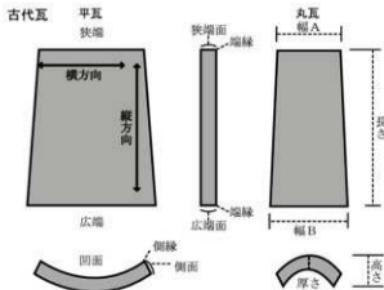


図30 瓦の部分名称・計測位置

木取りの分類

I	II				III	IV
	II-1	II-2	II-3	II-4		
中心に木の芯が残っている	単に削っただけの芯部側面	芯部側面を削り角状にする(1/2以下)	木肌側面を削り角状にする(1/2以下)	半削材(1/2程度)	断面がほぼ正方形	断面が長方形
丸木芯持材	削材			角材	板材	

先端形状の分類と加工状況の分類

先端形状	加工状況			
	1 <90°	2 ≥90°	3 <90°	4 ≥90°
a 数度にわたる繊密な削り直しを残すもの				
b 単純な削り直しを残すものの				

図31 木製品細部分類

表8 木製品出土一覧表

器種 地点	箸	曲物	漆器	生活 雑具	収穫 具	水田作 業具	織機 関連具	器具 部材	構造部 材	中世 斎事	杭	柱	板材	板状	ヘラ 状	棒状	用途 不明	総計
A地点	2	3			1	1				10	37		3	7	2	25	39	130
B地点	7	3	1	1		2	1		1	119	33		4	50	1	54	623	900
C地点									1	24	10	1	2	6		7	26	77
D地点	5		1					1	2	269	23		2	32	1	16	304	656
E地点	6	2		2				2		93	7		3	18	6	12	96	247
総計	20	8	2	3	1	3	1	3	4	515	110	1	14	113	10	114	1088	2010

表9 石器・石製品一覧表

石材 器種	チャート	下昌石	石英	玢岩	珪質 頁岩	安山岩	透光 頁岩	凝灰 岩	ホルン フェルス	安山 岩	粘板 岩	滑石	砂岩	泥岩	石材 不明	総計
有舌尖頭器					1											1
石鏹	8	6														14
石鏹未製品	1	1														2
槍未製品		1														1
スクレイバー	7	1										1				9
R F		1														1
UF	2															2
櫛	3															3
火打石	4		2								2					6
打製石包丁																2
粗製刃器																2
石核		1														1
フレイク	24	11		1		2	1		3				1			43
打製石斧								1	2	1	2		1			7
磨製石斧										1						1
石鍤										1						1
石刃										1	1					2
石製品																1
管玉												1				1
有溝砥石												1				1
磨石・敲石												11				11
砥石													57			57
碁石													4			4
硯												8				8
石墨																1
総計	49	22	2	1	1	2	1	1	4	6	13	1	13	3	63	182

表10 金属製品一覧表

地點	鐵 錆	釘	劍	鏡	鍔	鉢	刀 装具	飾金 具	茶釜	水 滴	毛抜 き	鉄滓	煙管	その 他	唐 銭	北宋 銭	明 銭	寛永 通寶	古錢名 称不明	総計
A地点		2				3	2				2	4	2		1		1			17
B地点		6	1			4		1			8	29	15	2	25	1	13			105
C地点		2				3	1				5	7	5		1		4			28
D地点	1	2		1	1	5	8		1	1	16	49	16	2	31	1	49	5		189
E地点		5			1	1	4	8			22	26	16		21	2	19	11		136
総計	1	17	1	1	1	2	19	19	1	1	1	53	115	54	4	79	4	86	16	475

第4節 水田関係以外の遺構（古墳・平安時代等）

A 地点 2面（近世）

S K 1（遺構図：図 86）A 地点 2面 II層

調査区周辺の排水溝掘削において、本遺構付近はII層上面まで砂礫が盛り上がっており、III a層下に落ち込みがあることを確認できていたため、本遺構の平面検出は比較的容易であった。

本遺構は大畦畔であるSM2を切る。遺構の掘形は隅丸方形で、断面形は皿状を呈する。埋土は直径1.0～50.0cmの円錐が主体であり、ラミナ層は確認できなかった。

出土遺物はない。本遺構の所属時期はSM2以降で近世と推定される。遺構の性格は不明であるものの、遺構の上面から下面まで大きな礫がランダムに入ることから、短期間で埋没した可能性が高い。

A 地点 3面（古墳時代）

S D 1・3（遺構図：図 32）A 地点 3面 V層

SD3は大畦畔SM2直下で検出できた構状の落ち込みである。遺構の断面形は皿状を呈し、とても緩やかな立ち上がりを有する。埋土は3層に分かれ、わずかにブロック土が認められた。SD1とSD3は直交し、SD3はSD2・4に平行する。

出土遺物は古墳時代中期の甕1点が出土しており、本遺構の所属時期は古墳時代中期と推定される。

S D 2・4（遺構図：図 32）A 地点 3面 V層

SD3にはほぼ平行する2条の溝である。遺構の埋土は検出面であるV層と類似し、その境は漸移的であったため、プラン確定に手間取った。いずれの溝も断面形は皿状を呈し、埋土は単層である。SD3に比べると幅が細い溝で、SD2とSD4は繋がっていないがほぼ同一線上にある。

出土遺物はないが、V層で検出されているため、本遺構の所属時期は古墳時代と推定される。

S K 13（遺構図：図 32・35）A 地点 3面 V層

A地点のV層上面で検出できた土坑のうち、最も大きい規模を有する。遺構の掘形は梢円形状で、底面はほぼ平坦である。

出土遺物はないが、V層で検出されているため、本遺構の所属時期は古墳時代と推定される。

S K 2～12・14～21（遺構図：図 32～34）A 地点 3面 V層

A地点のV層上面で検出できた土坑で、掘立柱建物跡になる可能性もある。SD1～4で区画された内側に位置している。

出土遺物はないが、V層で検出されているため、本遺構の所属時期は古墳時代と推定される。

B 地点 1面（近世）**S D 5・7・8（遺構図：図 87）B 地点 1面 II層**

大畦畔 S M17 を検出した際に、S M17 を切るように検出した 3 条の溝である。主軸方位はいずれも N-33°-W であり、S D 5 の幅が最も広い。溝の断面形はいずれも皿状を呈し、埋土は単層で流水痕跡は確認できなかった。

出土遺物は S D 5 から山茶碗 1 点、中近世陶磁器 1 点、土師器皿 1 点、近世以降の瓦 1 点の合計 4 点が出土している。遺構の性格は近世以降の耕作痕と考えられる。

S K24（遺構図：図 88）B 地点 1面 IIIb 層

III a 層の水田耕作土を除去した後に検出した。平面形は概ね方形を呈するが、大半は調査区外に位置する。埋土は単層である。

出土遺物は土師器 1 点、中近世陶磁器 2 点、土師器皿 3 点、木製品 1 点、石器 1 点の合計 8 点である。本遺構の所属時期は検出面から中世と推定される。遺構の性格は不明である。

B 地点 3面（古墳時代）**S A 2（遺構図：図 36）B 地点 3面 Va 層**

3 基の柱穴から成り、P 6・P 7 はほぼ同じ大きさである。柱間距離は P 6 と P 7 の間が約 3.1m、P 7 と P 8 の間が約 2.9m である。P 7 の柱穴埋土には明確な柱痕跡が認められたが、他では確認できず、P 6 の埋土中から土師器壺の脚部片（2）が出土した。

出土遺物は土師器 1 点、須恵器 1 点、山茶碗 1 点の合計 3 点である。本遺構の所属時期は古墳時代前期と推定される。遺構の性格は不明であるものの、S D25・26 の区画溝内側に位置する、竪穴住居跡か掘立柱建物跡を構成する柱穴跡の一部の可能性がある。

S D25・26（遺構図：図 37）B 地点 3面 V 層

S A 2 の南東側に延びる、浅くて細い溝である。断面形は皿状を呈し、埋土は単層で流水堆積は確認できなかった。S D25・26 は主軸方位が同じであることから一連の溝であり、S A 2 を構成する P 6・7 の柱筋の延長上で溝が切れている。

出土遺物は S D26 から須恵器が 1 点出土している。本遺構の所属時期は V 層から検出していること、S D27・28、S K28、S A 2 と同時期のものと考えられることから古墳時代と推定される。

S D27（遺構図：図 37）B 地点 3面 V 層

本遺構は、B 地点の南東側をやや蛇行しながら直線的に延びる溝であり、F3h-i10 グリッド付近で屈曲する。V 層上面で検出できたものの、遺構の輪郭がやや不鮮明であり、特に S K28 と重なる付近での検出が困難であった。断面形は三角形状もしくは逆台形状を呈し、埋土は単層で流水堆積は確認できなかった。

出土遺物は土師器 10 点、中世土師器皿 11 点、土製品 2 点、金属製品 1 点、時期不明 9 点の合計 33 点である。D 地点の S D61・62 と一連の溝で、S D58・59・63・64 と性格を同じくする区画溝であると考える。そのため、本遺構の所属時期は古墳時代と推定される。

S D 28（遺構図：図37）B地点3面V層

本遺構はほぼ真北を主軸にもつ溝であるが、南側のF3d12グリッドでは溝の延長ラインを検出できず、北側の調査区壁面でも溝の落ち込みが確認できなかったことから、検出面が削平されていないとすれば、長さ10m程度の溝であったことになる。直線的に延び、その断面形は逆台形を呈し、埋土に流水堆積は確認できなかった。

出土遺物は土師器2点、須恵器1点、中世土師器12点、石器2点、時期不明3点の合計21点である。本遺構の所属時期は古墳時代と推定される。S D26・27の間にあり、区画溝と考えられる。

S K 26（遺構図：図38）B地点3面V層

本遺構は楕円形を呈する長さ1m以上の大きな土坑であり、S A 2やS D25・26と比較的近い位置で検出した。その断面形は逆台形状を呈し、底面は緩やかに回んでいる。埋土は2層に分層でき、土師器片と石礫が出土した。

出土遺物は中世土師器皿11点、石器1点、合計12点である。本遺構の所属時期はV層で検出し、S D26・28などと関連のある遺構と考えられるため古墳時代と推定する。遺構の性格は不明である。

S K 28（遺構図：図39）B地点3面V層

本遺構はV層上面で検出できたものの、遺構の輪郭線がとても不明瞭で、そのプラン確定に手間取った。遺構の大半は調査区外に位置しており、北辺は直線的に延び、西辺はS D27に切られている。遺構の底面は平坦であり、北側にて浅くて細い溝を検出した。また、北西隅にて炭化物の広がりを確認し、その付近から土師器が出土した。

なお、発掘調査中には、周溝とも把握できる浅い溝の存在や、底面が平坦であることなどから、堅穴住居跡である可能性を検討した。しかし、底面では柱穴や土坑などの遺構を全く確認できなかったことから、ここでは方形を呈する土坑として報告する。

出土遺物は土師器28点、中世土師器皿13点、時期不明2点の合計43点である。本遺構の所属時期は古墳時代後期と推定される。

S U 1（遺構図：図38）B地点3面V層

IV層掘削中に円礫とともに土器片が集中して出土したため、土器集積とした。土器片はIV層中又はV層上面に位置していたものの、V層上面での掘り込みは確認できず、土器片の周辺には炭化物や焼土は確認できなかった。隣接グリッドで検出できたS A 2との関連を想定したが、明確に把握できなかった。

出土遺物は土師器12点、中世土師器皿3点、石器2点、時期不明2点の合計19点である。本遺構の所属時期は古墳時代前期と推定される。遺構の性格は不明であるがS D25・26の区画溝の内側に位置するものと思われる。

C 地点 1面（近世）**S D 32（遺構図：図 89）C 地点 1面 II層**

本遺構はIII a 層とV層との境付近で検出できた、南北方向を主軸とするやや湾曲した溝状遺構である。断面形は浅い皿状を呈し、埋土上層には粗砂や小礫が全体的に広がっていた。埋土下層は粘土であり、V層のブロック土が含まれている。遺構底面は、全体的にみて長軸を東西方向に向けた細長い橢円形状の土坑が連続している。

今回の調査で、溝状遺構の上面に砂礫層が全体的に認められるのは本遺構のみである。また、埋土中にV層ブロックがみられることや、底面の連続する橢円形状の土坑群は波板状凹凸面に類似することなどから、本遺構は道路状遺構か、あるいは生産域内にある農道を兼ねた大畦畔であったと考えられる。須恵器が中近世陶磁器と同位置で多く出土していることから、古墳時代の道路状遺構の可能性も考えたが、地籍図の畦畔の位置と重なっていることから農道を兼ねた大畦畔であると考えた。

出土遺物は土師器 15 点、須恵器 67 点、灰釉陶器 5 点、山茶碗 16 点、中近世陶磁器 12 点、中近世土師器 21 点、土製品 1 点、石器 2 点、金属製品 1 点の合計 140 点である。本以降の所属時期は寛永通寶の出土や陶磁器から近世（17世紀前葉頃）と推定される。

S D 33（遺構図：図 90）C 地点 1面 II層

本遺構は、V層が南西方向に向かって緩やかに下降し始める場所に位置する。平面形は西側が直線的であるのに対し、東側がやや湾曲しており、底面は凹凸が著しい。埋土中に流水堆積は確認できず、検出面から底面まで円礫が平坦面を上にして散在していた。

出土遺物は土師器 42 点、須恵器 48 点、灰釉陶器 5 点、山茶碗 46 点、中近世陶磁器 8 点、中近世土師器 59 点、近世以降瓦 1 点、土製品 4 点、木製品 1 点、石器 1 点、種子 2 点の合計 217 点である。本遺構の所属時期は S D 32 と同時期と考えられ、近世と推定される。地籍図の水路と重なっている。

S K 29～33（遺構図：図 91）C 地点 1面 II層

S K 30～33 は、V層上面において検出できた橢円形状の掘形を有する土坑群であり、遺構の長軸がそれぞれ平行している。一方、S K 29 は S K 30・31 などとほぼ同じ幅の大きな土坑であり、北端は調査区外へと延びている。埋土はいずれも単層であり、土坑の立ち上がりは極めて緩やかである。S K 29 の底面は凹凸があり、須恵器や灰釉陶器などが出土した。

遺構の検出当初は、道路状遺構に伴う波板状凹凸面の可能性を検討した。しかし、検出した範囲が狭いことから、結論を見いだせなかった。近世の水路と考えられる S D 33 と平行している。

出土遺物は S K 29 から土師器 20 点、須恵器 61 点、灰釉陶器 4 点、山茶碗 10 点、中近世陶磁器 2 点、中近世土師器 22 点、石器 3 点の合計 122 点が、S K 30 から須恵器 2 点が出土している。S K 29～33 は S D 32・33 と同時期のものと考えられ、所属時期は近世と推定される。

C 地点 2面（古墳時代・平安時代）**S A 3（遺構図：図 40）C 地点 2面 V a 層**

本遺構は5基の柱穴から成り、柱穴の掘形はいずれも円形で、規模の平均は長軸長さ0.29m、深さ0.15mで、柱間距離は約1.4mである。柱穴埋土には明確な柱痕跡は確認できず、いずれも上下2層に分層できた。

出土遺物はなく、本遺構の所属時期は不明である。SD37にやや平行している。

S A 4（遺構図：図 41）C 地点 2面 V a 層

本遺構は5基の柱穴から成り、柱穴の掘形は円形か楕円形で、規模の平均は長軸長さ0.22m、深さ0.12mで、柱間距離は約1.11mである。柱穴埋土はP31のみ柱痕跡を確認したものの、他の遺構は基本的に自然堆積である。

出土遺物はない。SD38・49に平行し、SH2と重なるため、SH2より古いものと思われる。

S B 1（遺構図：図 42）C 地点 2面 V a 層

本遺構は調査区周辺の排水溝掘削において、その壁面に被熟痕跡を確認できたことにより、遺構の存在が明らかとなった。しかし、平面の検出では、遺構埋土と検出面であるV層の土色が極めて類似し、そのプラン確定にかなりの時間を要した。排水溝による被熟痕跡を確認できていなければ、本遺構は検出できなかつたかもしれない。

本遺構は大半が調査区外に位置しているものの、平面形は主軸を北東から南西方向にもつ方形を呈すると思われる。遺構埋土は5層に分層でき、壁面際の三角堆積（5層）が顕著である。埋土上層（1・2層）は黄灰色を呈し、基本層序V層に色・質ともに類似する。これらの土は礫をほとんど含まない均質な水性堆積土であり、住居廃絶後に調査区周辺が湿地化し、しばらくの間、水面下で住居の部分が凹んでいた状態が続いていたと推定される。また、埋土下層（3・4層）は炭化物と焼土を含む土である。竪穴住居跡の広い範囲で炭化物と焼土粒を確認し、炭化材も一部確認できたことから、この竪穴住居跡は焼失住居であったと推定される。

住居の床面では、土坑3基、柱穴1基、カマド、周溝を検出した。土坑はいずれも浅く、その性格は不明である。柱穴は直径0.29m、深さ0.18mで、柱痕跡は確認できなかった。しかし、その位置や規模から柱穴と想定した。周溝は幅が極めて狭く、床面の周縁を全周するものの、カマドの手前で途切れている。カマド付近では、遺構埋土掘削中に焼土や炭化物の広がりを確認でき、土師器片が散在していた。土器片は複数破片が上下に重なっており、それらとともに長さ21cmの楕円形の円礫が縦位で出土した。円礫の前面（南西側）には焼土が広がっていたことから、この円礫はカマドの立柱石と想定される。カマドの袖部は確認できず、火処は床面から約10cm掘り込まれていた。なお、床面では、貼床に相当する整地土は確認できなかった。

出土遺物は土師器40点、須恵器5点、中近世陶磁器1点、中近世土師器16点、石器2点、時期不明5点の合計69点である。本遺構の所属時期は7世紀前半と推定される。

S B 2 (遺構図: 図 43) C 地点 2 面 V a 層

本遺構は、S B 1 と同様に遺構埋土と検出面である V 層の土色が極めて類似し、そのプラン確定にかなりの時間を要した。平面形は主軸をほぼ真北にもつ方形であり、遺構埋土は 2 層に分層できた。

住居の床面では柱穴 4 基を検出した。柱穴の掘形はいずれも円形で、規模の平均は長軸長さ 0.24m、深さ 0.10m である。いずれも浅く、柱痕跡は確認できなかった。なお、床面では、貼床に相当する整地土は確認できず、SK 40 は遺構埋土上面から掘り込まれる土坑である。

出土遺物は土師器 2 点、中近世土師器 2 点、石器 1 点、時期不明 1 点の合計 6 点である。S B 1 に近接しているが、遺構の形状が類似しているため、本遺構の所属時期は古墳時代と推定される。

S H 1 (遺構図: 図 45・46) C 地点 2 面 V a 層

本遺構は、桁行 3 間以上、梁行 1 間以上の北北東から南南西方向へと主軸をもつ掘立柱建物跡である。柱間の平均距離は桁行側の P 14・15・16 間が 1.75m、P 16・17 間が 1.55m、梁行側が 2.03m であり、桁行端の一間分の柱間が狭い。柱筋は桁行中央の柱穴（P 15）がわずかに東側にずれる特徴をもつ。この建物を構成する柱穴群は 5 基を検出した。柱穴の掘形はいずれも円形で、規模の平均は長軸長さ 0.49m、深さ 0.50m である。いずれも土層断面と柱穴底面において柱痕跡が確認され、P 14・15・16 で柱根が出土した。柱根は出土した時点で P 15・16 のものが断面方形、P 14 は芯のみが残存していた。なお、柱穴内に根石、支え石などはなかったが、P 16 の掘形埋戻土底面付近では、須恵器甕の体部破片が斜位で据えられていた。

出土遺物は、土師器が 1 点、須恵器 7 点、灰釉陶器 3 点、中近世土師器 7 点、木製品 4 点の合計 22 点である。遺構別にみると P 14 が 9 点、P 15 が 3 点、P 16 が 5 点、P 17 が 3 点、P 18 が 2 点である。そのうち、本遺構の所属時期は古墳時代と推定される。

S H 2 (遺構図: 図 47・48) C 地点 2 面 V a 層

本遺構は V 層上面で検出できたものの、遺構埋土上面の土と V 層が極めて類似し、検出にかなりの時間を要した。また、掘立柱建物跡を構成する柱穴は SK 79、SD 49・52 に切られており、P 24～26 までの柱穴を検出した段階では、これらが掘立柱建物跡を構成する遺構とは全く想定できなかった。

本遺構は、桁行 4 間、梁行 2 間の北東から南西方向へと主軸をもつ掘立柱建物跡であり、規模は柱穴の心心間で桁行 7.05m、梁行 4.00m、床面積 28.20 m² である。柱間の平均距離は桁行の両端が 1.35 m、桁行の中央二間が 2.15m、梁行が 2.00m であり、桁行の両端一間分の柱間が狭い。柱筋は、桁行中央の柱穴（P 20・26）がわずかに東側にずれる特徴をもつ。この建物を構成する柱穴群は 12 基あると思われ、そのうち 11 基を検出した。柱穴の掘形は円形が多く、P 26・29 は梢円形状、P 22 は不定形を呈する。柱穴の規模の平均は長軸長さ 0.51m、深さ 0.58m である。いずれも土層断面において柱痕跡が確認され、柱穴底面では P 19・22・23・24・28 で柱当たりを確認した。P 22 ではわずかに西側に傾斜して柱根が出土したが、とても細く残存状況は良くなかった。なお、柱穴内に根石、支え石などはなかった。

出土遺物は、縄文土器 9 点、土師器 7 点、須恵器 5 点、灰釉陶器 1 点、中近世土師器 6 点、木製品 1 点、時期不明 1 点の合計 30 点である。遺構別にみると P 20 が 9 点、P 22 が 17 点、P 27 が 3 点、P 28 が 1 点である。P 20 の須恵器は 1 層、土師器は 4 層の柱穴の掘形埋戻し土から、P 22 の土師器

は2・4層からの出土である。本遺構の所属時期は7世紀前半と推定される。

S D 35（遺構図：図50）C地点2面Va層

C地点の北端で検出した溝である。S B 1との検出面での比高差は約0.3mであり、かなり低い位置で確認できた。溝はほぼ東西方向に延びており、断面形は逆台形を呈し、埋土はいずれも粘性の極めて高い粘土であった。

出土遺物は土師器1点、須恵器1点、中近世土師器25点、木製品1点、合計28点である。本遺構の所属時期はS D 50と直交する位置にあり規模も似ていることから平安時代と推定される。区画溝になるものと思われる。

S D 36（遺構図：図50）C地点2面Va層

本遺構は南南東から北北西へ延びる、V層上面でプランを明瞭に確認できた溝である。溝の南の延長上にはS D 64があり、一連の遺構である可能性が高い。溝の断面形は方形を呈し、本来矢板列などの構造物が存在していた可能性がある。なお、埋土上層は炭化物を少量含む。

出土遺物はない。本遺構の所属時期は検出面から古墳時代と推定される。区画溝になると思われる。

S D 37（遺構図：図50）C地点2面Va層

本遺構は南南西から北北東へ延びる、V層上面でプランを明瞭に確認できた溝である。溝の延長上にはS D 63があり、埋土や断面形状が類似することから、一連の遺構である可能性が高い。溝の断面形は逆台形状を呈し、埋土中に炭化物を少量含む。

出土遺物は中近世土師器3点と少ない。本遺構の所属時期は検出面から古墳時代と推定される。本遺構及びS D 36の西側では竪穴住居跡や土坑などを多く検出できたが、東側の遺構は希薄であることから、両遺構は何らかの区画施設である可能性がある。

S D 38（遺構図：図51）C地点2面Va層

ほぼ直角に屈曲する溝状遺構であり、S D 49と一連の遺構と推定される。断面形は皿状を呈し、埋土は単層で、流水堆積は確認できなかった。

出土遺物は土師器1点、須恵器4点、中近世土師器1点の合計6点である。本遺構の所属時期は検出面とS H 2よりも古いことから古墳時代前期と推定される。S D 37・63に関連して区画溝であると考える。

S D 41（遺構図：図52）C地点2面Va層

北北東から南南西にかけて直線的に約7.8m延び、E3j17グリッドで屈曲し、収束する溝である。直線部分の東側には幅約1.5mで帯状に延びる酸化鉄集積があり、これは基本層序IV層より上位の水田の畦畔に伴う転写痕跡と思われる。溝の断面形は逆台形状を呈し、埋土は単層である。なお、S D 40も転写畦畔の西側に位置する細長い溝であり、本遺構と一連の遺構と思われる。

出土遺物は土師器1点、須恵器6点、灰釉陶器2点、中近世土師器4点、土製品1点の合計14点である。本遺構の所属時期は検出面から古墳時代と推定される。

S D 42・43（遺構図：図52）C地点2面Va層

S D 42・43は一連の溝である可能性が高い。遺構検出面であるV層はS D 42を境にして南北側が高く、北東側が低くなり、S D 43の南西側には性格不明の盛土遺構であるS X 1が位置する。そのため、

これらの溝は何らかの土地を区画する溝であった可能性が考えられる。

溝の断面形は、皿状または逆台形状を呈し、埋土に流水堆積は確認できなかった。また、S K62～64 は S X 1 の法尻に位置する浅い土坑であり、S D43 の残穴である可能性がある。

出土遺物は土師器 3 点、須恵器 6 点、灰釉陶器 2 点、中近世土師器 8 点の合計 19 点である。本遺構の所属時期は検出面と、S D41 と関連することから古墳時代と推定される。

S D44・45・47（遺構図：図 53）C 地点 2 面 Va 層

S D44・47 は一連の溝であり、S D45 はそれらに平行して延びる細長い溝である。断面形はいずれも逆台形状から皿状を呈し、埋土は単層で、流水堆積は確認できなかった。

出土遺物は土師器 12 点、須恵器 9 点、灰釉陶器 2 点、山茶碗 12 点、中近世陶磁器 2 点、中近世土師器 8 点の合計 45 点である。本遺構の所属時期は検出面と S D41～43 と関連する区画溝になるものと考えられるため、古墳時代と推定される。

S D46（遺構図：図 53）C 地点 2 面 Va 層

V 層上面で検出した溝状遺構であり、大半が調査区外に位置する。断面形は、中央に向かって緩やかに下降し、埋土は単層で、流水堆積は確認できなかった。本遺構に隣接する S D44・47 と比べて、幅が広く深い特徴がある。

出土遺物は土師器 17 点、須恵器 36 点、灰釉陶器 2 点、山茶碗 19 点、中近世土師器 10 点、土製品 1 点、木製品 4 点、石器 1 点の合計 90 点である。本遺構の所属時期は検出面から古墳時代と推定される。遺構の性格は不明である。

S D49（遺構図：図 51）C 地点 2 面 Va 層

E3e01 グリッドで二股に分かれる溝である。検出当初は 2 条の溝の重複を検討したが、平面及び土層観察では切り合い関係を確認できなかったため、一連の溝とした。西側の溝は東西方向に延びており、S D38 と同一遺構である可能性が高い。そして、そのすぐ北側に S A 4 が位置しており、ほぼ S D49 と同一の方角に延びている。S A 4 の柱穴列と S D49 の溝がセットであり、土地を区画するための何らかの施設であるならば、本来 S D49 はさらに東へ延びていたとも想定できる。一方、北東から南西に延びる溝はやや幅が広く、調査区外へと延びている。

溝の断面形はいずれも皿状を呈し、埋土は単層で、流水堆積は確認できなかった。

出土遺物は須恵器 1 点、灰釉陶器 2 点、中近世土師器 1 点、時期不明 1 点の合計 5 点である。本遺構の所属時期は S H 2 P 23 に切られているため古墳時代後期以前と推定される。

S D50（遺構図：図 50）C 地点 2 面 Va 層

本遺構は南北方向に延びる溝であり、検出時において、その南端に複数の遺物を確認していた。溝の断面形は皿状を呈し、埋土は単層で、流水堆積は確認できなかった。

出土遺物は土師器 1 点、須恵器 5 点、灰釉陶器 7 点、山茶碗 1 点、中近世土師器 1 点の合計 15 点である。本遺構の所属時期は平安時代 10 世紀と推定される。S D35・51 と関連し区画溝になるものと思われる。

S D 51（遺構図：図 54）C 地点 2 面 Va 層

本遺構は、南端を S K84 に切られ、北端は 3 条に分かれて調査区外へ延びている。遺構の断面形は皿状から逆台形状を呈し、埋土は 1 ~ 2 層に分層でき、南側で炭化物をわずかに確認した。本遺構の特徴は底面に凹凸面があることである。約 2m にわたって、長さ約 0.2m の小土坑状の凹みが連続しており、その内部からも遺物が出土した。調査中は流水機能による凹凸の可能性を検討したものの、埋土中には砂礫が全く認められなかったことからその可能性は低いと思われ、性格は明らかにできなかつた。

出土遺物は土師器 6 点、須恵器 48 点、灰釉陶器 22 点、中近世土師器 33 点、石器 4 点、時期不明 5 点の合計 118 点である。本遺構の所属時期は平安時代 10~11 世紀と推定される。S D35・50 と関連し区画溝になるものと思われる。

S D 52（遺構図：図 51）C 地点 2 面 Va 層

S D49・51 に平行して検出した溝状遺構である。その南端 (E4f01 グリッド付近) は遺構の輪郭線が漸移的であり、溝というよりは広い落ち込みと表現した方が妥当かもしれない。遺構の断面形は浅い皿状を呈し、埋土は 2 層に分層できた。遺物の多くは 1 層と 2 層の境付近から出土し、細片が多くかった。

出土遺物は土師器 17 点、須恵器 54 点、灰釉陶器 23 点、山茶碗 21 点、中近世土師器 54 点、土製品 1 点、石器 4 点、時期不明 3 点の合計 177 点である。本遺構の所属時期は S D51 と関連することから平安時代と推定される。

S F 1・2（遺構図：図 64）C 地点 2 面 Va 層

隣接する 2 つの細長い土坑であり、いずれも検出面にて被熱痕跡を明瞭に確認した。掘形は梢円形を呈し、断面形は浅い皿状で、埋土下層には焼土ブロックを含む土が充填されている。

出土遺物は S F 1 から中近世土師器 1 点、S F 2 から須恵器 1 点が出土している。S D44・45・47 との関連が考えられることから本遺構の所属時期は古墳時代と推定される。

S K 39（遺構図：図 60）C 地点 2 面 Va 層

V 層上面にて暗灰黄色土の広がりを確認したため土坑としたが、その輪郭線は漸移的で、深さも極めて浅いことから、大きな浅い凹みかもしれない。平面形は隅丸方形形状を呈し、埋土は単層でわずかに炭化物を確認した。

出土遺物は須恵器 1 点、灰釉陶器 1 点、中近世土師器 1 点の合計 3 点であり、本遺構の所属時期は検出面から古墳時代頃と推定される。遺構の性格は不明である。

S K 46（遺構図：図 67）C 地点 2 面 Va 層

V 層上面において、微砂層が筋状に確認でき、その周辺の土がわずかに異なっていたため土坑とした。平面形は不定形を呈し、大半が調査区外に位置する。遺構の立ち上がりは強く、底面はほぼ平坦で、中央付近が緩やかに下降する。埋土はシルトと微砂の互層堆積である。なお、遺構底面において S H 1 を構成する P18 を検出した。

出土遺物は須恵器 1 点、灰釉陶器 2 点、中近世土師器 1 点、時期不明 1 点の合計 5 点である。本遺構の所属時期は S H 1 P18 を切っていることから平安時代と推定される。遺構の性格は不明である。

S K49（遺構図：図 61）C 地点 2 面 Va 層

方形を呈する土坑であり、大半が調査区外に位置する。土坑の立ち上がりは緩やかであり、底面中央部分は平坦である。埋土は単層で、炭化物等は確認できなかった。

出土遺物は土師器 4 点、須恵器 3 点、中近世土師器 3 点、時期不明 1 点の合計 11 点である。7 世紀前葉代の須恵器蓋（99）を掲載した。S D38・40 との関連が考えられるため、本遺構の所属時期は古墳時代と推定される。遺構の性格は不明である。

S K53・54（遺構図：図 62）C 地点 2 面 Va 層

いずれの遺構も、V 層上面において炭化物粒が 1.5～2.0m の範囲で広がっていた。しかし、炭化物粒が含まれる土は V 層の土と識別できなかったため、トレンチを設定し掘削した結果、炭化物粒が下部まで含まれていたため土坑と認定した。平面形は S K53 が楕円形、S K54 が不定形を呈し、断面形はいずれも全体的に緩やかに傾斜する皿状を呈する。炭化物粒は検出面で最も多く、下部ほど少なかった。

出土遺物は S K53 から須恵器 1 点、灰釉陶器 1 点、山茶碗 1 点、中近世土師器 1 点、石器 1 点の合計 7 点が、S K54 から土師器 1 点が出土しているが、すべて小破片である。本遺構の所属時期は S D41～43 と関連すると考えられ古墳時代と推定される。遺構の性格は不明である。

S K56～61・63・64（遺構図：図 63）C 地点 2 面 Va 層

S K56～61 は S D41 に平行した 6 つの並んだ土坑群である。いずれも平面形は楕円形状で長軸が北東から南西方向を向くものが多い。断面形は皿状を呈し、すべて浅い。S D51 のような底面に凹凸面がある溝の残穴のようなものと思われる。同様に S K63・64 は S D43 の底面の残穴になると思われる。

出土遺物は S K56 から須恵器 1 点、S K59 から須恵器 1 点、中近世土師器 1 点の合計 2 点、S K61 から須恵器 5 点、灰釉陶器 1 点の合計 6 点、S K62 から中近世土師器 1 点、近世以降の瓦 1 点の合計 2 点が出土している。本遺構の所属時期は S D41・51 と同時期で古墳時代と推定される。

S K70・77～79（遺構図：図 66）C 地点 2 面 Va 層

E4d01 グリッドで検出した土坑群であり、S K70 も含めて、その平面形が南西から北東方向へ延び、南端が尖り気味である特徴を有する。遺構の断面形は S K77・79 が皿状、S K78 は周縁が凹む形状を呈し、埋土は 1～2 層に分層できた。

これらの遺構の周辺では、南西から北東方向に延びる筋状の微砂が複数箇所で認められている。これらは検出当初、埴砂痕跡と考えていたが、発掘調査中に発生した自噴水（湧水）により付近一帯が陥没すると、周辺にひび割れが生じ、そこに微砂が堆積した。その状況は、発掘調査で検出した帯状の微砂と類似していることから、これらの土坑は、そのような自然現象により陥没した痕跡かもしれない。なお、S K77 の底面にて SH1 を構成する P14 を、S K79 の底面にて SH2 を構成する P27・28 を検出した。

出土遺物は S K70 から須恵器 1 点、灰釉陶器 1 点の合計 2 点、S K78 から須恵器 12 点、灰釉陶器 4 点、中近世土師器 15 点、時期不明 2 点の合計 33 点、S K79 から須恵器 6 点、灰釉陶器 1 点、中近世土師器 1 点の合計 8 点が出土している。S K79 が S D51 に切られていることから、本遺構の所属時期は古墳時代と推定される。

S K 84（遺構図：図 67）C 地点 2 面 Va 層

不定形を呈する長さ 3.38m の大きな土坑であり、SD 51・52 を切る。遺構の断面形は浅い皿状を呈し、底面にはわずかに凹凸が認められた。埋土は 2 層に分層でき、遺物は底面直上から細片が多く出土した。出土遺物には、四方輪花をもつ灰釉陶器碗（実測番号 598）や、焼成不良の灰釉陶器碗（同 599）、摘みの形態が特徴的な蓋（同 597）などがあり、他の遺構とはやや異なる様相を呈する。

出土遺物は土師器 5 点、須恵器 44 点、灰釉陶器 38 点、山茶碗 1 点、中近世土師器 1 点、石器 7 点、時期不明 6 点の合計 131 点である。本遺構の所属時期は SD 51・52 を切っていることから 10 世紀後半と推定される。遺構の性格は不明である。

S P 1～9（遺構図：図 75）C 地点 2 面 Va 層

単独で存在する柱穴は C 地点にて 9 基検出した。そのうち、6 基（S P 1・3～7）は SH 1・2 周辺に位置し（図 51）、S P 2 は SD 51 付近（図 54）、S P 8・9 は SD 37 付近に位置する（図 59）。いずれも柱穴の掘形は円形で、S P 6 の埋土中からは木片が出土した。

出土遺物は S P 7 から須恵器 1 点、山茶碗 1 点の合計 2 点のみであり、遺構の所属時期は明確でない。しかし、SH 1・2 周辺で検出した柱穴は、掘立建物跡を構成する柱穴と検出状況が類似しており、古墳時代の遺構と推定される。

S X 1（遺構図：図 76）C 地点 2 面 Va 層

SD 43 と SK 62～64 の南西側に広がる盛土遺構である。検出時において礫の上面がわずかに見えたものの、遺構確認面である V 層と礫周辺の土との識別が困難であったため、トレーナーを設定して礫周辺の様子を確認した。その結果、礫とともに多数の土師器片が出土し、V 層の土である黄灰色粘土とともに灰色粘土がわずかに含まれていたため、盛土遺構と判断した。

盛土は大半が調査区外に位置するものの、東西 3.2m、南北 1.8m 以上の規模で、隅丸方形を呈する。盛土内には扁平な円礫が平坦面を上にして数個並べられており、その間や周辺から土師器片が出土した。土師器片を取り除くと、その下から焼土や炭化物が出土した。円礫は被熱割れしており、3 個体の礫が 7 破片に割れていたもの、それらは離れた場所から出土した。盛土を除去すると、最終的には遺構確認面から 0.22m 挖り込まれた方形土坑状となった。その底面に被熱痕跡は認められず、酸化鉄集積層が広がっていた。

盛土は一度に造成されたと思われ、版築などの痕跡は確認できなかった。盛土内部の接合できた礫が離れて並べられていること、土坑底面に被熱痕跡が認められないことなどから、別の場所で使用した礫を盛土の構築材として据え、何らかの理由で土器も一緒に盛土内に入れたと思われる。

出土遺物は土師器 135 点、須恵器 11 点、灰釉陶器 1 点、中近世土師器 33 点、時期不明 4 点の合計 184 点である。本遺構の所属時期は古墳時代後期と推定される。

D 地点2面（古墳時代）**S B 3（遺構図：図44）D 地点2面V層**

本遺構は、S B 1と同様に遺構埋土と検出面であるV層の土色が極めて類似し、そのプラン確定にかなりの時間を要した。平面形は主軸をほぼ真北にもつ方形であり、遺構埋土は黄灰色土の単層である。住居の床面では柱穴4基と土坑5基を検出した。柱穴の掘形はいずれも円形で、規模の平均は長軸長さ0.23m、深さ0.08mである。柱穴の埋土はいずれも単層で、深さは浅く、柱痕跡は確認できなかつた。また、柱穴の配置は豊穴住居跡全体の中でも南側に寄つてゐる。土坑は北西隅に2基、柱穴間に2基、南西隅に1基検出した。柱穴間にあるSK 3・4はやや規模が大きく、SK 5のみ2層に分層できた。なお、床面では、貼床に相当する整地土は確認できなかつた。

出土遺物は土師器3点、中近世土師器2点、時期不明4点の合計9点である。本遺構の所属時期はS B 1・2と同時期の古墳時代後期と推定される。

S D 58（遺構図：図55）D 地点2面V層

本遺構は、南西から北東へ蛇行しながら延びる検出長55mの溝であり、S D 59を切る。北端は調査区外に延び、南端は畠状遺構付近で収束する。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は単層で、流水堆積は確認できなかつた。

出土遺物は石器1点である。南にあるS D 61・62・27と関連する可能性が考えられ、本遺構の所属時期は7世紀後半と推定される。

S D 59（遺構図：図55）D 地点2面V層

本遺構は、ほぼ東西方向に蛇行しながら延びる溝であり、S D 58に切られる。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は単層で、流水堆積は確認できなかつた。

出土遺物はない。S D 58との関連が考えられ、本遺構の所属時期は7世紀後半と推定される。

S D 60（遺構図：図56・57）D 地点2面V層

本遺構はほぼ南北方向に延びており、S D 61に切られる。断面形は皿状を呈し、その立ち上がりは緩やかである。埋土は3層に分層でき、流水堆積は確認できなかつた。遺物は1～2層の溝中央付近から出土し、3層からの出土は確認できていない。

本遺構は、検出が比較的容易であったものの、隣接する調査区でその延長を検出できなかつた。しかし、溝の北端西側の平面形が緩やかに湾曲していることから、本遺構は直線的に延びるのではなく、方形状に屈曲する可能性もある。

出土遺物は土師器32点、須恵器10点、中近世土師器7点、石器3点、時期不明2点の合計54点である。本遺構の所属時期は7世紀前半と推定される。

S D 61（遺構図：図56・57）D 地点2面V層

本遺構は、南西から北東方向に直線的に延びる溝であり、S D 60を切る。断面形は皿状もしくは三角形状を呈し、埋土は3層に分層できたものの、流水堆積は確認できなかつた。

出土遺物は土師器24点、須恵器2点、中近世土師器7点、時期不明5点の合計38点である。本遺構の所属時期は7世紀後半と推定される。S D 27・62と一連の区画溝である可能性が高い。

S D 62（遺構図：図 56）D 地点 2 面 V 層

本遺構は、南西から北東方向に直線的に延びる溝であり、S X 2 を切る。断面形は皿状もしくは逆台形状を呈し、埋土は単層で流水堆積は確認できなかった。また、溝の底面標高値はほぼ均一である。

出土遺物は土師器 2 点、須恵器 1 点、中近世土師器 4 点、石器 1 点、時期不明 1 点の合計 9 点である。S D 61・27 と一連の区画溝である可能性が高く、本遺構の所属時期は 7 世紀後半と推定される。

S D 63（遺構図：図 50）D 地点 2 面 V 層

本遺構はほぼ南北に延びる、V 層上面でプランを明瞭に確認できた溝である。溝の延長上には S D 37 があり、埋土や断面形状が類似することから、一連の遺構である可能性が高い。溝の断面形は逆台形状を呈し、埋土中に V 層ブロックを含む。S D 37・65 と一連の溝と考えられる。

出土遺物はない。本遺構の所属時期は S D 37・65 との関連から古墳時代と推定される。

S D 64（遺構図：図 50）D 地点 2 面 V 層

本遺構は南東から北北西へ蛇行しながら延びる溝である。溝の延長上には S D 36 があり、一連の遺構である可能性が高い。溝の断面形は皿状を呈し、埋土は単層で、流水堆積は確認できなかった。

出土遺物は土師器 2 点、須恵器 1 点、中近世土師器 1 点の合計 4 点である。本遺構の所属時期は 7 世紀前半と推定される。

S D 65（遺構図：図 50）D 地点 2 面 V 層

本遺構は E4d08 グリッドで屈曲する溝であり、S D 64 に切られる。検出は比較的容易であり、溝の断面形は逆台形状を呈し、埋土中に V 層ブロックが入る。

出土遺物は須恵器 9 点、中近世土師器 3 点、木製品 1 点、石器 2 点、合計 15 点である。本遺構の所属時期は古墳時代後期と推定される。S D 37・63 と一連の区画溝と考えられる。

S I 1・2（遺構図：図 58）D 地点 2 面 V 層

いずれの遺構も IV 層中から礫が出土し始め、V 層上面において礫の広がりを確認した。S I 1 は D4r11 グリッドから D4s13 グリッドまで約 11.5m 延びる集石遺構で、主軸方位は N-65° -W、幅約 0.8 m である。S I 2 は D4s11 グリッドから D4s13 グリッドまで約 8.2m 延びる集石遺構で、主軸方位は N-78° -E、幅約 1.8m である。

礫はいずれも円礫である。S I 2 は長さ約 30~50 cm の円礫が約 0.5~1.0m の間隔でランダムに出土し、その間には比較的小さな円礫が充填されていた。また、遺構の中央付近には礫が少なく、側縁に沿って帶状に礫の密度が高い印象を受ける。一方、S I 1 の礫は S I 2 よりも小さく、礫の密度も低い傾向がある。礫は基本的に V 層上面に積まれたような状態で出土し、大きな礫の一部は V 層中までめり込んでいた。また、集石遺構に伴う盛土、掘り込みを確認するために、土層観察用ベルト及び断ち割り調査を実施したものの、それらは確認できなかった。なお、両遺構の切り合いは現地で確認できず、その前後関係は不明である。

S I 1・S I 2 には掘り込みがなく、S I 2 の円礫は扁平な面を上にして出土している。本遺構は水田畦畔というよりは道の地盤整地と考えられる。また、本遺構は III a 層上面で検出した畦畔 S M71 直下に位置し、遺構の主軸方位も同じである。当遺跡の水田遺構は、古い段階の畦畔の位置をそのまま踏襲する例が多く検出されており、主軸方位を同じくしていることから、S I 2 がその後の水田の

畦畔の位置や主軸方位の基になっている可能性も考えられる。

出土遺物は S I 1 から土師器 6 点、須恵器 21 点、中近世土師器 18 点、石器 1 点、時期不明 3 点の合計 49 点で、S I 2 からは土師器 49 点、須恵器 130 点、中近世土師器 65 点、土製品 2 点、木製品 37 点、石器 1 点、種子 2 点、時期不明 10 点の合計 296 点があり、その多くは縄間から出土した。特に 69 と 71 は地面に叩きつけて割ったかのようで、71 は口縁部と胴部が、69 は底部と胴部が離れた位置から出土している。S I 2 に時期の新しい須恵器が混じるため、S I 1 の方が S I 2 よりも古いと考えられる。S I 1・S I 2 共に所属時期は 7 世紀後葉と推定される。

S K 106 (遺構図: 図 71) D 地点 2 面 V 層

D41-m14 グリッドで検出した土坑である。本遺構の周辺では S D58 以外に遺構を検出できず、ほぼ単独で存在することになる。平面形は梢円形状を呈し、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は 2 層に分層でき、土師器の小片が多数出土した。

出土遺物は土師器 7 点、中近世土師器 24 点、時期不明 4 点の合計 35 点であるが、いずれも小片であり、実測図を掲載していない。本遺構の所属時期は検出面から古墳時代と推定される。遺構の性格は不明である。

S K 115 (遺構図: 図 74) D 地点 2 面 V 層

IV 層掘削中に、内面を上にした土師器皿がほぼ完形の状態で出土した。そのため、付近を精査したところ、黒褐色土の広がりを確認できたので遺構と認定した。遺構の掘形は不定形を呈し、埋土は単層で、断面形は皿状を呈する。

本遺構の所属時期は中世と推定される。遺構の性格は不明である。

S T K 1 ~ 47 (遺構図: 図 77~79) D 地点 2 面 V 層

D4e13 グリッドから D4p15 グリッドにかけて検出した、連続する溝状遺構である。各溝の長さは 2 m 前後のものが多いものの、本来は S T K 14・15 のように 4 m 前後の長さであったかもしれない。溝状遺構の方位は一様ではないものの、概ね南北方向を向いているものが多く、その列は S T K 11 から S T K 41 まで 17 条を数える。また、S T K 23・26 などは北西から南東方向に延びており、17 条の溝状遺構を区切っているように見える。溝状遺構の断面形は浅い皿状を呈し、埋土は単層で、炭化物を確認できた遺構もある。

出土遺物は S T K 18 から石器 1 点、S T K 45 から石器 1 点の合計 2 点である。本遺構の所属時期は検出面から古墳時代と推定される。遺構の性格は連続する溝状遺構の配置から、畑に伴う畠の可能性が高い。

S X 2 (遺構図: 図 74) D 地点 2 面 V 層

本遺構は、V 層上面において鉄分やマンガン斑が多く沈着した付近に、炭化物が集中して分布していたため遺構と認定した。北側は半分以上が調査区外に延び、西側は S D 62 に切られている。遺構の掘り込みの有無は確認できおらず、炭化物の範囲のみ図示した。

出土遺物はない。本遺構の所属時期は古墳時代と推定される。遺構の性格は不明である。

E 地点 1面（近世）**S K116（遺構図：図 93） E 地点 1面Ⅲa層**

II層を除去した後、Ⅲa層上面で検出した。埋土は単層である。平面形は円形を呈する。検出長は64cm、深さは10cmである。

出土遺物はなく、本遺構の所属時期と性格は不明である

E 地点 3面（古墳時代）**S D70（遺構図：図 81・82） E 地点 3面IVb層**

IV層を除去した後、V層上面で検出した。第3調査面の北西に位置している。本遺構はほぼ東西を主軸にもつ溝であるが、調査面西壁から東壁まで突き抜けているため、両端は調査区外である。検出長は3m、幅40cmの溝である。断面は皿状を呈し、深さは10cm、埋土は2層に分層できた。上面はIV層の影響が強くやや白色が強いが、下面是V層の影響が強く、やや黒色が強い。片側に堆積が寄る流水堆積が確認できた。

出土遺物は確認できなかった。本遺構の所属時期は検出面から古墳時代と考える。

S D71（遺構図：図 81・82） E 地点 3面IVb層

IV層を除去した後、V層上面で検出した。第3調査面の中央やや北に位置している。本遺構はほぼ東西を主軸にもつ溝であるが、蛇行しながら調査面東部にあるNR1の自然流路に接続している。また西端部分は西方向と北方向の2又に分かれている。中央でトレンチ掘削をした結果、層位や深さに違いが見られず、同一遺構と判断した。検出長は約21m、幅約1mの溝である。断面形状は皿状を呈し、深さは60cm、埋土の西部分は単層であるが、屈曲してから東部分では2層に分層できた。

出土遺物は土師器1点である。本遺構の所属時期は検出面よりNR1と同時期の古墳時代と考える。

S D73・74・75・77（遺構図：図 81・82） E 地点 3面IVb層

IV層を除去した後、V層上面で検出した。第3調査面の中央に位置している。本遺構はほぼ東西を主軸にもつ溝であるが、調査面中央の搅乱により切られている。SD73、74、75とともに主軸と同じくしているため搅乱により切られた同一遺構であると考えた。検出長は約35m、幅約50cmの溝である。断面形状は皿状を呈し、深さは10cm、埋土の西部分は単層であるが、屈曲してから南東部分では3層に分層できた。SD73・SD74では確認できなかったが、SD75では流水堆積が確認できた。SD77はSD73・74・75と平行している。これらの溝はNR1を切っている。

出土遺物はSD73～75ではなく、SD77から土師器1点、灰釉陶器2点、山茶碗7点、中近世土師器6点、木製品2点、種子1点の合計20点がある。本遺構の所属時期は検出面から古墳時代と推定する。

S D76（遺構図：図 81・82） E 地点 3面IVb層

IV層を除去した後、V層上面で検出した。第3調査面の中央に位置している。本遺構はほぼ東西を主軸にもつ溝である。検出長は約10m、幅約1mの溝である。本遺構の南壁面が埋土よりも低位置に設定されている。南壁面は上層のSD69の遺構掘削の影響によるものである。断面形状は逆台形状を呈し、深さは20cm、埋土は2層に分層できた。土層断面状況からは杭が確認できた。

本遺構の所属時期は検出面から古墳時代と考える。

S D 78 (遺構図: 図 81・82) E 地点 3 面IVb 層

IV層を除去した後、V層上面で検出した。第3調査面の中央に位置している。本遺構は、反転前調査と反転後調査の関係で同一遺構に2つの番号が付いている。ほぼ東西を主軸にもつ溝であるが、調査区東側のC5r10のグリッドから南東方向へ屈曲する。検出長は25m、幅1mの溝である。断面形状は皿状を呈し、深さは30cm、埋土は西部分は単層であるが、屈曲してから南東部分では3層に分層できた。屈曲している地点の底面からは砂層が堆積している。南東部の溝内底部からは弥生土器の甕の一部と思われる土器片が出土している。

出土遺物は合計4点ある。本遺構の所属時期は検出面から古墳時代と推定される。

S D 80 (遺構図: 図 81・82) E 地点 3 面IVb 層

IV層を除去した後、V層上面で検出した。第3調査面の中央に位置している。ほぼ南北を主軸にもつ溝であるが、S D78に接続している。S D78とS D80の土層断面状況を確認すると、S D78への流れ込みが確認できたため、同一時期の遺構であると確認できた。検出長は19m、幅50cm、深さ10cm、断面形状は皿状を呈する溝である。

出土遺物は土師器4点でS D78との接続に近い部分で出土している。土層断面状況や遺物の出土状況からも南から北に向けて流水方向の可能性が高い。本遺構の所属時期は古墳時代と推定される。

S D 82 (遺構図: 図 80) E 地点 3 面IVb 層

IV層を除去した後、V層上面で検出した。第3調査面の南に位置している。本遺構は北方向から南方向へまっすぐに延びる長さ10m、幅1mの溝である。断面形状は皿状を呈し、深さは10cm、埋土は2層に分層できた。調査区南側のD5a06グリッドから大量の湧水があり、長期にわたって調査区が水没していたため検出が困難であった。本来はもう少し幅も広く、深い溝であった可能性がある。

出土遺物は土師器4点石器1点の合計5点で、本遺構の所属時期は検出面から古墳時代と推定する。

S K117~122 (遺構図: 図 85) E 地点 3 面IVb 層

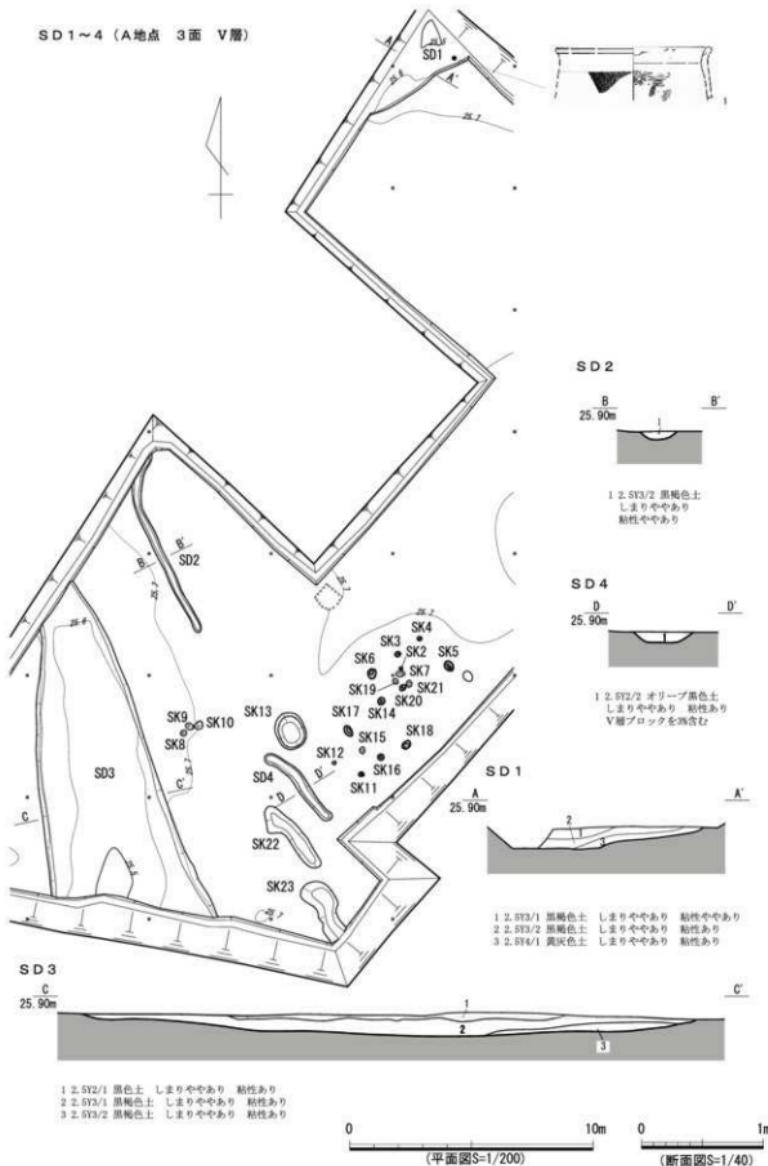
IV層を除去した後、V層上面で検出した。第3調査面の中央に位置している。C5o07グリッド付近で検出した土坑群であり、S K122とS K125を直径にはば円形に位置している。ど

出土遺物は確認できなかった。遺構の性格は不明である。

N R 1 (遺構図: 図 83・84) E 地点 3 面IVb 層

IV層を除去した後、V層上面で検出した。第3調査面の北東部に位置している。検出長は70m、幅17mの自然流路である。掘削深度を20cmとしてトレーンチ掘削を行った結果、埋土は3層に分層できた。第3調査面で確認できた溝状遺構は、ほぼ主軸を東西にしており、そのほとんどが東部に向かうほど深く、層が増えることを考えると、多くの溝がこの自然流路に流れ込んでいたものと考えられる。

出土遺物は土師器2点、須恵器3点、土製品1点、木製品1点の合計8点である。79・80はセットで、78は79・80とはやや離れて、S D75の北側の脇でN R 1との境にあたるところから出土している。平瓶(80)の中には桃の種が1点入っていた。埋納遺構と考えられる。1502はN R 1から出土しているが、S D77の護岸材の可能性がある。本以降の所属時期は7世紀後葉と推定する。



SK3～SK11 (A地点 3面 V層)

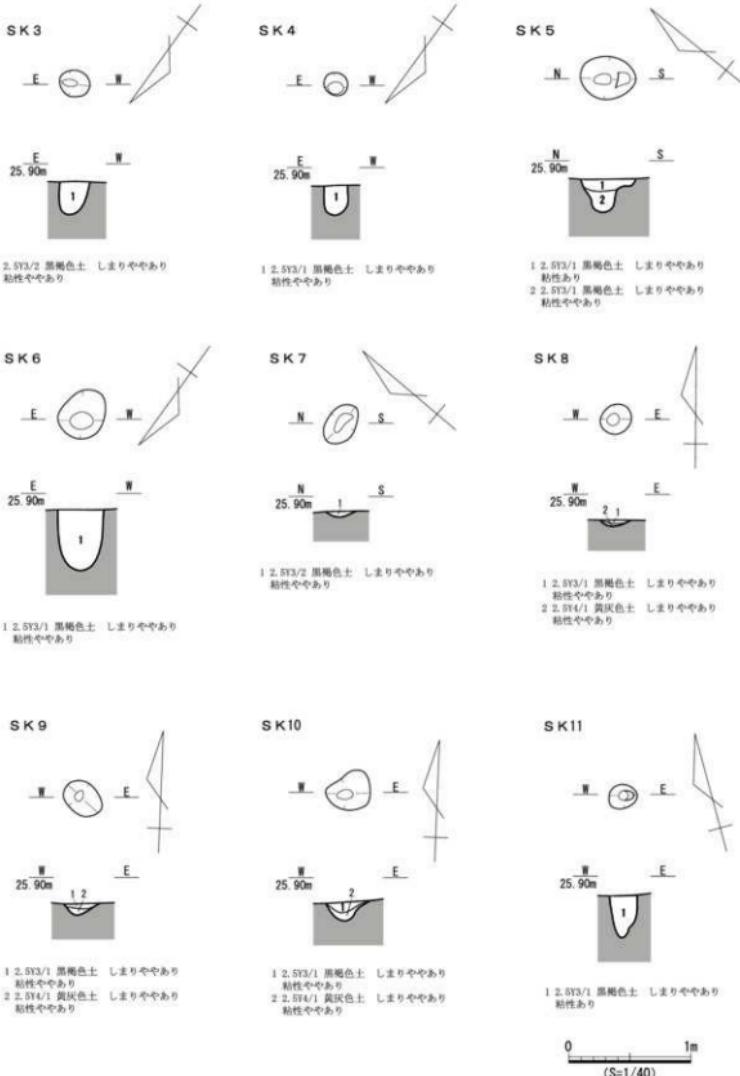


図 33 SK3～11 遺構図

SK12・14～21（A地点3面 V層）

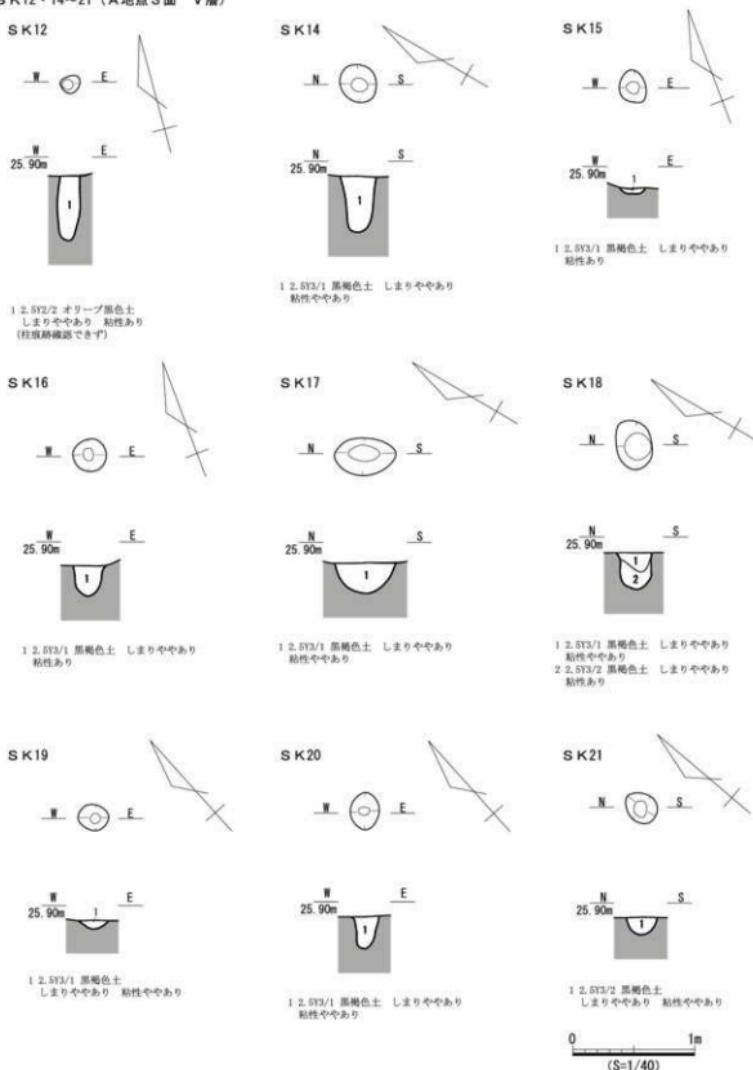


図34 SK12～21遺構図

SK13・22・23 (A地点 3面 V層)

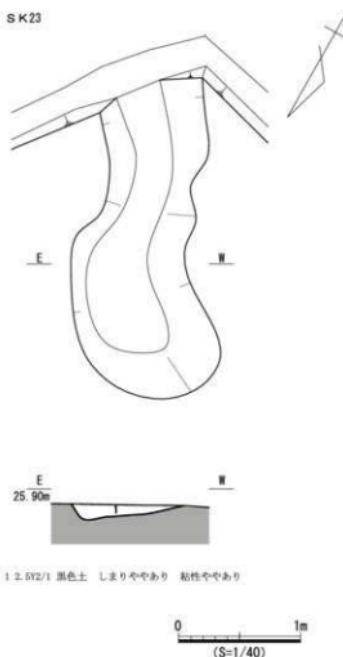
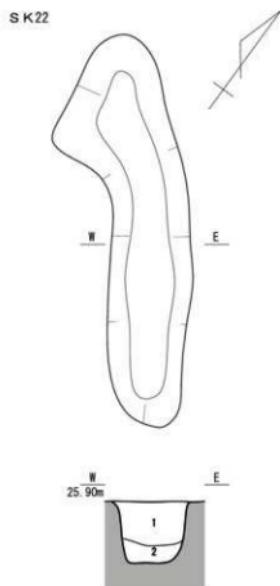
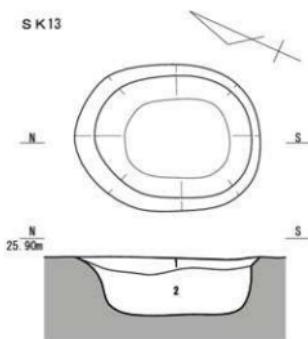


図35 SK13・22・23 遺構図

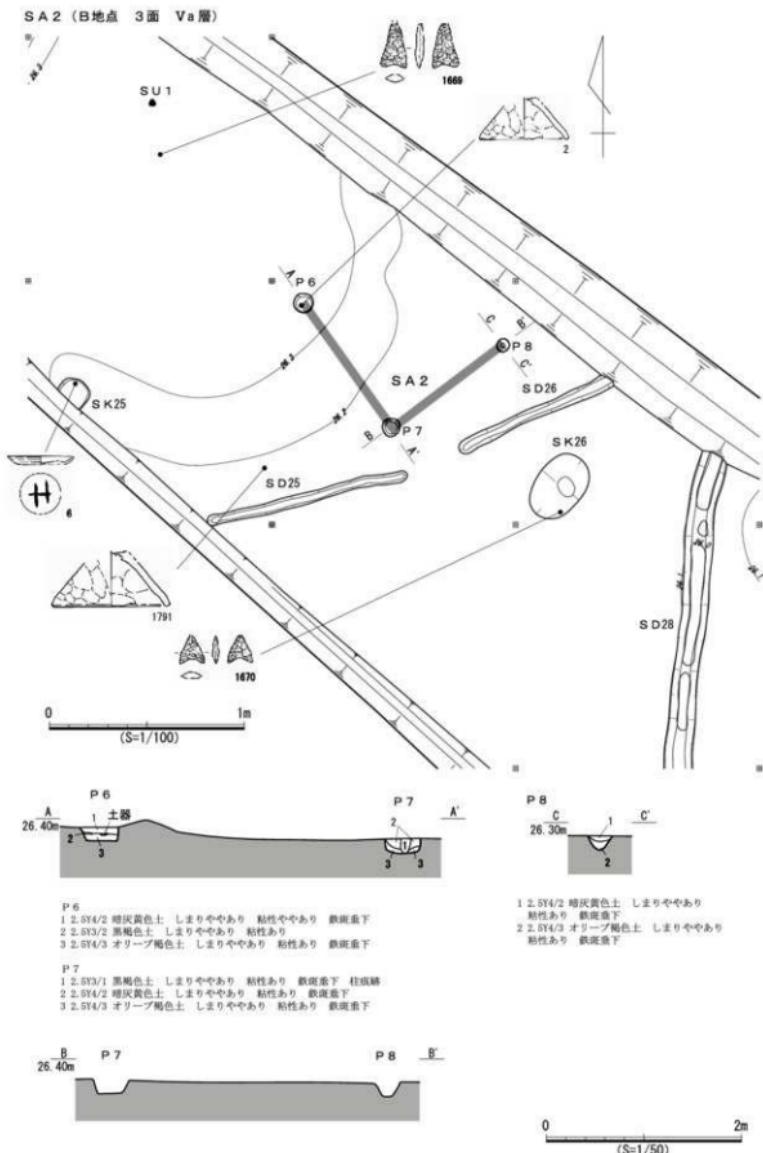


図36 SA 2遺構図

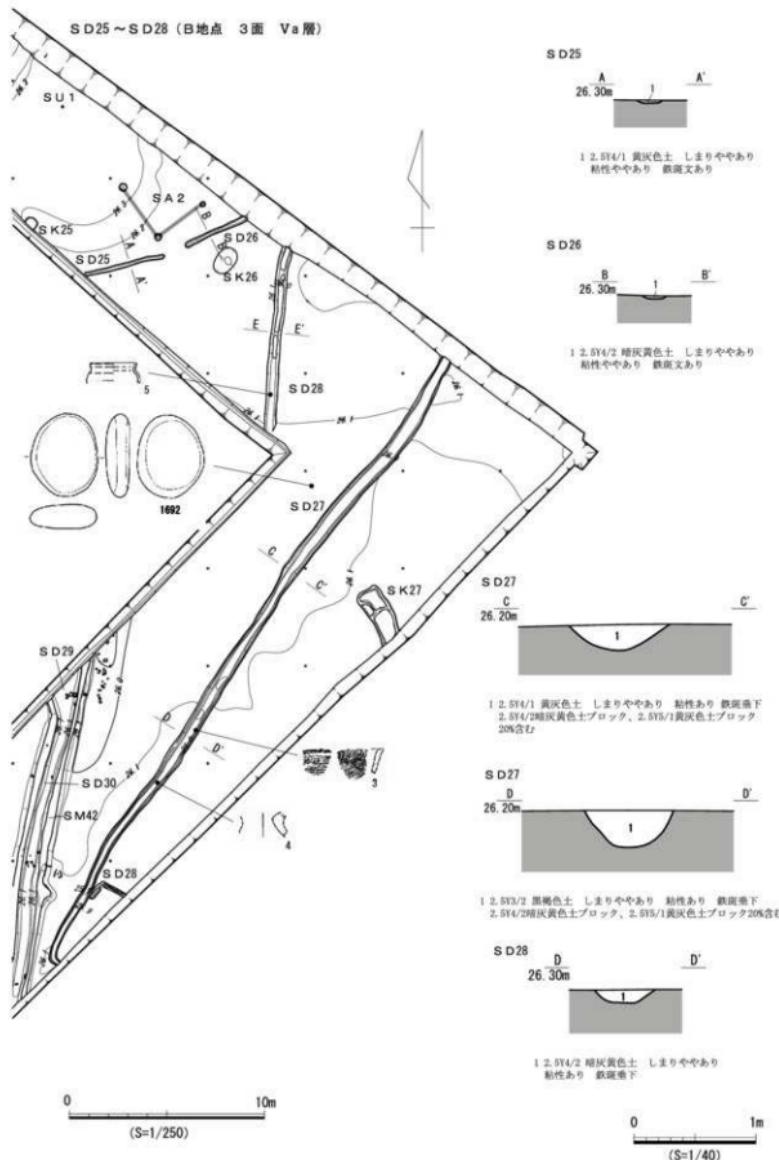


図37 SD 25 ~ SD 28 造構図

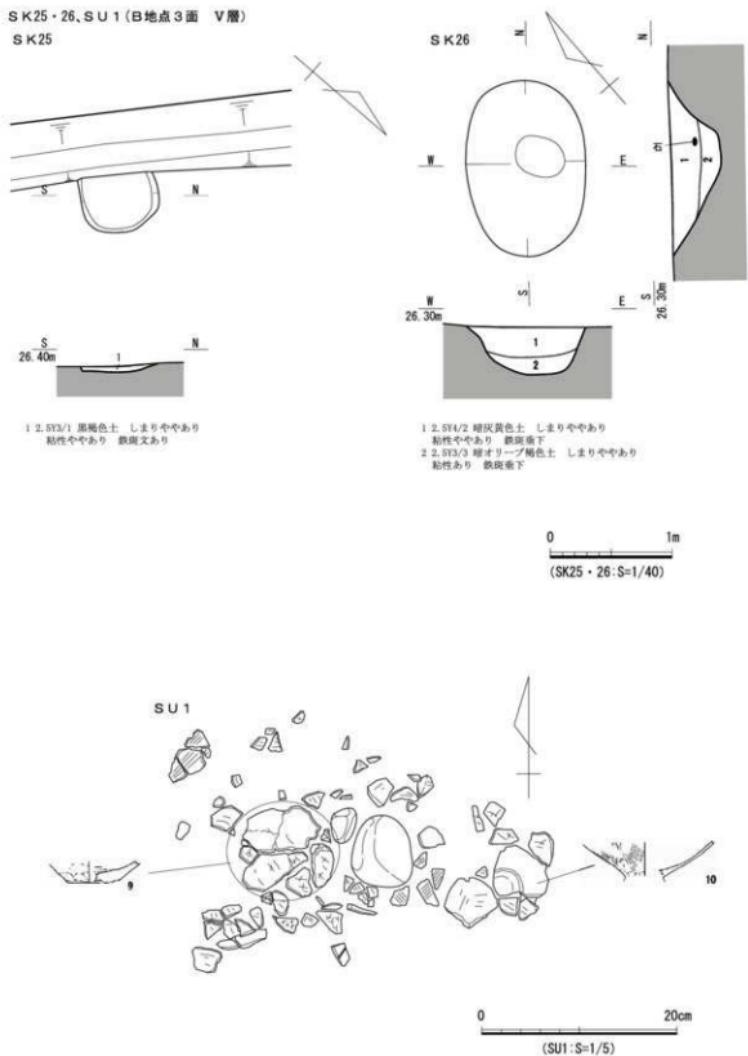
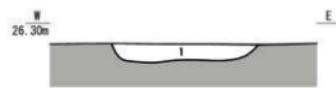
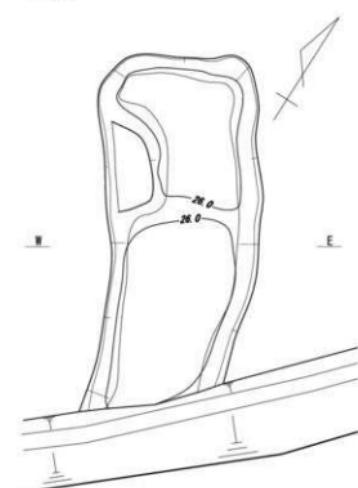


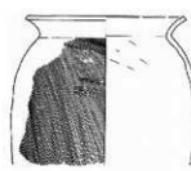
図38 SK25・26、S U 1遺構図

SK27・28 (B地点 3面 Va層)

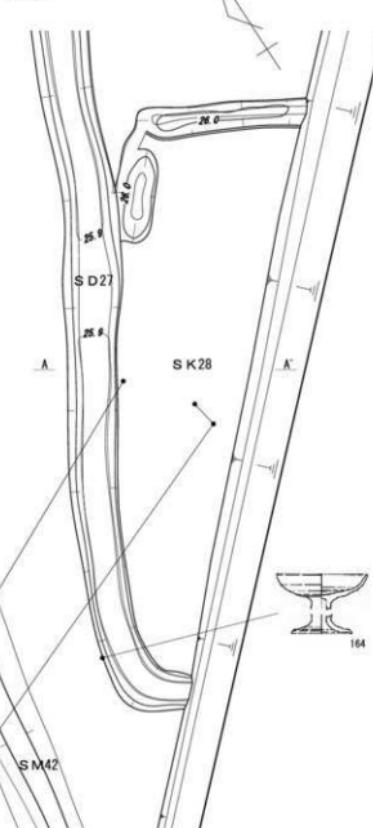
SK27



I 2. SY4/1 黄灰色土 しまりややあり 粘性あり 鉄錆量下
4/3オーリープ褐色土ブロック20%含む



SK28



I 2. SY4/1 黄灰色土 しまりややあり 粘性あり
鉄錆量あり 2. SYS/1 黄灰色土ブロック30%含む

0 1m
(S=1/40)

図39 SK27・28 造構図

S A 3 (C地点 2面 Va層)

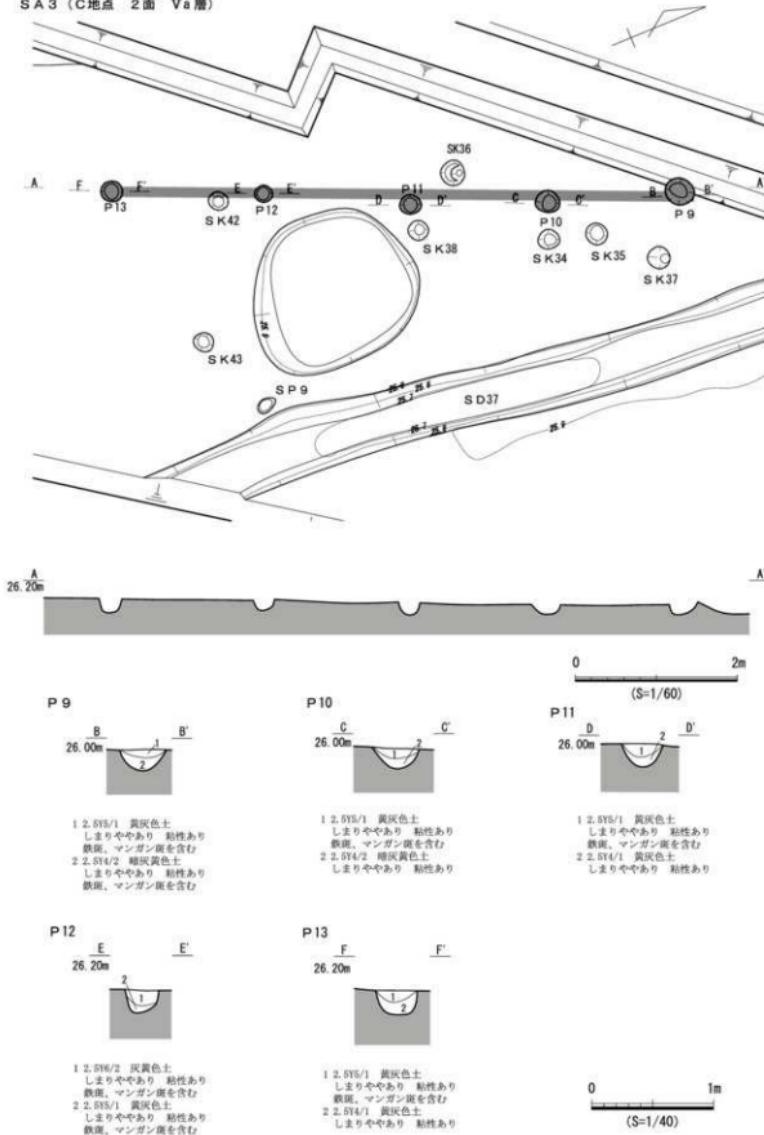


図40 S A 3 遺構図

SA 4 (C地点 2面 Va層)

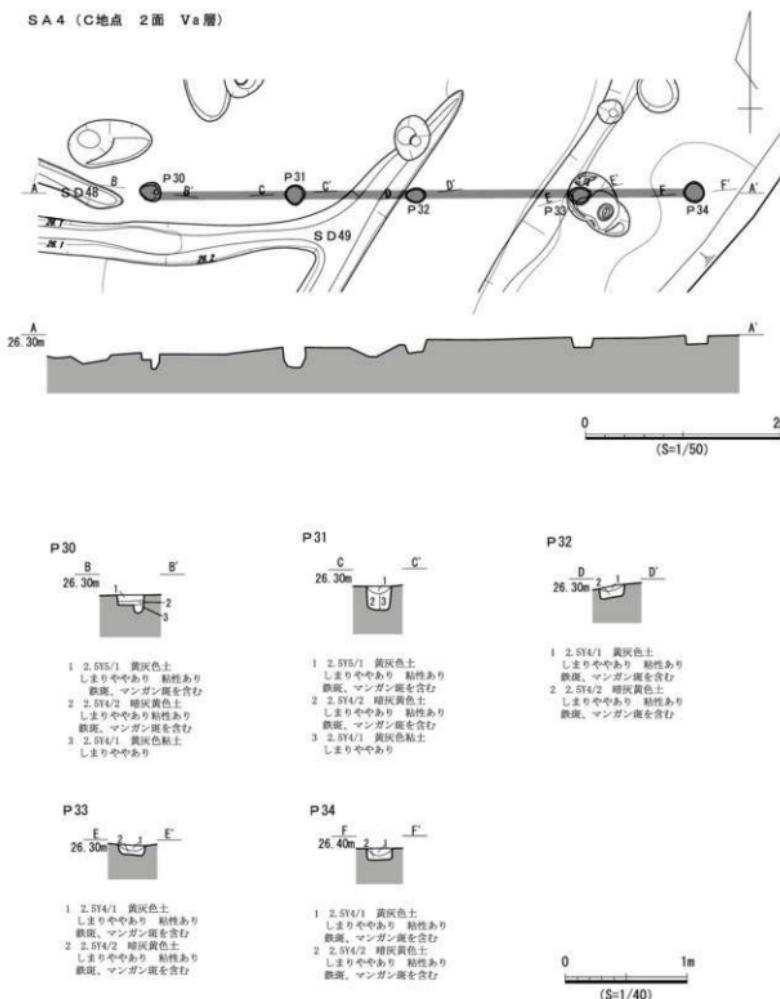


図41 SA 4造構図

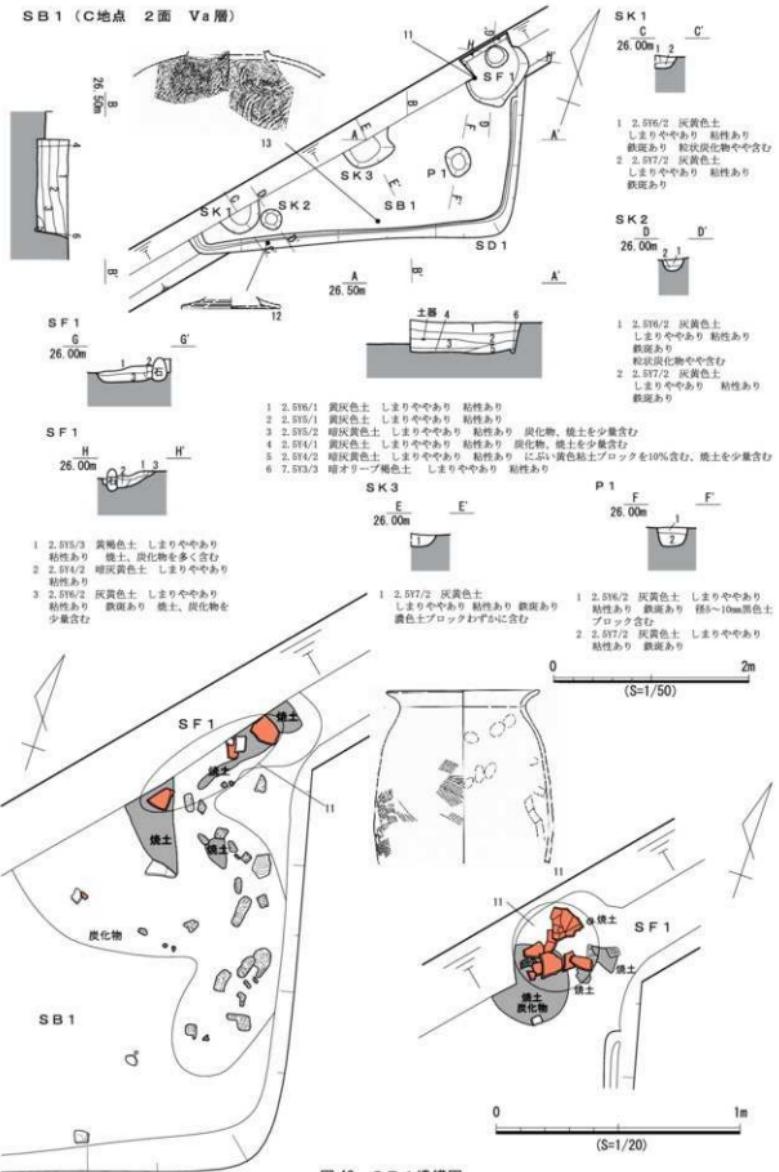


図42 SB1遺構図

SB 2 (C地点 2面 Va層)

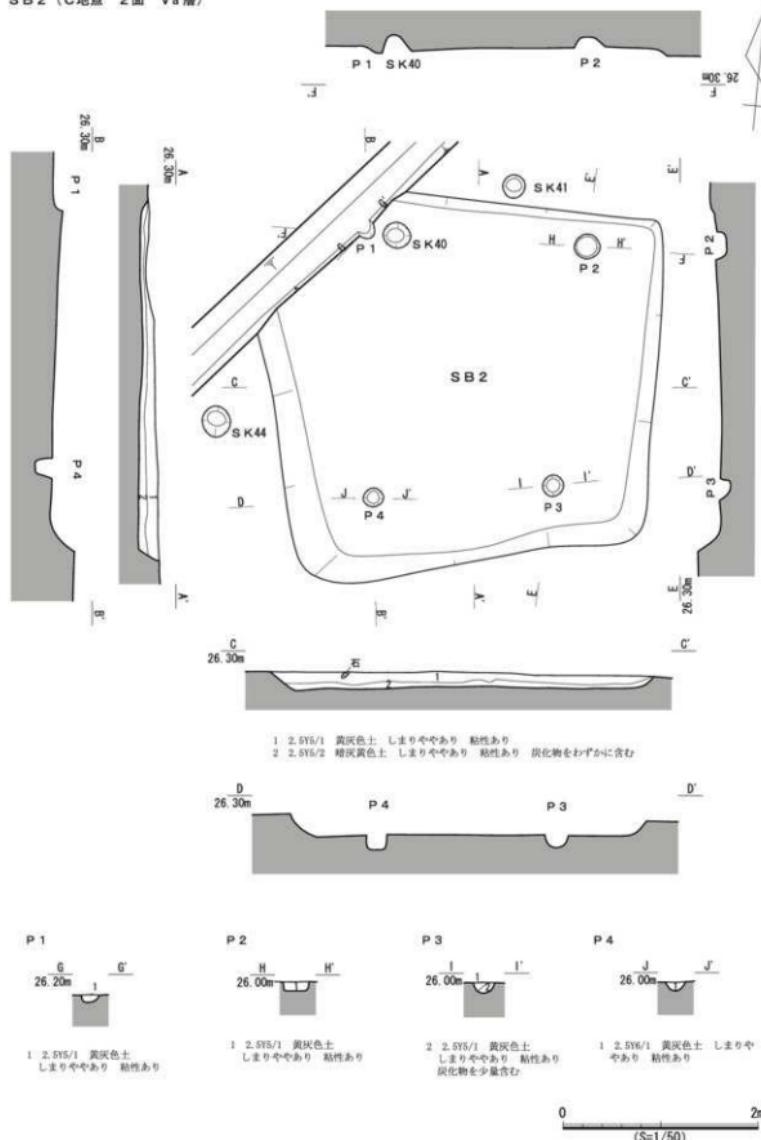
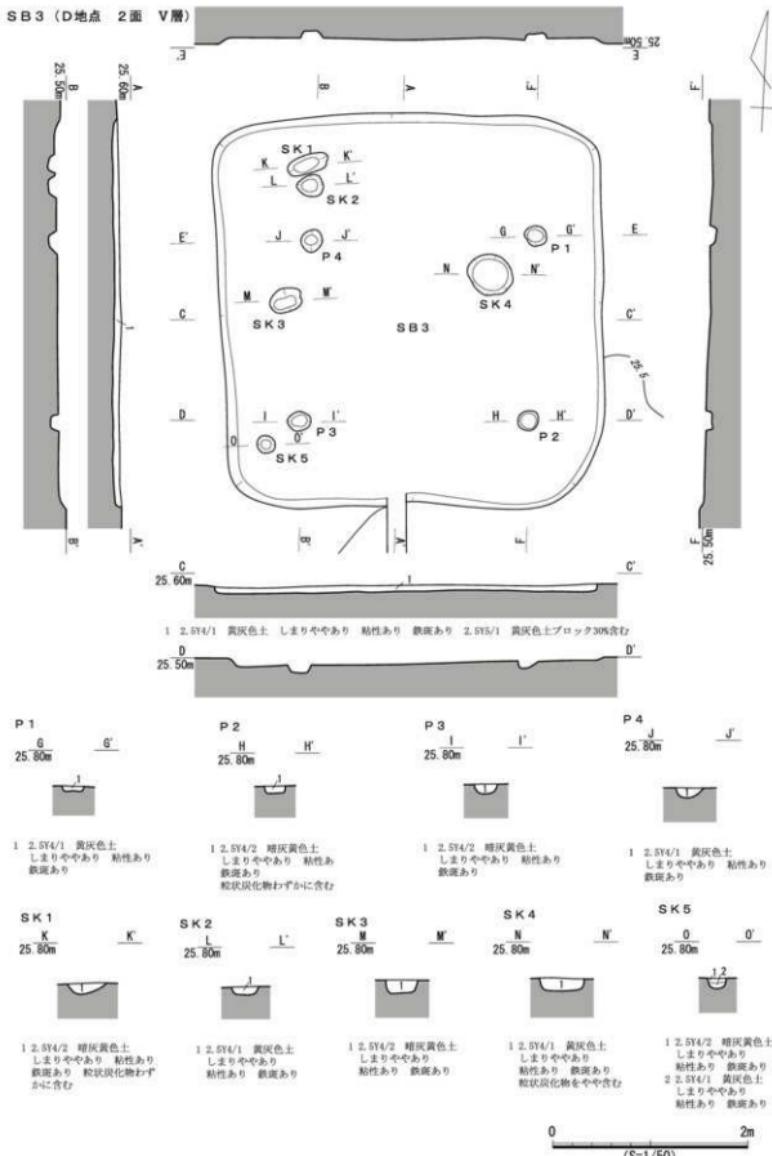


図 43 SB 2 造構図



SH 1 (C地点 2面 Va層)

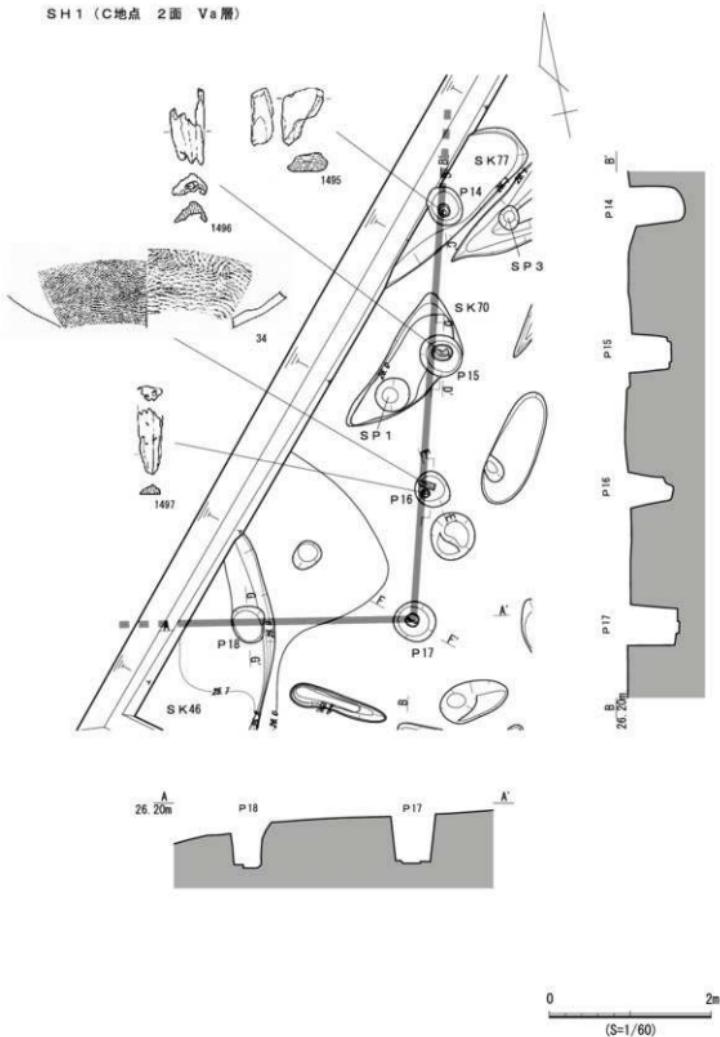


図45 SH 1造構図 (1)

SH1

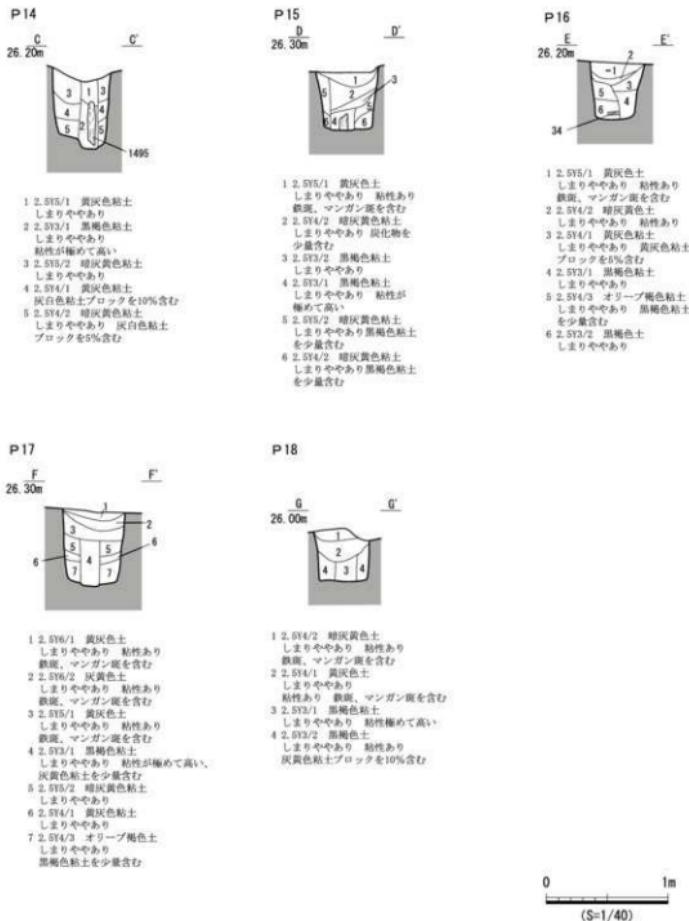


圖 46 SH1遺構圖（2）

SH 2 (C地点 2面 Va層)

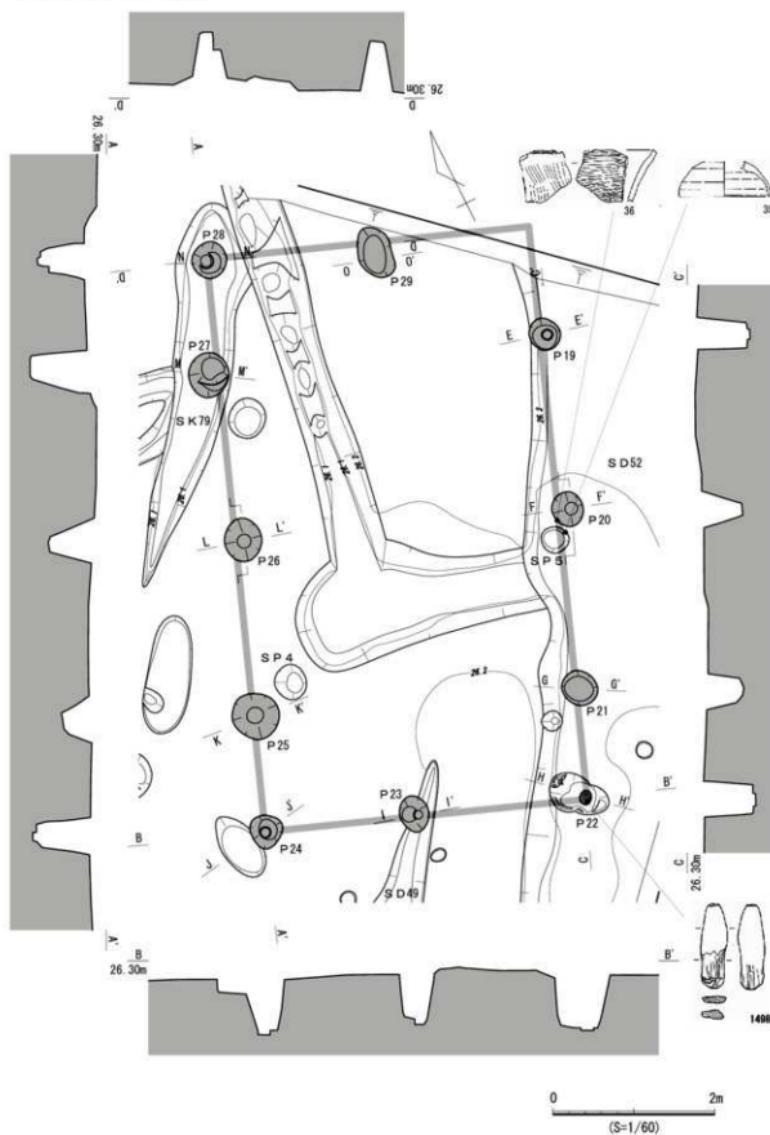


図47 SH 2遺構図(1)

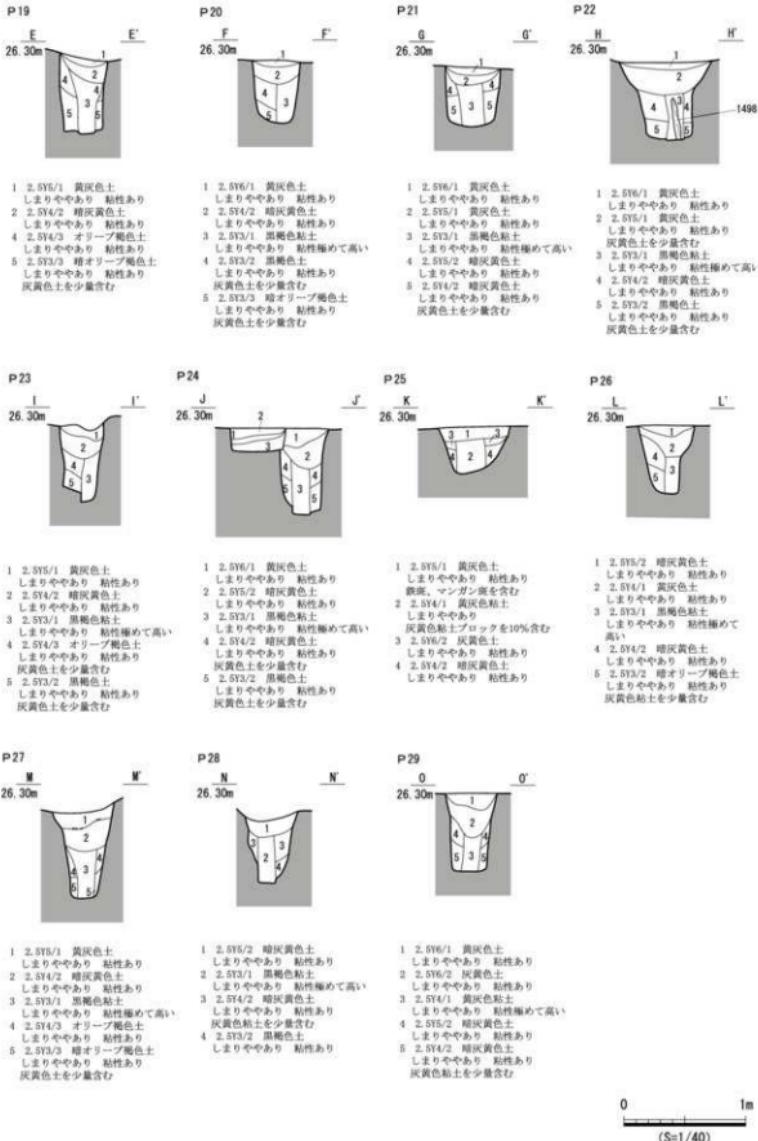


図48 SH2遺構図(2)

SD35~37・50・63~65 (C地点 2面 Va層)
 (D地点 2面 V層)

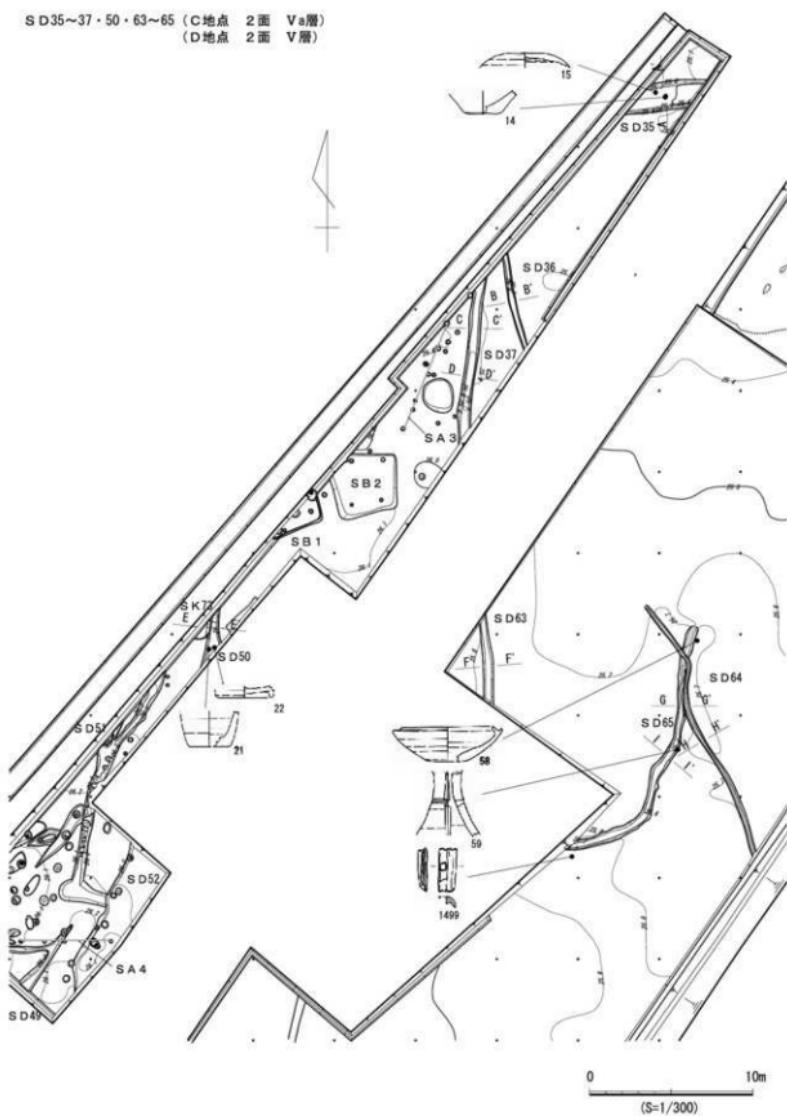


図49 SD35~37・50・63~65遺構図（1）

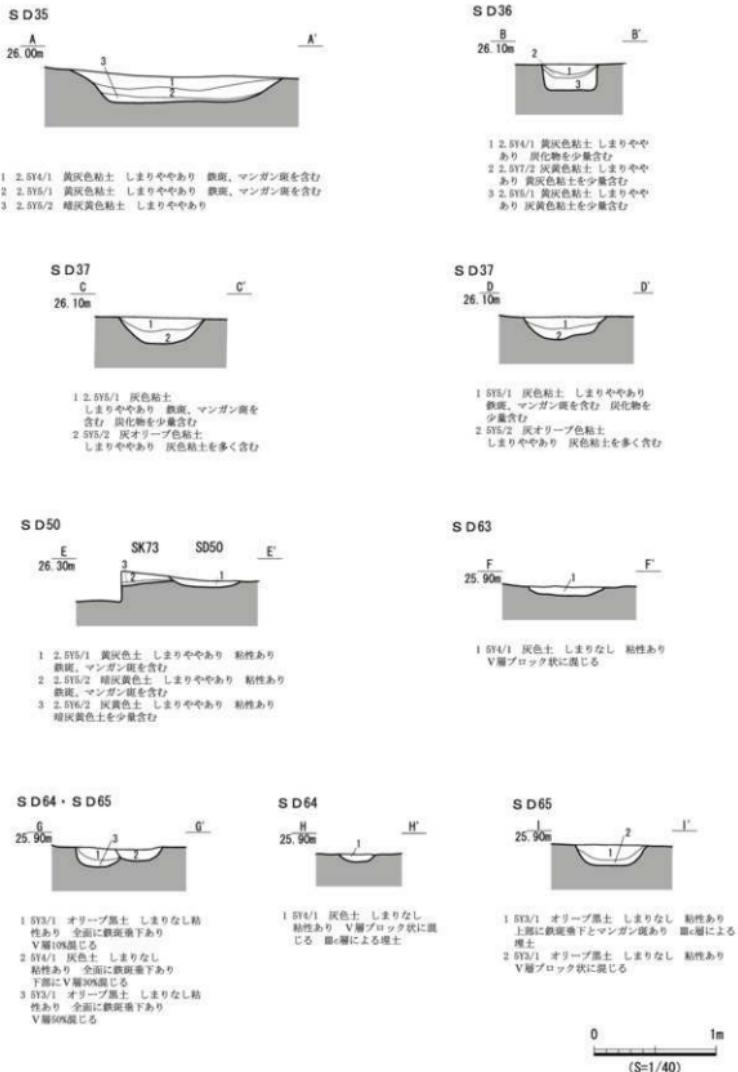
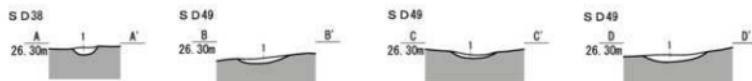
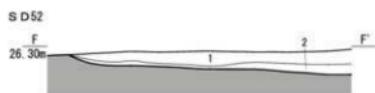
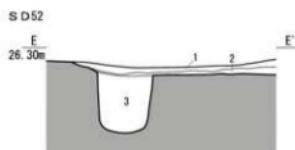


図 50 S D 35 ~ 37 · 50 · 63 ~ 65 遺構図 (2)

SD 38・39・48・49・52 (C地点 2面 Va層)

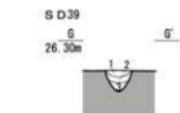


1 2.SY4/2 緑灰色土 しまりややあり 黏性あり 鉄斑、マンガン斑を含む

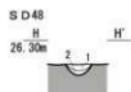


1 2.SY4/2 破壊黄色土 しまりややあり 黏性あり 鉄斑、マンガン斑を含む
2 2.SY6/1 黄灰色土 しまりややあり 黏性あり 噴灰黄色土を少量含む

1 2.SY4/2 緑灰色土 しまりややあり 黏性あり
鉄斑、マンガン斑を含む
2 2.SY4/1 黄灰色土 しまりややあり 黏性あり
噴灰黄色土を少量含む
3 P21埋土



1 2.SY5/1 黄灰色土 しまりややあり
粘性あり 鉄斑、マンガン斑を含む
2 2.SY4/1 黄灰色土 しまりややあり
粘性あり 鉄斑、マンガン斑を含む
3 2.SY4/2 噴灰黄色粘土 しまりややあり



1 2.SY5/1 黄灰色土 しまりややあり
粘性あり 鉄斑、マンガン斑を含む
2 2.SY4/1 黄灰色土 しまりややあり
粘性あり 鉄斑、マンガン斑を含む



図51 SD 38・39・48・49・52断面図

S D 40~43 (C地点 2面 Va層)

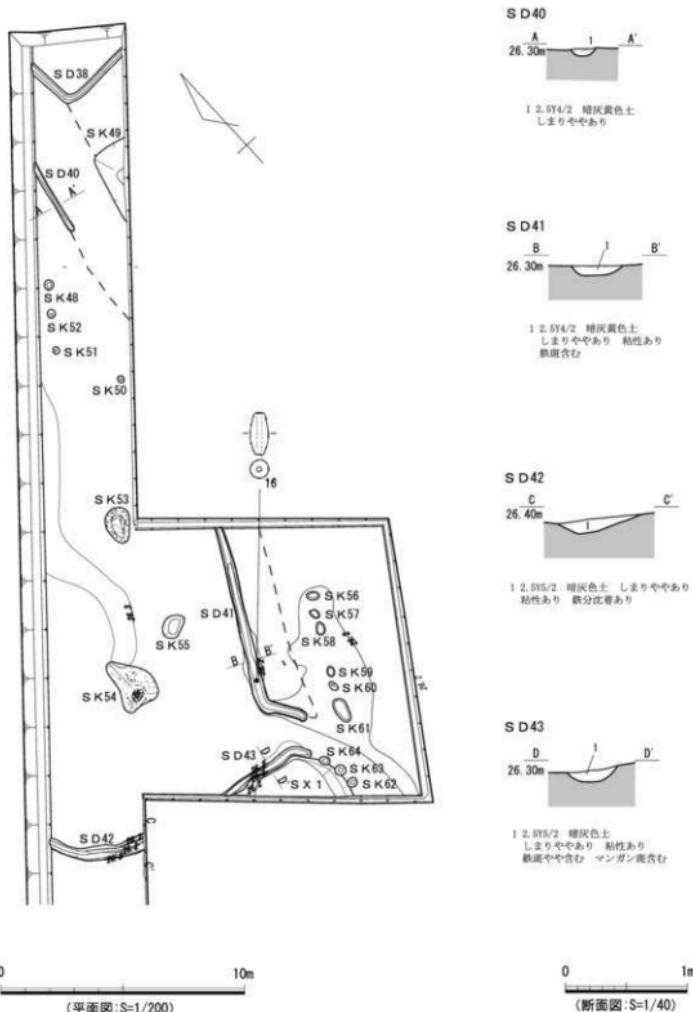


図52 S D 40~43遺構図

SD 44 ~ 47 (C地点 2面 Va層)

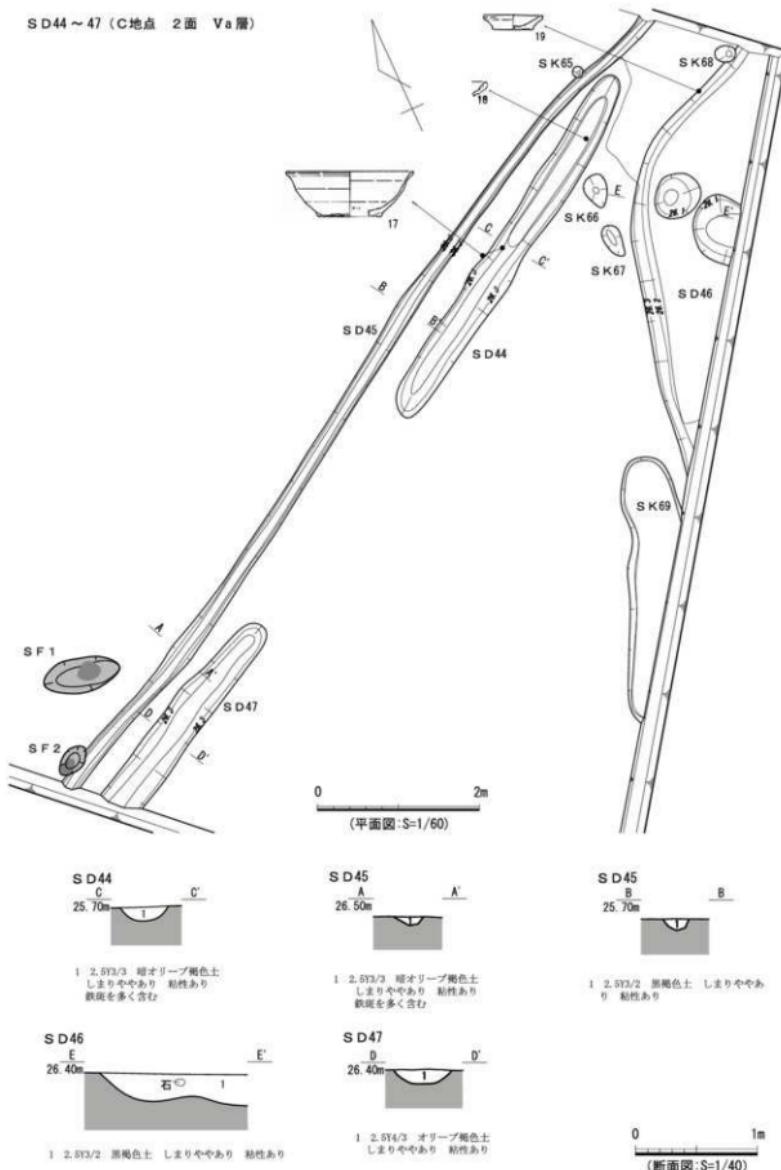
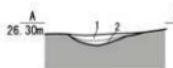
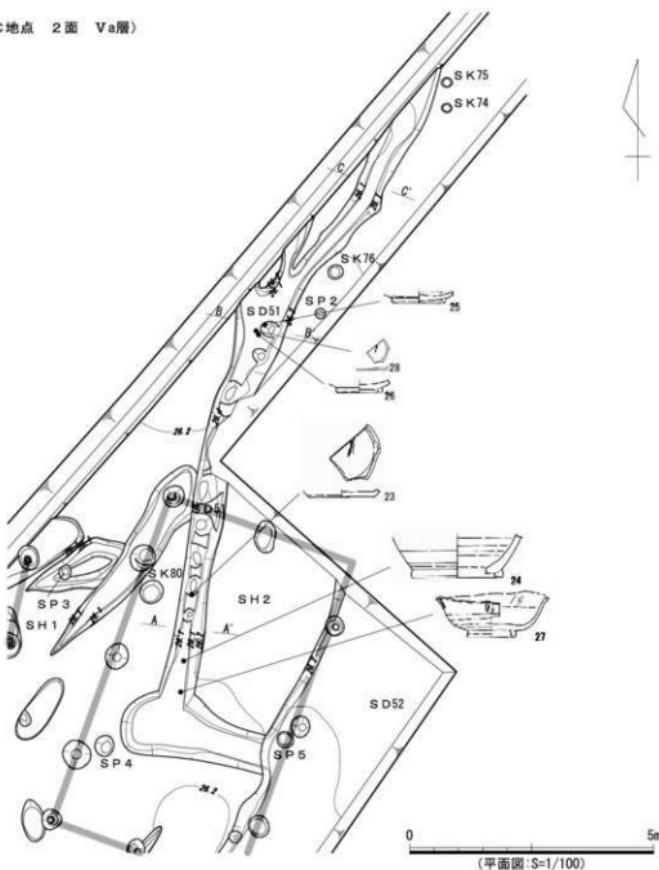


図53 SD 44~47遺構図

SD51 (C地点 2面 Va層)



1 2.5Y6/1 黄灰色土 しまりややあり 粘性なし
鉄斑、マンガン斑を含む
2 2.5Y5/1 黄灰色土 しまりややあり 粘性なし
鉄斑、マンガン斑を含む 炭化物を少量含む



1 2.5Y6/1 黄灰色粘土 しまりややあり
鉄斑、マンガン斑を含む



1 2.5Y5/1 黄灰色粘土 しまりややあり
鉄斑、マンガン斑を含む

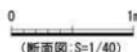
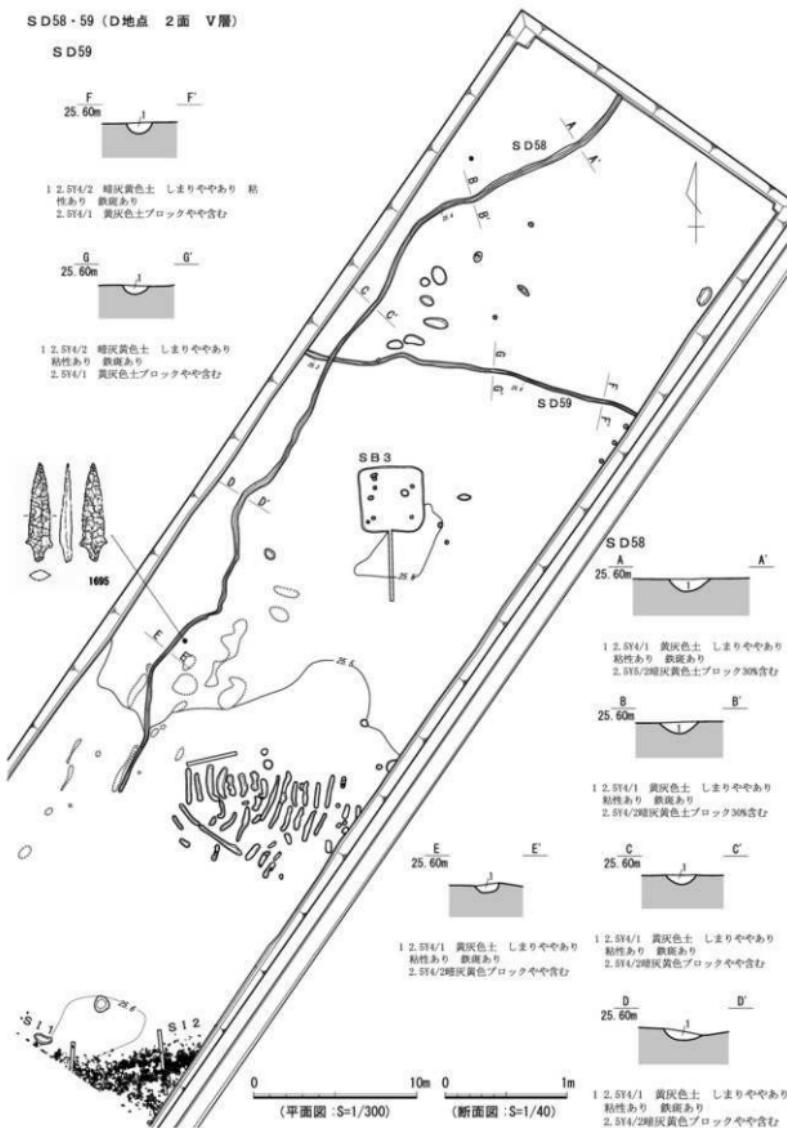


図54 SD51 遺構図



SD 60～62 (D地点 2面 V層)

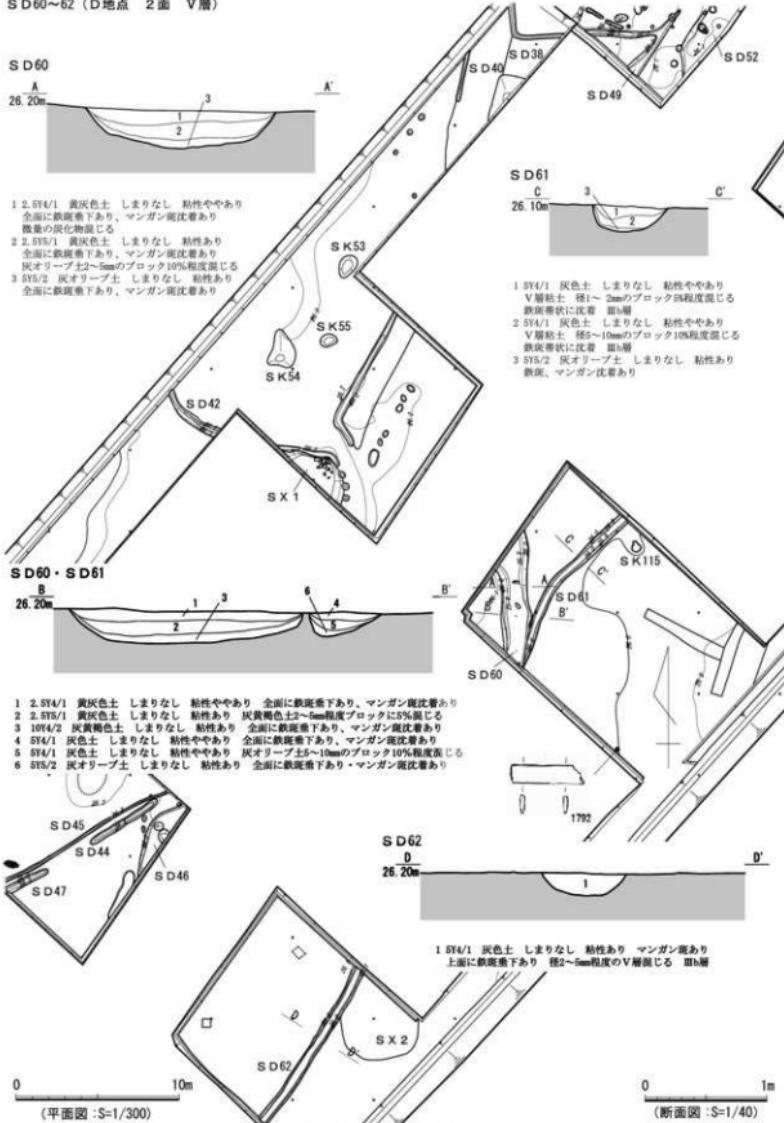


図56 SD 60～62遺構図

S D 60・61出土遺物

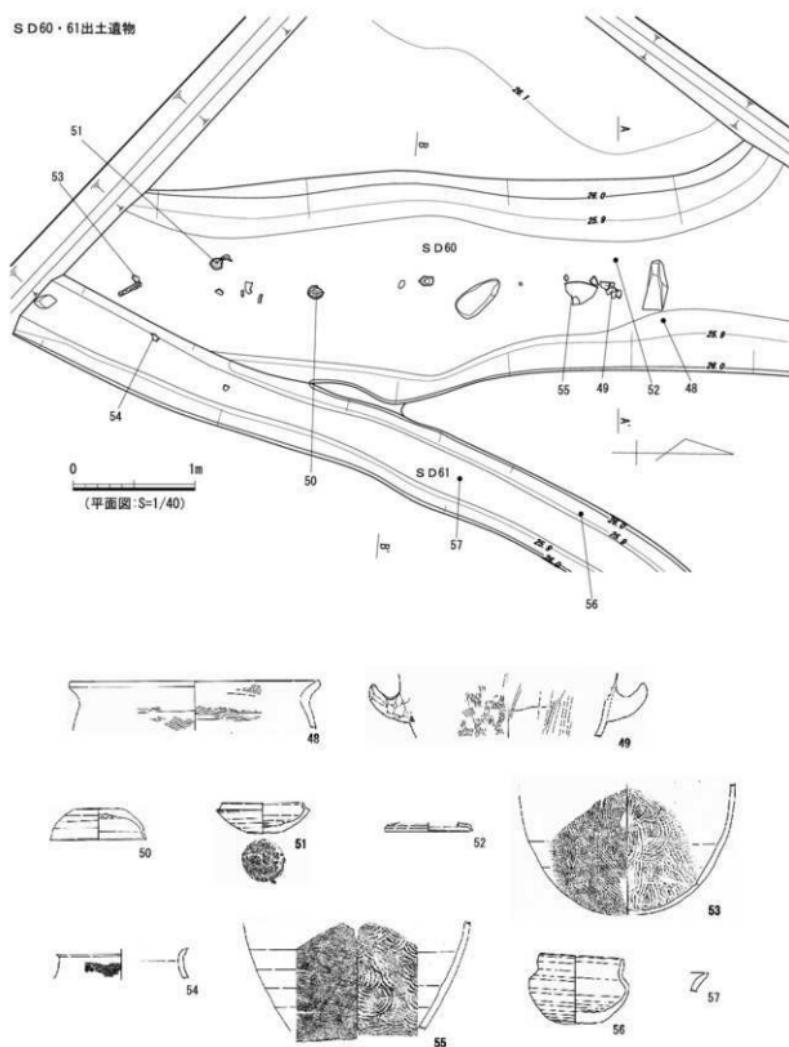


図57 S D 60・61周辺出土状況

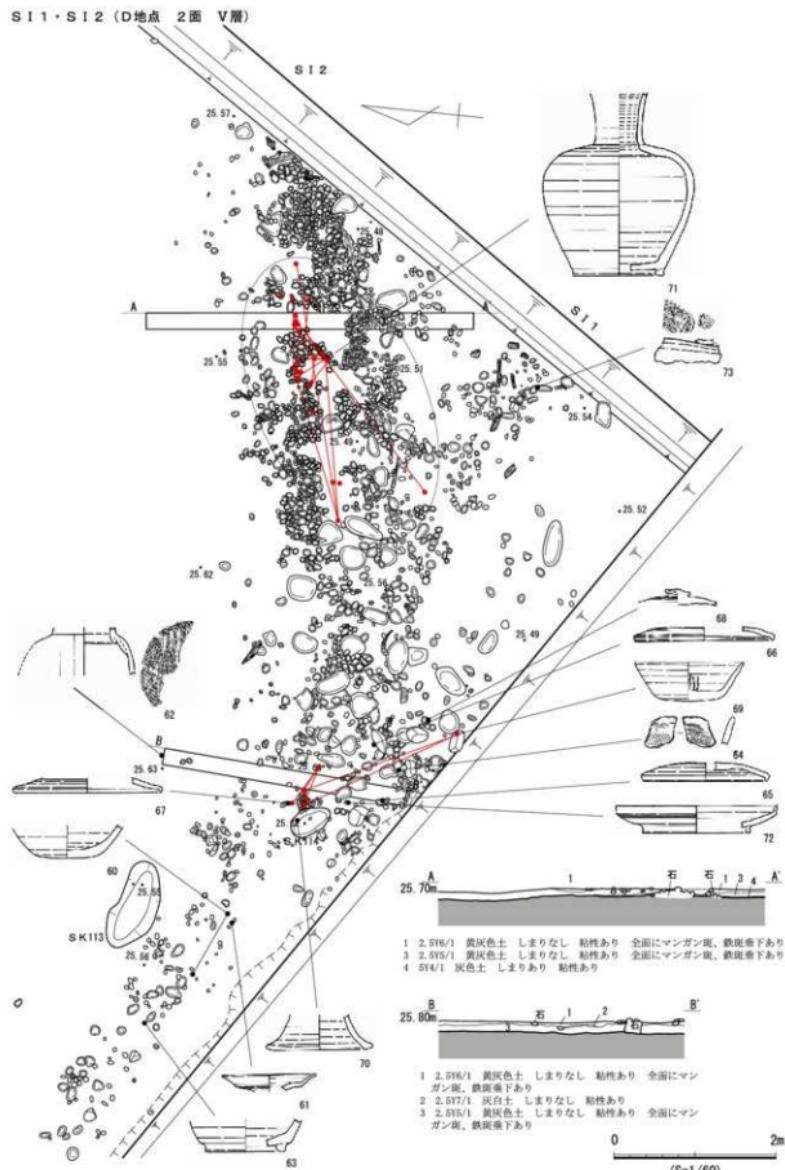


図 58 S I 1 · 2 遺構図

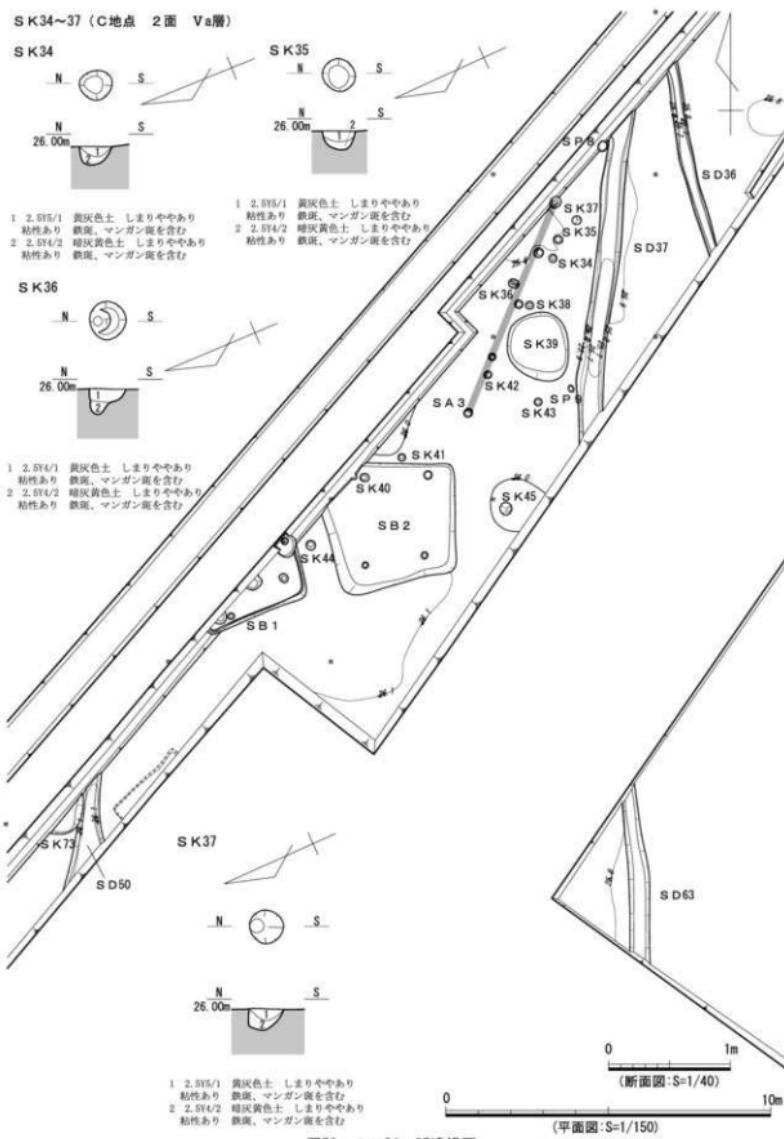


図59 SK34~37遺構図

SK38~45 (C地点 2面 Va層)

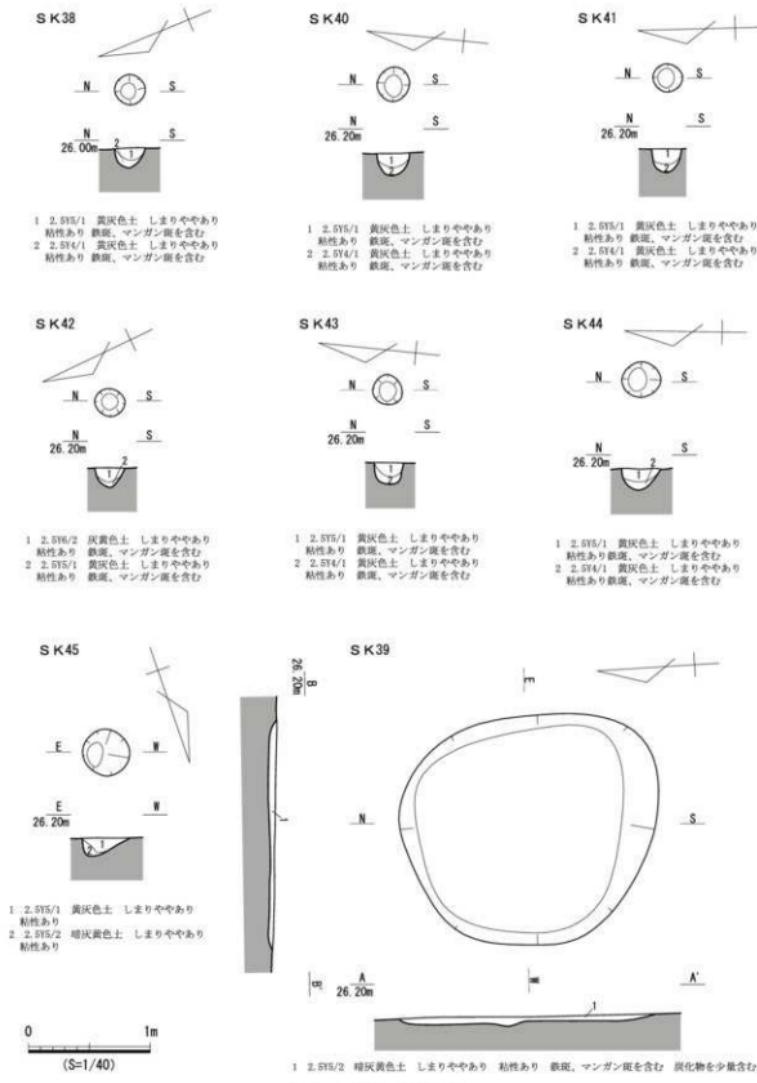


図60 SK38~45遺構図

SK48~52 (C地点 2面 Va層)

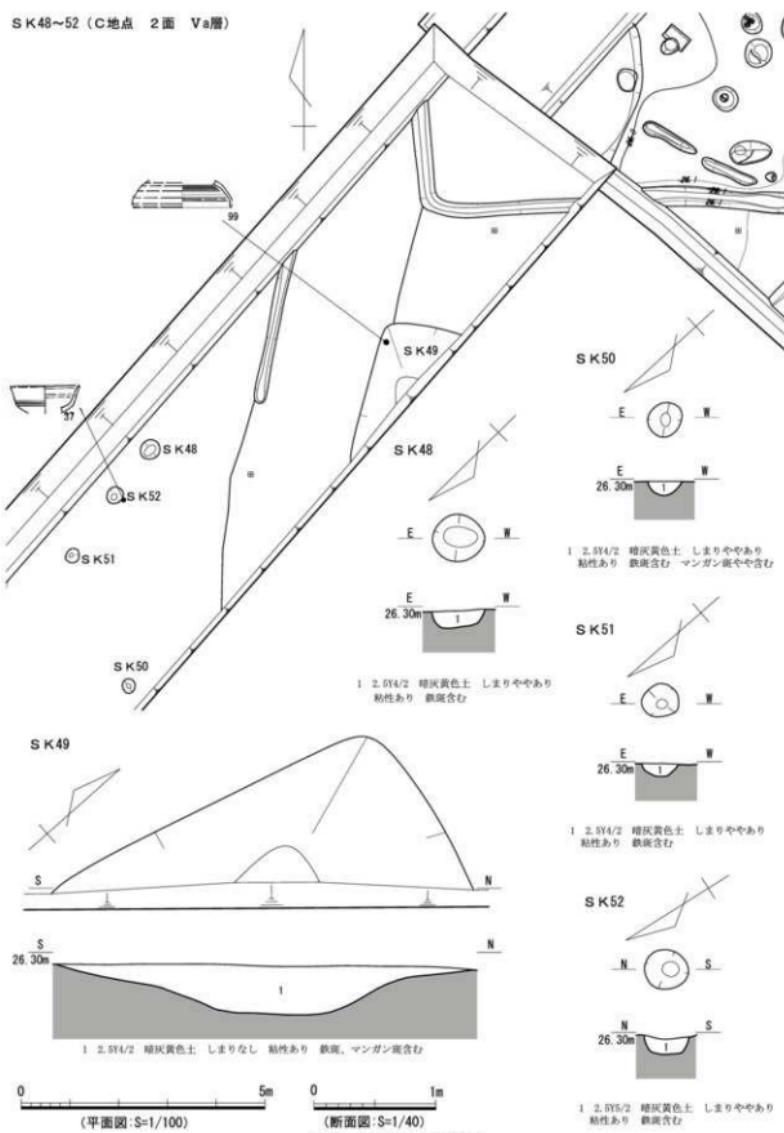


図61 SK48~52遺構図

SK53~55 (C地点 2面 Va層)

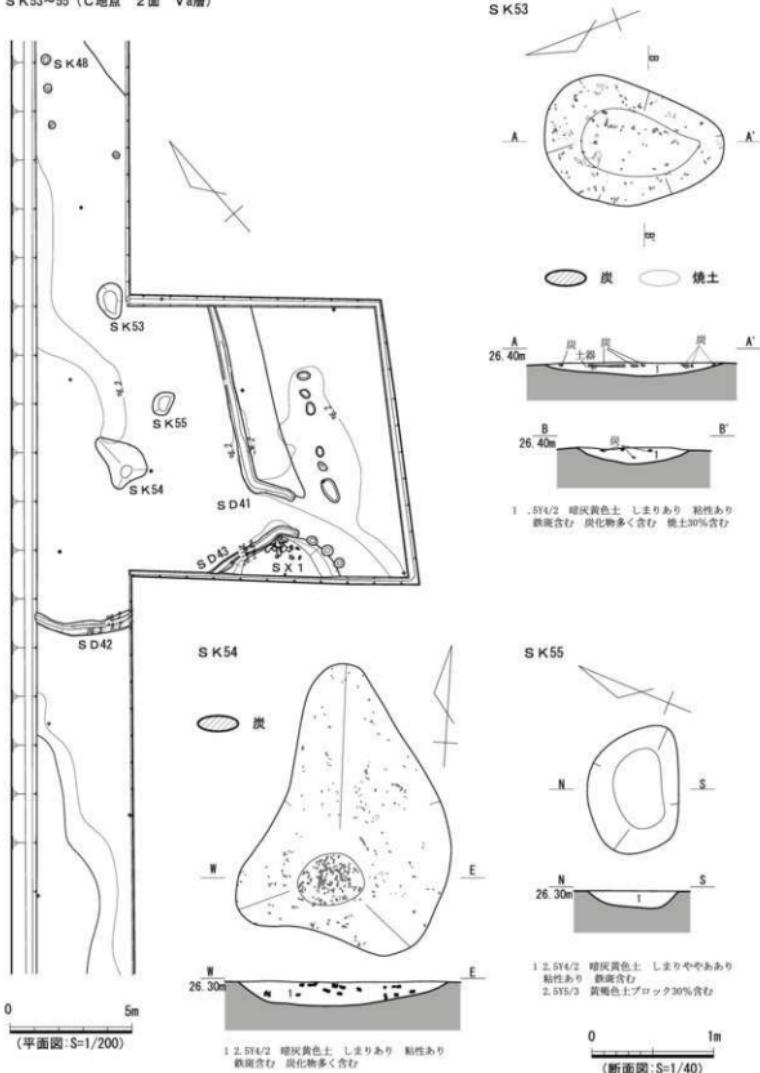
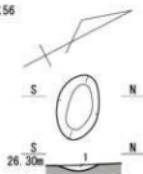


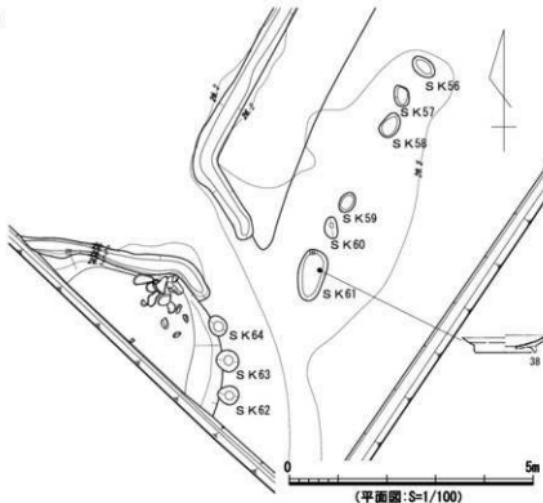
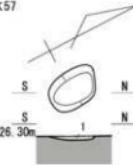
図62 SK53~55遺構図

SK56~64 (C地点 2面 Va層)

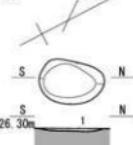
SK56



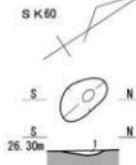
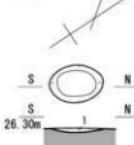
SK57



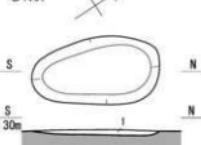
SK58



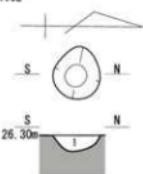
SK59



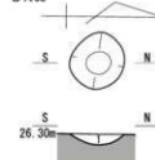
SK61



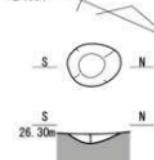
SK62



SK63



SK64



0 1m
(断面図:S=1/40)

図63 SK56~64遺構図

S F 1・2、SK65~69 (C地点 2面 Va層)

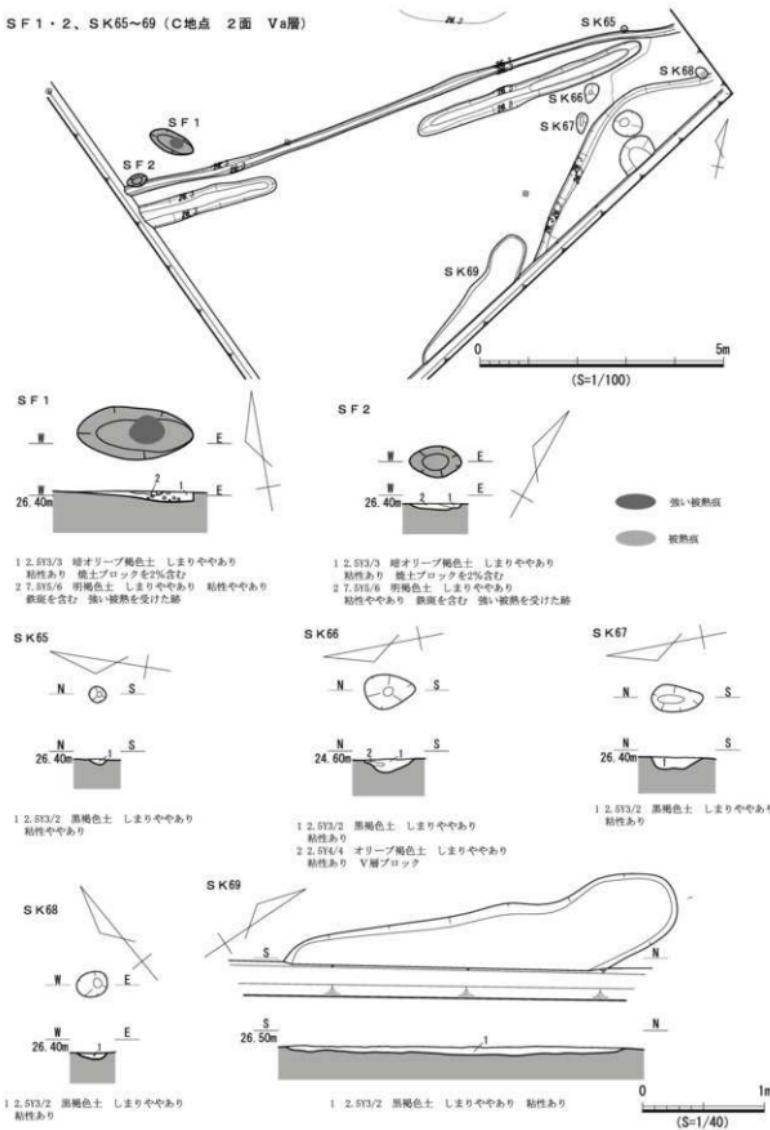


図64 S F 1・2、SK65~69遺構図

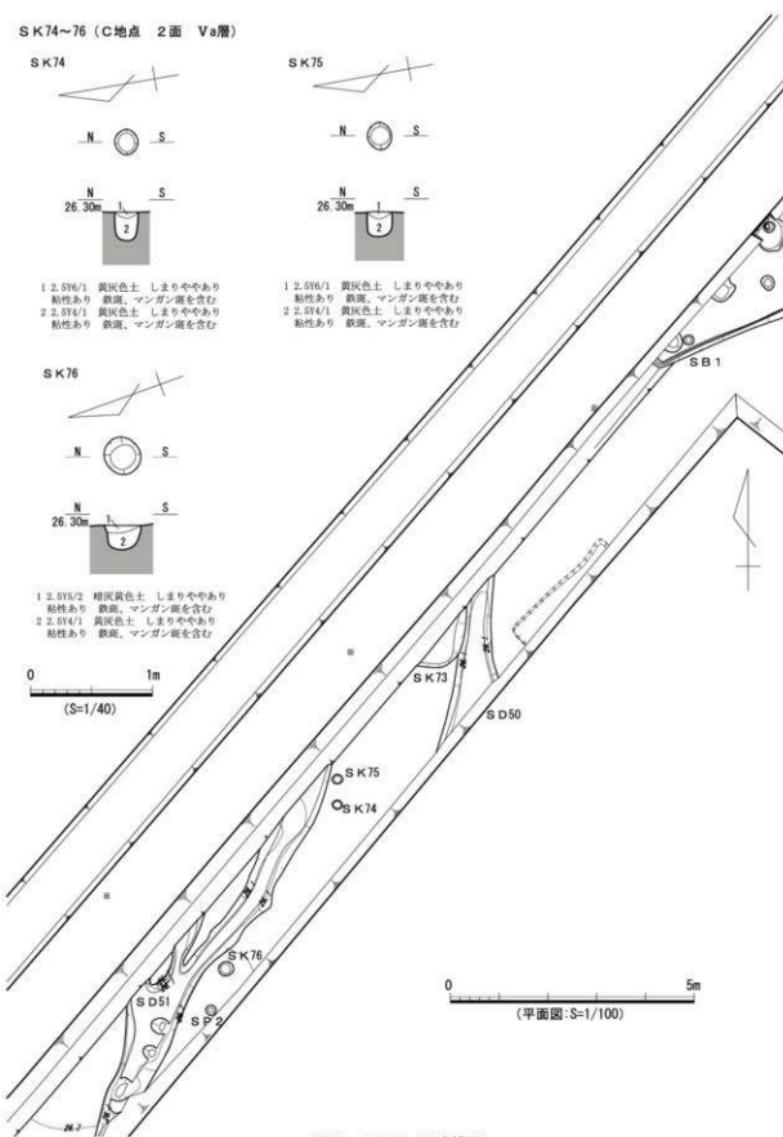


図65 SK74~76遺構図

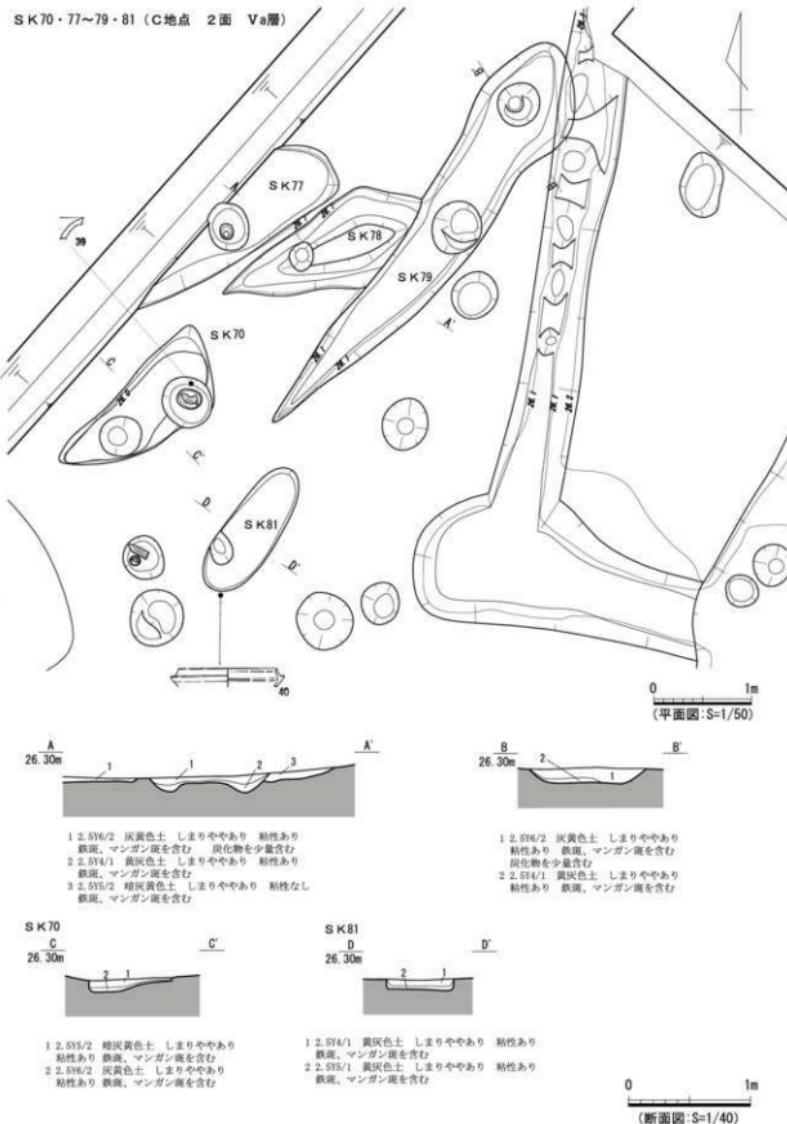


図66 SK 70・77~79・81遺構図

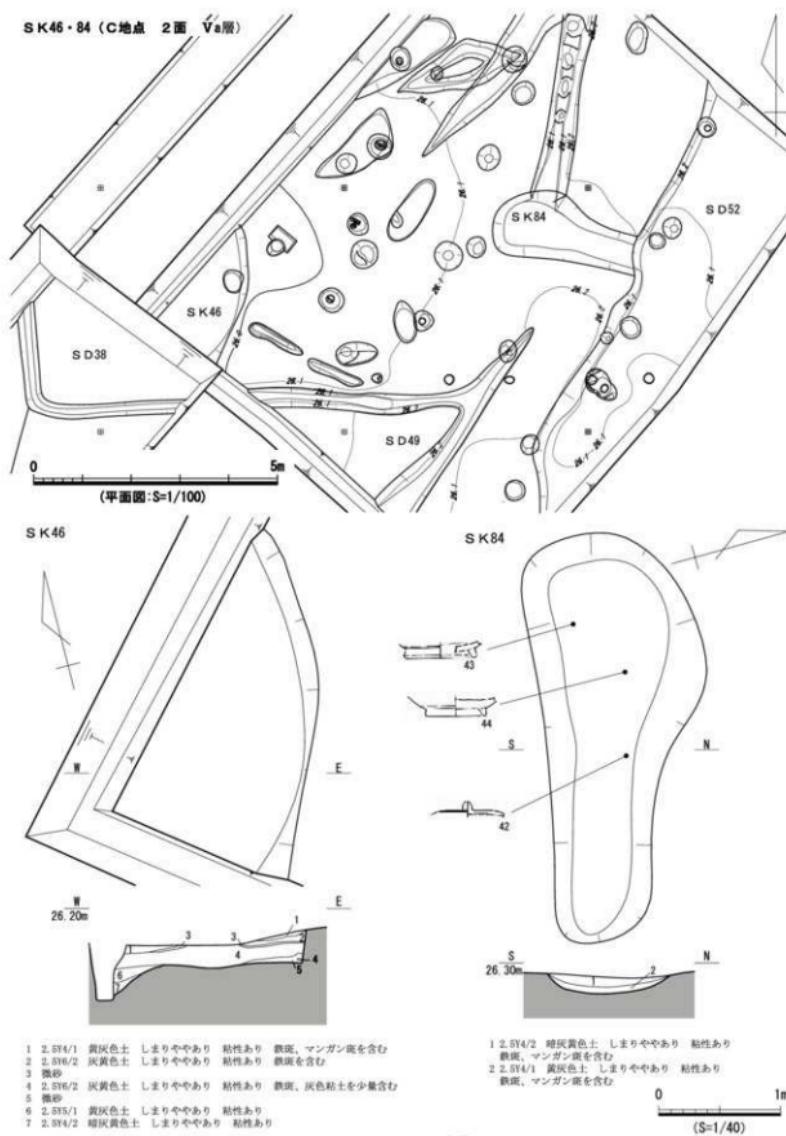
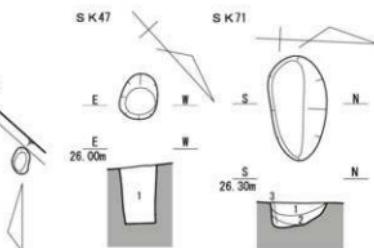
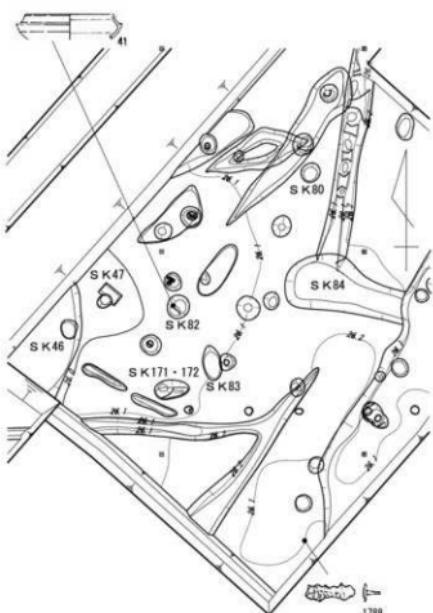
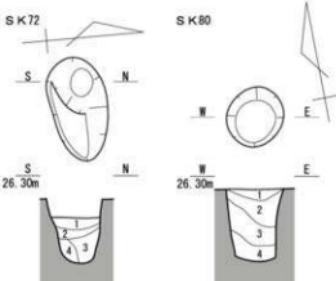


図67 SK46-84遺構図

SK47・71・80・82・83・85 (C地点 2面 Va層)

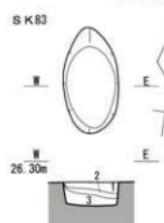
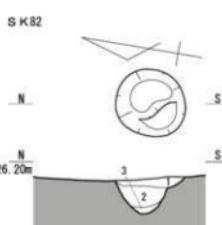


1. 2.SY7/1 灰白色粘土 しまりややあり
粘性あり 鉄斑、マンガン斑を含む
底辺はまだ見えないか。
2. 2.SY4/1 黄灰色粘土 しまりややあり
3. 2.SY4/2 灰灰黄色粘土 しまりややあり
粘性あり 増灰色粘土を少量含む



1. 2.SY4/1 黄灰色土 しまりややあり
粘性あり
2. 2.SY6/1 黄灰色土 しまりややあり
粘性あり
3. 2.SY5/1 黄灰色土 しまりややあり
粘性あり 鉄斑、マンガン斑を含む
4. 2.SY3/1 黑褐色土 しまりややあり
粘性あり 鉄斑、マンガン斑を含む
黒褐色ブロックを10%含む 鉄斑、
マンガン斑を含む

1. 2.SY6/1 黄灰色土 しまりややあり
2. 2.SY5/2 増灰黄色土 しまりややあり
3. 2.SY5/3 黄灰色土 しまりややあり
4. 2.SY3/3 増オリーブ褐色土 しまりややあり 粘性あり



1. 2.SY5/1 黄灰色土 しまりややあり 粘性あり
鉄斑、マンガン斑を含む
2. 2.SY4/2 増灰黄色粘土 しまりややあり
3. 2.SY4/1 黄灰色粘土 しまりややあり 黄灰色
粘土を少量含む

1. 2.SY5/1 黄灰色土 しまりややあり 粘性あり
鉄斑、マンガン斑を含む
2. 2.SY6/2. 黄灰色土 しまりややあり 粘性あり
3. 2.SY4/1 黄灰色粘土 しまりややあり 鉄斑、マ
ンガン斑を含む

1. 2.SY6/1 黄灰色土 しまりややあり
粘性あり
2. 2.SY4/1 黄灰色土 しまりややあり
黄灰色土を少量含む

図68 SK47・71・80・82・83・85遺構図

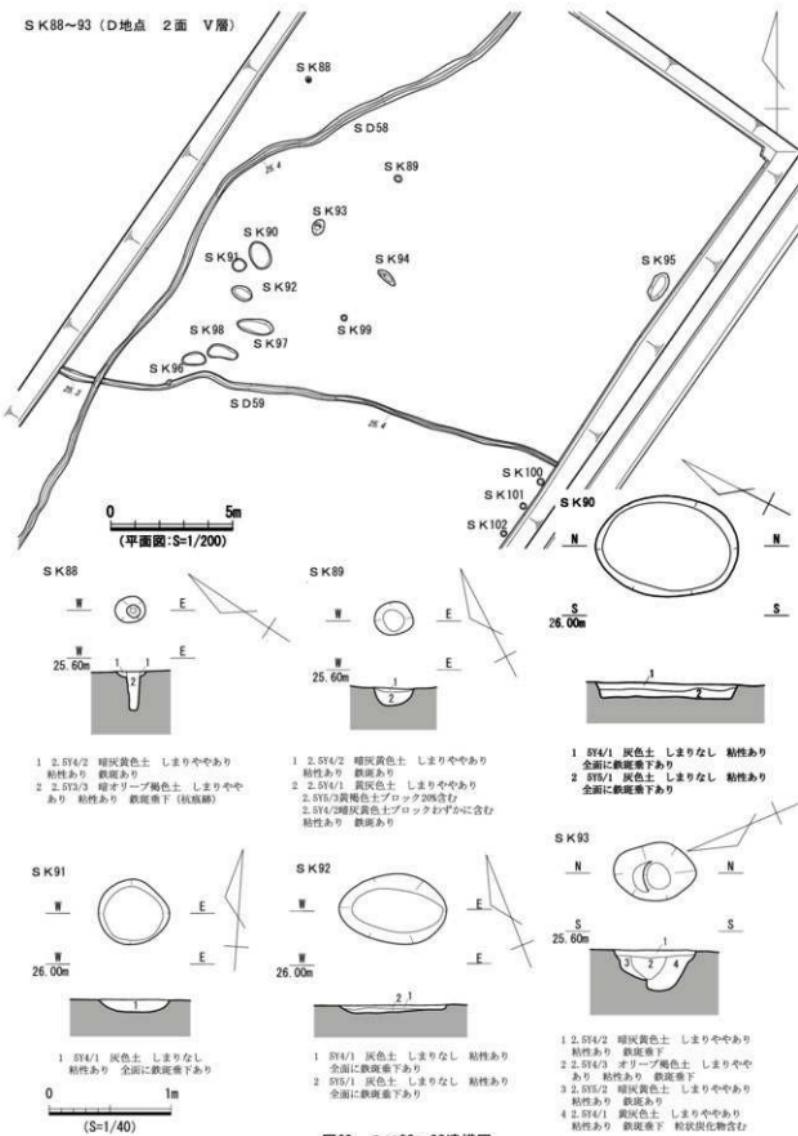


図69 S K88~93遺構図

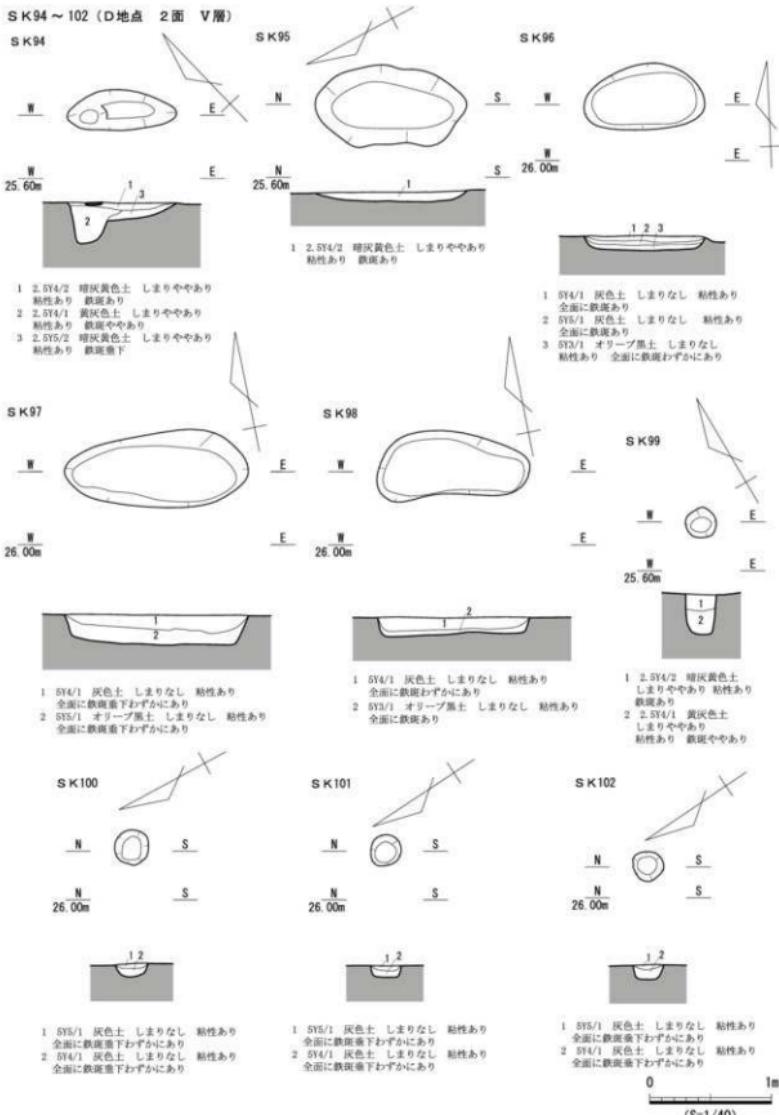
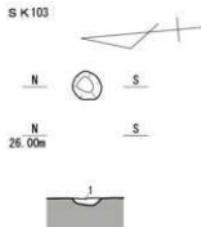
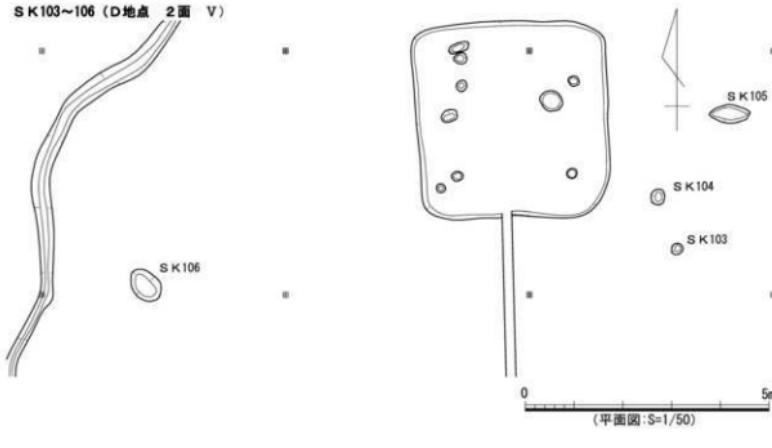
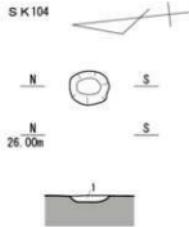


図 70 SK94 ~ 102 遺構図

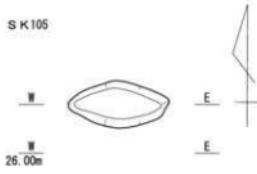
SK103~106 (D地点 2面 V)



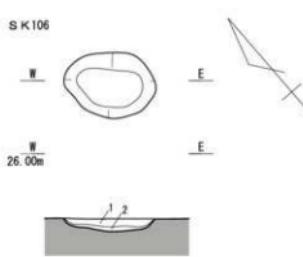
1 SY4/1 灰色土 しまりなし 黏性あり
全面に鉄斑あり



1 SY4/1 灰色土 しまりなし 黏性あり
全面に鉄斑あり



1 SY4/1 灰色土 しまりなし 黏性あり
全面に鉄斑下あり
2 SY5/1 灰色土 しまりなし 黏性あり
全面に鉄斑下あり



1 SY4/1 しまりなし 黏性あり
全面に鉄斑下あり
2 SY5/1 しまりなし 黏性あり
全面に鉄斑下あり

0 1m
(S=1/40)

図71 SK103~106遺構図

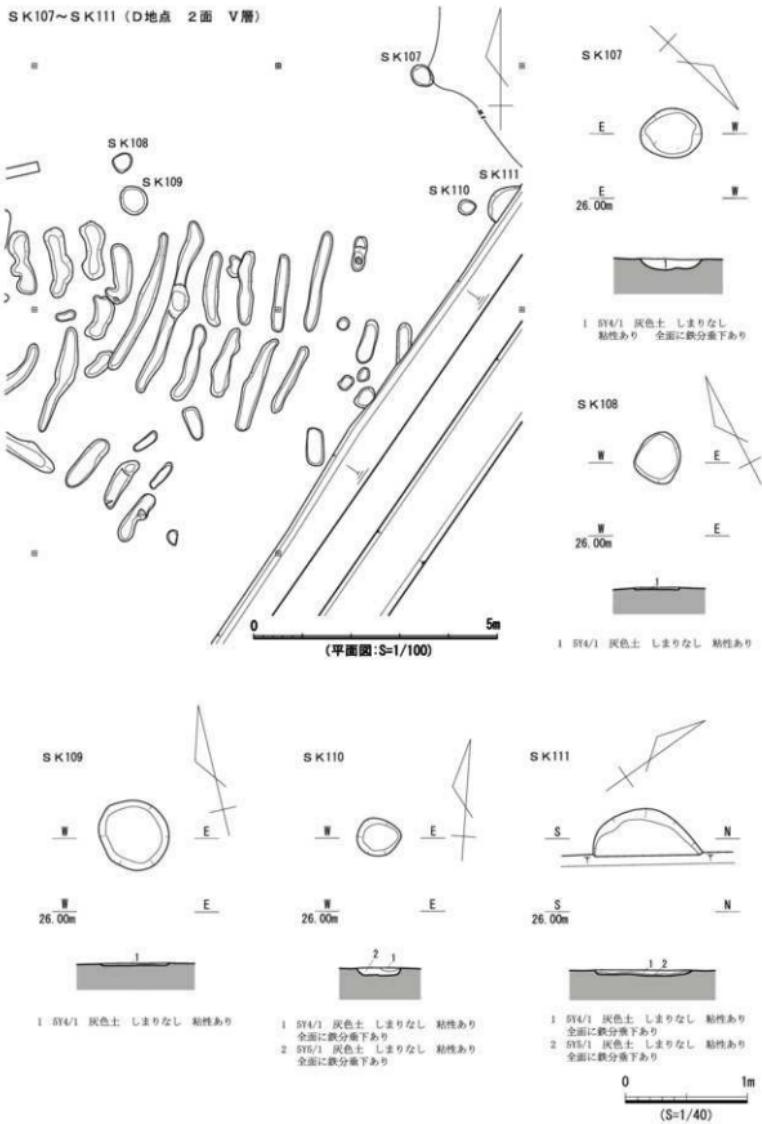


図72 SK107~111遺構図

SK112~114 (D地点 2面 V層)

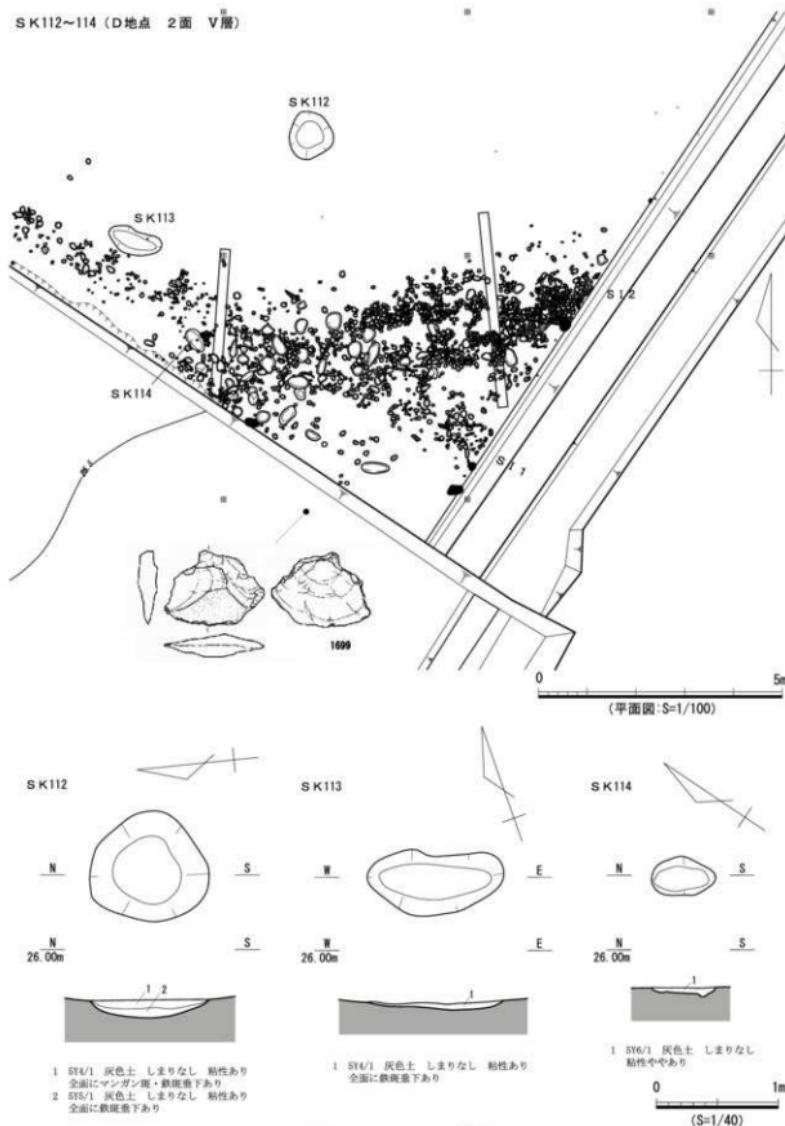


図73 SK112~114遺構図

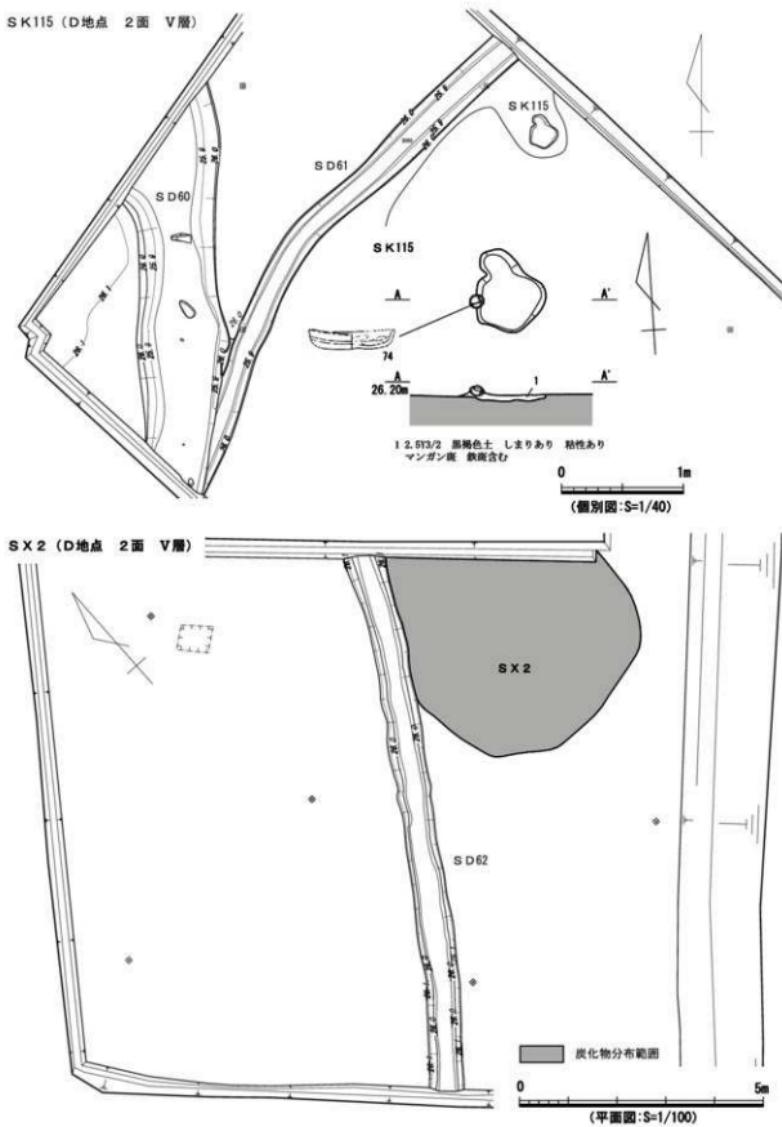


図74 SK115・SX2遺構図

SP 1~9 (C地点 2面 Va層)

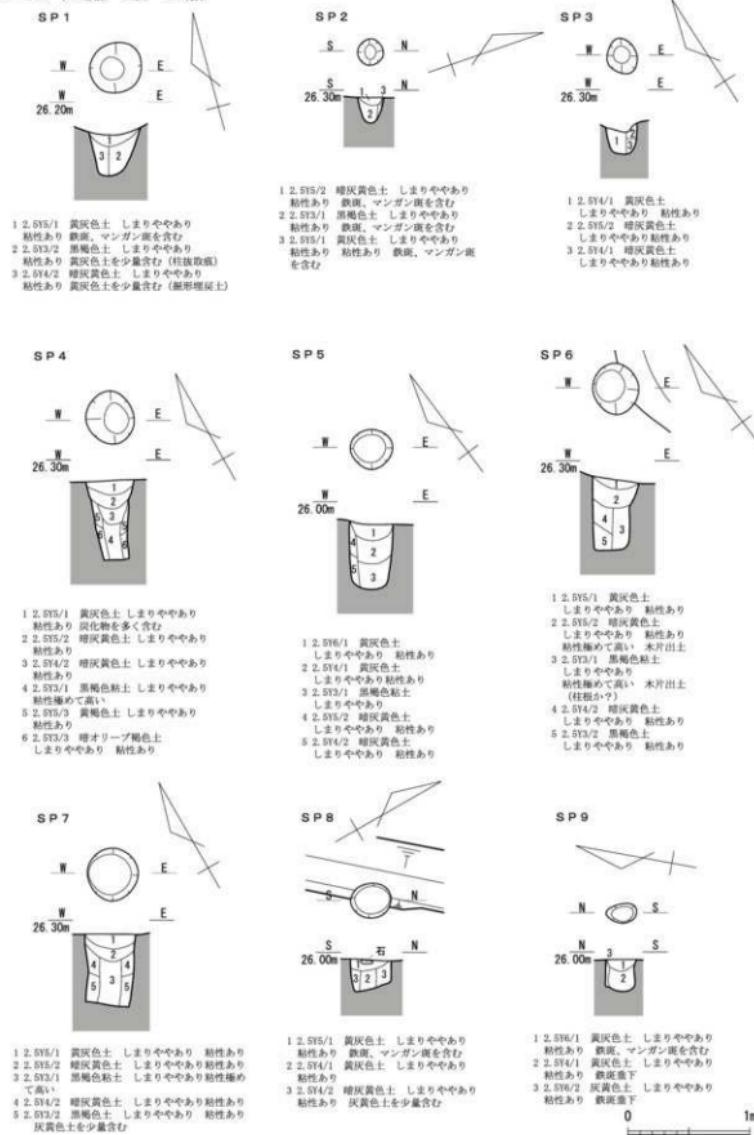


図 75 SP 1~9 遺構図

SX 1 (C地点 2面 Va層)

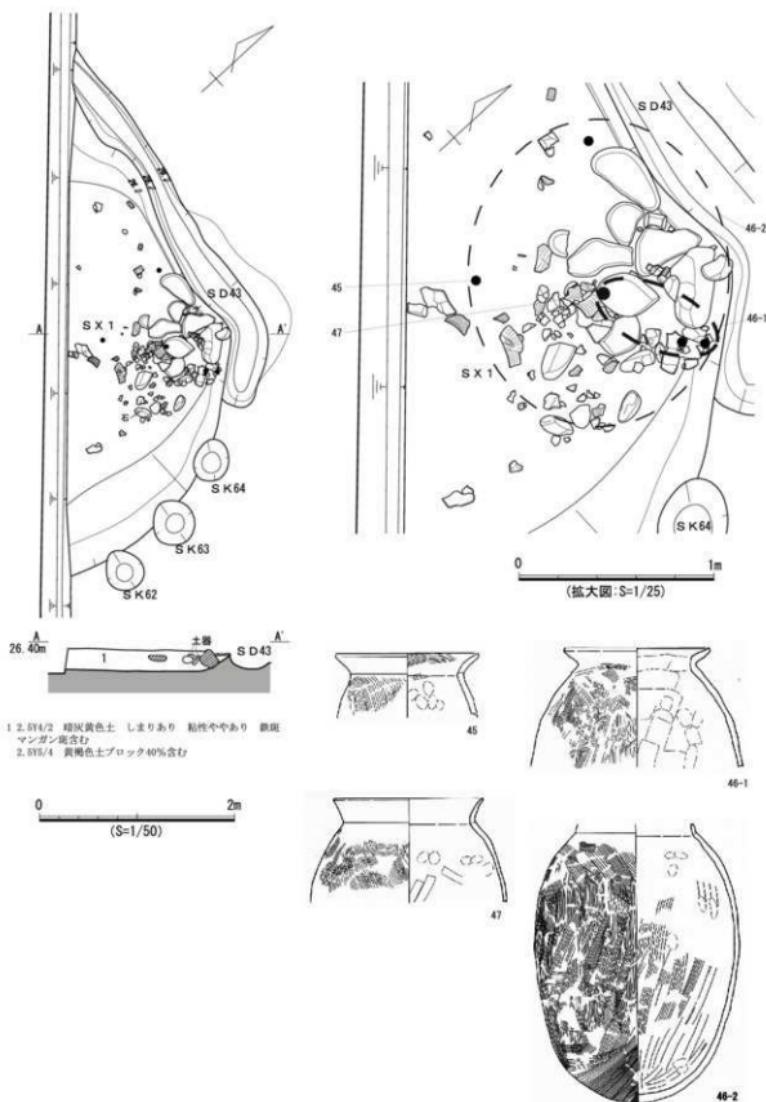


図 76 SX 1 遺構図

STK 1~47 (D地点 2面 V層)

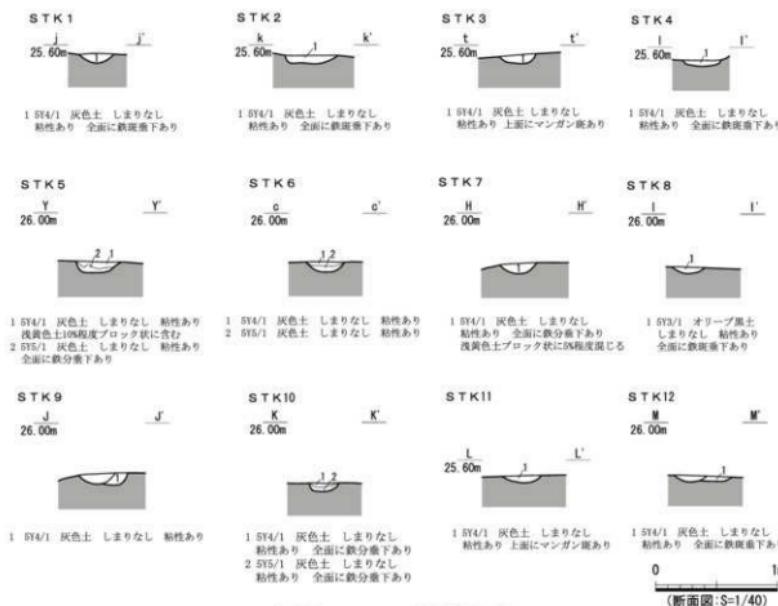
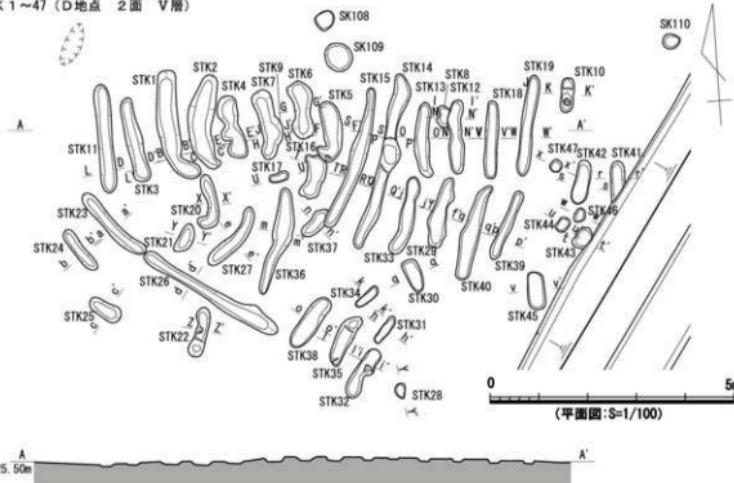


図 77 STK 1~47 遺構図 (1)

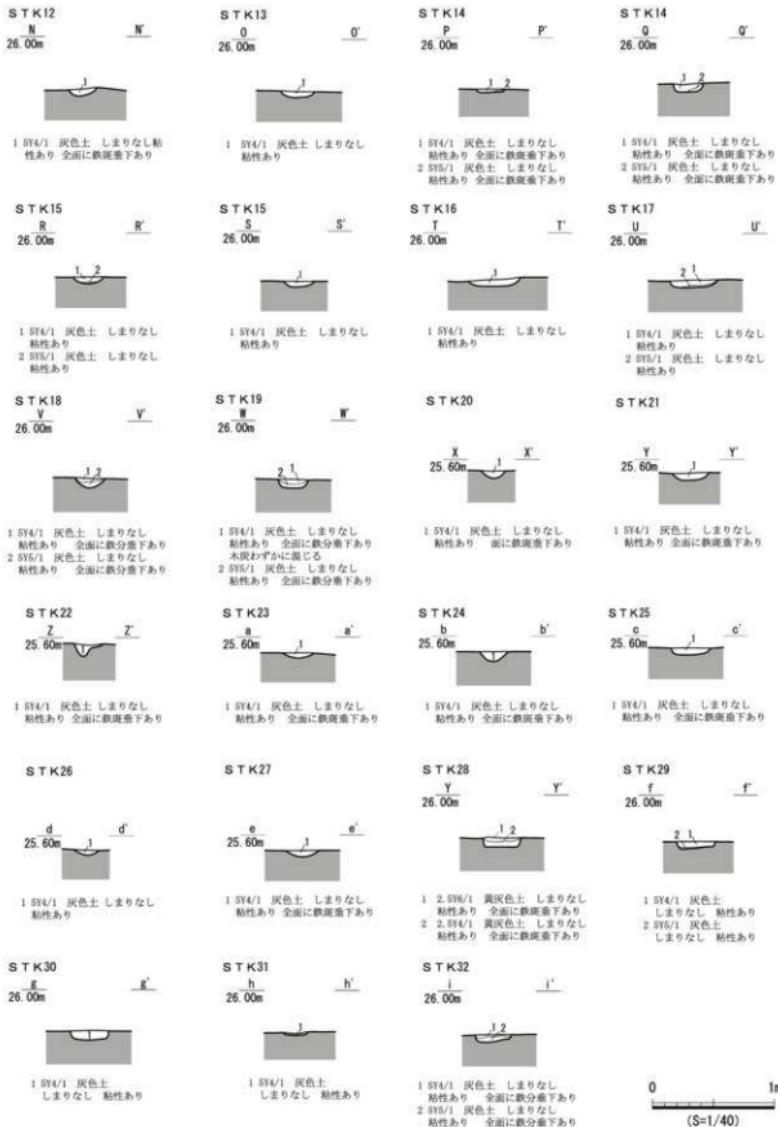


図78 S T K 1~47 遺構図（2）

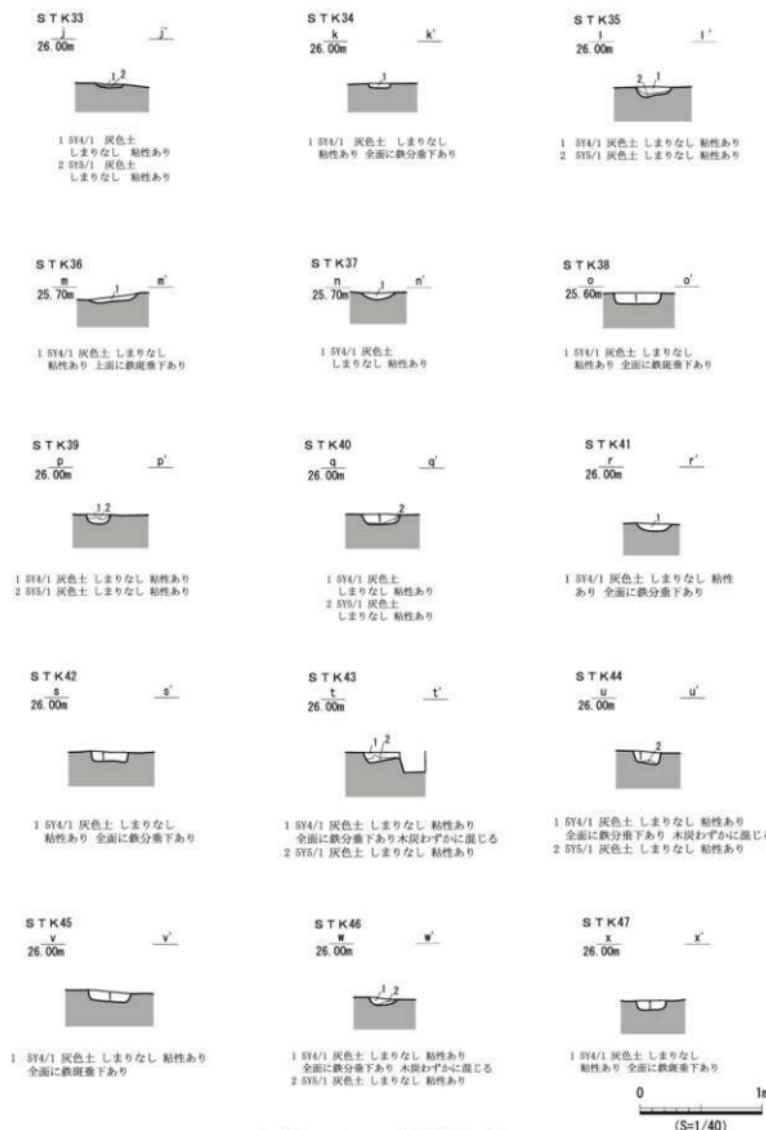


図 79 S T K 1 ~ 47 遺構図 (3)

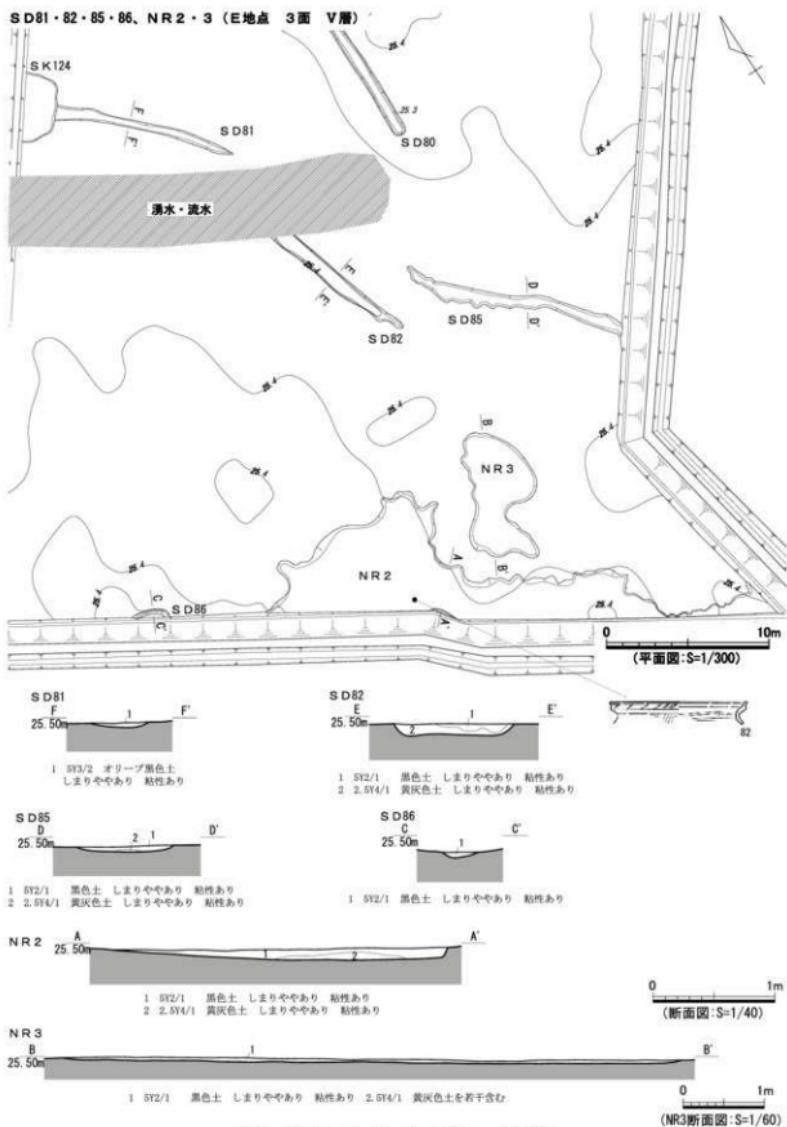


図80 SD 81・82・85・86、NR 2・3 遺構図

SD 70~80 (E地点 3面 V層)

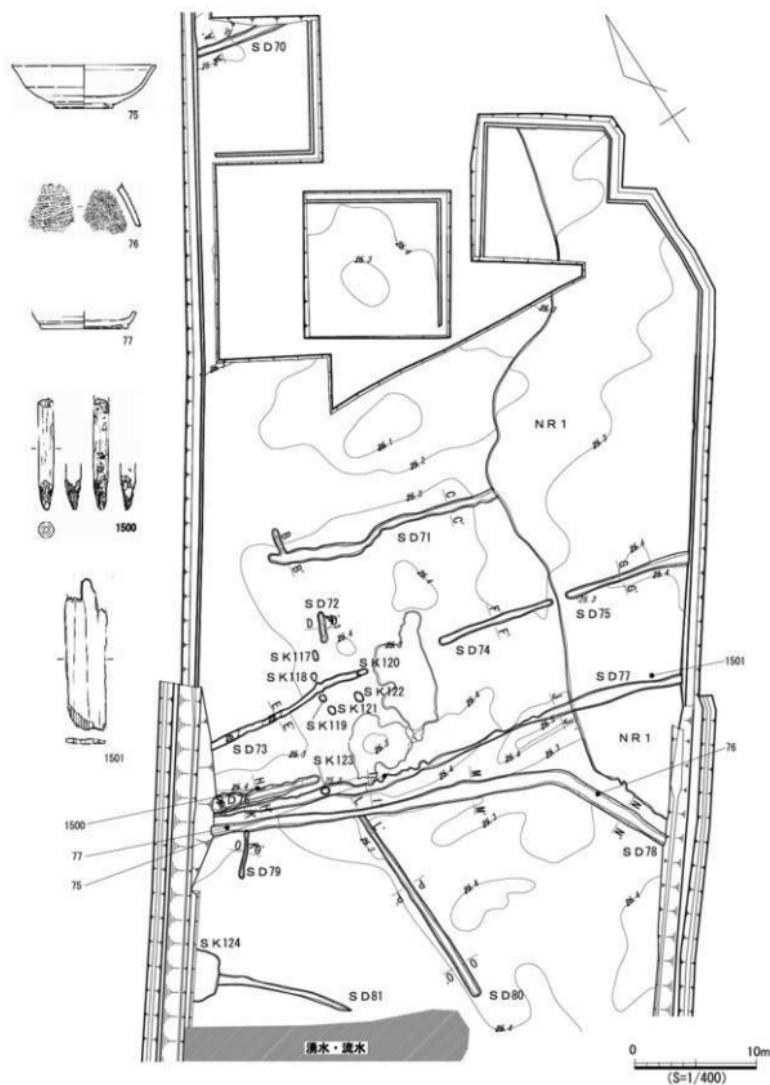


図81 SD 70~80遺構図 (1)

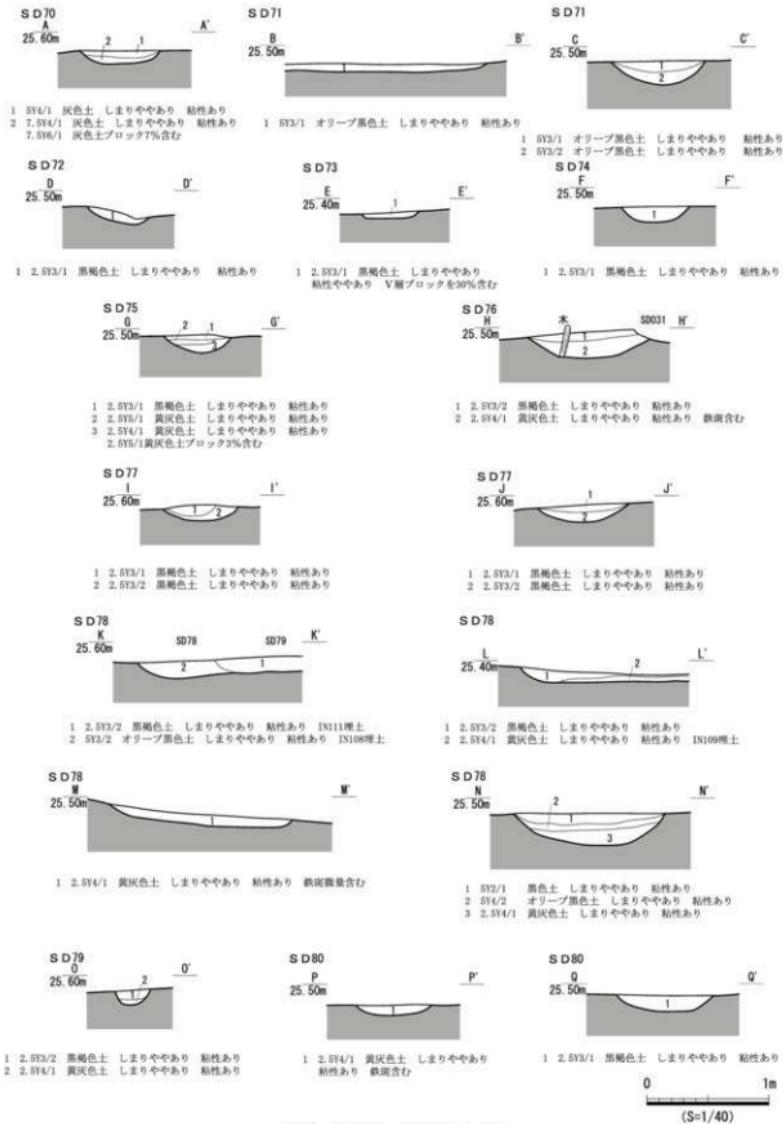


図 82 S D 70 ~ 80 遺構図（2）

NR 1 (E地点 3面 V層)

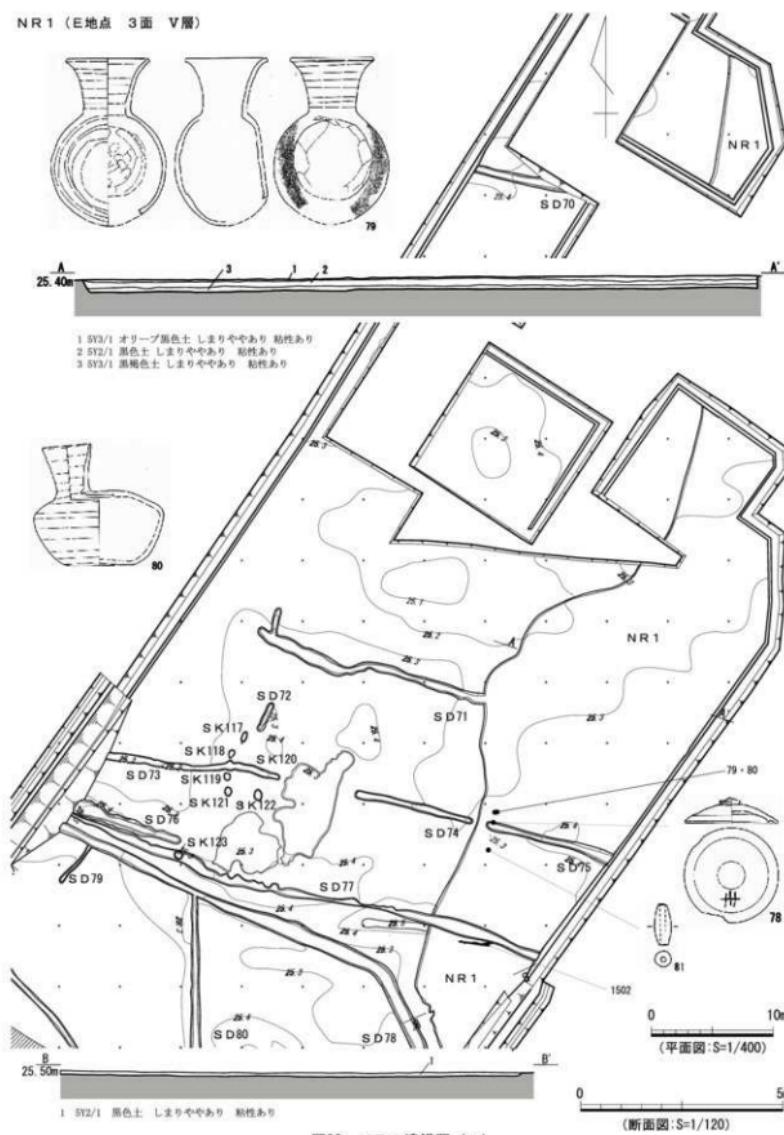
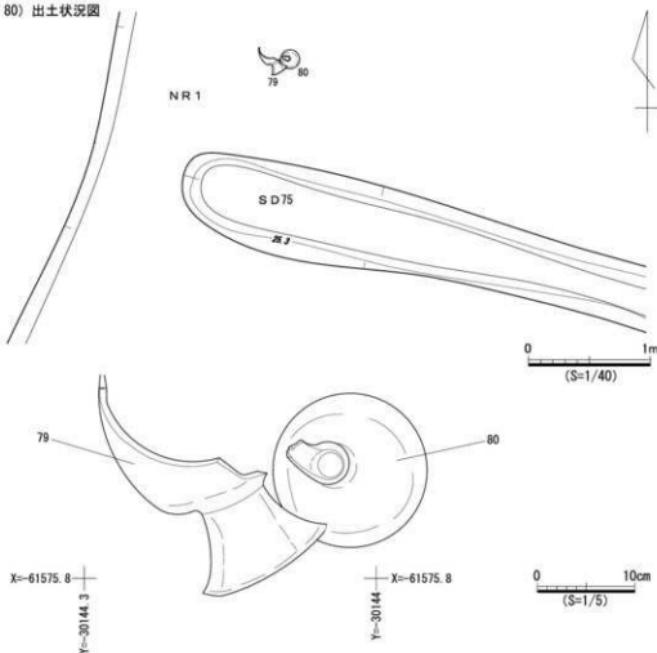


図83 NR 1遺構図(1)

須恵器 (79・80) 出土状況図



流木 (1502) 出土状況図

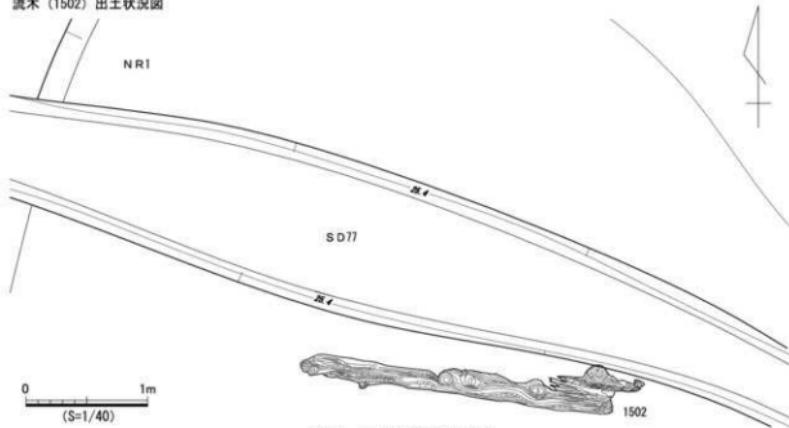


図 84 NR 1 遺構図 (2)

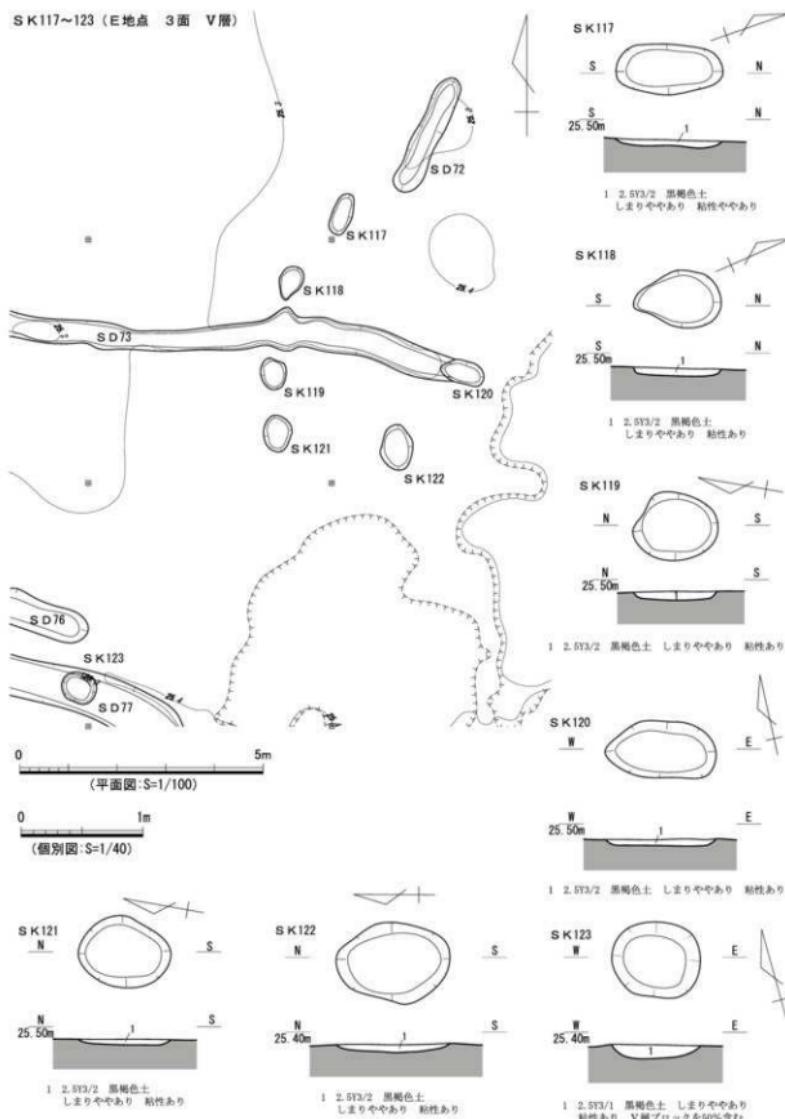


図85 SK117~123造構図

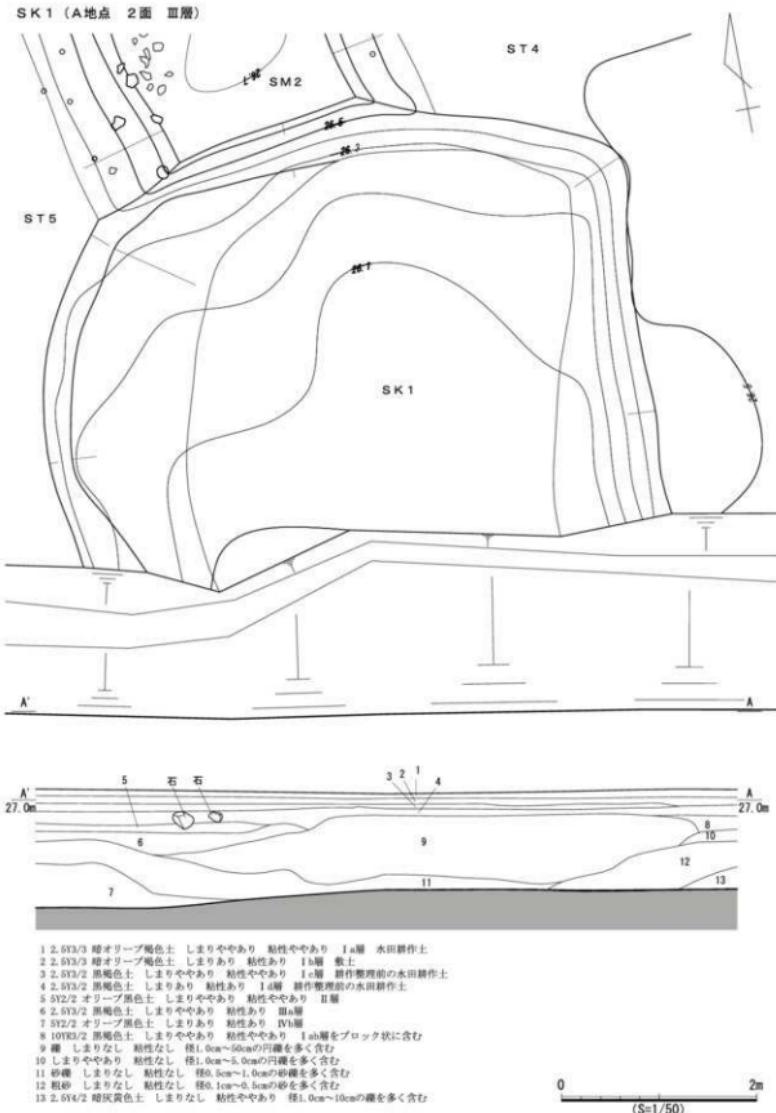
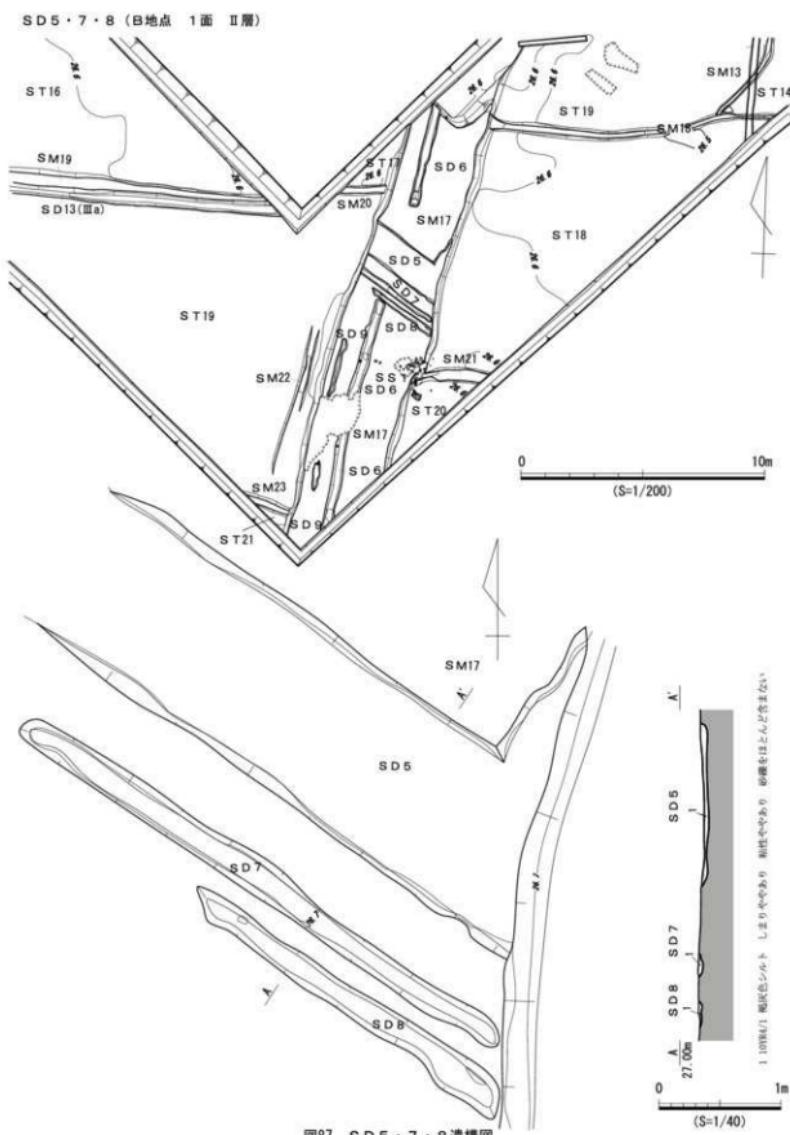


図 86 SK 1 遺構図



SK24 (B地点 1面 II層(IIb層で構成))

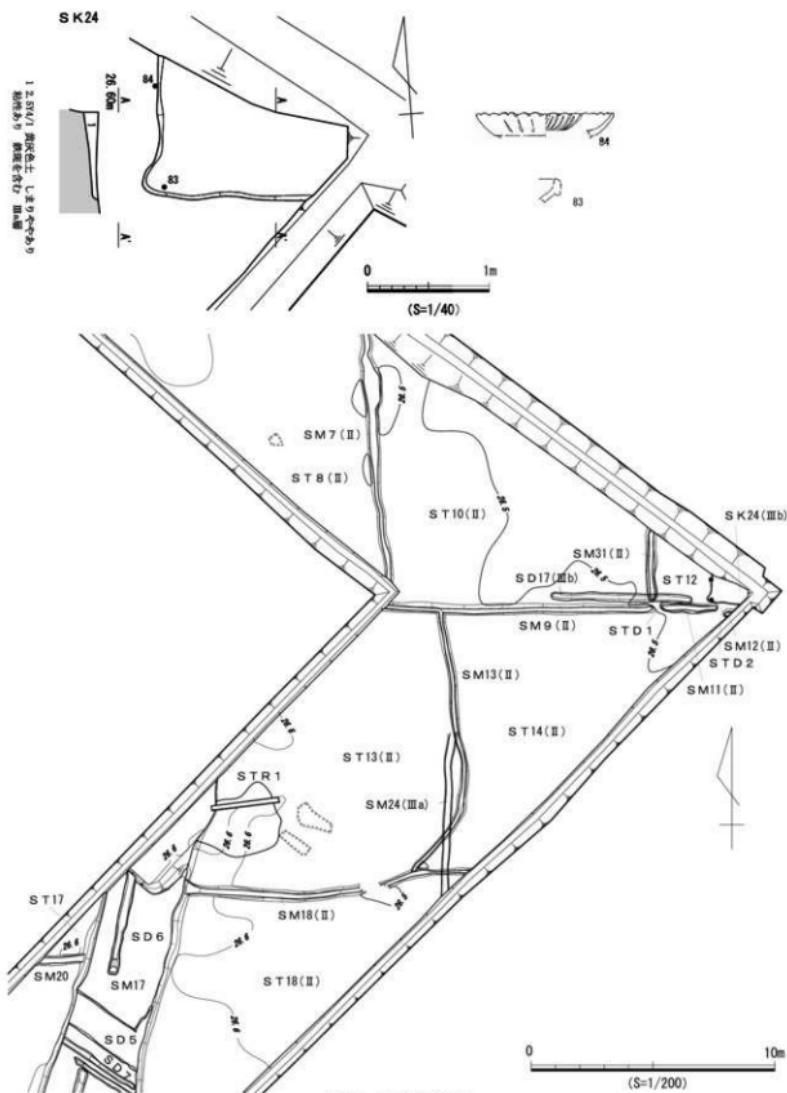


図88 SK24遺構図

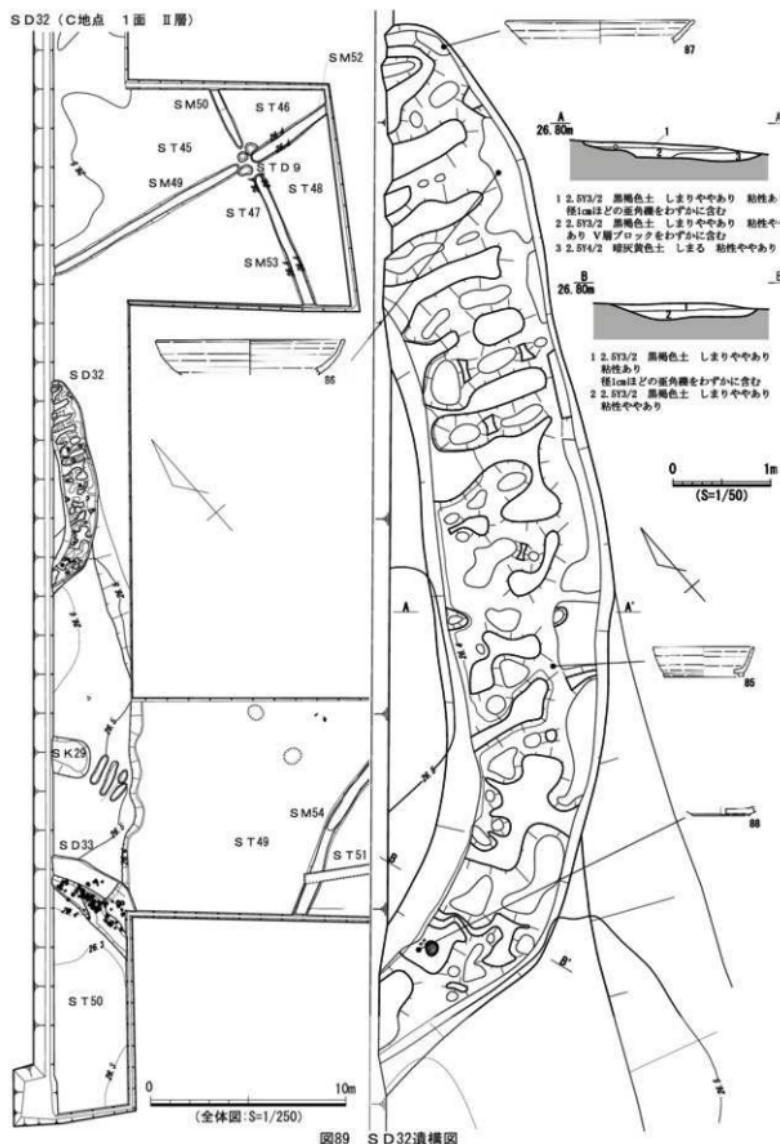
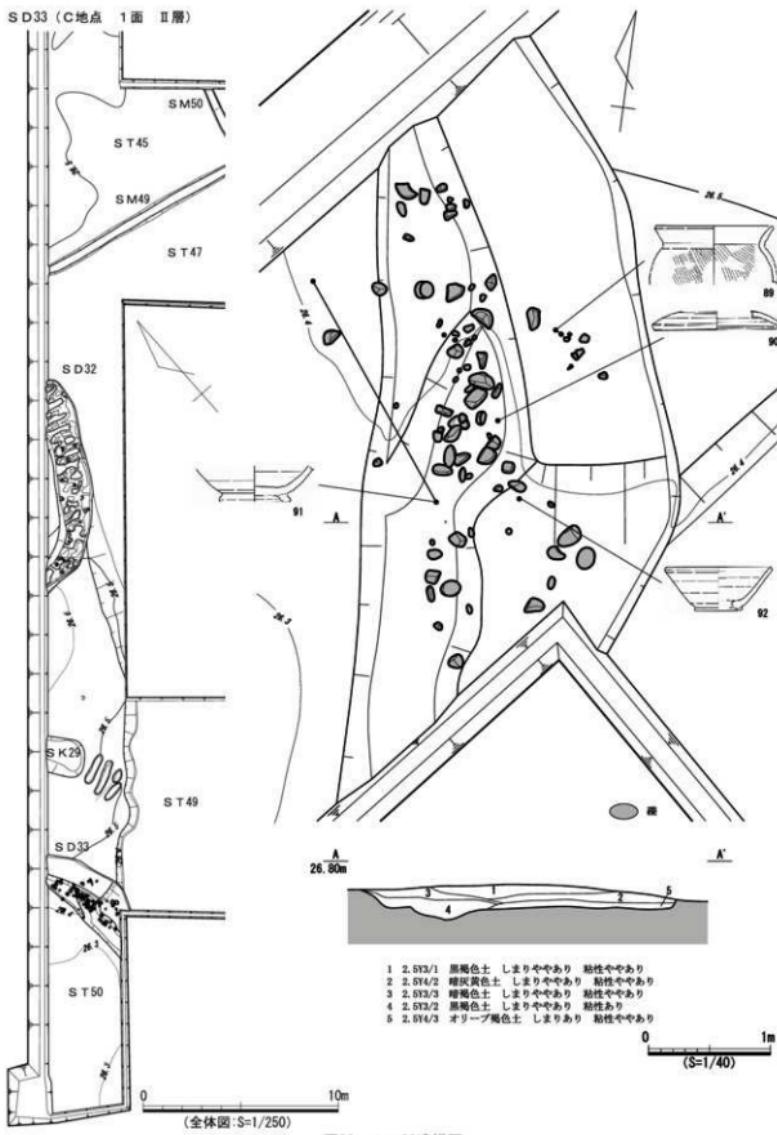


図89 SD 32遺構図



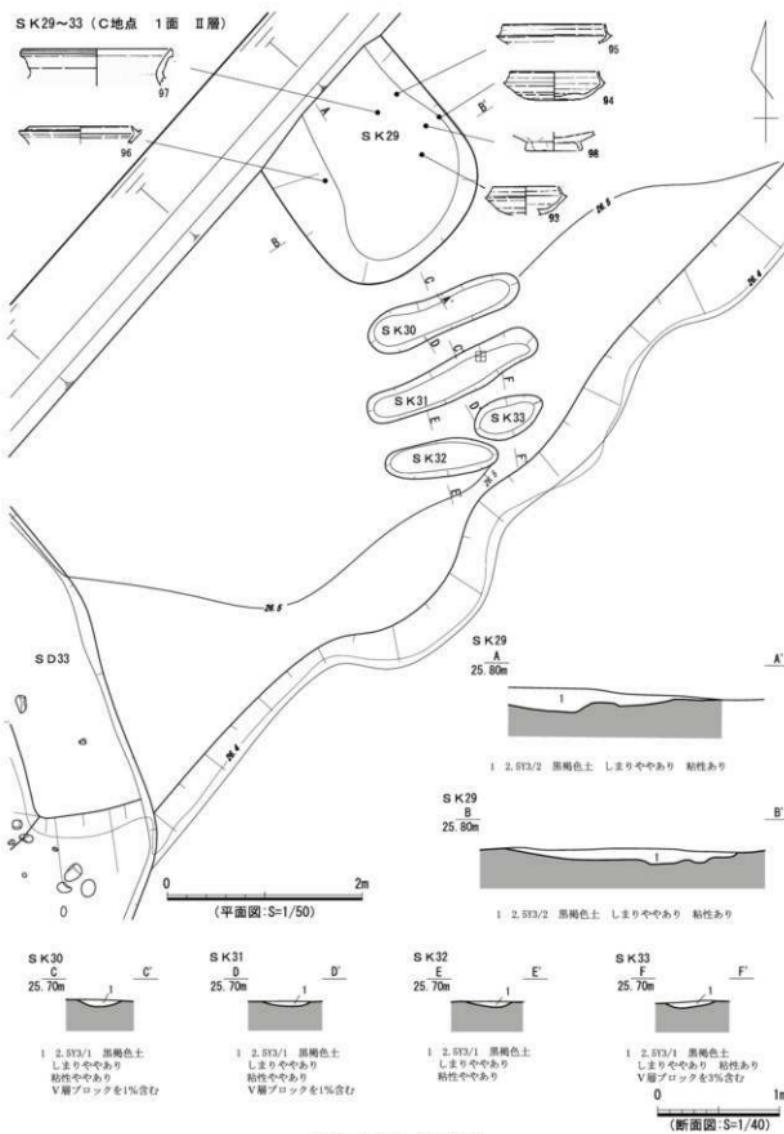


図91 S K29~33造構図

SK87 (D地点 1面 II層 (IIIa層で構成))

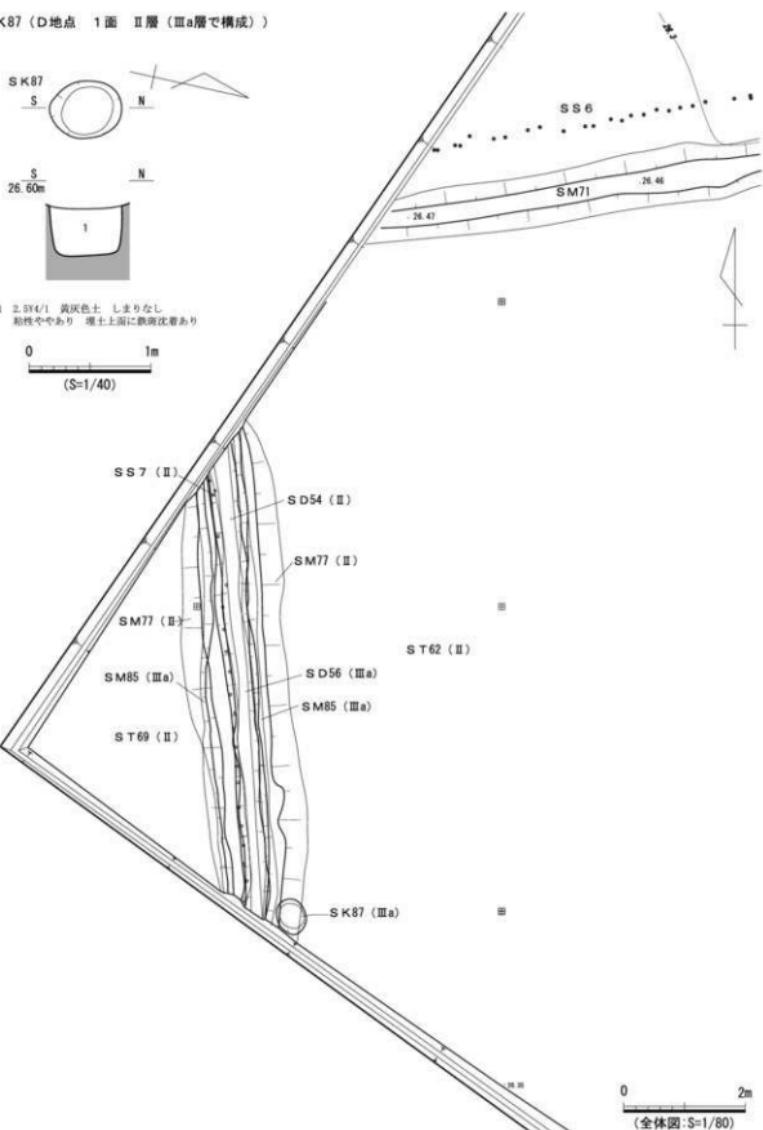


図92 SK87遺構図

SK116 (E地点 1面 IIIb)

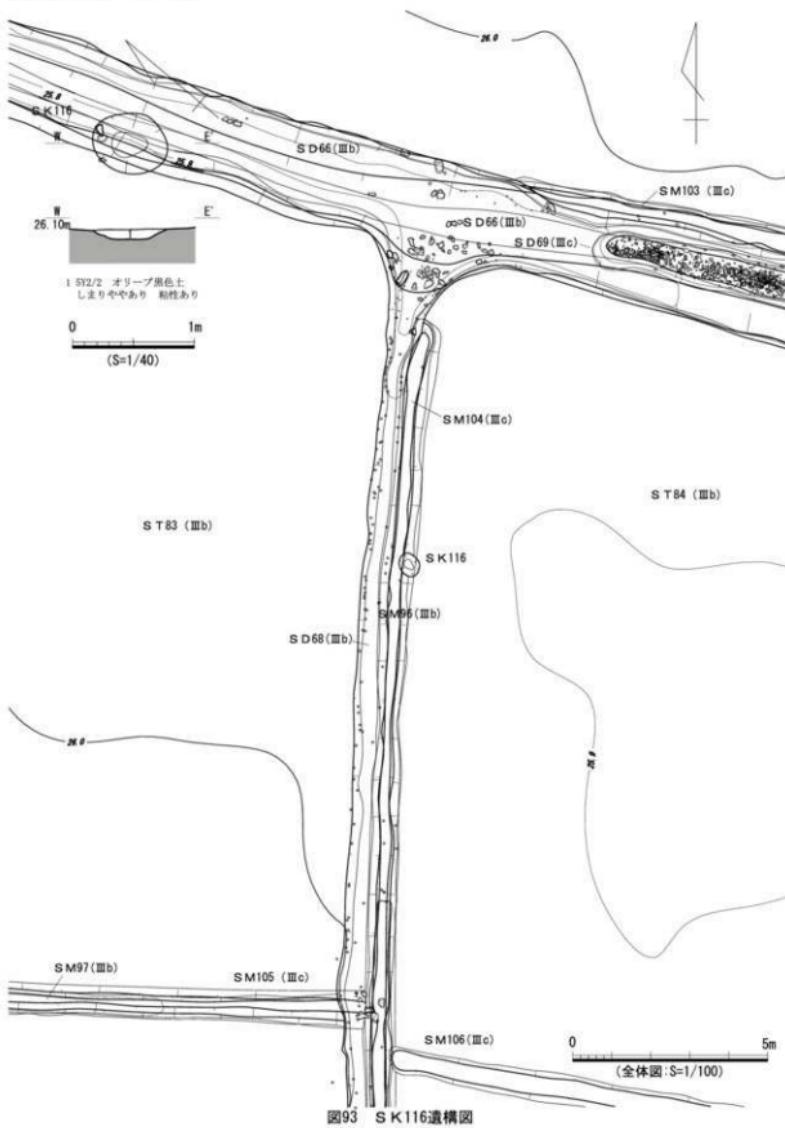


図93 SK116遺構図

第5節 水田関係遺構（中世以降）

水田遺構は以下の順序で地点別に報告する。①各地点の明治年間の水田区画の様相、②各地点の土層堆積と遺構検出状況、③検出遺構面別に検出した遺構説明。条里型地割の想定は第5章で記載する。

1 A地点

1 明治21年作図の地籍図の分析

調査区南西側に太く記された道路が通り、その東西に畦が表記され、水路は表記されていない。東側の畦のうち、南端にあるものは畦の途中が屈折している。字名は道路以西が「池田」、以東が「蔽下」である（図94）。

2 A地点の堆積と遺構検出状況

中世～近世初頭の水田耕作土であるIII a層は、現地表面から約0.4m下に位置する。III a層より上位は5層に分層でき、床土や鉄斑帯の位置から2面以上の水田耕作面が想定できる。

中世以前の水田耕作土はIII a層、III b層、IV a層であり、それぞれの上面で畦畔や溝を検出した。しかし、III a・III b層は調査区のおよそ南北半分で確認できなかった。以下、III a・III b層上面とIV a層上面に分けて検出した遺構を報告する。

3 検出した遺構

(1) III a・III b層上面の水田遺構（遺構図：図96）

①大畦畔

IV a層上面に伴う大畦畔SM2があり、その位置で明治年間まで大畦畔が存続していたとするならば、かつてはIII a・III b層に伴う大畦畔も存在していたと思われる。しかし、調査区南側でIII a・III b層を確認できなかったことと同様に、大畦畔も確認できなかった。なお、図96（III a・III b層上面の遺構配置図）のSM2はIV a層上面に伴う畦畔である。

②水田区画

3筆を検出した。区画全体を検出できた筆はなく、平面形も不明である。田面の平均標高値は、ST1が26.56m、ST2が26.75m、ST3が26.72mであり、全体的に南側が高く、北側が低い傾向にある。

③小畦畔・溝等

小畦畔1本を検出した。SM1の構成土はIII a層であり、大畦畔SM2にはほぼ直交する方向に直線的に延びている。

④遺物出土状況

中近世陶磁器の多くはST2から出土している。

⑤出土遺物

A地点1面水田遺構（SM1、ST1・2）からの出土遺物はSM1から須恵器1点、山茶碗2点、中近世陶磁器2点の合計5点が、ST1・2からは須恵器9点、灰釉陶器7点、山茶碗20点、中近世陶磁器57点、中近世土師器12点、近世以降瓦1点、土製品3点、石器2点、金属製品2点、種子2点、時期不明5点の合計120点が出土している。

畦畔からは室町時代のものが出土しているが、水田跡からは登窯第5～7小期のものが出土している。本水田面の所属時期は江戸時代前半と推定される。

(2) IV a 層上面の水田遺構（遺構図：図95・97）

①大畦畔

調査区南側で検出したSM2であり、明治21年作図の地籍図に道路として表記のある位置とほぼ同じである。SM2は上端の最大幅2.40m、下端の最大幅3.54m、水田耕作土との比高差約0.4mであり、黒色土及び砂礫層の上面に0.5～0.6mの盛土を行い造成されている。盛土はとても縮まりのある土で、バチグワを使用しないと畦畔を掘削できない程であった。また、盛土4層上面には長さ5～10cmの円礫が並んでおり、その上に黒褐色土が存在することから、SM2は数回の造り替えがあったかもしれない。SM2の法面には多数の杭が残存していた。法面上の杭は断面円形を呈するものが多いが、法尻から水田面にかけての杭は断面方形を呈するものが多く、前者よりも太い傾向にある。杭はおよそ列をなしており、畦畔上面では確認できなかった。また、畦畔の東法尻には大小多数の礫が出土したが、これらが畦畔の盛土に伴う礫なのか、畦畔下層に位置する砂礫層に伴う礫なのかは判断できなかった。

②水田区画

2筆を検出した。区画全体を検出できた筆はなく、平面形も不明である。田面の平均標高値は、ST4が26.46m、ST5が26.34mである。

③小畦畔・溝等

小畦畔や溝等は検出できなかった。

④遺物出土状況

ST4から土鍤が多く出土している。出土状況に法則性はあまりないようである。元豊通宝（1746）も出土している。墨書き器が6点出土している。墨書きは数を表す意味のものが多いようである。

⑤出土遺物

A地点2面水田遺構（SM2、ST4・5）からの出土遺物は土師器3点、須恵器37点、古代瓦1点、灰釉陶器28点、山茶碗398点、中近世陶磁器80点、中近世土師器514点、土製品20点、木製品90点、石器7点、金属製品3点、種子22点、炭化材15点、時期不明78点の1,296点が出土している。

畦畔からは鎌倉時代のもの、水田跡からは鎌倉～室町時代のものが出土していることから、本水田面の所属時期は鎌倉時代～室町時代と推定される。

SM2出土の杭には太さの違いで大きく2つに分けることができ、横幅5cm未溝の細い杭は畦畔の上面や斜面に打たれ、横幅が5cm以上の太い杭は畦畔底面に打たれている。底面に打たれた太い杭は畦畔法面の土留めと考えられ、畦畔上面の杭は山側からの獸等の進入を防ぐものと考えられる。

2 B地点

1 明治21年作図の地籍図の分析

調査区中央に太く記された道路が通り、その西側に道路に沿って水路が表記されている。道路及び水路は、南側では直線的に延び、北側で屈曲してC地点へと延びている。水田区画は、道路及び水路を境として西側が南北に長く、東側が東西に長い。また、西側には道路及び水路からほぼ直角に分岐する水路が描かれている。字名は道路及び水路以西が「蔽下」、以東が「露無」である。

2 B地点の堆積と遺構検出状況

中世～近世初頭の水田耕作土であるIII a層は、現地表面から0.2～0.4m下に位置する。III a層より上位は3～5層に分層でき、床土や鉄班帯の位置から2～3面の水田耕作面が想定できる。

中世以前の水田耕作土はIII a層、III b層、IV a層であり、それぞれの上面で畦畔や溝を検出した。しかし、III a層の堆積は薄く、II層中にてIII a層とIII b層で構成された畦畔をほぼ同じ標高で検出した場合も多いため、以下、III a・III b層上面とIV a層上面に分けて検出した遺構を報告する。

3 検出した遺構

(1) III a・III b層上面の水田遺構（遺構図：図110～115）

①大畦畔

調査区南側と北側の2箇所で検出した。いずれも明治21年作図の地籍図に道路として表記のある位置に該当する。南側の大畦畔はSM17、北側の大畦畔はSM5であり、いずれも同じ位置に造り替えられ、畦畔の上面中央付近に溝を有する特徴がある。以下、各遺構ごとに記述する。

SM17（遺構図：図102・103）

SM17は上端の最大幅3.70m、下端の最大幅4.28m、水田耕作土との比高差約0.2mであり、小畦畔SM18・20・21・23が接続している。また、SM17の西側では、SM17に平行する小畦畔SM22を検出した。SM17はSM30の上面に約0.1mの盛土を行い造成されている。盛土はとても縮まりのある土で、バチグワを使用しないと畦畔を掘削できない程であった。また、SM17の上面では、SM17の長辺に平行する2条の溝（SD6・9）を検出した。いずれも浅い溝で埋土はシルトであるが、SD6の南端では埋土下層に粗砂を確認した。SD6はF3g10グリッド付近で途切れしており、その先端は深く凹んでいた。溝の底面は凹凸がわずかにみられるものの、全体的には北側が低く、南側が高い。また、ST13・18の南西隅では、砂礫層の広がりであるSTR1・2を検出した。これらはいずれもSM17側が狭く、水田区画の中央に向かって広がりがある。SM17からSM21が分岐する付近ではランダムに打ち込まれた杭群SS1を検出した。SS1付近は上面からの擾乱のため遺構の詳細は不明であるが、STR2が存在することから、SS1は水口に伴う杭であった可能性が考えられる（図102）。なお、SD6の底面標高や、STR1・2の砂礫の広がりから判断して、SD6は大畦畔SM17の上面に設けられた導水施設（取水溝）であり、その流水方向は南から北で、少なくともB地点におけるSM17の東側に展開している水田区画は、区画の北西側から取水していたといえる。

SM5（遺構図：図108・109）

SM5は上端の最大幅3.78m、下端の最大幅4.34m、水田耕作土との比高差約0.2mである。SM5はSM32の上面に約0.15mの盛土を行い造成されている。盛土はとても縮まりのある土で、バチグ

ワを使用しないと畦畔を掘削できない程であった。また、SM5の上面では、SM5の長辺に平行する溝（SD11）を検出した。SD5は断面逆台形を呈し、埋土下層に微砂とシルトの互層堆積が認められた。また、上面では畦畔の長軸ラインに直交する凹みが、ST6側に1箇所、ST8側に2箇所あり、いずれかは取水溝の残欠である可能性が考えられる。なお、SD11の底面標高は南端で26.61m、北端で26.58mであり、底面標高から流水方向は想定しにくい。しかし、SM5はSM17と一緒にの大畦畔と想定され、流水方向は南から北と思われる。

②水田区画

16筆を検出した。区画全体を検出できた筆はないものの、平面形は概ね長方形を呈する。区画の規模は、長辺の長さがわかる区画はなく、短辺がST6で10.48m、ST9で10.78m、ST10で10.91m、ST11で11.60m、ST13で11.32mを測る。田面の平均標高は、ST19・21が26.64mと最も高く、ST6が26.53m、ST12が26.48mと低く、全体的に南側が高く、北側が低い傾向にある。

③小畦畔・溝等

小畦畔21本、溝4条、水口3基を検出した（大畦畔上の溝を除く）。SM24を除く小畦畔はII層除去後に検出されたが、その構成土はSM8・10・13・15・16・18・19・20がIIIa層、それ以外がIIIb層である。また、小畦畔の大半は直線的に延びており、主軸方位はほぼ真北か、それに直角の方位に近い。しかし、SM13のみ大きく湾曲しており、SM13除去後に直線的に延びるSM24を検出した。SM4・6は平行して延び、その間にSD10が位置する。SD10は断面皿状を呈し、上下2層に分層された。埋土は粘土であり、砂礫層は確認できなかったため明確な通水機能は判断できない。溝埋土を除去すると、底面にて無数の杭跡を検出した。SM6の法尻付近に直線的に並んで検出されたことから、畦畔の補強剤としての機能が想定できる。SM14・15も平行する2本の畦畔であり、その間にSD12が位置するものの、SD10にみられたような杭跡は確認できなかった。

水口は3基検出されたが、STD1・2は位置が極めて近い。STD1は3本の畦畔が接する箇所に、STD3は2本の畦畔が接する箇所にそれぞれ設けられ、長さは約0.40mで、水口を形成する畦畔の先端はほぼ真っ直ぐ収束している。

④遺物出土状況

ST8からは擂鉢の胴部を使って作った加工円盤が、ST13からは開元通宝（1750）が、ST16からは古墳時代と思われる大型土製品（202）が、ST18からは茶釜の蓋の摘み（1721）が出土している。

⑤出土遺物

B地点1面水田遺構（SD5～17、SM3～24、ST6～20、STD1～3、STR2）からの出土遺物は土師器91点、須恵器371点、古代瓦1点、灰釉陶器176点、山茶碗1,676点、中近世陶磁器1,211点、中近世土師器3,152点、近世以降の瓦97点、土製品96点、木製品631点、石器203点、金属製品73点、種子146点、炭化材191点、時期不明462点の合計8,577点である。

掲載した遺物のうち149・186・188・189・200は大窯第2～4段階のものであるが、ほとんどが登窯第1～6小期のものである。本水田面の所属時期は江戸時代前半と推定される。

(2) IV a 層上面の水田遺構（遺構図：図 116～120、遺物図：図 164・167・168）

①大畦畔

調査区南側と北側の2箇所で検出した。いずれも明治 21 年作図の地籍図に道路として表記のある位置に該当する。南側の大畦畔は SM30・43、北側の大畦畔は SM32・39 であり、いずれも同じ位置に造り替えられ、畦畔の上面中央付近に溝を有する特徴がある。以下、遺構ごとに記述する。

SM30（遺構図：図 99～101・104・10）

SM30 は上端の最大幅 2.88m、下端の最大幅 4.30m、水田耕作土との比高差約 0.3m であり、小畦畔 SM31・36・38 が接続している。SM30 は SM43 の上面に約 0.3m の盛土を行い造成されており、盛土は SM17 と同様にとても縮まりのある土であった。また、SM17・30 では、図 103・105A-A' に示したとおり畦畔上面から下に向かってほぼ垂直に延びる褐色土、又はにぶい黄橙色土を確認した。¹¹⁾これは無遺物層である V 層まで達していないことから畦畔機能時のオーブンクラックと推定され、平面的には畦畔の長軸に沿って数条確認できた。SM30 の上面では、畦畔の長軸方向に沿って東西両端が堤状に盛り上がっており、中央では 2 条の溝（SD19・20）を検出した。SD19 は幅約 2.1m、SD20 は幅約 0.5m であり、いずれも流水方向は南から北で、SD20 は SD19 埋没後に再掘削された溝である。

SD19 の断面形は皿状を呈し、埋土はシルト質である。ST33・34 側では SM30 西端の堤状の盛り上がりが 2 箇所で長さ約 1.3～1.8m の間途切れていた。そして、ST34 側は堤状の持ち上がりが途切れた箇所は明確な落ち込みと、微砂の堆積を確認できた。このことから、これらの施設は、SD20 から ST33・34 へと導水する水口か、洪水等による畦畔の破損の痕跡である可能性がある。また、ST27・28 側では SM30 東端の堤状の盛り上がりが 3 箇所で長さ約 0.5m の間途切れており、その落ち込み部分の距離が長く、幅が狭いことから水口としての機能が想定できる。そのうち、P1 付近の落ち込み底面には円礫が 1 個出土した。また、ST28 へと導水する落ち込みは長さ 1.47m で、明らかに SD19 から分岐する溝状遺構であるため SD23 とした。SD23 は断面逆台形を呈し、埋土下層に微砂と粗砂のラミナ状の堆積がみられた。また、溝底面からわずかに浮いた状態で長さ 12～26 cm の円礫が 3 個出土し、溝の東端に杭が 1 本残っていた。溝の底面標高は、西端が 26.64m、東端が 26.60m である。

SD20 の断面形は皿状を呈し、埋土はシルト質である。ST33・34 側には分岐しておらず、ST27・28 側に 2 条の溝（SD21・22）が分岐している。いずれの溝にも側石と蓋石が残存し、流水堆積層が存在することから、暗渠としての機能が想定できる。

SD21 は長さ 3.12m で、東端は SM31 の北側に位置し、一度埋没した後に再掘削されている。当初の溝は断面逆台形状を呈し、埋土下層にわずかに微砂を含む。SD20 からの分岐付近では溝の肩部に円礫 4 個が斜位に据えられ、その上に長さ約 40 cm の円礫が蓋石として 2 個並んで出土した。また、SD21 の東端では溝の肩部に円礫 3 個が斜位に据えられ、その下部に扁平な円礫 2 個が平坦面を上にして出土した。溝の肩部に据えられた礫は図 99B-B' ラインの 6 層内に位置するため、溝掘削後に 6 層の堆積があり、その後に礫を据えたと思われる。溝の底面標高は、西端が 26.50m、東端が 26.37m であり、礫を除去すると礫直下から白瓷系陶器の破片が出土した。一方、再掘削後の溝は SD20 からの

分岐付近の幅が狭く、東端は再掘削前の溝の形状をほぼ踏襲していた。

S D22 は長さ 2.12m で、東端は S T28 へと延びている。溝は断面逆台形状を呈し、埋土下層はわずかに微砂を含む。S D20 からの分岐付近では立石状の縦位の円礫と角礫が 2 個据えられていた。溝の肩部には円礫や角礫が礫の長辺を溝と平行させて据えられ、なかには 2 段に積んであるものもみられた。その上には長さ約 40 cm の円礫や角礫が蓋石として 8 個並んで出土し、東端では蓋石が 2 枚重なって出土した。S D22 出土の円礫と角礫の数はほぼ同数であり、なかには被熱している礫もみられた。また、溝の肩部に据えられた礫は図 101A-A' ラインの 4 層内及び 4 層上に位置するため、溝掘削後に 4 層の堆積があり、その後に礫を据えたと思われる。なお、溝の底面標高は、西端が 26.55m、東端が 26.45m であり、礫直下からは須恵器、灰釉陶器、白瓷系陶器などの破片が出土した。

また、S M30 の東法面において S A 1 を検出した。5 基の柱穴から成り、柱穴の掘形はいずれも円形で、規模の平均は長軸長さ 0.23m、深さ 0.28m で、柱間距離は約 3.8m である。柱穴の埋土には明確な柱痕跡が認められ、柱穴の掘形埋戻し土には灰黄色粘土ブロックが含まれていた。S A 1 の性格は不明であるものの、柱列が暗渠取水溝のある S T27 側のみに存在していることは注目できる。

S M43（遺構図：図 106）

S M43 は上端の最大幅 2.32m、下端の最大幅 5.50m、水田耕作土との比高差約 0.35m であり、小畦畔 S M44 が接続している。S M43 は V 層上面に約 0.9m の盛土を行い造成されており、盛土は S M17 と同様にとても縮まりのある黒褐色土（IV a 層）から成る。S M43 の上面では、畦畔の長軸方向に沿って 1 条の溝（S D29）を検出した。S D29 は幅約 0.6m であり、埋土中に微砂を含み、流水方向は南から北と推定される。なお、S M43 の南側上面は掘りすぎにより S D29 を検出できなかった。

S M43 の盛土をすべて除去すると、V 層上面において畦畔状の盛り上がり 2 条（S M41・42）と、その間にあら溝 1 条（S D30）を検出した（図 107）。S D30 は断面逆台形を呈し、底面は比較的平坦である。溝の東肩部には V 層の崩落土があることから、溝の周囲に盛土造構が存在していた可能性が指摘できる。しかし、S M41・42 の構成土は V 層単独土であり、盛土ではない。また、V 層は無遺物層で、発掘調査結果や自然科学分析結果などから水田耕作土の可能性は極めて低い。そのため、本来は V 層上面に層厚の薄い水田耕作土、S M41・42 上面に畦畔が存在しており、畦畔部分のみ耕起作業が実施されなかったために、結果として V 層上面で擬似畦畔として S M41・42 が検出できたと思われる。つまり、S M43 構築以前にも、中央に取水溝を有する畦畔が存在していたと推定できる。

S M32（遺構図：図 108・109）

S M32 は上端の最大幅 3.20m、下端の最大幅 4.30m、水田耕作土との比高差約 0.3m である。S M32 は S M39 の上面に約 0.25m の盛土を行い造成されており、盛土は S M5 と同様にとても縮まりのある土であった。また、S M32 では、図 109A-A' に示したとおり畦畔上面から下に向かってほぼ垂直に延びる褐色土、又はにぶい黄橙色土を確認した。これは無遺物層である V 層まで達していないことから畦畔機能時のオープンクラックと推定される¹¹。S M32 の上面では、畦畔の長軸方向に沿って東西両端が堤状に盛り上がっており、中央では 2 条の溝（S D15・16）を検出した。S D15 は幅約 0.5m、S D16 は幅約 1.8m であり、いずれも流水方向は南から北で、S D15 は S D16 埋没後に再掘削された溝である。

S D16 の断面形は皿状を呈し、東西の水田への取水溝は検出できなかった。S D15 の断面形は皿状もしくは逆台形状を呈し、埋土はシルト質である。S T23 側には分岐しておらず、S T22 側に1条の溝（S D14）が分岐している。S D14 は長さ 1.16m で、西端は S M32 の法面の途中で収束する。断面皿状を呈し、埋土中にブロック土が含まれていることから、人為的な埋戻しが想定できる。溝の南側には3個の礫が出土したが、いずれも底面から浮いていた。

SM39（遺構図：図 108・109）

S M39 は上端の最大幅 1.76m、下端の最大幅 3.78m、水田耕作土との比高差 0.10～0.25m である。S M39 は V 層上面に約 1.0m の盛土を行い造成されており、盛土は S M5 と同様にとても締まりのある黒褐色土（IV a 層）から成る。S M39 の上面では、畦畔の長軸方向に沿って 1 条の溝（S D24）を検出した。S D29 は幅約 0.5m であり、埋土中に微砂を含み、流水方向は南から北と推定される。

S M39 の盛土下では、S M39 の東法尻付近で畦畔状の盛り上がり（S M40）を検出した。S M40 の構成土は V 層に灰色粘土がわずかに混じり、その東側も帯状に回んでいることから、B 地点南側で検出した S D30、S M41・42 に相当する構造物が存在していたと想定される。

②水田区画

13 筆を検出した。区画全体を検出できた筆はないものの、平面形は概ね長方形を呈する。区画の規模は、長辺が S T33 で 19.55m、短辺が S T27 で 10.20m、S T33 で 10.10m、S T31 で 8.3m を測る。田面の平均標高値は、S T28・34 が 26.41m と最も高く、S T22 が 26.33m、S T29 が 26.27m と低く、全体的に南側が高く、北側が低い傾向にある。

③小畦畔・溝等

小畦畔 15 本、溝 1 条、水口 3 基を検出した（大畦畔上の溝を除く）。小畦畔はいずれも直線的に延びており、主軸方位はほぼ真北か、それに直交する方位に近い。S M27・28 は平行して延び、その間に S D18 が位置する。S D18 は大畦畔から取水し、各水田区画へと導水する機能を有していたと推定される。大畦畔以東では水口を検出できなかったが、以西では 3 基の水口を検出した（STD 4～6）。STD 4・6 は長さ約 0.30m で、水口を形成する畦畔 S M35 の先端は、わずかに西側に湾曲している。水口周辺の傾斜は STD 4・5 が西高東低、STD 6 が北高南低であり、S T24・29・30・31・33 の水利系統は大畦畔 S M30 からの取水ではなく、主に西側からの取水であったと推定される。

④遺物出土状況

S M39・43 からは須恵器が多く出土しているが、周辺の古墳時代の遺構を壊している可能性も考えられる。多くの遺物が南北方向の大畦畔周辺から出土している。

⑤出土遺物

B 地点 2 面水田遺構（S D18～23、S M25～38、S S 1、S T22～34、STD 4～6）からの出土遺物は土師器 13 点、須恵器 175 点、灰釉陶器 88 点、山茶碗 1,030 点、中近世陶磁器 384 点、中近世土師器 2,181 点、近世以降の瓦 7 点、土製品 53 点、木製品 251 点、石器 67 点、金属製品 28 点、種子 96 点、炭化材 118 点、時期不明 118 点の合計 4,838 点である。

畦畔から鎌倉～安土・桃山時代のものが、水田跡から登窯のものも出土しているが、古瀬戸後 IV 期



図 94 遺跡周辺小字名

と大窯のものが多く出土していることから、B地点2面の水田遺構の所属時期は室町時代～安土・桃山時代と推定される。

B地点3面水田遺構（S D24・29・30、S M39～44）からの出土遺物は土師器18点、須恵器83点、古代瓦1点、灰釉陶器37点、山茶碗318点、中近世陶器36点、中近世土師器349点、土製品14点、木製品156点、石器8点、金属製品1点、種子13点、炭化材11点、時期不明32点の合計1,077点である。

畦畔から古墳時代～室町時代のものが出土し、検出面からは古墳時代の溝などの遺構があることから、本畦畔の所属時期は古墳時代～鎌倉時代と推定される。

注) 1. 藤根久氏の御教示による。

3 C・D地点

1 明治21年作図の地籍図の分析

C地点南隅で、B地点から延びる太く記された道路が通り、その西側に道路に沿って水路が表記されている。また、C地点中央南寄りと、C地点北寄りからD地点中央付近にかけて、細く記された道路が2本通っている。細く記された道路のうち、前者は調査区内を湾曲して通り、後者は道路の西側に水路が表記されている。水田区画は、概ね東西方向に長い区画であり、D地点の中央付近のみは南北方向に長い記載となっている。また、D地点中央や北側には、道路及び水路からほぼ直角に分岐し、途中で直角に折れる水路が描かれている。字名はC地点南端が「藪下」、C地点からD地点へ延びる道路及び水路以南が「露無」、以北が「大坪」である。

2 C・D地点の堆積と遺構検出状況

中世～近世初頭の水田耕作土であるIII a層は、現地表面から0.4～0.6m下に位置する。III a層より上位は4～7層に分層でき、床土や鉄班帯の位置から2面以上の水田耕作面が想定できる。また、C地点の中央南寄り(E3j15～E3n12グリッド付近)では、I層除去後にすでにV層がみえていた箇所もある。この場所は、明治21年作図の地籍図における、湾曲して細く描かれた道路以西にほぼ該当し、この付近は古来より微高地状の高まりがあったと想定される。

中世以前の水田耕作土はIII a層、III b層であり、それぞれの上面で畦畔や溝を検出した。また、部分的にIV b層上面でも畦畔を検出した。しかし、II層中にてIII a層とIII b層で構成された畦畔をほぼ同じ標高で検出した場合も多いため、以下、III a・III b層上面で検出した遺構として報告し、適宜、IV b層上面で検出した遺構についても記載する。

3 検出した遺構（遺構図：図122～139）

①大畦畔

A地点やB地点で検出したような、幅2m以上の盛土を有する畦畔は確認できなかった。

②水田区画

39筆を検出した。区画全体を完全に検出できた筆はないものの、平面形は概ね長方形を呈し、S T 59のように方形に近い形状の区画もある。区画の規模は、長辺がS T 55で20.50m、S T 59で20.20m、短辺がS T 54で10.50m、S T 55で6.05m、S T 56で10.50m、S T 59で15.60m、S T 62で17.30m、S T 64で15.50m、S T 68で12.10m、S T 70で16.95mを測る。

区画一筆の面積は、S T 62が約810m²、S T 36・60が約700m²と広く、同様に広い区画はS T 61やS T 70などが該当すると推定される。一方、S T 55は約120m²、S T 43・63は約250m²と狭く、同様に狭い区画はS T 52、S T 54、S T 68などが該当すると推定される。このように、検出した水田区画はおよそ300m²以下の小区画と、700m²以上の大区画に分かれ、それぞれはある程度のまとまりをもって配置されているようである。

水田面の平均標高値は、C地点南端のS T 49が26.38m、同北端のS T 26が26.32mであり、両者はほとんど同じ高さである。しかし、中央付近に位置するS T 41が26.49m、S T 44が26.47m、S T 45が26.51mと高くなってしまい、概ね旧地形（V層の起伏）に応じていると思われる。一方、D地点では、南端のS T 64が26.34m、北端のS T 53が26.13m、S T 54が26.14mであり、全体的に南

側が高く、北側が低い傾向にある。

なお、S TD65 直下のV層上面において、灰色粘土を埋土とする長辺5~6cm、短辺2~3cmの三日月状の凹みを複数検出したが、その方向に統一性はみられなかった。水田耕作との関係は不明であるものの、付記しておく。

③小畦畔・溝等

小畦畔42本、溝4条、水口6基を検出した。小畦畔はいずれも直線的に延びており、主軸方位はほぼ真北か、それに直角する方位に近い。ただし、C地点中央南寄りは地形による影響のためか、若干主軸方位がずれている。

C地点では小畦畔が「+」字状に交差する場所が3箇所ある。SM49・50・52・53は交差せず、交点付近に水口S TD9がある。S TD9を形成する畦畔の先端はほぼ真っ直ぐ収束しており、S TD9ではIII b層中にIII a層が入り込む凹みが3箇所で確認できた。また、SM55・59・60ではSM55が直線的に延び、SM59・60が水口S TD7・8を介して交差している。一方、SM56・57・58では擾乱によって多くが破壊されているものの、水口は検出できなかった。

また、小畦畔が2条平行して延び、その間に溝が存在する造構は3箇所で確認した。

SM63・87、SD53は全体的にわずかに湾曲しているものの、概ね主軸方位を真北にもつ。SM63は上端幅約0.75mと広く、南端でSM68と接続する。一方、SM87は上端幅約0.25mと細く、南北両端は調査区外まで延びている。SD53は断面皿状を呈し、埋土中に砂礫が厚く堆積している箇所も確認できた。また、杭列SS3はSD53、SM87内に打設され、特にS TD10付近にて多くの杭を検出した。これらの畦畔に接続する東西方向に延びる畦畔は5本検出した(SM64・65・66・68・69)。このうち、SM64・68はSM63と接続しており、それ以外は水口(S TD10~12)を介している。これらの水口を形成する畦畔の先端はほぼ真っ直ぐ収束しており、S TD10・12では砂礫層の広がり(STR3・4)を検出した。砂礫はSTR3においてS TD10からS T53方向へ、STR4においてS TD12からS T55方向へそれぞれ広がっていることから、水利系統はS T59→S T55→S T53の順序であったと想定できる。しかし、砂礫の広がりが水口付近のみでしか確認できなかったことから、SD53に簡易的な堰を設けて水田へ導水していた可能性もあるかもしれない。なお、S TD10では、SM87の法面に円礫2つが据えられており、SD53の南端に位置するSK86からは円礫2つが出土した。また、SM84の西側では杭列SS4を検出したが、杭の打設時期は不明である。SM63・87、SD53掘削後に、SM87、SD53の直下からSM84を検出した。SM84の構成土はIII b層であり、南北方向に直線的に延びている。

SM77・87、SD54とSM78・88、SD55はD地点内で主軸方位をほぼ真北にもつ直線的に延びる畦畔と溝であり、これらの畦畔の構成土はII層もしくはIII a層である。そして、この直下からSM85とSD56、SM86とSD57というIII b層を構成土とする畦畔と、それに平行する溝を検出した。SM77・78の上端から東法面にかけては、一列に延びる残存状況が極めて良好な杭列SS7・8を検出した。しかし、このように残存状況が良好な杭列は、その打設時期は近世以降の可能性が高い。SM85・86はほぼ直線的に延びているが、E4g07グリッド付近で西に約0.5m湾曲する。SM85は畦畔の上端が幅約0.15mと安定しているが、SM86は南側に向かうにつれて畦畔の上端幅が狭くなり、南端で

は断面三角形状となる。また、畦畔の東に隣接して検出した S D56・57 は、E4e07 グリッド付近にて直径 0.9m 程度の円形を呈する凹みを有する。その周辺では杭がランダムに打ち込まれ、礫が少数出土したことから、簡易な水溜のような機能が想定できるかもしれない。

S M46・47、S D31 は主軸方位が N-26° -W であり、これらの畦畔の構成土はIII b 層である。そして、やや西にずれた位置のIV a 層中からほぼ同方位の S M61・62、S D34 という IV b 層を構成土とする畦畔と溝を検出した。S D31・34 はいずれも断面皿状を呈し、埋土中に砂礫は確認できなかった。また、S M46・47 と S M61・62 の検出面の比高差は 0.10~0.15m であり、S M47 の中央では杭列 S S 2 を検出した。S S 2 の杭は検出面から 0.20~0.25m 打設されており、明確に S M47 に伴う杭かどうかは判断できなかった。

④ 遺物出土状況

遺物は南北方向の大畦畔周辺から多く出土している。

S M47 上面中央に一列に打たれている S S 2 の杭は横幅が 5cm 未満の細い杭を使用している。それに対して、S M71 の底面で S T 60 の中に一列に打たれている S S 6 の杭は横幅が 5cm 以上の太い杭を使用している。S S 4 は S M87 の底面で S T 55・59 の中に打っているが、畦畔が細いためか、杭も 5cm 未満と細い。

⑤ 出土遺物

C 地点 1 面水田遺構（S D31・34、S M45~60、S S 2、S T 35~51、S T D 8・9）からの出土遺物は土師器 40 点、須恵器 125 点、灰釉陶器 59 点、山茶碗 412 点、中近世陶磁器 183 点、中近世土師器 530 点、近世以降の瓦 2 点、土製品 13 点、木製品 27 点、石器 36 点、金属製品 13 点、種子 6 点、炭化材 14 点、時期不明 38 点の合計 1,498 点である。D 地点 1 面水田遺構（S D53~57、S M63~87、S S 3~8、S T 52~73、S T D 10・12）からの出土遺物は土師器 42 点、須恵器 316 点、古代瓦 2 点、灰釉陶器 165 点、山茶碗 1,508 点、中近世陶磁器 1,349 点、中近世土師器 3,146 点、近世以降の瓦 160 点、土製品 106 点、木製品 286 点、石器 74 点、金属製品 114 点、種子 80 点、炭化材 209 点、時期不明 320 点の合計 7,877 点である。

C・D 地点の水田跡検出面は 1 面であるが、大畦畔は III b 層で構成された南北方向の大畦畔 S M46・47・87・88 と、IV b 層で構成された南北方向の大畦畔 S M61・62・84~86 との 2 時期ある。前者が江戸時代で後者が室町時代～安土・桃山時代で本水田面の所属時期は室町時代～江戸時代と推定される。

4 E 地点

1 明治 21 年作図の地籍図の分析

E 地点中央で、南東から東西に延びる太く記された水路が表記されている。また、E 地点中央東寄りから前述の水路に垂直の位置にも水路が南北に 1 本通っている。東西の水路より以北には、等間隔に細く記された道路が 6 本通っている。この 6 本の道路はほぼ E 地点中央を流れる水路に並行している。中央の水路以南には等間隔で東西に 4 本と、E 地点やや西寄りに、中央の水路から道路 2 本目まで南北に細い道路が記されている。東西の道路も以北と同じように中央を流れる水路にほぼ平行であり、南北の道路も中央を流れる水路に垂直であり、南北を流れる水路に平行している。E 地点の水路、道路は概ね東西南北の軸に沿っている。字名は中央に流れる水路以南が「大坪」、水路以北が「宮前」である。

2 E 地点の堆積と遺構検出状況

中世～近世初頭の水田耕作土である III a 層は、現地表面から 0.5～0.6m 下に位置する。III a 層より上位は南側壁面では 5 層、西側壁面では 7 層に分層でき、水田敷土の位置から 2 面以上の水田耕作面が想定できる。

中世以前の水田耕作土は III b 層、III b' 層、III c 層 (IV 層以上) であり、それぞれの上面で畦畔や溝を検出した。III b' 層については、E 地点を南北に延びる水路の以東の位置で検出した。また、東西に延びる水路以南で、南北に延びる水路の以西では III b' 層は認められなかった。同位置において III b 層の畦畔は検出できなかった。以下に、II 層下と IV 層上に分けて検出した遺構を報告する。

3 検出した遺構

(1) III a 層上面の水田遺構（遺構図：図 140～149）

① 大畦畔

A 地点や B 地点で検出したような、幅 2 m 以上の盛土を有する畦畔は確認できなかった。

② 水田区画

17 筆を検出した。区画全体を完全に検出できた筆はないものの、平面形は概ね長方形を呈している。区画の規模は、長辺が S T87 で 28.00m、短辺が S T83 で 23.20m、S T87 で 21.00m、S T81 で 14.30m、S T76 で 15.80m を測る。

区画一筆の面積は、S T84・90 が約 1130 m²、S T76 が約 720 m²、S T80・83 が約 600 m² と広く、同様に広い区画は S T82 や S T80 などが該当すると推定される。

水田面の平均標高値は、E 地点南端の S T88 が 26.00m、S T78 が 26.00m、同北端の S T74 が 26.10m であり、全体的に南側が低く、北側が高い傾向にある。さらに、中央付近まで水田面の平均標高値は 26.00m ではほぼ同じ高さであることに対して、中央付近を東西に流れる水路 S D66 以北の水田面の平均標高値は 26.10m と同じ高さで水路 S D66 以南よりも高くなっている。このことから、E 地点は中央を流れる水路 S D66 路を最低点として V 字形の地形をしているものと考えられる。一方、中央付近に位置する S T84 が 25.90m と他の S T と比較しても低い。そのため西側が高く、東側が低い傾向にある。地形では長良川自然堤防側が高く、東側の段丘崖下が低くなっている。東側段丘崖際を流れている清水川を通して長良川とつながる排水路として活用していた可能性がある。

③小畦畔・溝等

小畦畔 16 本、溝 3 条、水口 2 基を検出した。小畦畔はいずれも直線的に延びており、主軸方位はほぼ真北か、それに直交する方位に近い。

小畦畔が 2 条平行して延び、その間に溝が存在する遺構は 1 箇所で確認した。SM94・95、SD67 は、概ね主軸方位を真東にもつ。SD67 は E 地点中央を流れる SD66 が分流したものである。SM94 の西端は SD66 と SD68 の交点付近北側から始まり、東の調査区端まで伸びる。SM94 は上端幅約 0.40m とやや狭い。一方、SM95 は SD66 と SD67 の分流地点であるグリッド C5 q 08 地点から始まり、東の調査区端まで伸びる。上端幅約 0.55m と広い。SM94 は IIIa 層の土で畦畔が構成されているのに対して、SM88 は 5~10 cm の円礫や砂礫で畦畔が構成されている。SD67 は断面逆台形状を呈し、溝底部には約 5 cm の円礫を確認した。SM94 と 95 の畦畔の作りが異なること、SM94 が水田面の途中から構成されていること、SM94・95 と SD67 の幅が SD66 の西端からの延長上の幅にほぼ一致することから、当初 SD66 の溝だけであったものが、水田面の拡張に伴い、SM94 が造成され、さらに新しい畦畔を造成するために SD66 を半分埋める形で SM95 ができたものと考えられる。その際に SD67 が一時的に使用されるが、水路を埋めるために畦畔に円礫を使用したものと考えられる。

水口は 2 箇所で確認した。STD13 は、E 地点南東部の SM96 と SM99 の交点に位置する。SM96 は南北に延び、その壁面に位置する。SM99 の先端は、SM96 の壁面に向かってほぼ真っ直ぐ収束していた。砂層の広がりは確認することができなかった。交点付近に円礫 1 個、角礫 1 個を検出した。そのうち、円礫は水口の南側に位置し、角礫は SM96 に並行して位置していた。水口付近における水田面の標高値が、南側が 26.02m であるのに対し、北側が 26.01m であることや、礫の位置からも水流方向は ST89→ST90 に向かっていると考えられる。STD14 は、E 地点南西部の SM97 と SM98 に位置する。SM97 は東西に延び、その壁面に位置する。SM98 の先端は、SM97 の壁面に向かってほぼ真っ直ぐ収束していた。砂層の広がりは確認することができなかった。円礫 1 個を検出したが、半円形になっており、直線面が ST86 の対角線上に位置する。水口付近における水田面の標高値は、東側・西側共に 26.02m であるが、礫の配置状況や水田面の平均標高値から、水流方向は ST86→ST87 に向かっていると考えられる。

SD66（遺構図：図 140~142）

明治の字絵図とも一致する大溝である。第 1 調査区中央において検出される。本遺構は、西方向から東方向へ直線的に延びる検出長約 35m、幅約 2 m の大溝である。断面形は二段の掘り込み状を呈し、深さは 60 cm、埋土は 4 層に分層できた。上層 2 層は径 5 cm 未満の円礫を含むが、下層 2 層は微砂を含んでいる。遺物はどの層からも確認することができた。

本遺構は検出が比較的容易であったものの、東方向に進むにつれて SM94 や SD67、SM95 と平行しており、プランが不明瞭であった。そのため溝付近に杭が敷設されていたため、土色と打杭をもとにプラン設定をした。

SD67（遺構図：図 140~142）

SD66 にほぼ平行する 2 条の溝である。第一調査面の中央において検出される。本遺構は東部から SD67 に平行して進み、調査区中央で合流する。直線に延びる検出長約 13m の溝である。ただしこの

長さは合流地点から調査壁までとした。断面形は逆三角形を呈し、埋土は単層で、鉄分を確認することができた。流水堆積は確認できなかった。SM87が本遺構の北部に併行している。

当初はSM94から全てをSD66としていたが、礫で形成されたSM95を確認したため、プラン確定に手間取った。遺物の出土場所の半数は調査区東部であり、SD66との合流地点ではあまり出土しなかった。流水方向は確認できなかったが、出土した遺物の位置から考えると西方向から東方向、断崖下に流れる清水川に流水していた可能性が高い。また、溝の深度が浅いことから、SM95を造成した際に埋められた遺構であることも考えられる。

SD68（遺構図：図139～140）

明治の字絵図とも一致する溝である。第一調査区の南部において検出される。本遺構は南方向から北方向へ直線に延びる検出長約56mの溝である。断面形は皿状を呈し、深さは10cm、埋土は2層で、流水堆積は確認できなかった。若干鉄班が確認できた。SM97との交点付近では礫が出土したが水口を確認することができなかった。SM96が東側に平行している。本遺構は中央部を搅乱で切られている。溝内に杭が打たれていたため、土色と杭をもとにプランを設定した。

STD14（遺構図：図149）

II層を除去した後、IIIa層上面で検出した。第1調査面の南東に位置し、ST77とST78を結んでいる。SM98を検出した際に北端がSM86と交わらなかつたため、水口とした。検出長は40cm、深さは20cmである。埋土はほぼ水平堆積の2層であるが、交点付近に幅25cm、厚さ10cmの角礫が検出された。また、角礫の向きが交点に垂直ではなく南東45度に傾いている。この角礫が水流方向を促す役割を果たしていると考えれば、西方向から東方向へ流水していた可能性が高い。

④遺物出土状況

E地点1面から出土した遺物の多くは、東西方向の溝SD66や南北方向の溝SD68から出土している。中世陶磁器は水田面全体から出土している。

⑤出土遺物

E地点1面水田遺構（SD66～68、SM88～109、ST74～90、STD13・14）からの出土遺物は、土師器41点、須恵器84点、灰釉陶器33点、山茶碗1,884点、中近世陶磁器975点、中近世土師器3,137点、近世以降の瓦75点、土製品95点、木製品91点、石器63点、金属製品76点、種子34点、炭化材65点、時期不明192点の合計6,845点である。遺物が多く出土しているのは、SD66とST84で、SD66からは1,082点、ST84から1,585点出土している。種子34点のうち18点はSD66から出土している。

E地点1面水田遺構の所属時期は、畦畔から鎌倉時代～室町時代の遺物、水田跡から室町時代～江戸時代の遺物が出土していることから江戸時代と推定される。

(2) IV層上（III b層）の水田遺構（遺構図：図 150～154）

①大畦畔

A地点やB地点で検出したような、幅2m以上の盛土を有する畦畔は確認できなかった。

②水田区画

13筆を検出した。区画全体を完全に検出できた筆はないものの、平面形は概ね長方形を呈し、S T 97 のように方形に近い形状の区画もある。区画の規模は、長辺が S T 97 で 28.70m、S T 91 で 25.50 m、短辺が S T 92 で 5.20m、S T 99 で 18.80m、S T 97 で 26.50m を測る。

区画一筆の面積は、S T 97 が約 760 m²（ただし S T 96 を含むと考えられる。）、S T 99 が約 650 m²と広く、S T 91 や S T 93、S T 95 などが該当すると推定される。

水田面の平均標高値はE地点南端のS T 103 が 25.70m、S T 100 が 25.70m、同北端のS T 91 が 25.80m、S T 97 が 25.90m であり、全体的に南側が低く、北側が高い傾向にある。さらに、中央付近まで水田面の平均標高値は 25.70m ではほぼ同じ高さであることに対して、中央付近を東西に流れる水路 S D 69 以北の水田面の平均標高地は 25.90m とほぼ同じ高さで水路 S D 69 以南よりも高くなっている。このことから、E地点は中央を流れる水路 S D 69 を最低点としてV字形の地形をしているものと考えられる。また S D 69 以南では S M 118 以東においてのみ水田区画を検出した。S M 118 以西では土色も異なり、検出することができなかった。一方で S D 69 以北では調査面全域で水田区画を確認した。S D 69 以北において、S T 91 と S T 92、93、95、96、97、98、99 の捉えを述べる。S D 69 以南の水田面は III b' 層で、西側壁面では確認できない層が広がる。これは III b 層が灰色土であるのに対して III b' 層は黒色土であるため、景観撮影時でも土色の違いは明確であった。一方、先に述べた S M 118 以東には III b' 層は広がらず、III c 層になるため白色土であった。S T 92 は S D 69 以南で認められた III b' 層の黒色土であったために水田遺構とした。S T 92 以東では S D 69 以南の III c 層と同色に近い土色であったが、畦畔を検出することができた。そのため土層断面状況を確認したところ、E 地点の約 44m 付近に S D 69 があるが、それ以南の III b 層の厚さは約 40 cm で 5Y3/1 オリーブ黒色土であった。一方、S D 69 以北は 5Y3/1 オリーブ黒色土は認められるものの厚さは約 15 cm になっている。さらに III c 層との間に、2.5Y3/1 黒褐色土が約 20 cm の厚さで認められた。この 2 つの土層の厚さは S D 69 以南の III b 層の厚さに近い。そのため、S D 69 以南では見られなかった層が、S D 69 以北では確認できたため、この 2.5Y3/1 黑褐色土が S T 92 で見られた III b' 層に相当する土層であると捉えた。よって IV 層上での水田遺構は S D 69 以南では S M 118 以東の 4 筆、S D 69 以北では全面の 8 筆とした。

③小畦畔・溝等

小畦畔 19 本、溝 1 条を検出した。小畦畔はいずれも直線的に延びており、主軸方位はほぼ真北か、それに直交する方位に近い。

S D 69 水路以南では S M 118 が南北に延び、その北端から西に向かい S M 117 が伸びる。S M 118 と S 117 で L 字状になる。S M 117 から南にほぼ等間隔で S M 119、S M 120、S M 121 の順で並ぶ。一方、S M 118 以西には畦畔を検出することができなかった。一方で S D 69 以北では調査面全域において畦畔と水田面を確認することができた。S M 111、S M 112、S M 115 はほぼ東西方向に延びている。また S M 110、S M 114、S M 116 は南北方向に延びている。S M 110 は調査面の東端に位置し、調査区

外の段丘崖にはほぼ平行している。SM114は調査面中央西に位置し、SM115と直交して北へ延びている。一方SM116は調査面西端に位置し、これもSM115と直交して南に延びている。SM116はC5o08のグリッドまでしか確認することができなかった。

S D 69（遺構図：図140～143）

III a層の水田耕作土を除去し、III C層の掘削に伴ってSD66の直上で拡張した溝状遺構である。平面形は2段の掘り込み状を呈し、深さは38cm、埋土は5層に分層できた。上層3層は円碟や砂碟を含むが、下層2層には碟が含まれない。遺物はどの層からも確認することができた。検出は両隣の水田面との境が不明瞭でプラン設定が困難であった。遺物は北側壁面から多く出土している。

④遺物出土状況

山茶碗はSD66・68の2本の溝に挟まれたST100～102から多く出土している。SM118から古代瓦の平瓦が出土している。

⑤出土遺物

E地点2面水田遺構（SD69、SM110～121、ST91～103）からの出土遺物は土師器97点、須恵器24点、古代瓦1点、灰釉陶器11点、山茶碗820点、中近世陶磁器42点、中近世土師器641点、近世以降の瓦1点、土製品34点、木製品29点、石器10点、金属製品2点、種子26点、炭化材22点、時期不明59点、合計1,819点である。

SD69の所属時期は出土遺物からは室町時代～安土・桃山時代、畦畔は出土した遺物から鎌倉時代～室町時代、水田跡は出土遺物から鎌倉時代～室町時代である。これらのことからE地点2面水田面の所属時期は鎌倉時代～室町時代と推定される。

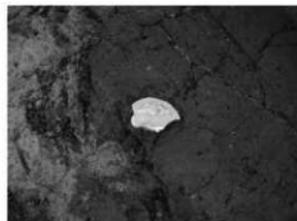


写真21 B地点双魚文青磁出土状況

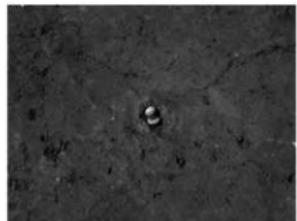


写真22 B地点茶蓋藁摘み出土状況

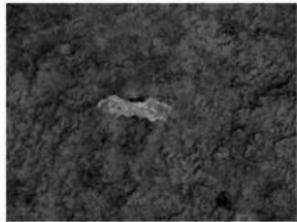


写真23 C地点目貫出土状況



写真24 E地点銅鈴出土状況

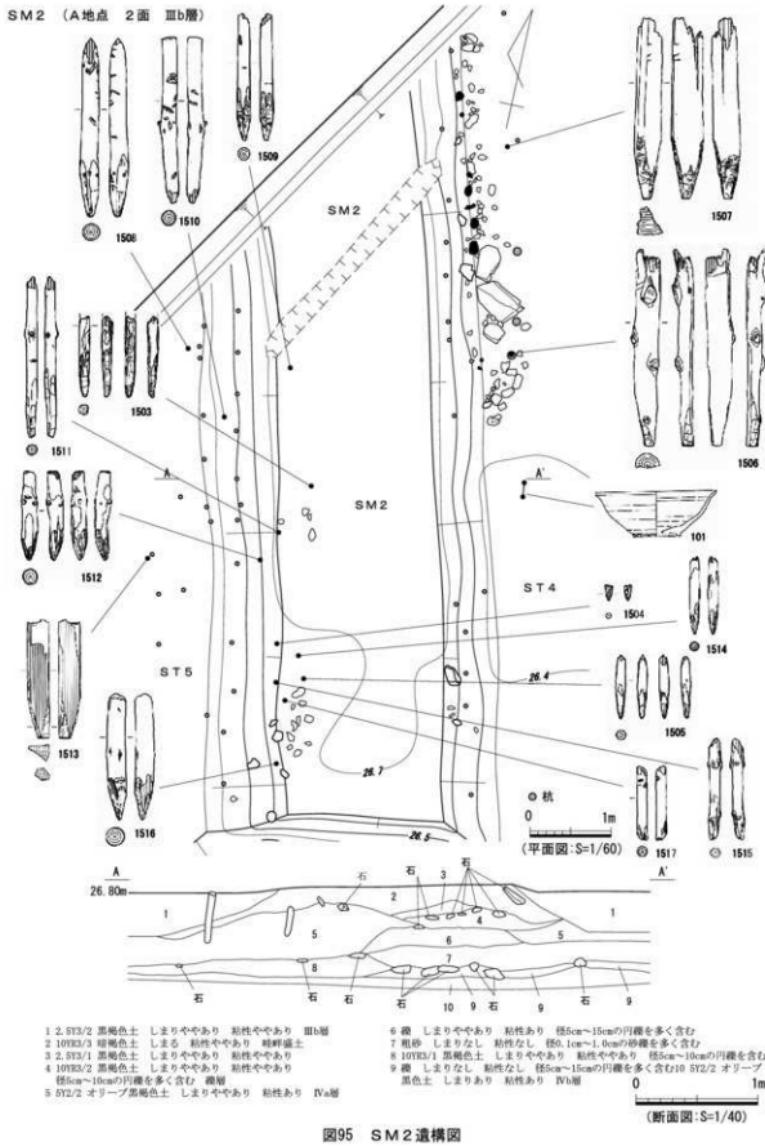


図95 SM2 遺構図

SM1・ST1～3 (A地点 1面 II層)

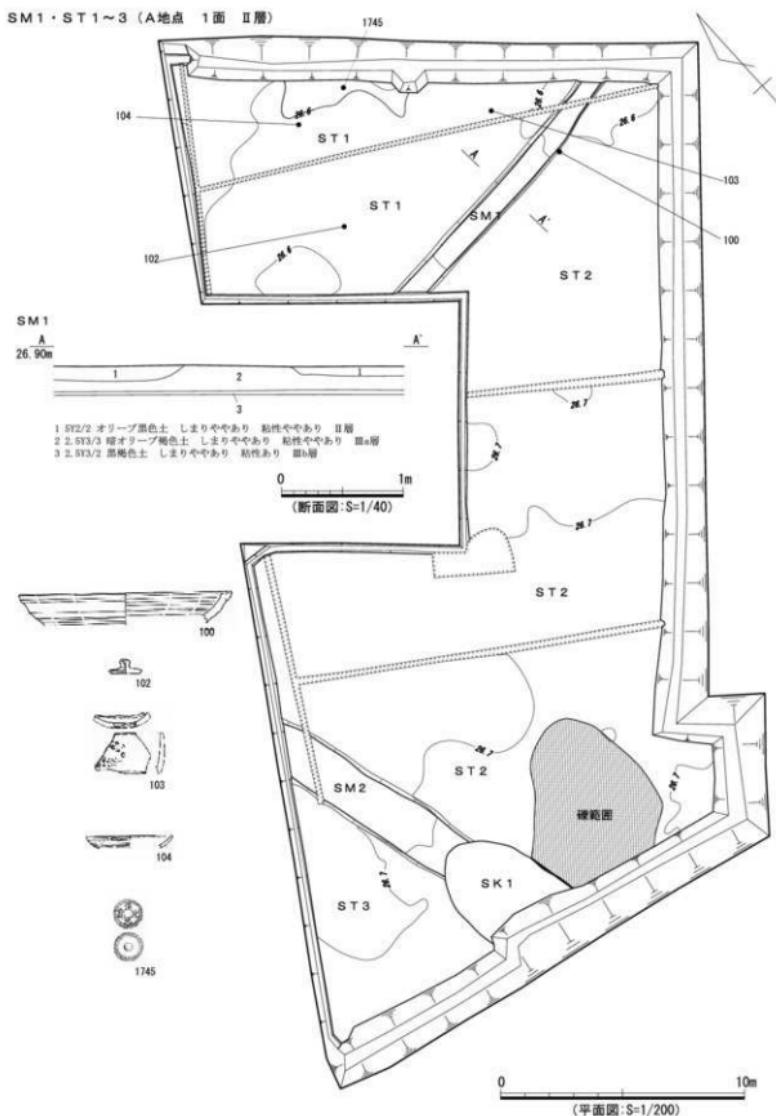


図96 SM1、ST1～3遺構図

ST 4・5 (A地点 2面 IIIa層)

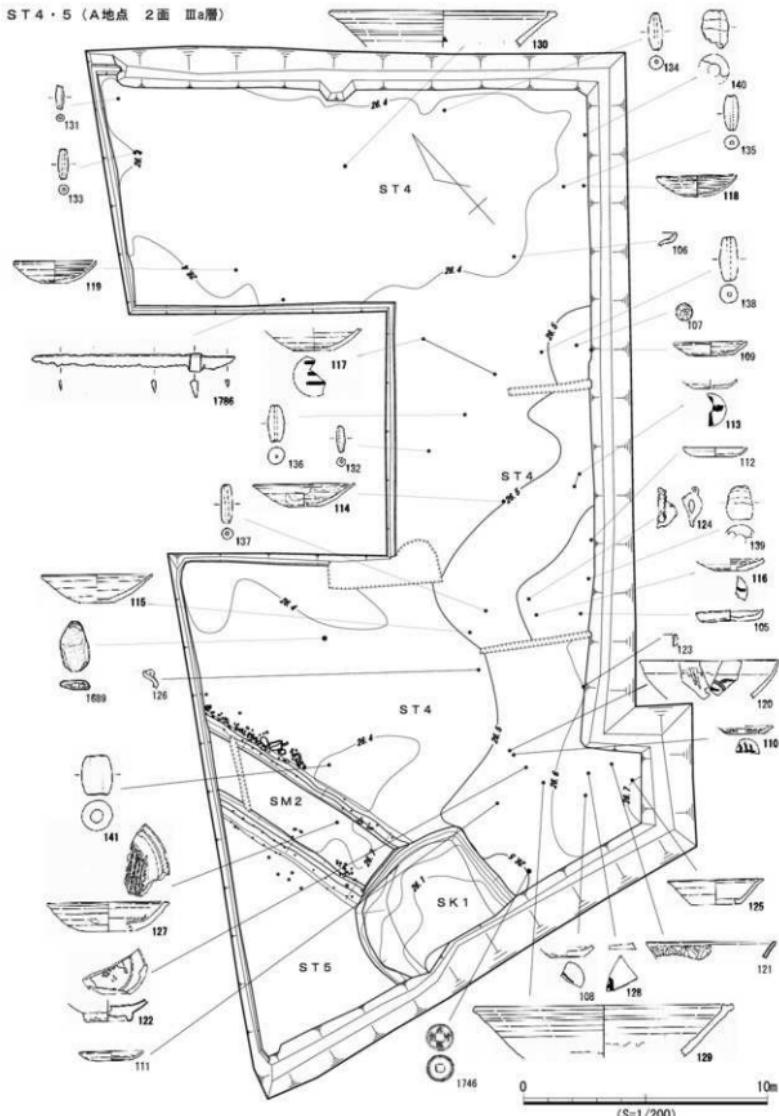


図97 ST 4・5遺構図

S A 1 (B地点 2面 IIIb・IIIc層)

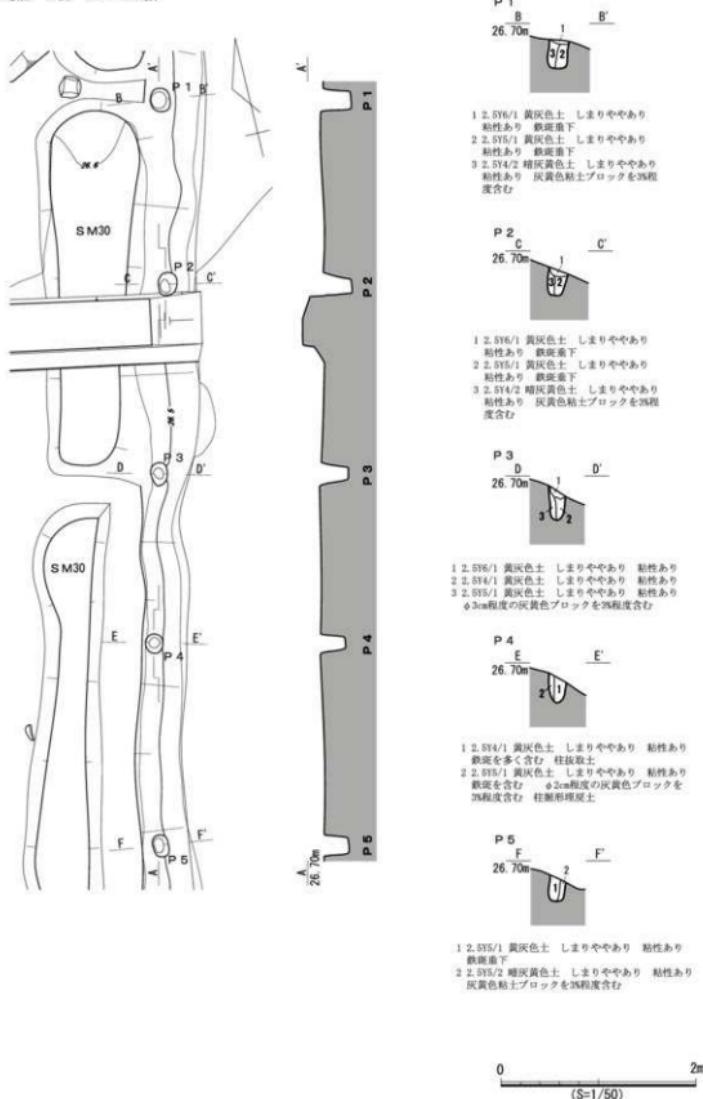
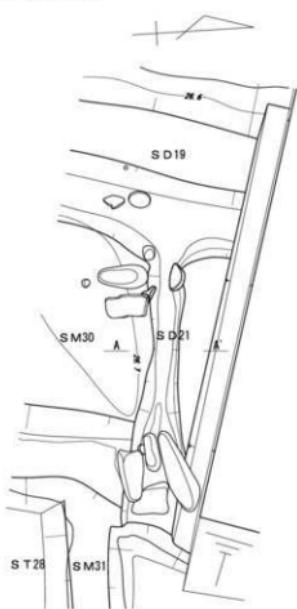


図98 S A 1 造構図

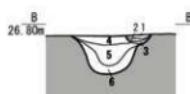
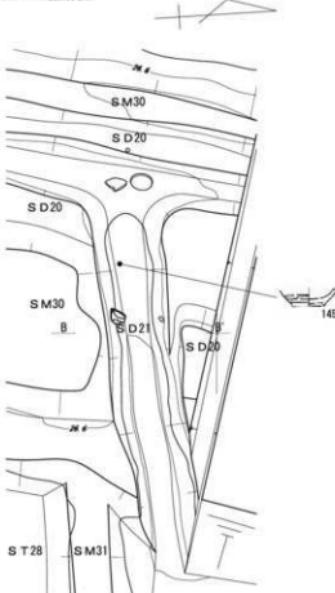
SD21 (B地点 2面 IIIb層)

(SD19掘削前)



1. 536/1 黄灰色土 しまりややあり 粘性あり 粗砂と微砂を少量含む 鉄斑を含む
2. 537/1 黄灰色土 しまりややあり 粘性あり 鉄斑を含む
3. 537/1 黄灰色粘土 しまりややあり 粗砂がラミナ状に堆積している

(SD19掘削後)



1. 536/1 黄灰色土 しまりややあり 粘性あり 粗砂と微砂を少量含む 鉄斑を含む
2. 535/1 黄灰色土 しまりややあり 粘性あり 鉄斑を含む
3. 534/1 黄灰色粘土 しまりややあり 粘性あり 粗砂がラミナ状に堆積している
4. 536/3 黄灰色土 しまりややあり 粘性あり 鉄斑とマンガン斑を含む
5. 534/1 黄灰色土 しまりややあり 粘性あり 鉄斑とマンガン斑を含む 粗砂を少量含む
6. 533/1 黒褐色土 しまりあり 粘性あり 鉄斑とマンガン斑を含む

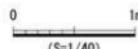
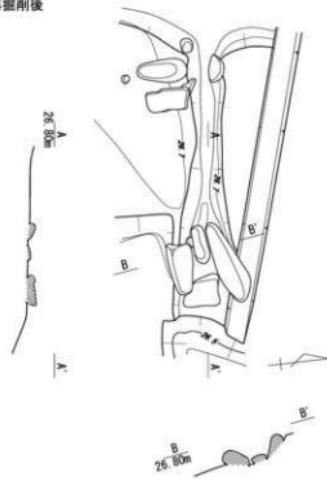


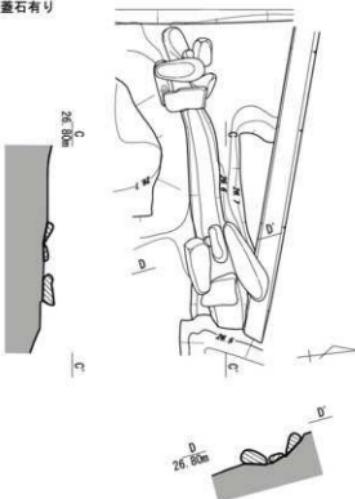
図99 SD21遺構図（1）

SD21 (B地点 2面 IIIb層)

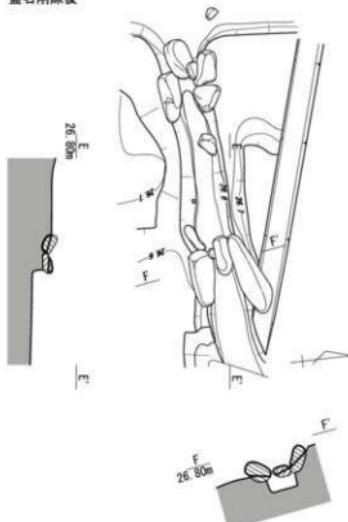
再掘削後



蓋石有り



蓋石削除後



0
(S=1/40)
1m

図100 SD21遺構図(2)

S D22・23 (B地点 2面 IIIb層)

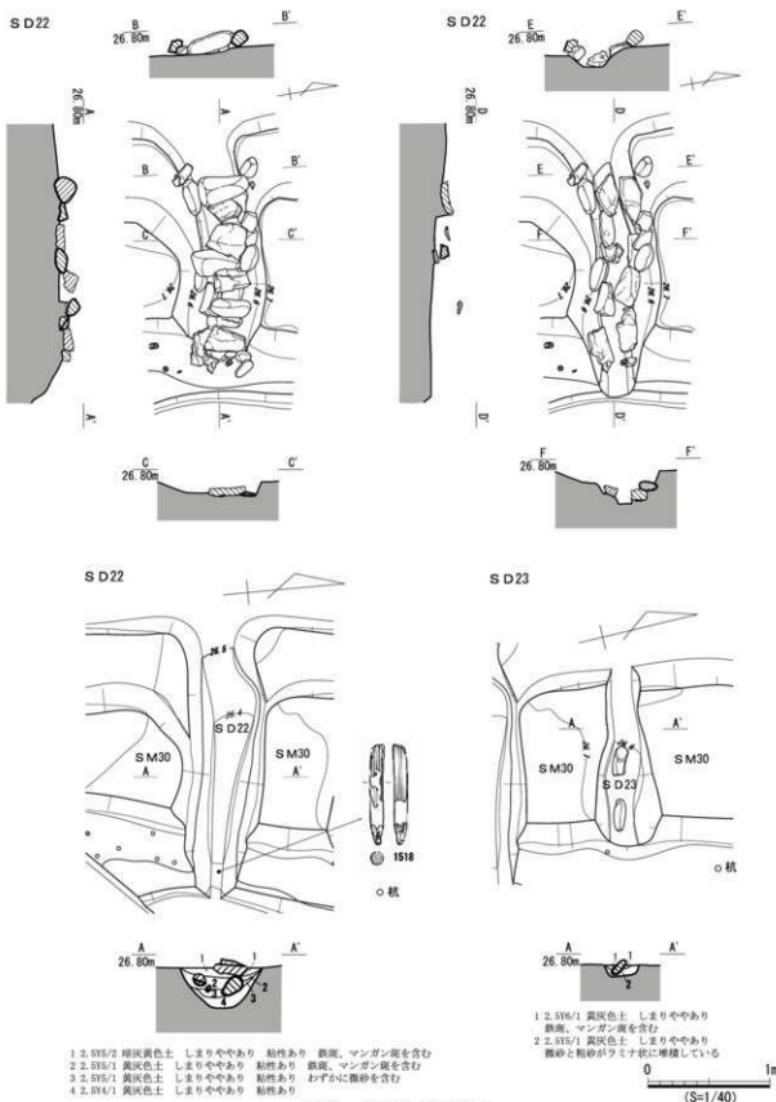


図101 S D22・23遺構図

SD 6・9、SM17 (B地点 1面 II層)

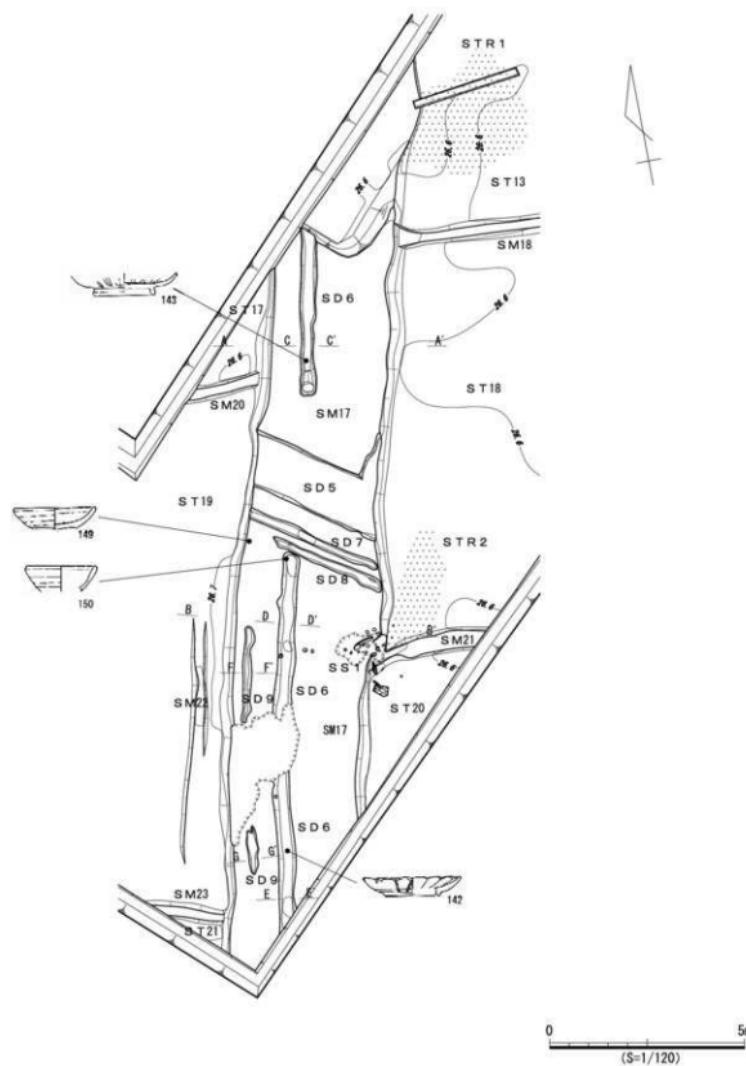


図102 SD 6・9、SM17 遺構図(1)

SD 6・9、SM17 (B地点 1面 II層)

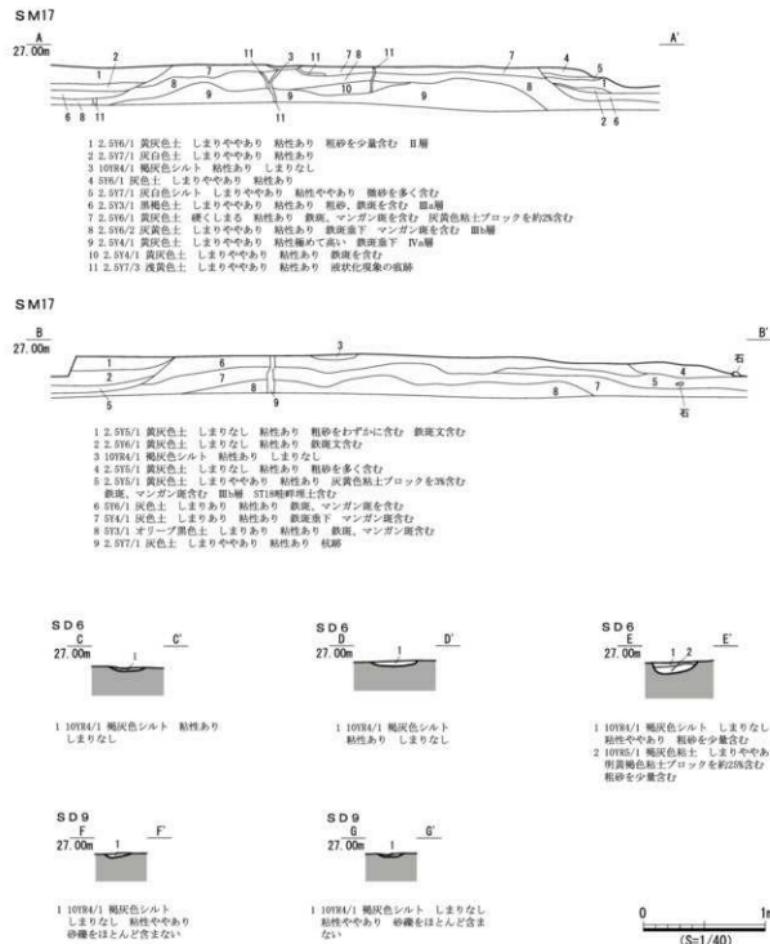
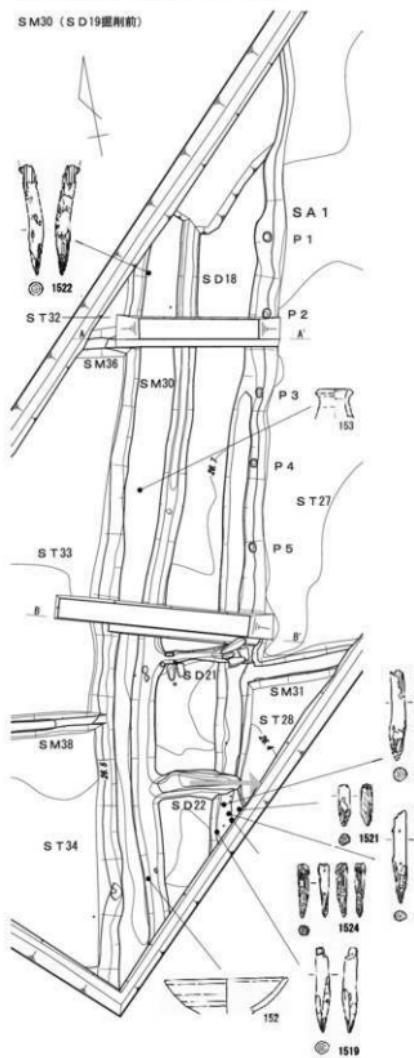


図103 SD 6・9、SM17造構図(2)

SD19・20、SM30（B地点 2面 IIIb層）

SM30（SD19掘削前）



SM30（SD19掘削後）

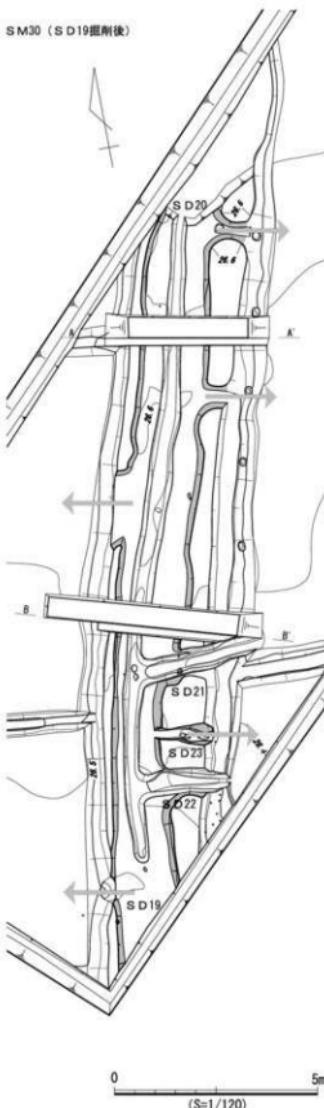
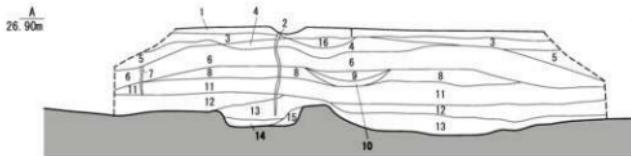


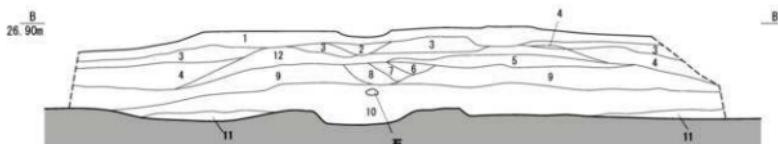
図104 SD19・20、SM30造構図（1）

0
5m
(S=1/120)

SD 19・20, SM30 (B地点 2面 IIIb層)



- 1 10YES/3 にぶい黄褐色土。しまりあり 粘性ややあり マンガン斑あり
- 2 10YE4/4 棕色土。しまりややあり 粘性あり
- 3 10YE3/4 黄褐色土。しまりややあり 粘性ややあり マンガン斑。鉄斑あり
- 4 10YE3/3 にぶい黄褐色土。しまりややあり 粘性ややあり マンガン斑。鉄斑あり (SD 19)
- 5 10YES/4 にぶい黄褐色土。しまりややあり 粘性ややあり マンガン斑。鉄斑あり
- 6 10YE3/2 黄褐色土。しまりややあり 粘性ややあり マンガ斑。鉄斑あり
- 7 10YE3/1 黄褐色土。しまりややあり 粘性ややあり 鉄斑あり
- 8 10YE1/1 黄褐色土。しまりややあり 粘性ややあり 鉄斑あり
- 9 2.SY3/3 増オリーブ褐色土。しまりややあり 粘性ややあり 鉄斑下 滅砂をわずかに含む (SD 20)
- 10 2.SY3/2 黄褐色土。しまりややあり 粘性ややあり 鉄斑垂下 滅砂を含む (SD 20)
- 11 10YE3/1 黄褐色土。しまりややあり 粘性ややあり 鉄斑垂下 硫化物をわずかに含む
- 12 2.SY3 黄褐色土。しまりややあり 粘性ややあり 鉄斑垂下 粒状炭化物を含む
- 13 2.SY4/2 暗灰褐色土。しまりややあり 粘性あり 鉄斑垂下 木片多く含む
- 14 2.SY3/3 増オリーブ褐色土。しまりややあり 粘性あり 鉄斑垂下
- 15 2.SY3/1 黄褐色土。しまりややあり 粘性あり 2.SY1/1 黄褐色土ブロックを20%含む (V層くずれ)
- 16 10YE4/4 棕色土。しまりややあり 粘性ややあり マンガン斑。鉄斑あり



- 1 10YES/3 にぶい黄褐色土。しまりあり 粘性ややあり マンガン斑あり
- 2 10YE4/4 棕色土。しまりやややあり 粘性やややあり マンガン斑。鉄斑あり
- 3 10YE3/4 黄褐色土。しまりやややあり 粘性やややあり マンган斑。鉄斑あり
- 4 10YE3/3 にぶい黄褐色土。しまりやややあり 粘性やややあり マンガ斑。鉄斑あり
- 5 10YE3/2 黄褐色土。しまりやややあり 粘性やややあり マンガ斑。鉄斑あり
- 6 10YE1/1 黄褐色土。しまりやややあり 粘性やややあり 鉄斑下 滅砂を含む (SD 20)
- 7 2.SY3/2 増オリーブ褐色土。しまりややややあり 粘性ややややあり 鉄斑下 滅砂をわずかに含む (SD 20)
- 8 2.SY3/2 黄褐色土。しまりやややややり 粘性ややややり 鉄斑垂下 滅砂を含む (SD 20)
- 9 10YES/1 黑褐色土。しまりやややややり 粘性やややややり 鉄斑垂下 硫化物を含む
- 10 2.SY3/2 黑褐色土。しまりやややややり 粘性やややややり 鉄斑垂下 粒状炭化物を含む
- 11 2.SY1/2 暗灰褐色土。しまりやややややり 粘性ややややり 鉄斑垂下 木片を含む
- 12 10YE4/3 にぶい黄褐色土。しまりやややややり 粘性ややややり マンガン斑。鉄斑あり

0 1m
(S=1/40)

図 105 SD 19・20, SM30 遺構図 (2)

SD29, SM43 (B地点 3面 IVa層)

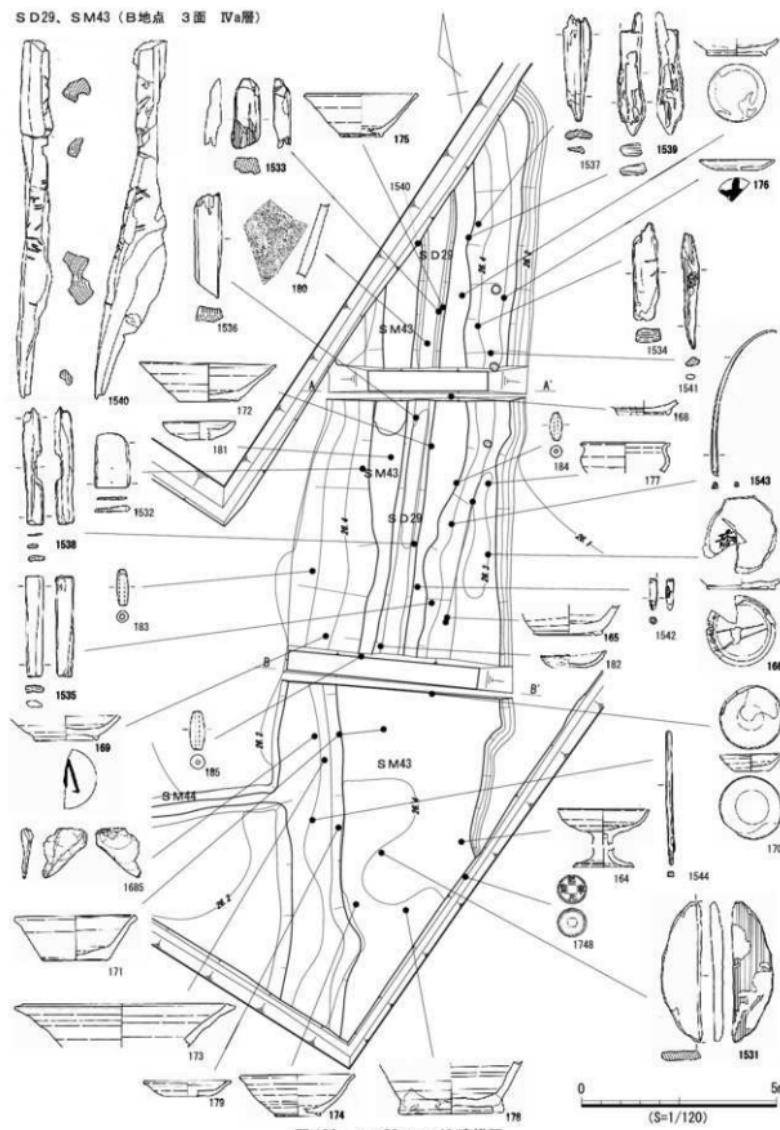


図 106 SD29, SM43 遺構図

(\$=1/120)

SD30、SM41・42 (B地点 3面 V層)

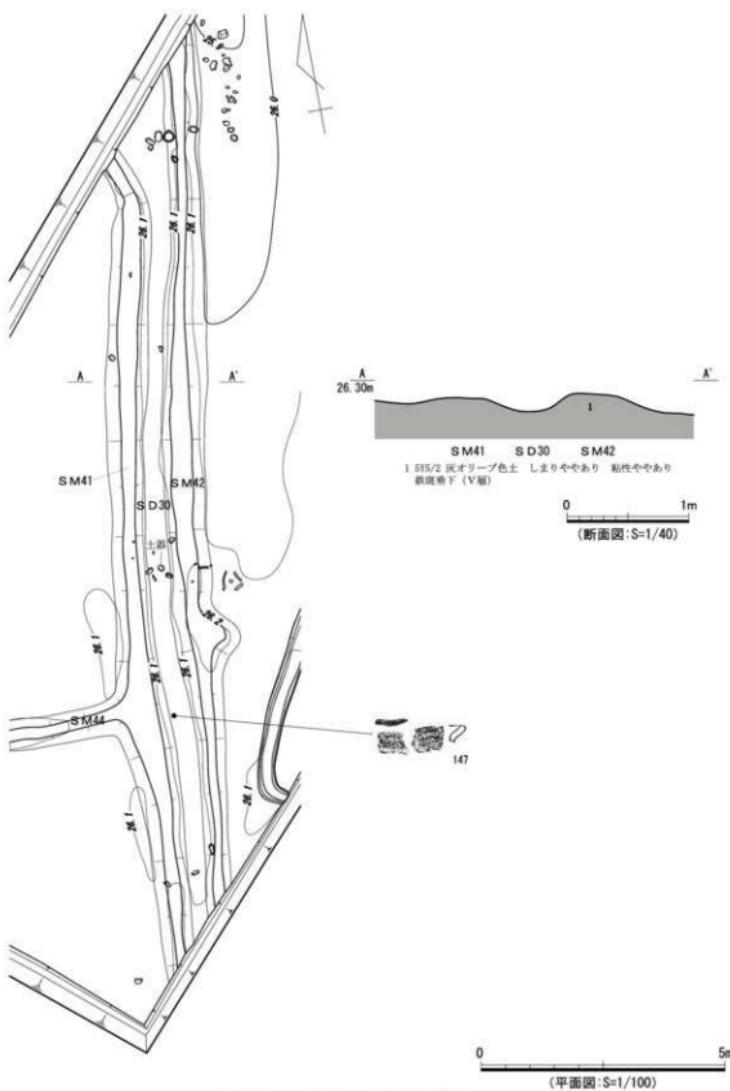


図 107 SD30、SM41・42 遺構図

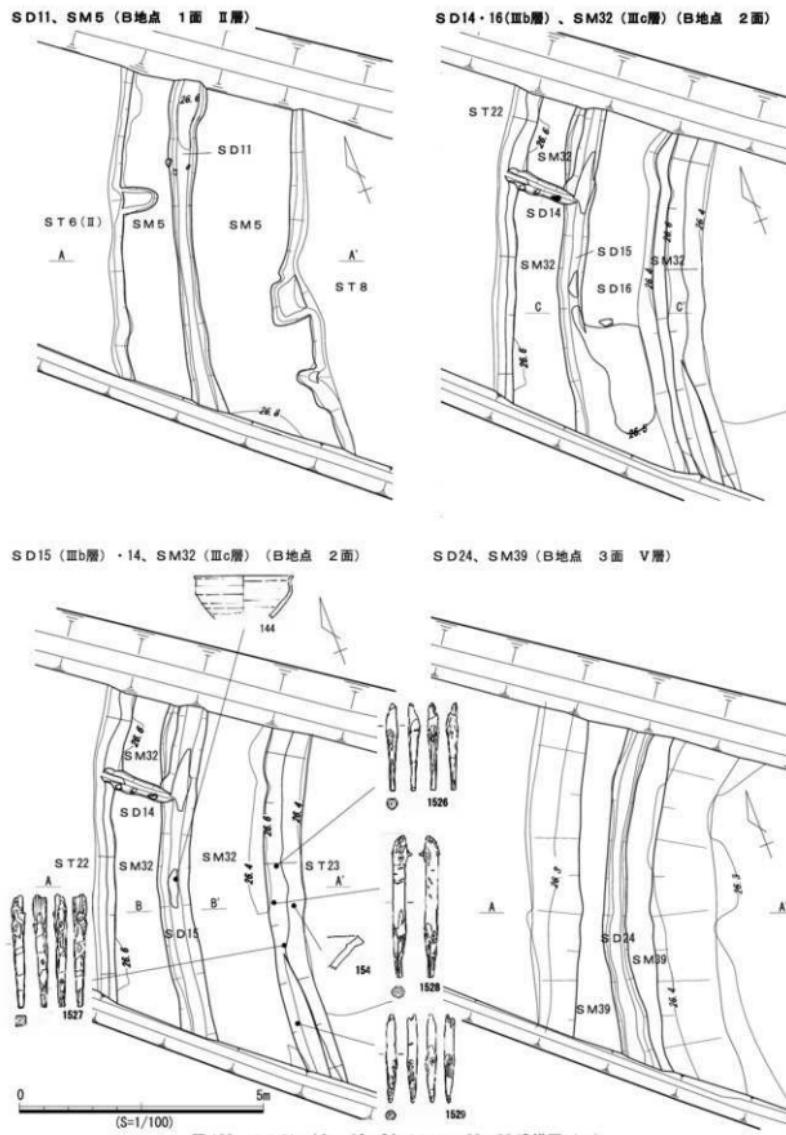
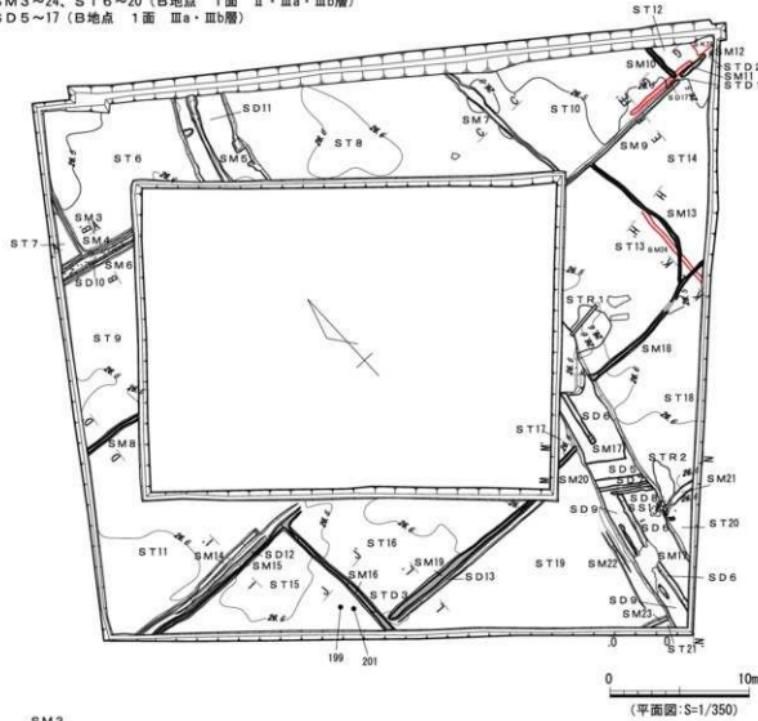


図108 SD11・14～16・24、SM5・32・39 遺構図 (1)

SM3~24、ST6~20 (B地点 1面 II・IIIa・IIIb層)
SD5~17 (B地点 1面 IIIa・IIIb層)



SM3	
A	26.70m
2.5	2.3
4	2.3
5	
1. 2. SY4/1 黄灰色土	しまりややあり 粘性あり 鉄斑を多く含む
2. 2. ST5/1 黄灰色土	しまりややあり 粘性あり 長さ10cm以下の角礫を少量含む 鉄斑、マンガン斑を多く含む
3. 2. SY3/1 黄灰色土	しまりややあり 粘性あり 鉄斑を含む 層a層
4. 2. SY6/1 黄灰色土	しまりややあり 粘性あり 鉄斑を多く含む マンガン斑を含む 層b層
5. 2. SY4/1 黄灰色土	しまりややあり 粘性が極めて高い 鉄斑を多く含む IVa層

SM4・SM6・SD10	
B	26.70m
1.5	4
3	2.1
6	
7	7.6
SM6	SD10
SM4	
1. 2. SY4/1 黄灰色土	粘性あり 鉄斑、マンガン斑を多く含む 一辺5mm以下の角礫を少量含む
2. 2. SY5/1 黄灰色土	粘性あり 鉄斑、マンガン斑を多く含む 岩化物（一辺5mm程度）を多く含む
3. 2. SY4/1 黄灰色土	粘性あり 鉄斑重下 粗砂を少量含む
4. 2. SY5/1 灰色土	粘性あり 鉄斑重下 粗砂を含む (3割以上微砂が多い)
5. 2. SY5/1 黄灰色土	しまりややあり 粘性あり 鉄斑、マンガン斑を多く含む 層a層
6. 2. SY6/1 黄灰色土	しまりややあり 粘性あり 鉄斑を多く含む マンガン斑を含む 層b層
7. 2. SY4/1 黄灰色土	しまりややあり 粘性が極めて高い 鉄斑を多く含む IVa層

0 1m
(断面図:S=1/40)

図110 SM3~24、ST6~20構造図(1)

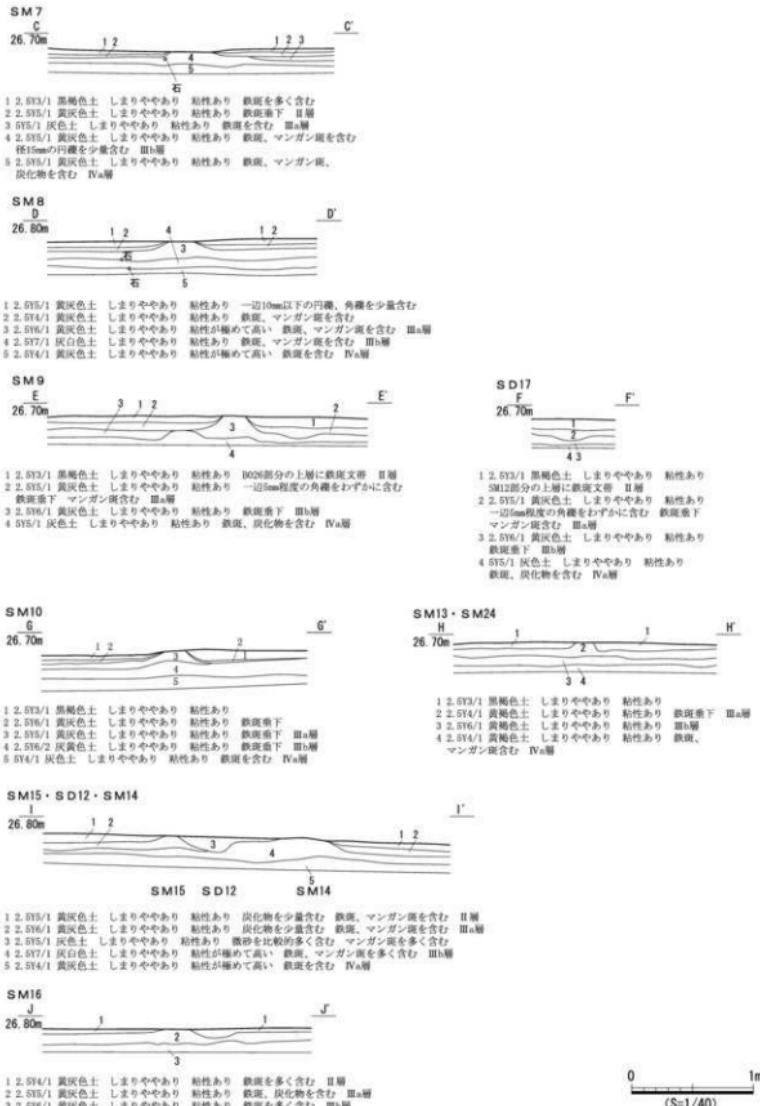


図 111 SM 7～10・13～16、SD 17 遺構図

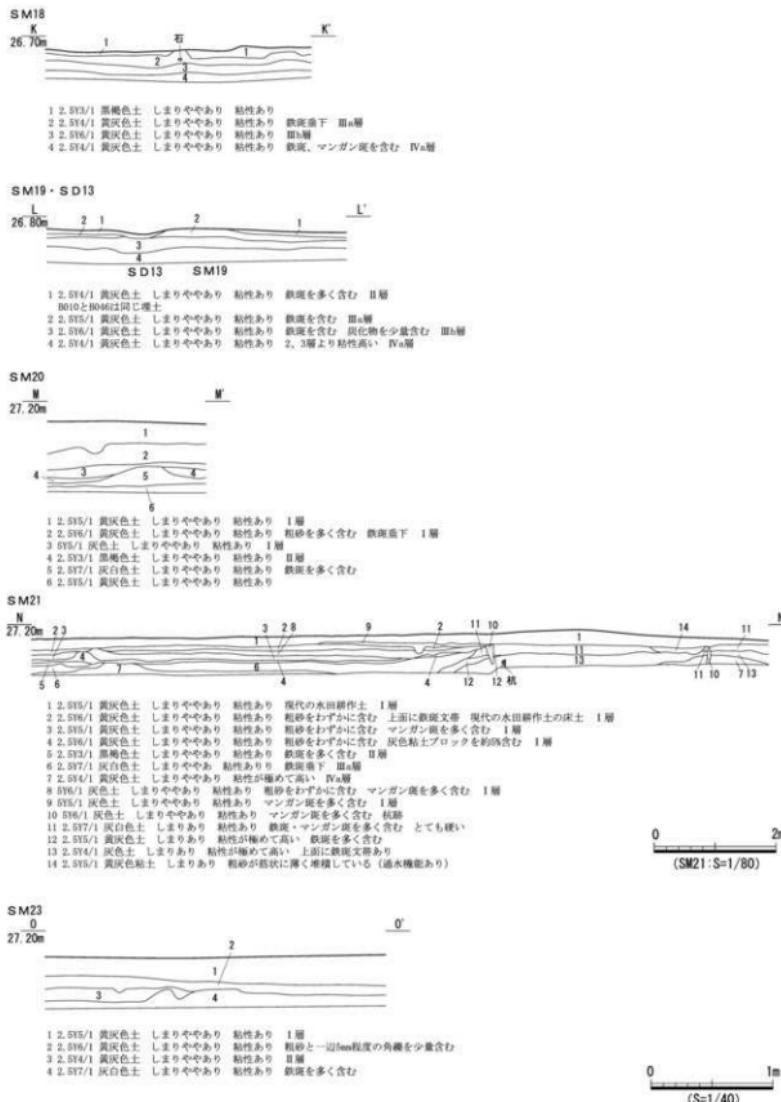
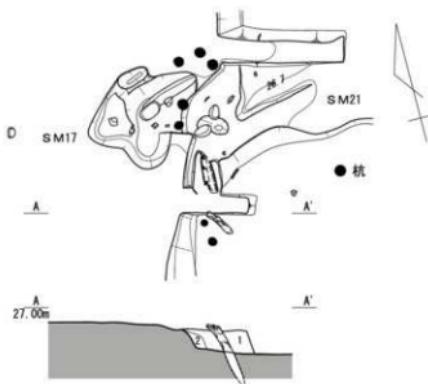


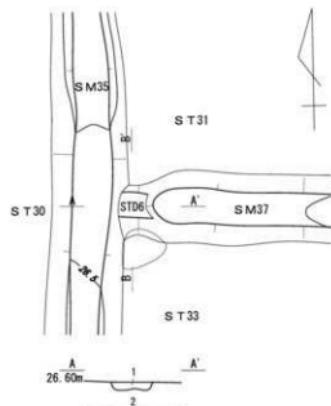
図112 SM18～21・23, SD13 遺構図

SS 1 (B地点 1面 II層)



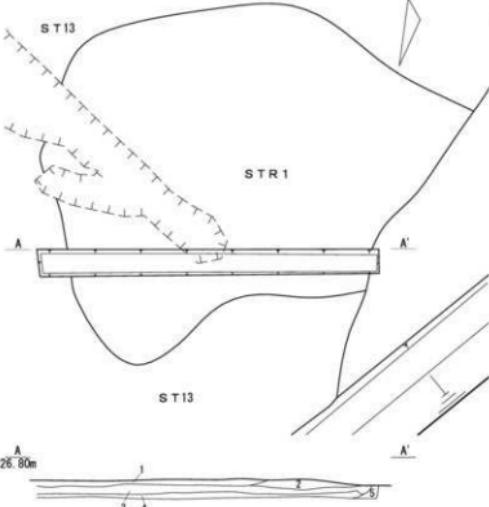
1. 2.SY5/1 黄灰色土 しまりややあり 黏性あり 径2~5mmの凹凸を含む III層
2. SY4/1 黄灰色土 しまりあり 黏性あり 縫をほとんど含まない

STD 6 (B地点 1面 IIIc層)



1. 2. STD6/1 黄灰色土 しまりややあり 黏性あり
一辺5mm程度の炭化物を少量含む 鉄錆垂下 IIIc層
2. SY4/2 雜灰黄色土 しまりややあり 黏性あり
粒状炭化物を少量含む 鉄錆垂下 IVa層

STR 1 (B地点 1面 II層)



1. 2. SY6/1 黑褐色土 しまりややかたり 黏性あり 粘砂をわずかに含む
2. 2. SY6/1 黑褐色土 しまりややかたり 黏性あり 一辺10mm以下の角礫を多く含む
3. 2. SY5/1 黄灰色土 しまりややかたり 黏性あり 粘砂をわずかに含む
4. 2. SY6/1 黄灰色土 しまりややかたり 黏性あり
5. SY7/1 灰白色土 しまりあり 黏性あり 鉄錆を多く含む SM17底土

1. 2. SY6/1 黄灰色土 しまりややあり 黏性あり
一辺5mm程度の炭化物を少量含む 鉄錆垂下 IIIc層
2. SY4/2 雜灰黄色土 しまりややあり 黏性あり
粒状炭化物を少量含む 鉄錆垂下 IVa層

0 1m
(S=1/40)

図 113 SS 1, STD 6, STR 1 遺構図

SM3~24、ST6~20 (B地点 1面 II・IIIa・IIIb層)
SD5~17 (B地点 1面 IIIa・IIIb層)

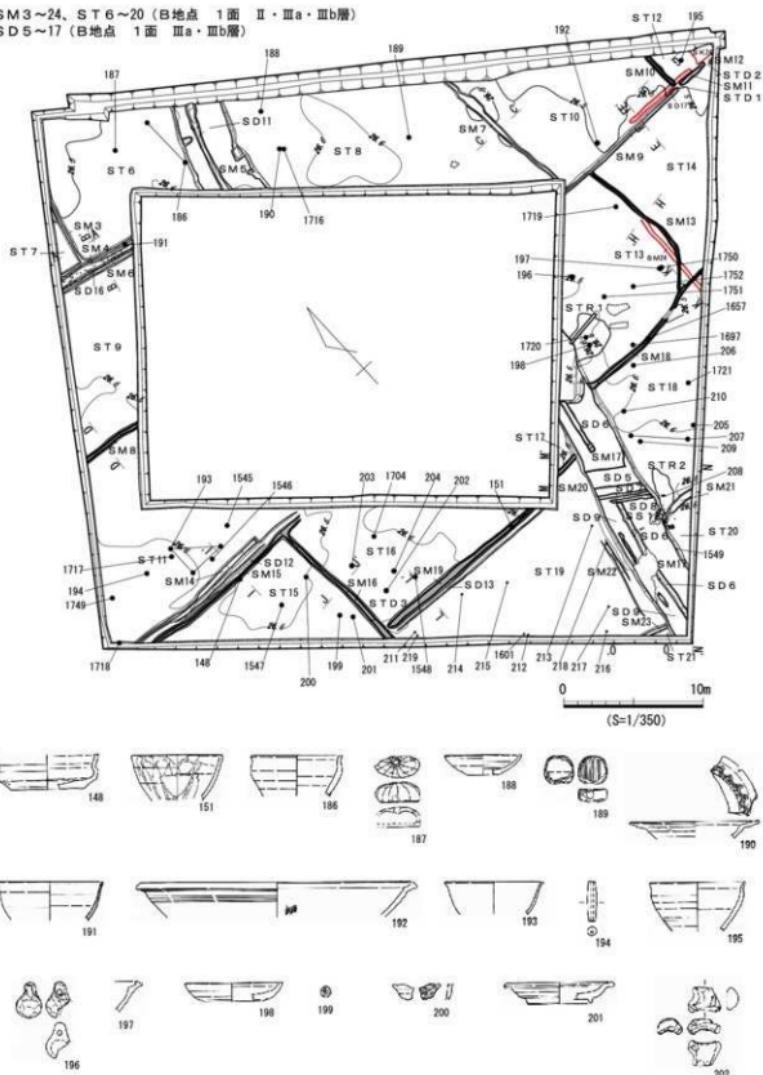


図114 SM3~24、ST6~20遺構図 (2)

SM 3~24、ST 6~20 (B地点 1面 II・IIIa・IIIb層)

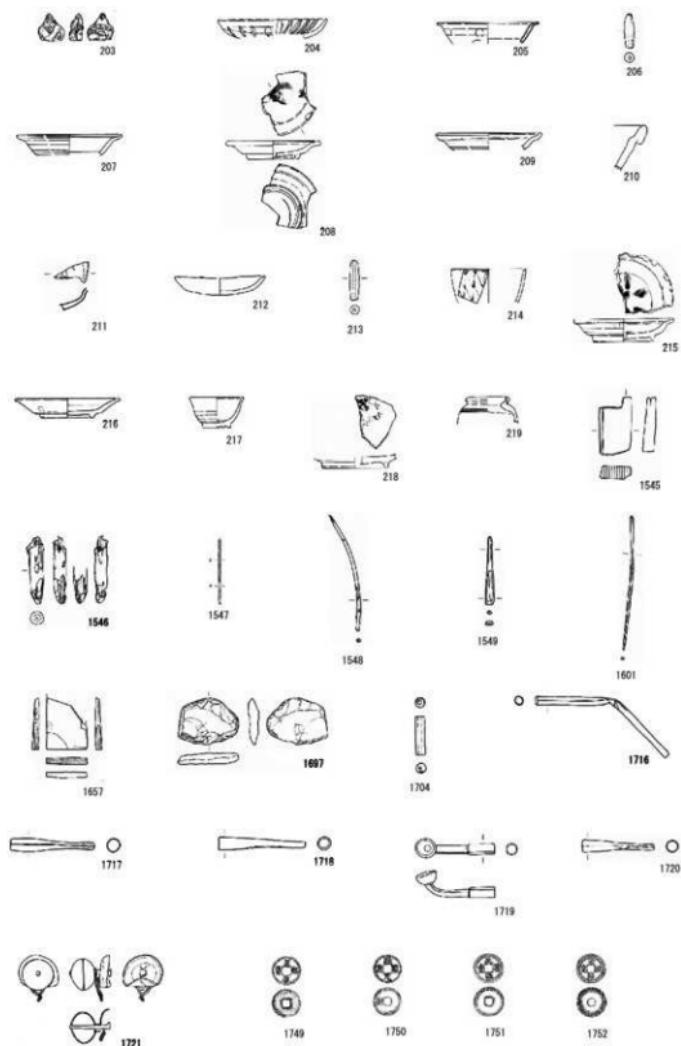
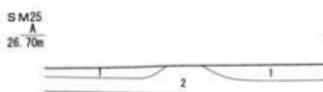
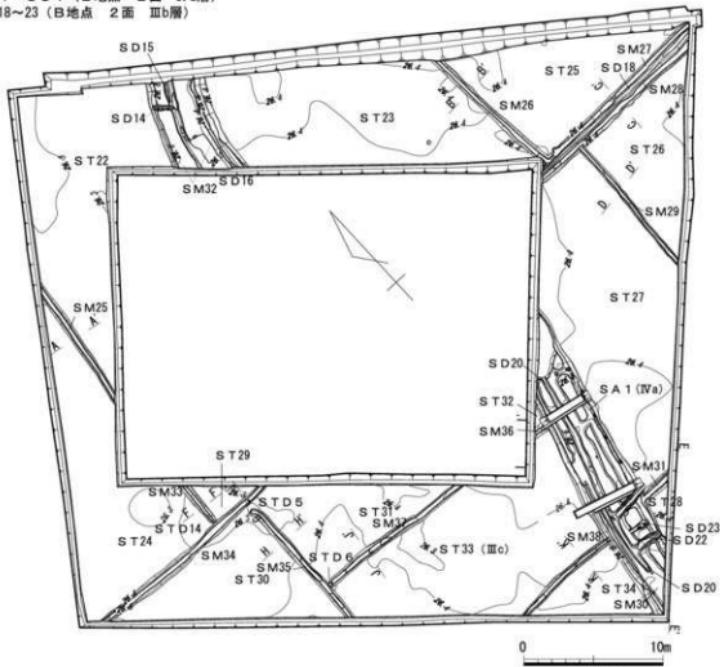
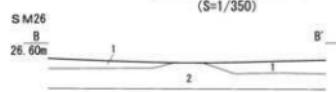


図115 SM 3~24、ST 6~20遺構図（3）

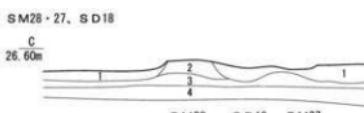
SM25~31, ST22~28 (B地点 2面 IIIb層)
 SM32~38, ST29~34, STD4~6 (B地点 2面 IIIc層)
 SA1・SS1 (B地点 2面 IVa層)
 SD18~23 (B地点 2面 IIIb層)



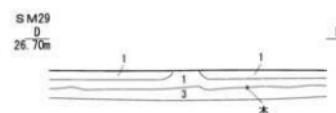
1 2.SY6/1 黄灰土 しまりややあり 黏性あり
 鉄化物と鉄斑を含む IIIb層
 2 2.SY4/2 基底黄色土 しまりややあり 黏性あり
 鉄状鉄化物を少量含む 鉄斑を含む IVa層



1 2.SY6/1 黄灰土 しまりややあり 黏性あり 鉄化物を含む
 鉄斑垂下 IIIb層
 2 2.SY4/2 基底黄色土 しまりややあり 黏性あり
 鉄斑垂下 IVa層



1 2.SY6/1 黄灰土 しまりややあり 黏性あり 鉄斑垂下 IIIb層
 2 2.SY4/1 黄灰土 しまりややあり 黏性あり 上面に鉄斑が集積する
 3 2.SY4/1 黄灰土 しまりややあり 黏性高い 鉄斑垂下 IVa層
 4 2.SY4/2 基底黄色土 しまりややあり 黏性高い IVa層



1 2.SY5/1 黄灰色土 しまりややあり 鉄化物を少量に含む
 2 2.SY4/2 基底黄色土 しまりややあり 黏性あり 鉄斑垂下 IVa層
 3 2.SY4/1 黄灰色土 しまりややあり 黏性あり 鉄斑垂下 IVa層

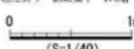


図116 SM25~38, ST22~34, STD4~6 遺構図 (1)

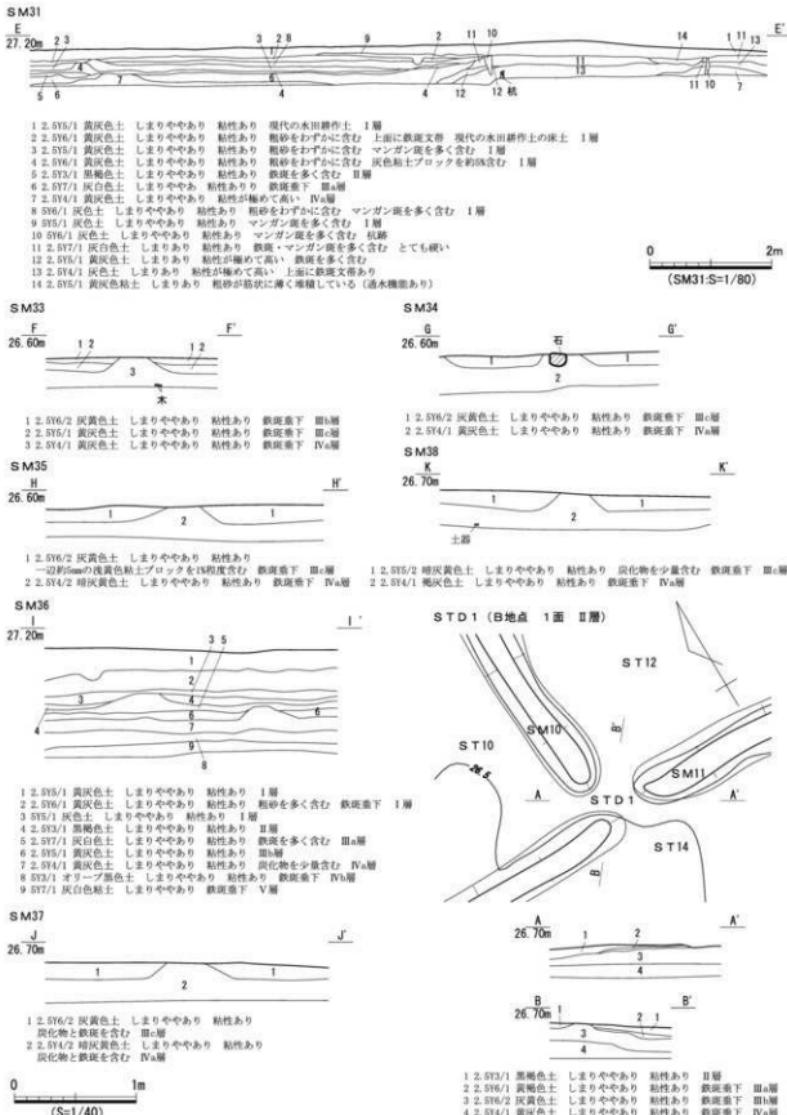


図 117 S M31・33～38, S T D 1 遺構図

SM25~31、ST22~28 (B地点 2面 IIIb層)
 SM32~38、ST29~34、STD4~6 (B地点 2面 IIIc層)
 SA1 (B地点 2面 IVa層)
 SD18~23 (B地点 2面 IIIb層)

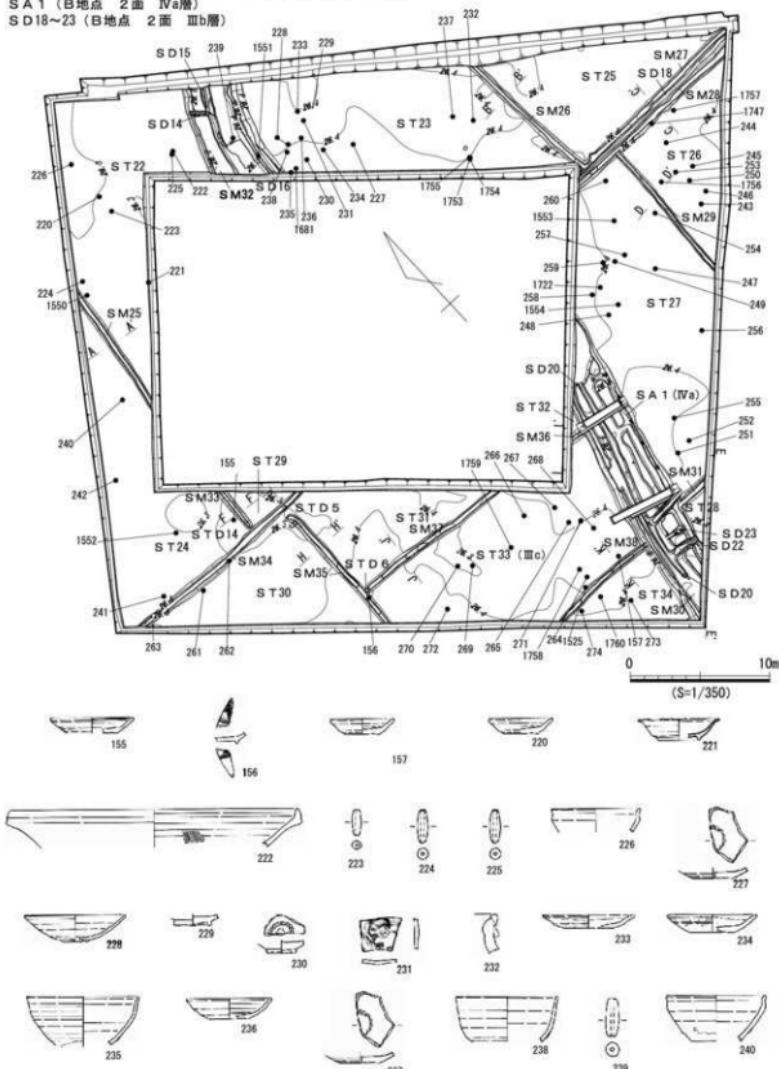


図118 SM25~38、ST22~34、STD4~6遺構図(2)

SM25~31、ST22~28（B地点 2面 IIIb層）
 SM32~38、STD4~6（B地点 2面 IIIc層）
 SA1（B地点 2面 IVa層）

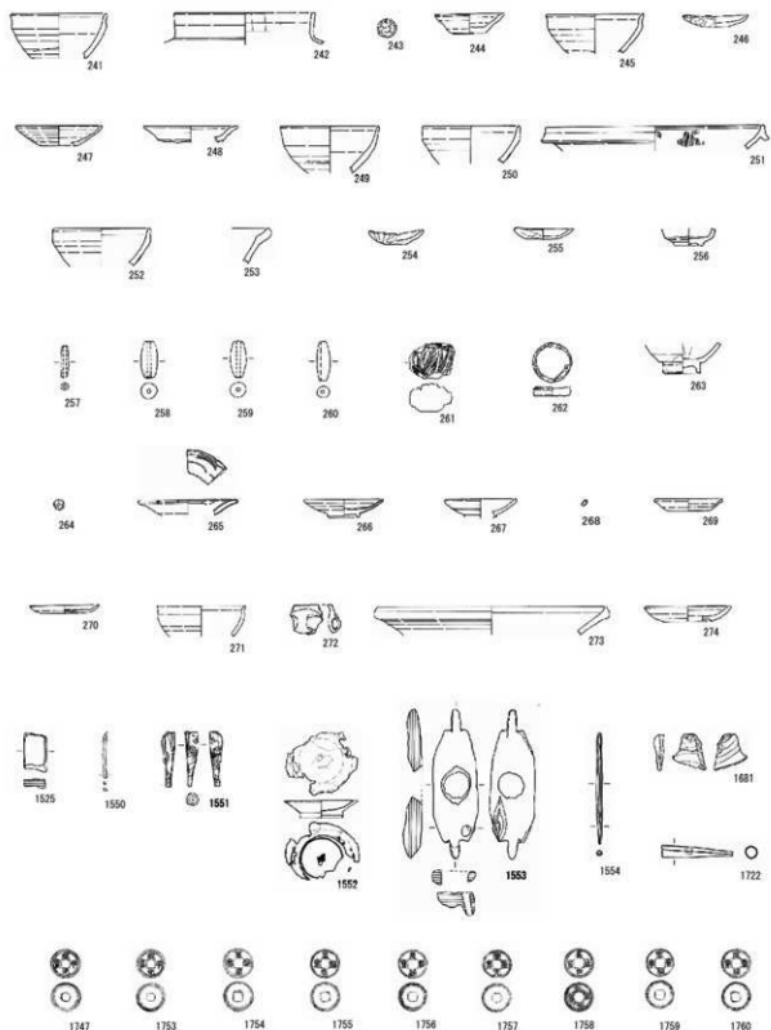
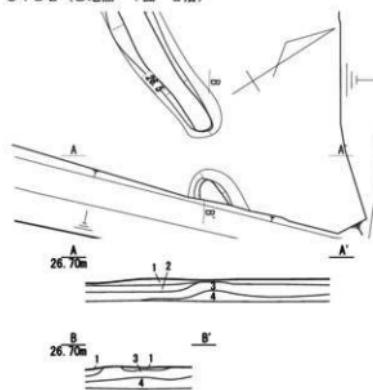
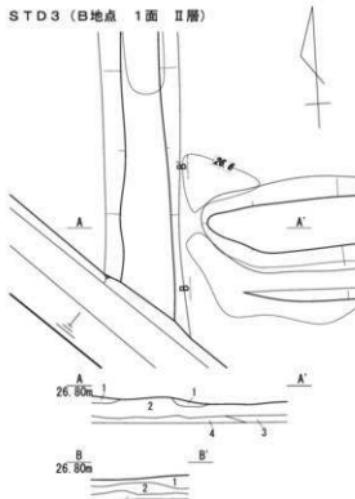


図119 SM25~38、ST22~34、STD4~6遺構図（3）

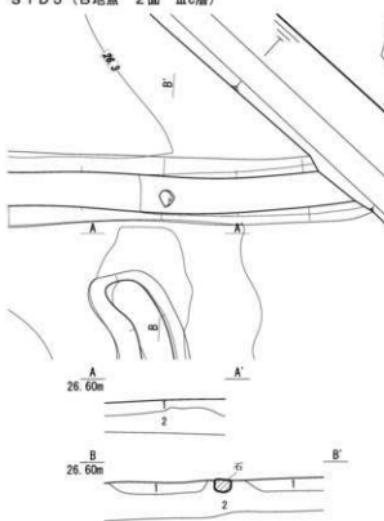
STD 2 (B地点 1面 II層)



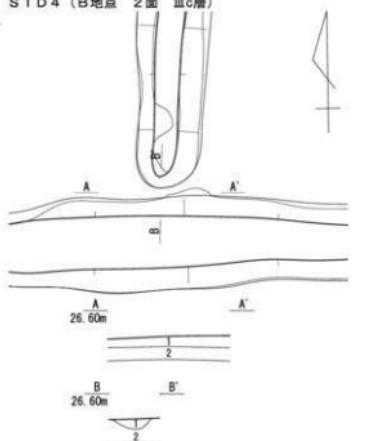
STD 3 (B地点 1面 II層)



STD 5 (B地点 2面 IIIc層)



STD 4 (B地点 2面 IIIc層)



0 1m
(S=1/40)

1 2. SY6/1 黄褐色土 しまりややあり 粘性あり 鉄鉱垂下 IIIc層
2 2. SY4/1 黄褐色土 しまりややあり 粘性あり 鉄鉱垂下 IVa層

図 120 STD 2~5 造構図

SM39~44 (B地点 3面 V層)
SD24・29・30 (B地点 3面 V層)

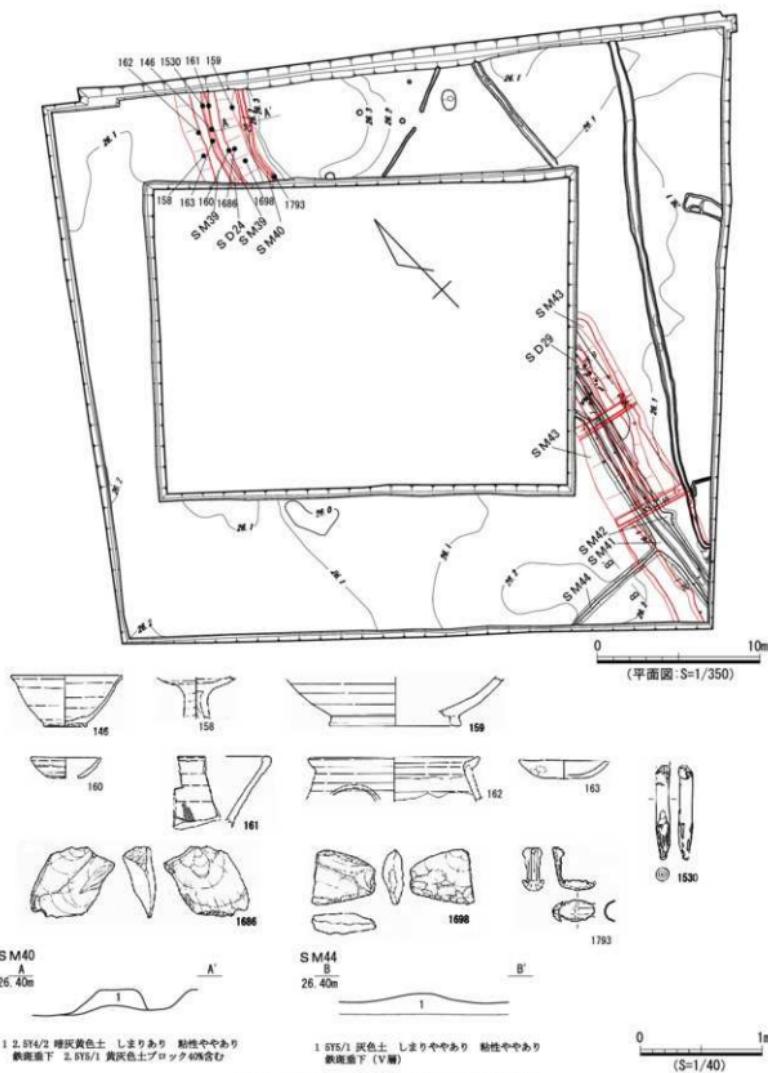


図121 SD24・29・30、SM39~44遺構図

SM48~54 (C地点 1面 II層)、SM73~76・79~83 (D地区 1面 II層)
 ST41~44~51 (C地点 1面 II層)、ST63~68・70~73 (D地区 1面 II層)

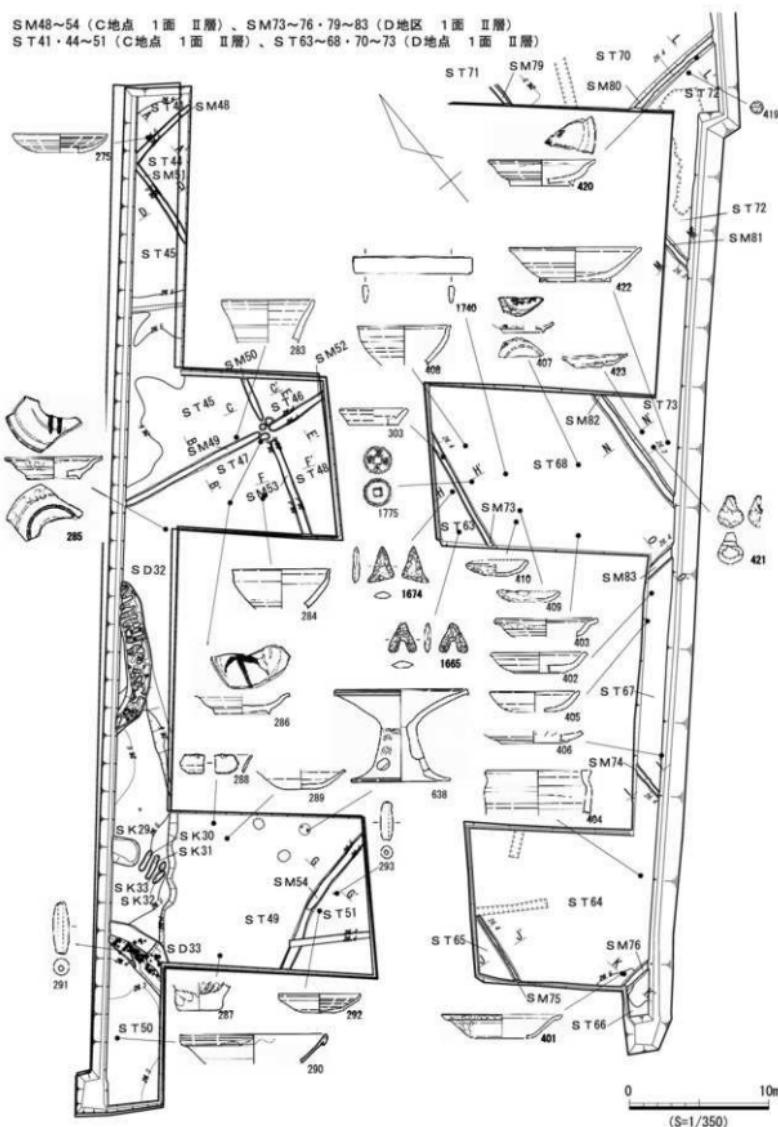


図122 C D 地点 1面 南水田遺構図

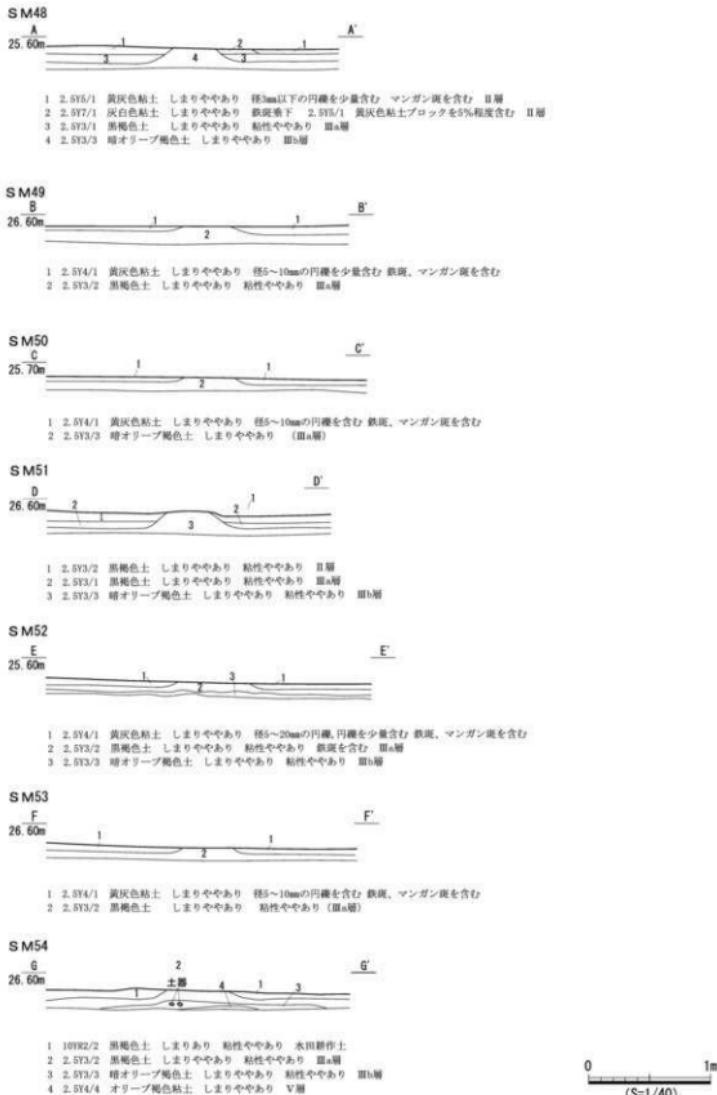


図 123 S M48 ~ 54 遺構図

0 1m
(S=1/40)

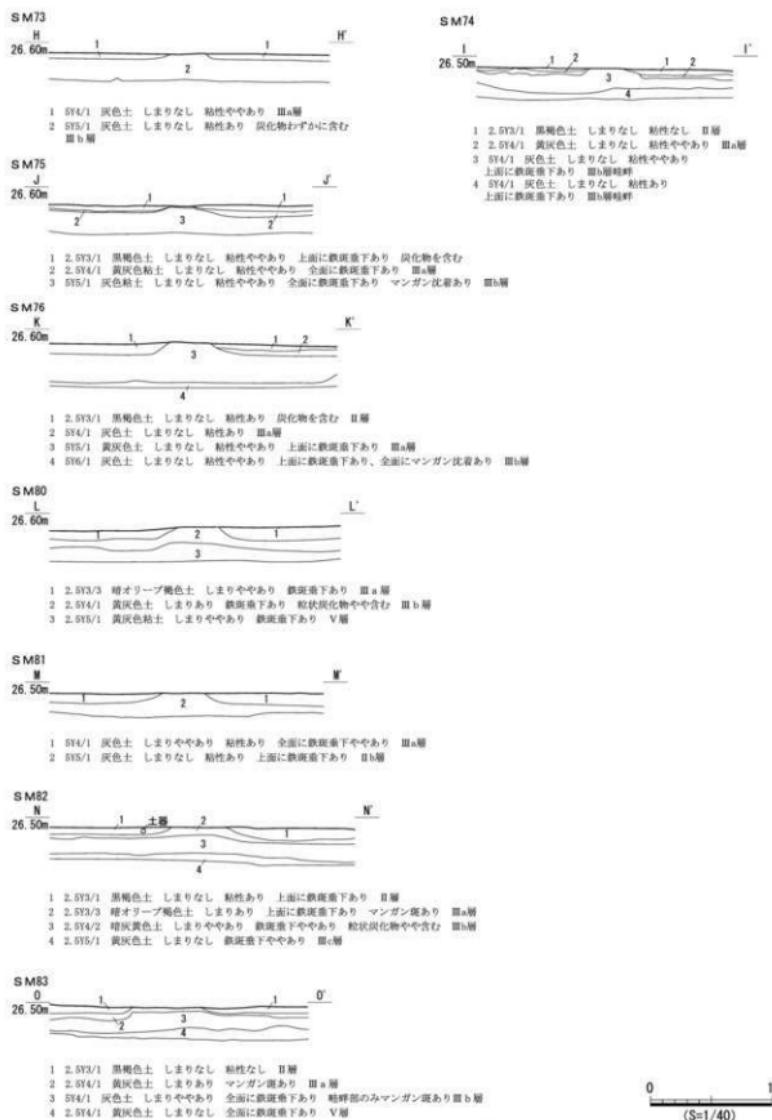
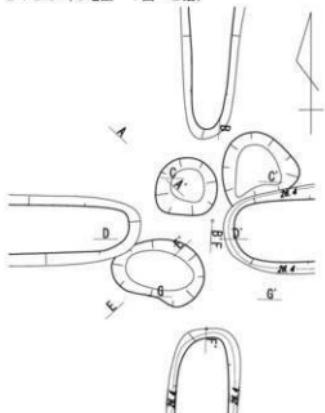


図 124 SM73～76・80～83 造構図

STD9 (C地点 1面 II層)



A
25.60m
—
4 1
—
2 3

1. 2.SY5/1 黄灰色土 しまりややあり 粘性あり
径10mm以下の円繩を少量含む 鉄斑を含む
2. 2.SY4/1 黄灰色土 しまりややあり 粘性あり
3. 2.SY3/3 増オリーブ褐色土 しまりややあり 粘性あり
4. 2.SY4/2 暗灰黄色土 しまりややあり 粘性あり 鉄斑含む

B
25.60m
—
1
—
2 3 2

1. 2.SY4/1 黄灰色土 しまりややあり 粘性あり
2. 2.SY7/1 灰白色土 しまりややあり 粘性あり 鉄斑を含む
3. 2.SY3/3 増オリーブ褐色土 しまりややあり 粘性あり

C
25.60m
—
1
—
2

1. 2.SY4/1 黄灰色土 しまりややあり 粘性あり
2. 2.SY3/3 増オリーブ褐色土 しまりややあり 粘性あり

D
25.60m
—
1
—
2

1. 2.SY7/1 灰白色土 しまりややあり 粘性あり
2. 2.SY3/3 増オリーブ褐色土 しまりややあり 粘性あり

638 出土状況



0 50cm
(638-S=1/10)

E
25.60m
—
1
—
2 3

1. 2.SY5/1 黄灰色土 しまりややあり 粘性あり
径5mm以下の円繩を少量含む
2. 2.SY4/1 黄灰色土 しまりややあり 粘性あり
3. 2.SY3/3 増オリーブ褐色土 しまりややあり 粘性あり

F
25.60m
—
1
—
2 3

1. 2.SY5/1 黄灰色粘土 しまりややあり 径5mm以下の円繩を少量含む
2. 2.SY4/1 黄灰色粘土 しまりややあり
3. 2.SY3/3 増オリーブ褐色粘土 しまりややあり

G
25.60m
—
1
—
2 3

1. 2.SY5/1 黄灰色土 しまりややあり 粘性あり
2. 2.SY4/1 黄灰色土 しまりややあり 粘性あり
3. 2.SY3/3 増オリーブ褐色土 しまりややあり 粘性あり

0 1m
(S=1/40)

図125 STD9 遺構図

SD31 (C地点 1面 II層)
 SD54 - 55 (D地点 1面 II層)
 SS 2 (C地点 1面 II層)
 SS 6 ~ 8 (D地点 1面 II層)
 ST35~40・42・43 (C地点 1面 II層)
 ST60~62・69~72 (D地点 1面 II層)
 SM45~47・55~60 (C地点 1面 II層)
 SM71・72・77~80 (D地点 1面 II層)
 SD34, SM61・62 (C地点 1面 IIIb層)
 SK87, SD56・57, SM85~86
 (D地点 1面 IIIa層)

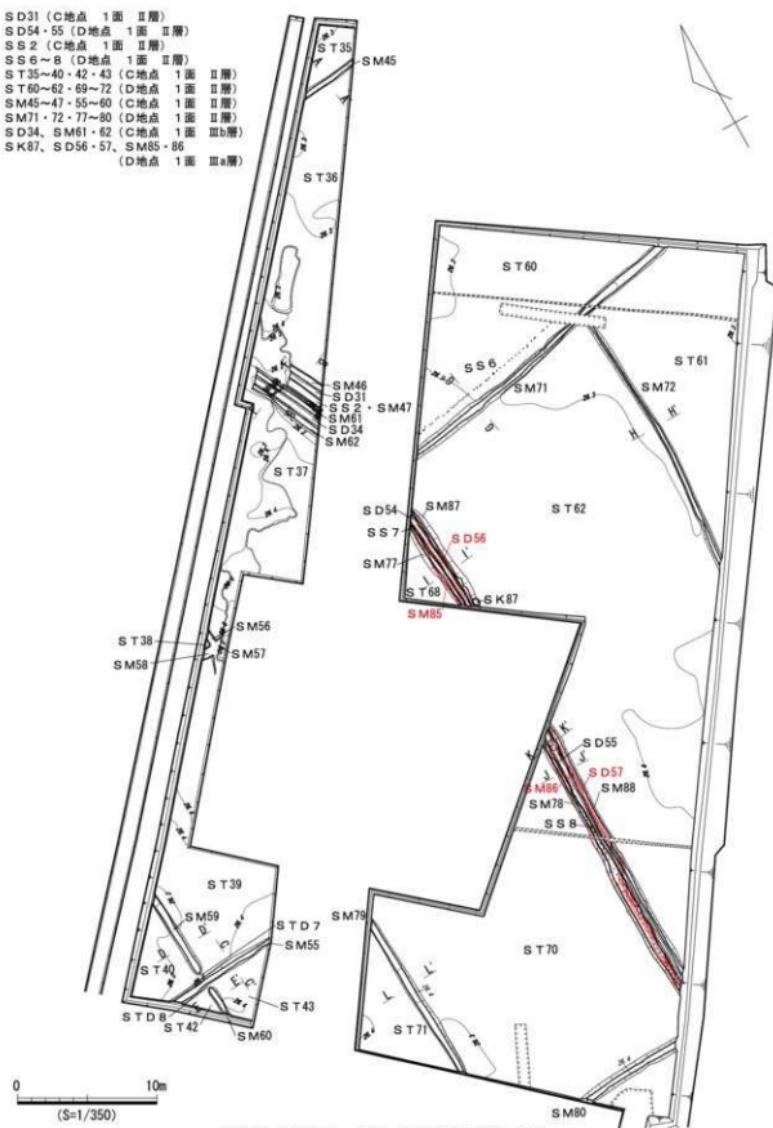


図126 CD地点 1面 中央水田遺構図 (1)

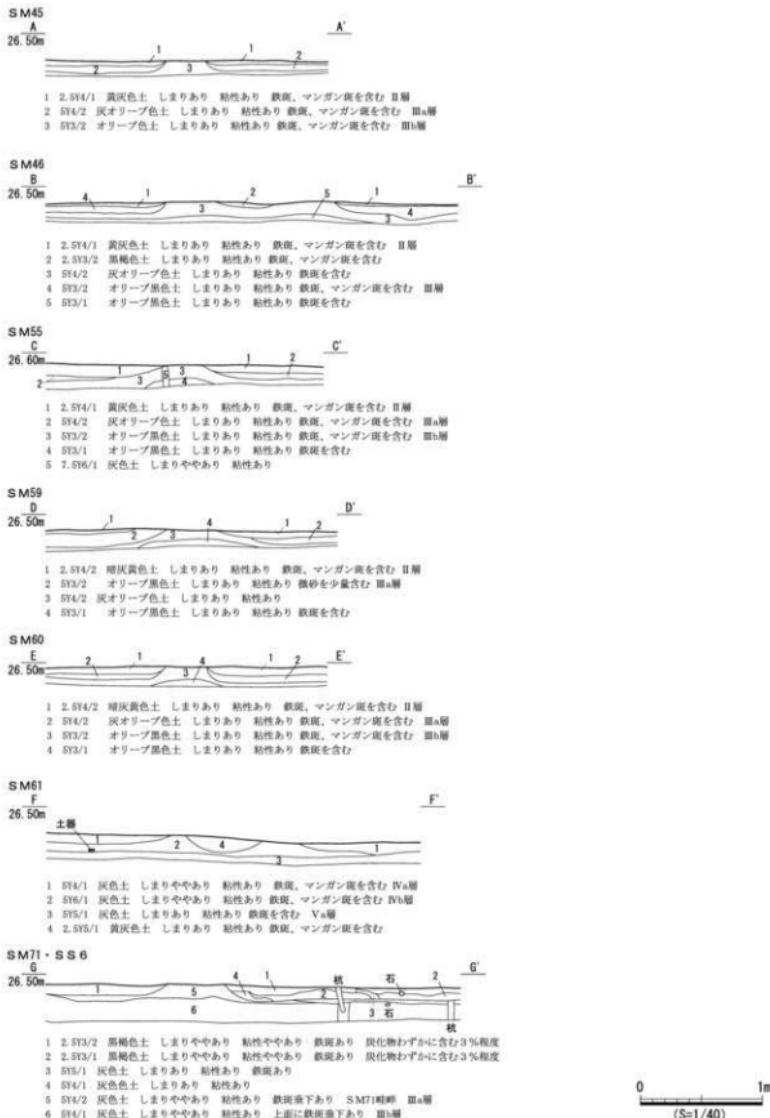


図 127 S M45・46・55・59～61・71 遺構図

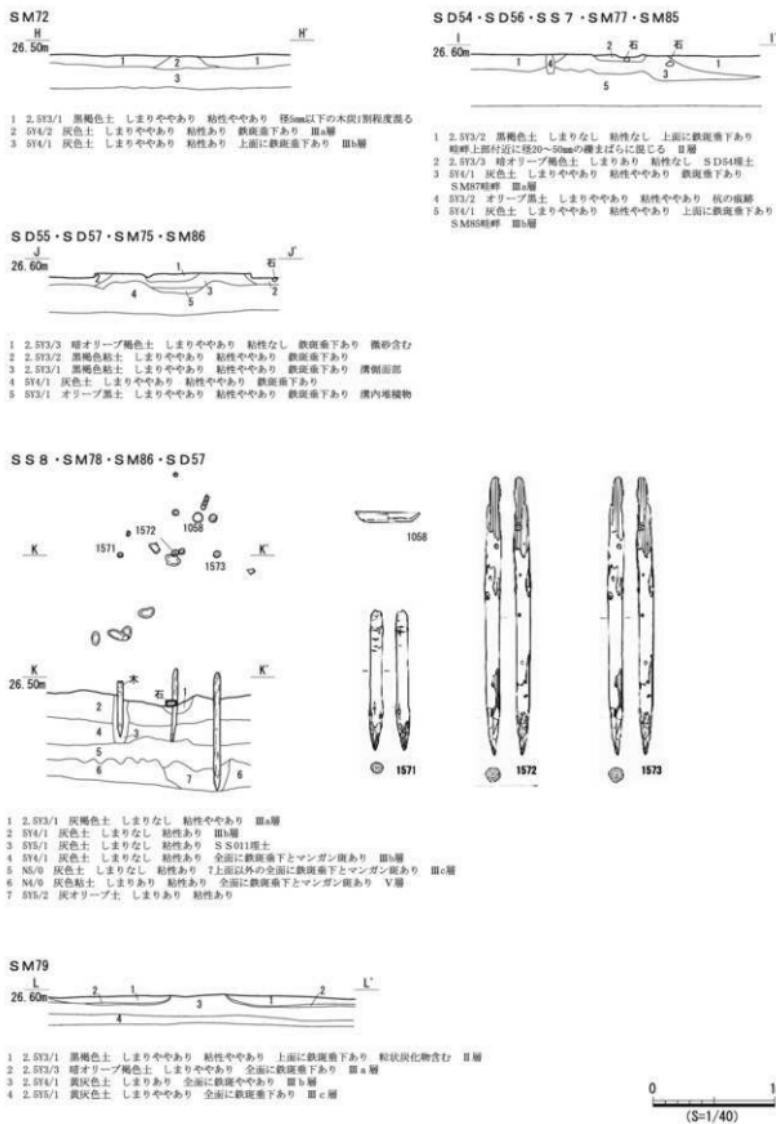


図 128 S M72・77~79・85・86 遺構図

SS 2, SD31, SM46・47 (C地点 1面、構成土Ⅲb層)

SD34, SM61・62 (C地点 1面、構成土Ⅳb層)

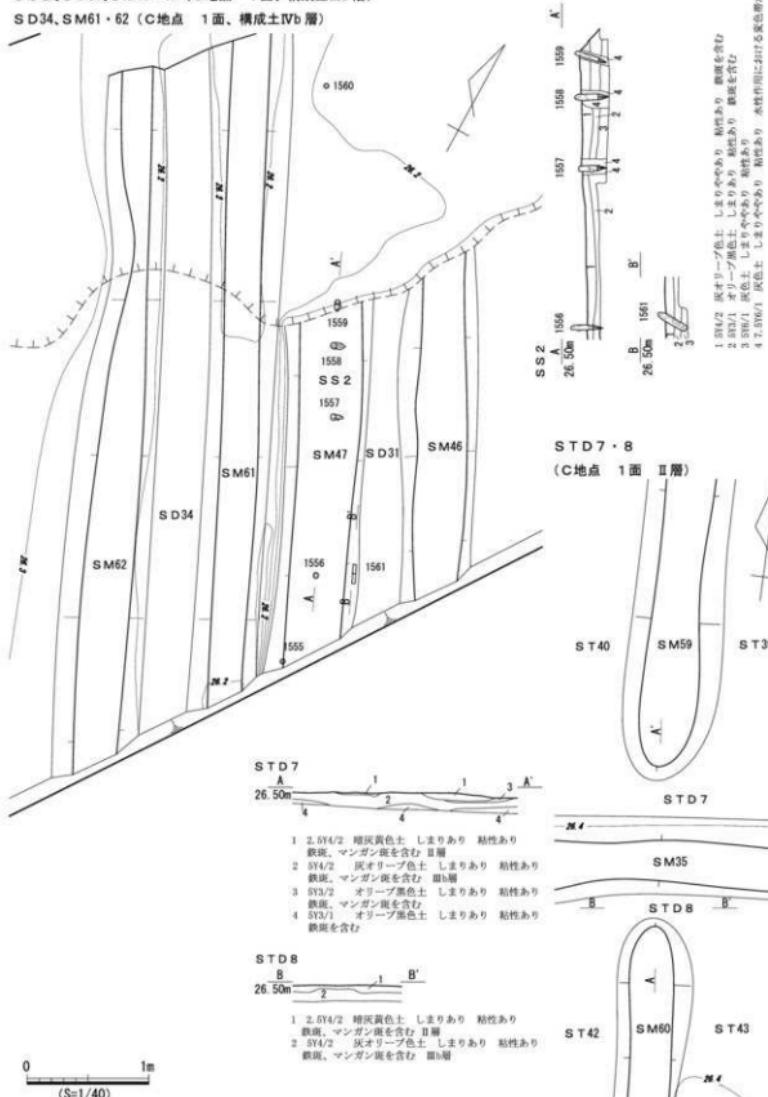


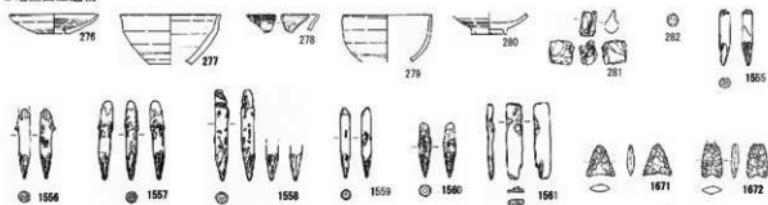
図 129 SS 2, STD 7・8 遺構図

S D31 (C地点 1面 II層)
 S D54 - 55 (D地点 1面 II層)
 S S 2 (C地点 1面 II層)
 S S 6 - 8 (D地点 1面 II層)
 S T35 - 40・42・43 (C地点 1面 II層)
 S T60 - 62・69 - 72 (D地点 1面 II層)
 S M45 - 47・55 - 60 (C地点 1面 II層)
 S M71 - 72・77 - 80 (D地点 1面 II層)
 S D34、S M61・62 (C地点 1面 IIIb層)
 S K81、S D56・57、S M85・86
 (D地点 1面 IIIa層)



図130 C・D地点 1面 中央水田造構図(2)

C地点出土遺物



D地点出土遺物

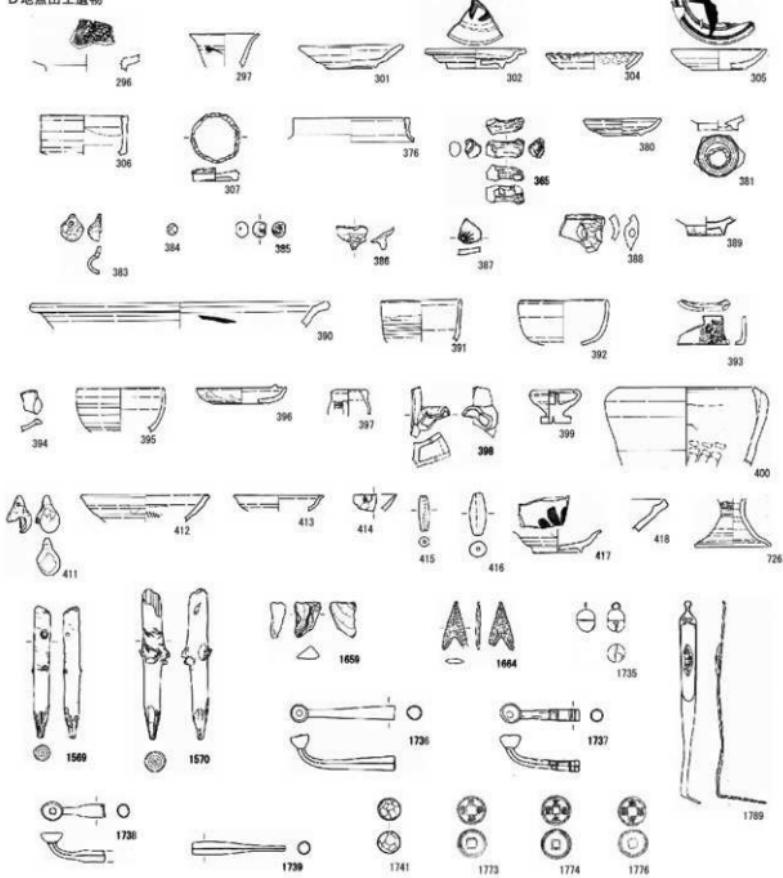


図131 C・D地点 1面 中央水田遺構図(3)

SD53, SS3~5, SM63~71, ST52~61, STR3~4 (D地点 1面 II層)

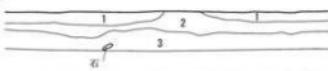
SM84~87 (D地点 1面 IIIa層)

SK86 (D地点 1面 IIIa層)

SM64

A

26.40m



1 SY3/1 オリーブ風土 しまりなし 黏性ややあり 鉄分物わずかに混じる IIIa層

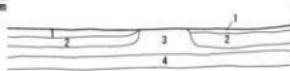
2 SY4/1 灰色土 しまりなし 黏性ややあり 岩畔上面に鉄分・マンガン斑

3 SY5/1 灰色土 しまりなし 黏性あり 磨耗層

SM65

B

26.40m



1 SY2/2 オリーブ風土 しまりなし 黏性あり IIIa層

2 SY3/1 オリーブ風土 しまりなし 黏性ややあり 全面に鉄分集中あり IIIa層

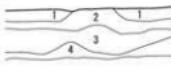
3 SY5/1 灰色土 しまりなし 黏性あり 全面に鉄分集中あり IIIb層

4 SY4/1 灰色土 しまりなし 黏性あり IIIb層

SM66

C

26.40m



1 SY3/1 オリーブ風土 しまりなし 黏性ややあり

2 SY4/1 灰色土 しまりなし 黏性ややあり 全面に鉄分集中あり

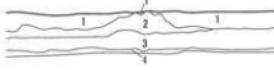
3 SY5/1 灰色土 しまりなし 黏性あり 全面に鉄分集中あり

4 SY3/1 オリーブ風土 しまりなし 黏性あり 全面に鉄分集中あり

SM67

D

26.40m



1 SY3/1 オリーブ風土 しまりなし 黏性あり IIIa層

2 SY4/1 灰色土 しまりなし 黏性ややあり 全面に鉄分集中あり

3 SY4/1 灰色土 しまりなし 黏性ややあり 全面に鉄分集中あり

4 SY5/1 灰色土 しまりなし 黏性あり

SM68

E

26.40m



1 SY3/1 オリーブ風土 しまりなし 黏性ややあり

2 SY3/2 オリーブ風土 しまりなし 黏性ややあり

3 上面に鉄分・マンガン斑着あり

3 SY4/1 灰色土 しまりなし 黏性ややあり 全面に鉄分集中あり

4 SY5/1 灰色土 しまりなし 黏性ややあり 全面に鉄分集中あり

5 SY4/1 灰色土 しまりなし 黏性あり

0 10m

(平面図:S=1/350)

0 1m

(断面図:S=1/40)

図 132 D地点 1面 北水田遺構図 (1)

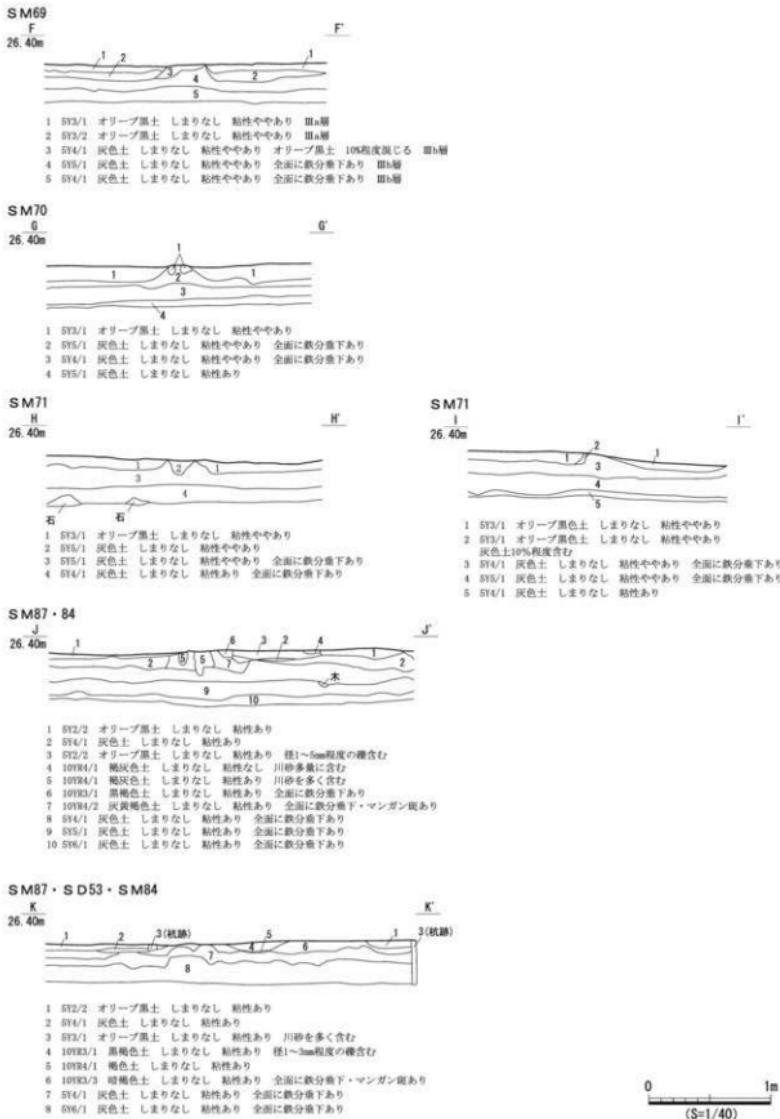


図133 S M69~71・84・87遺構図

S D53, SS 3~5, SM63~71, S T52~61, S TR3·4 (D地点 1面 II層)

SM84·87 (D地點 1面 IIIa層)

SK86 (D地點 1面 IIIa層)

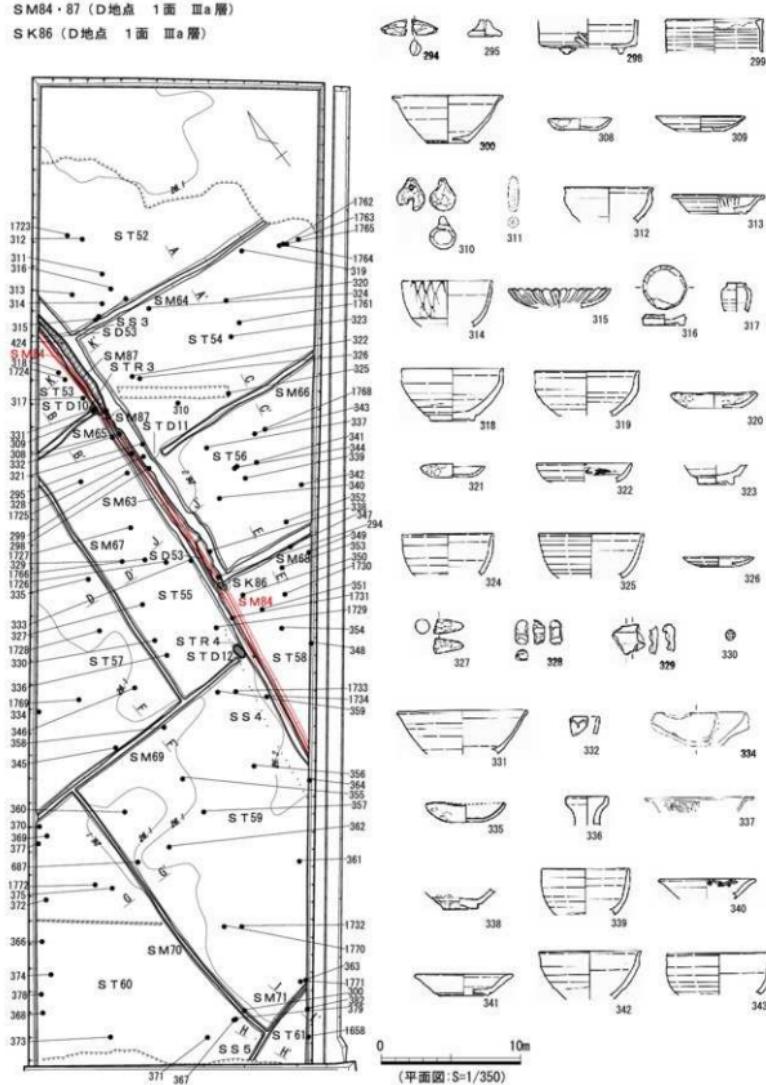


図134 D地点 1面 北水田遺構図(2)

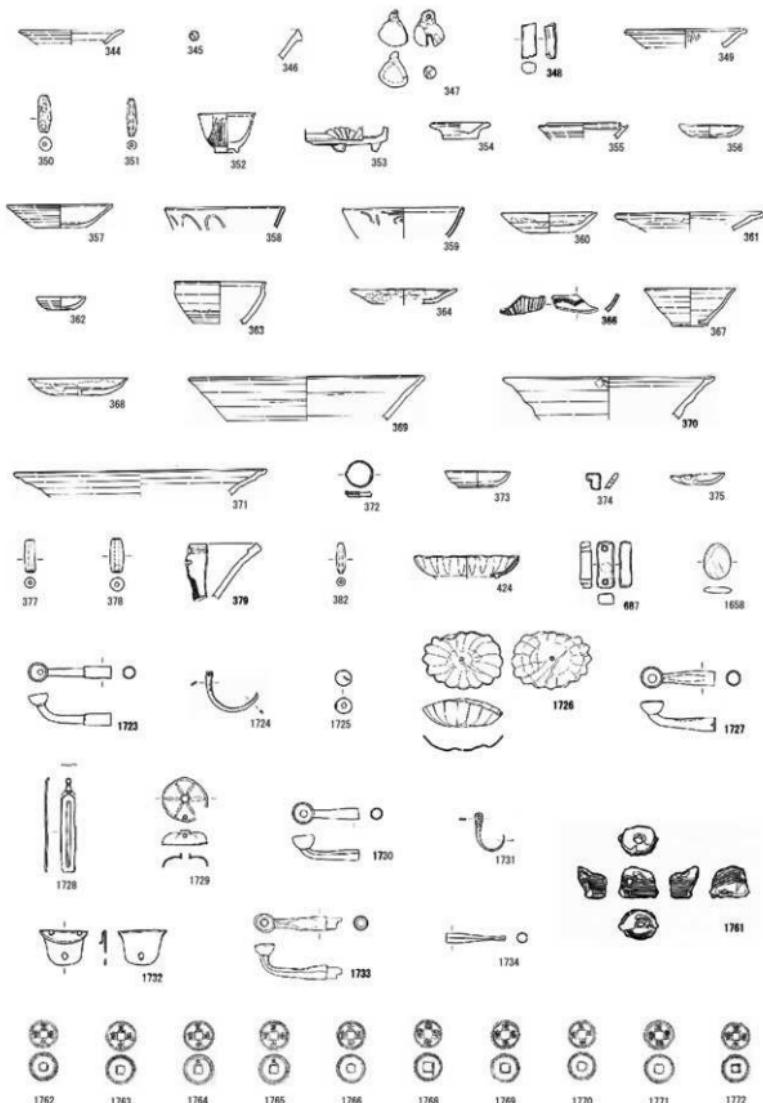
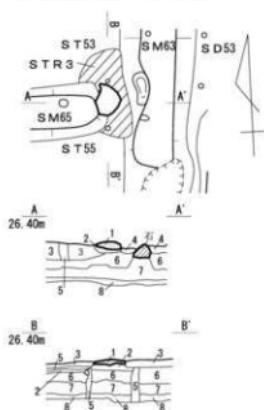


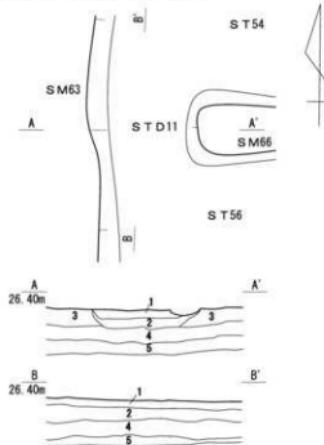
図135 D地点 1面 北水田遺構図(3)

STD10 (D地点 1面 II層)



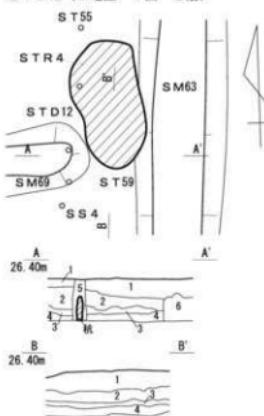
- 1 10YR5/8 黄褐色土 しまりなし 粘性なし 微1mm程度の礫砂多量に含む
- 2 10YR5/8 黄褐色土 しまりなし 粘性あり
- 3 SY4/1 灰色土 オリーブ土色 しまりなし 粘性あり SM68弱
- 4 SY3/1 オリーブ土色 しまりなし 粘性ややあり
- 5 SY3/1 灰色土 しまりなし 粘性あり 枯れ
- 6 SY3/1 オリーブ土色 しまりなし 粘性ややあり SM84弱
- 7 BY3/1 灰色土 しまりなし 粘性ややあり SM84弱
- 8 SY4/1 灰色土 しまりなし 粘性あり

STD11 (D地点 1面 II層)



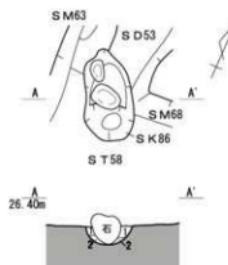
- 1 8E3/1 オリーブ土色 しまりなし 粘性ややあり IIIb弱
- 2 8Y2/2 オリーブ土色 しまりなし 粘性ややあり IIIb弱
- 3 SY4/1 灰色土 しまりなし 粘性ややあり IIIb弱
- 4 SY4/1 灰色土 しまりなし 粘性ややあり IIIb弱
- 5 SY5/1 灰色土 しまりなし 粘性ややあり IIIb弱

STD12 (D地点 1面 II層)



- 1 BY3/1 オリーブ土色 しまりなし 粘性ややあり 全面に鉄分重下あり 全体に5mm程度の礫砂多量に含む
- 2 10Y3/1 黑褐色土 しまりなし 粘性ややあり 全面に鉄分重下あり
- 3 SY4/1 灰色土 しまりなし 粘性あり 全面に鉄分重下あり
- 4 SY5/1 灰色土 しまりなし 粘性あり 全面に鉄分重下あり
- 5 10YR2/1 黑褐色土 しまりなし 粘性ややあり 川砂を多量に含む
- 6 10YR2/1 黑褐色 しまりなし 粘性ややあり 川砂を少量含む

SK86 (D地点 1面 II層)



- 1 10YR2/2 黑褐色土 しまりなし 粘性ややあり 微5mm程度の礫砂じる
- 2 10YR3/1 黑褐色土 しまりなし 粘性ややあり 微1mm~3mm程度の礫砂じる

0 1m
(S=1/40)

図 136 STD10 ~ 12, SK86 遺構図 (1)

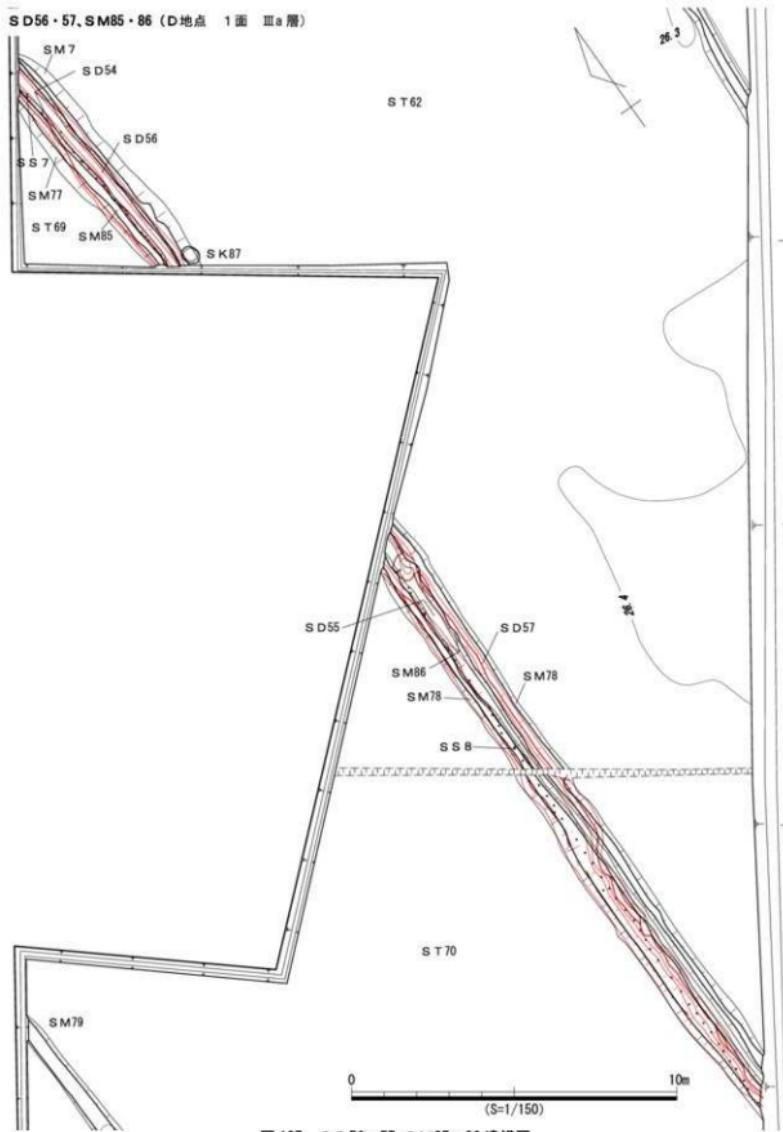
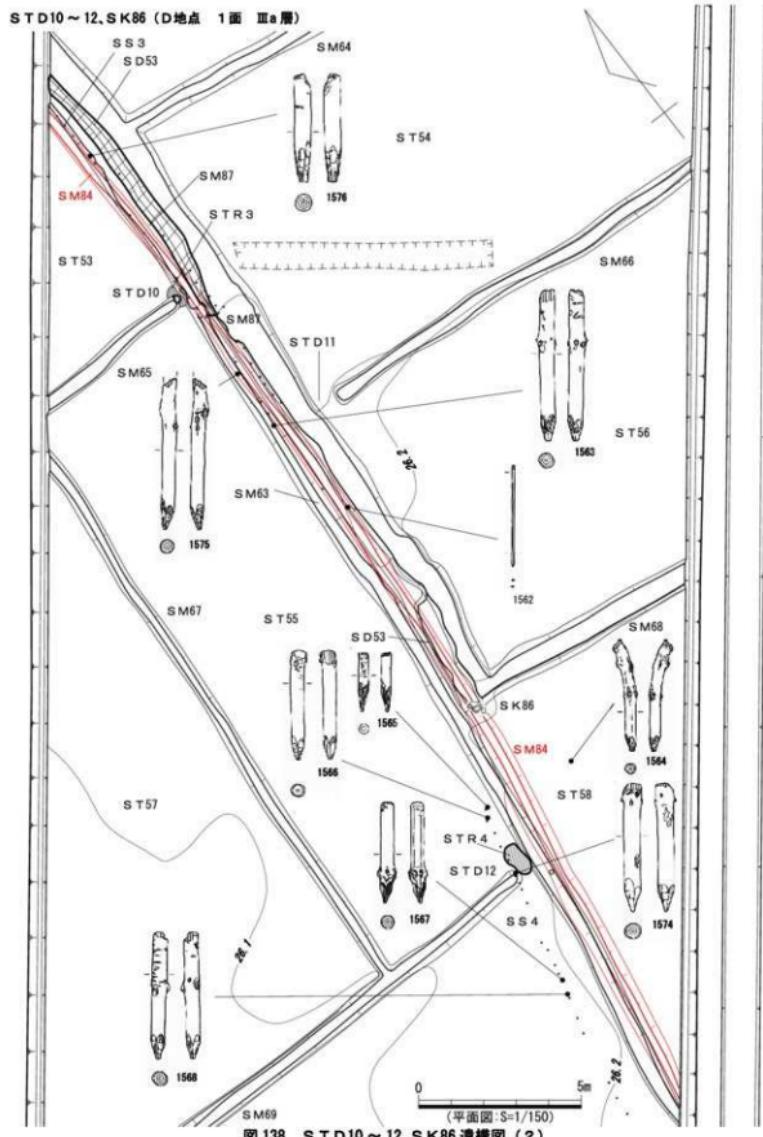


図137 S D56 · 57, S M85 · 86 遺構図



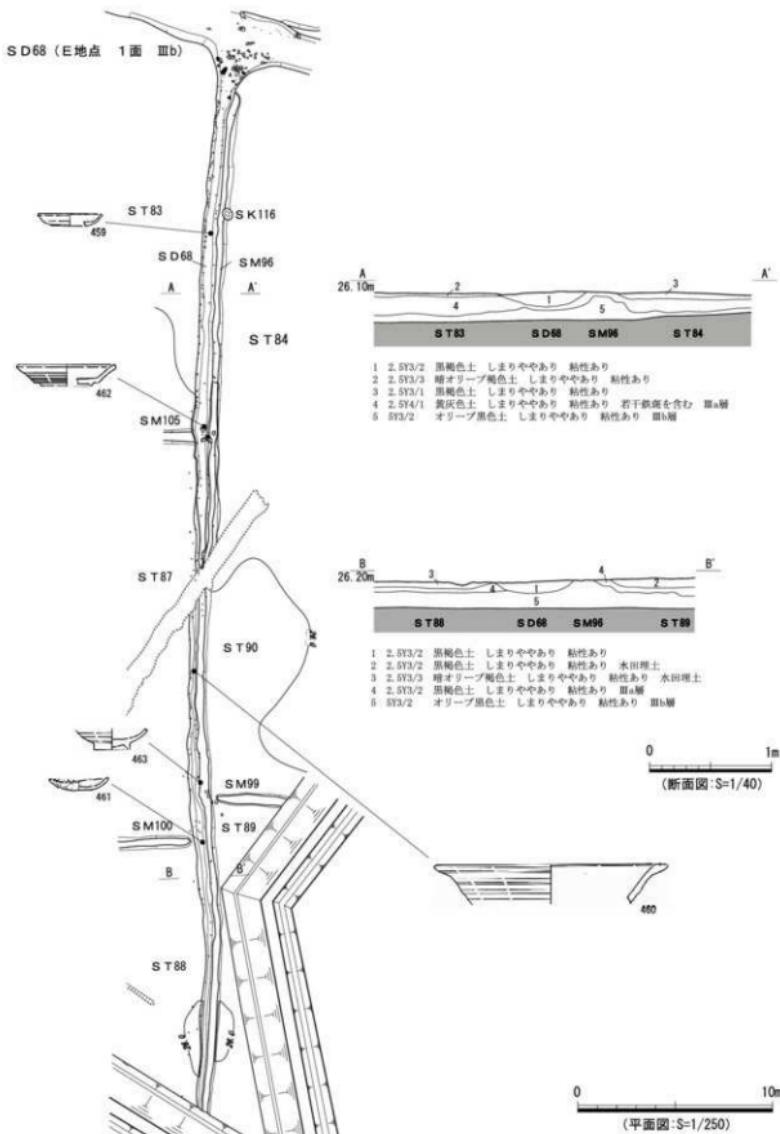


図 139 SD68 遺構図

SD 66～69 (E地点 1面 IIIb層)

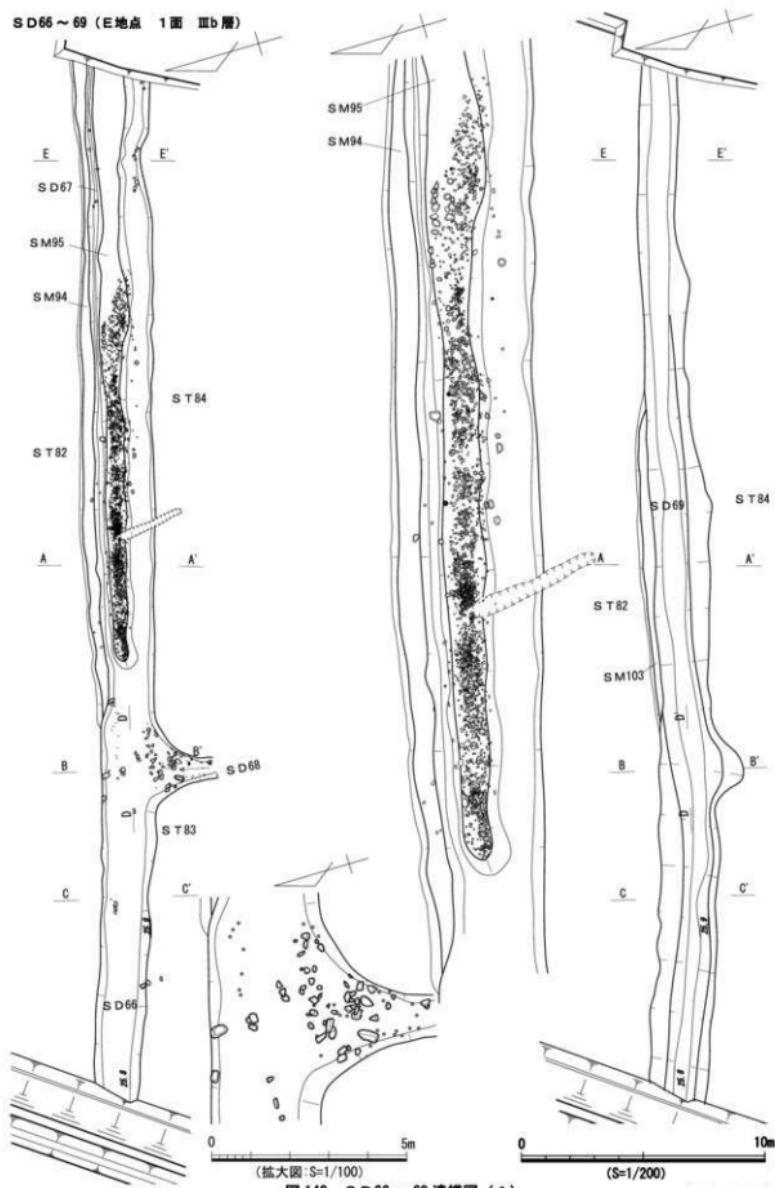


図 140 SD 66～69 造構図 (1)

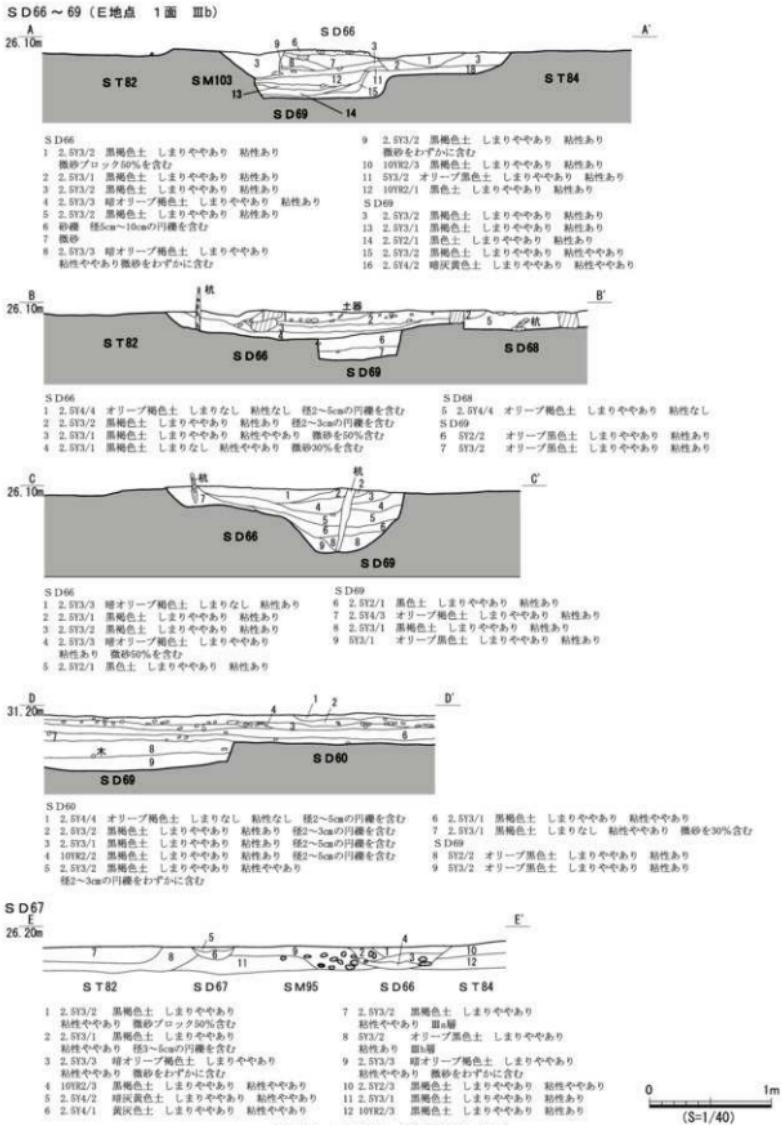


図 141 S D 66 ~ 69 遺構図 (2)

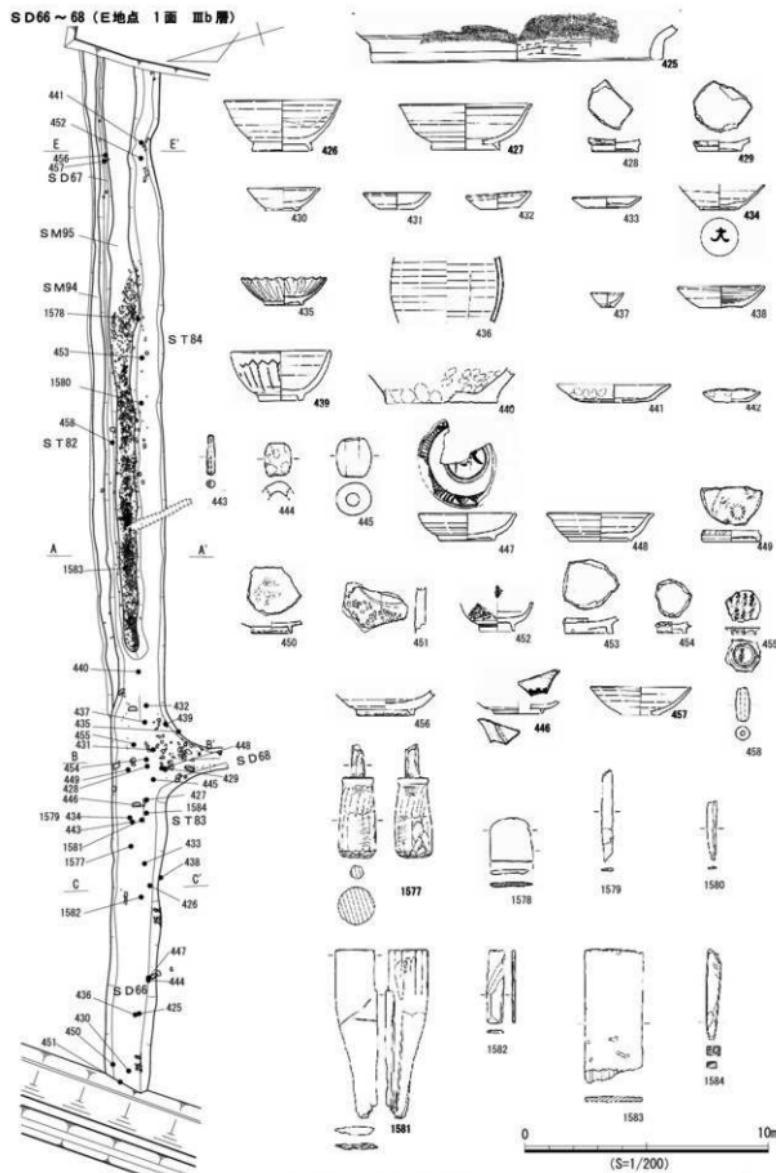


図 142 S D 66 ~ 68 遺構図

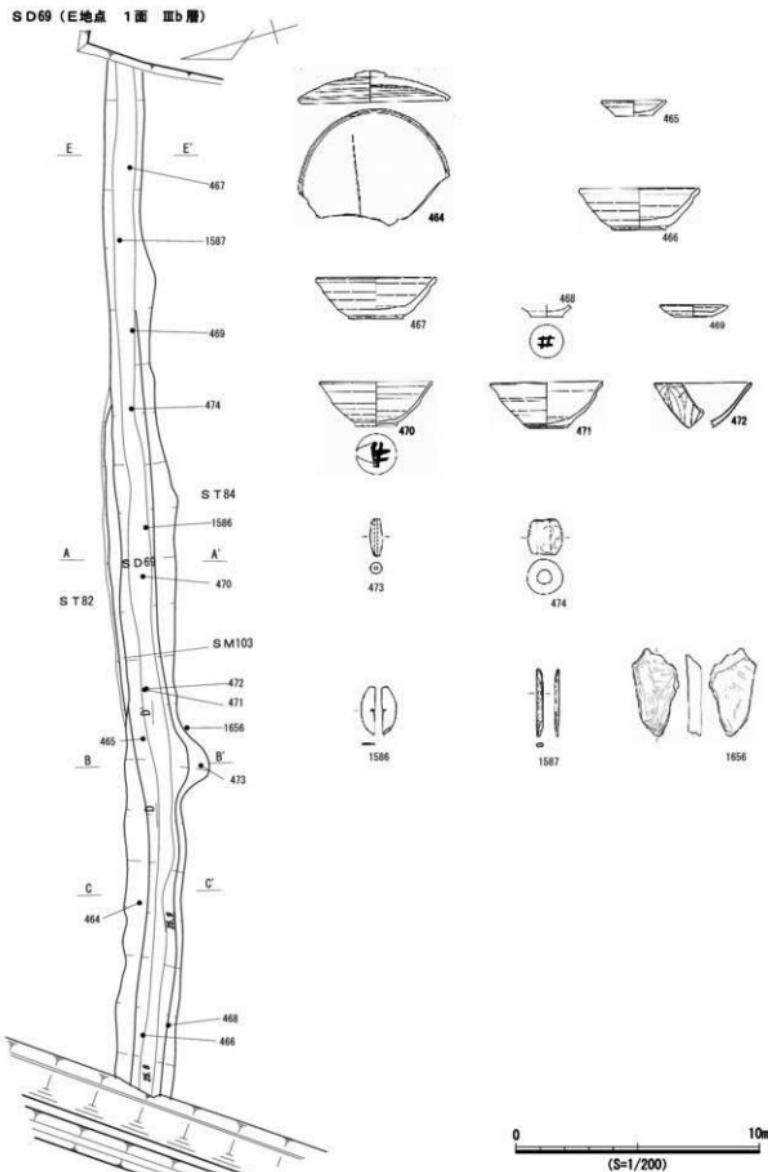


図 143 SD69 遺構図

SD66～68, SM88～95, ST74～84 (E地点 1面 IIIb層)

SD69 (IIIc層)

SM101～103 (E地点 1面 IIIc層)

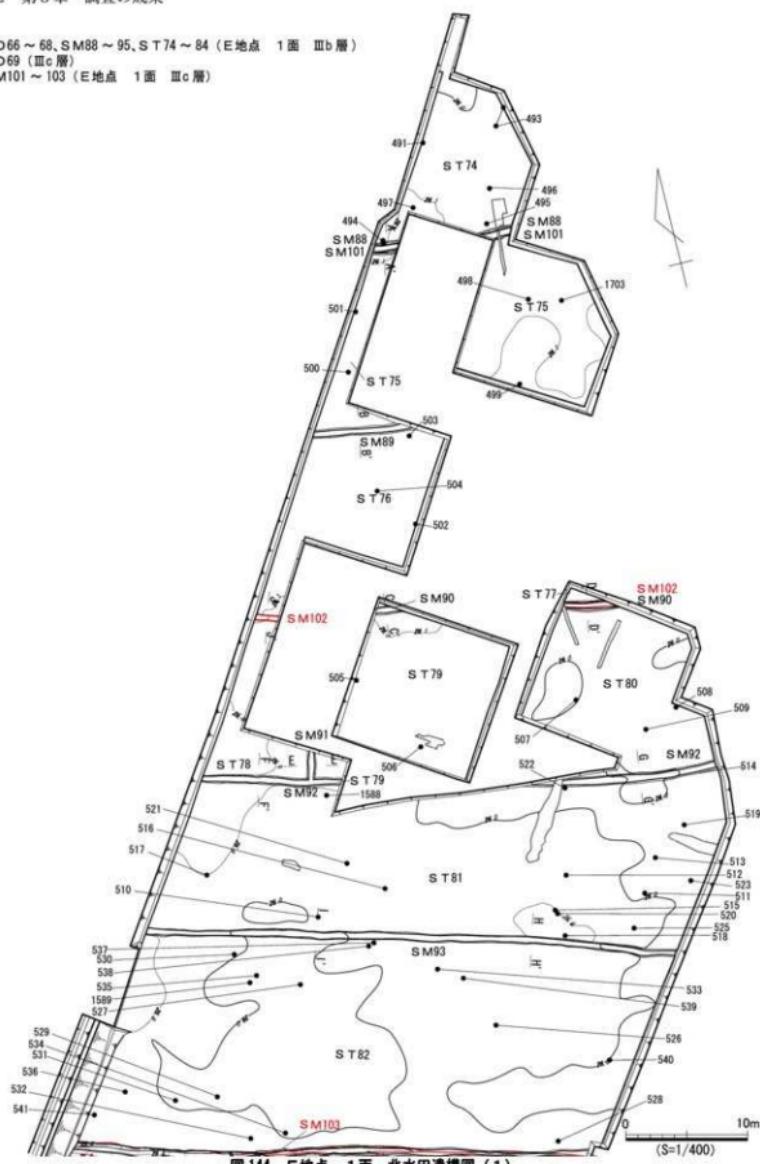


図144 E地点 1面 北水田遺構図(1)



図145 E地点 1面 北水田遺構図（2）

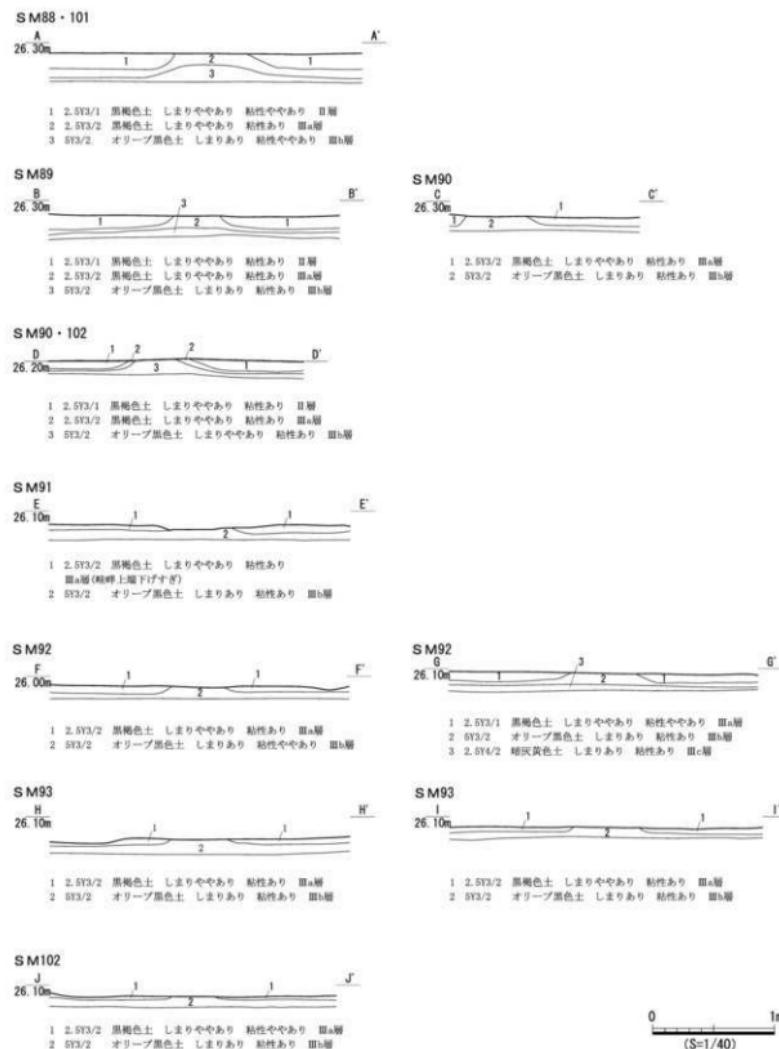


図 146 S M87 ~ 93・101・102 造構図

S D66 ~ 69 (E地点 1面 IIIb層)
 S M94 ~ 100 (E地点 1面 IIIb層)
 S T85 ~ 90 (E地点 1面 IIIb層)
 S T D13 (E地点 1面 IIIb層)
 S M103 ~ 109 (E地点 1面 IIIc層)

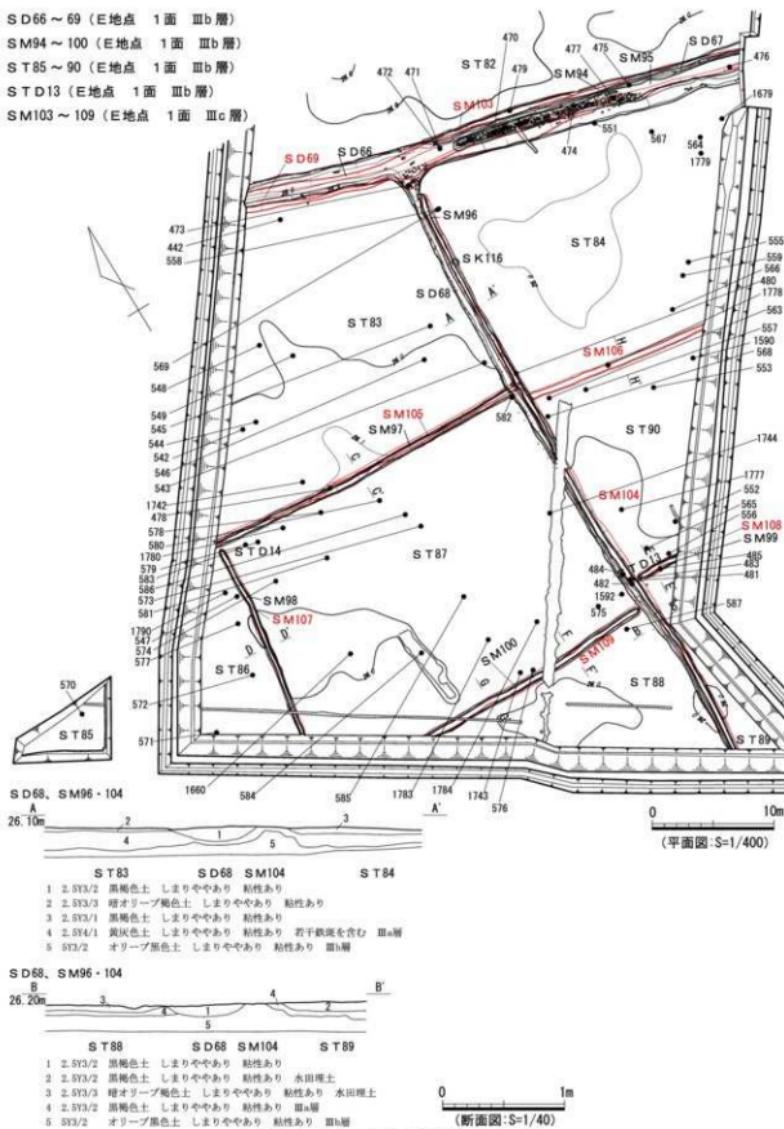


図 147 E 地点 1面 南水田遺構 (1)

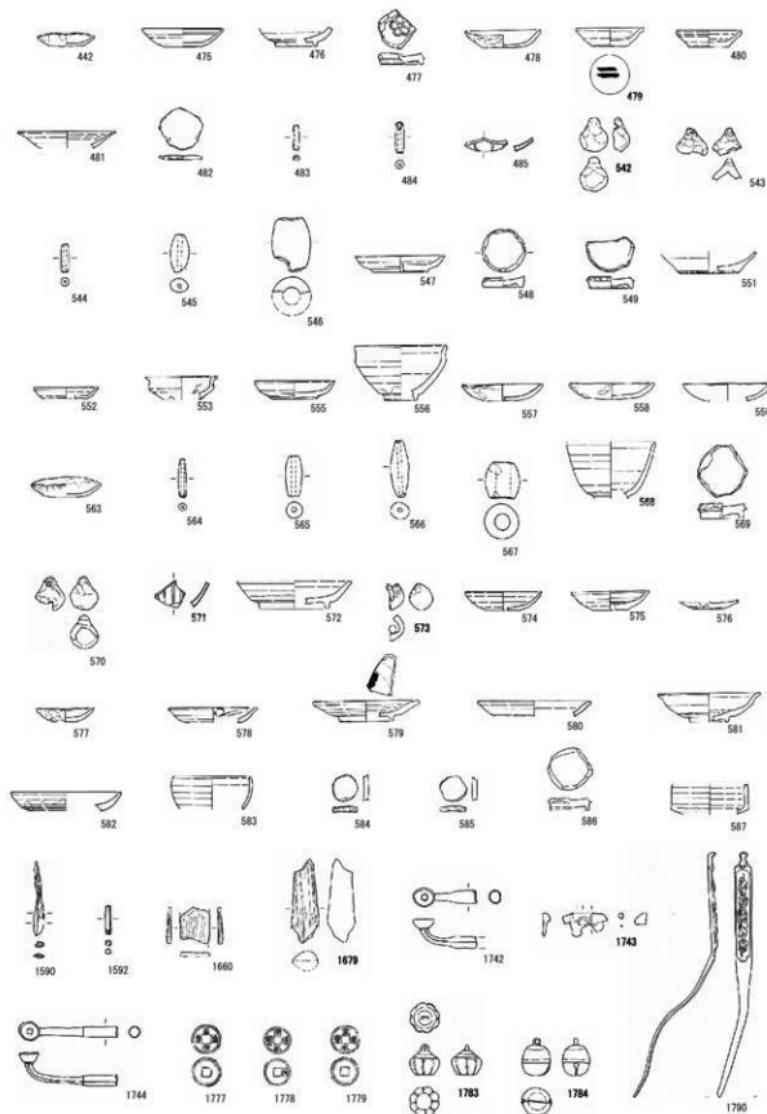


図148 E地点 1面 南水田遺構図(2)

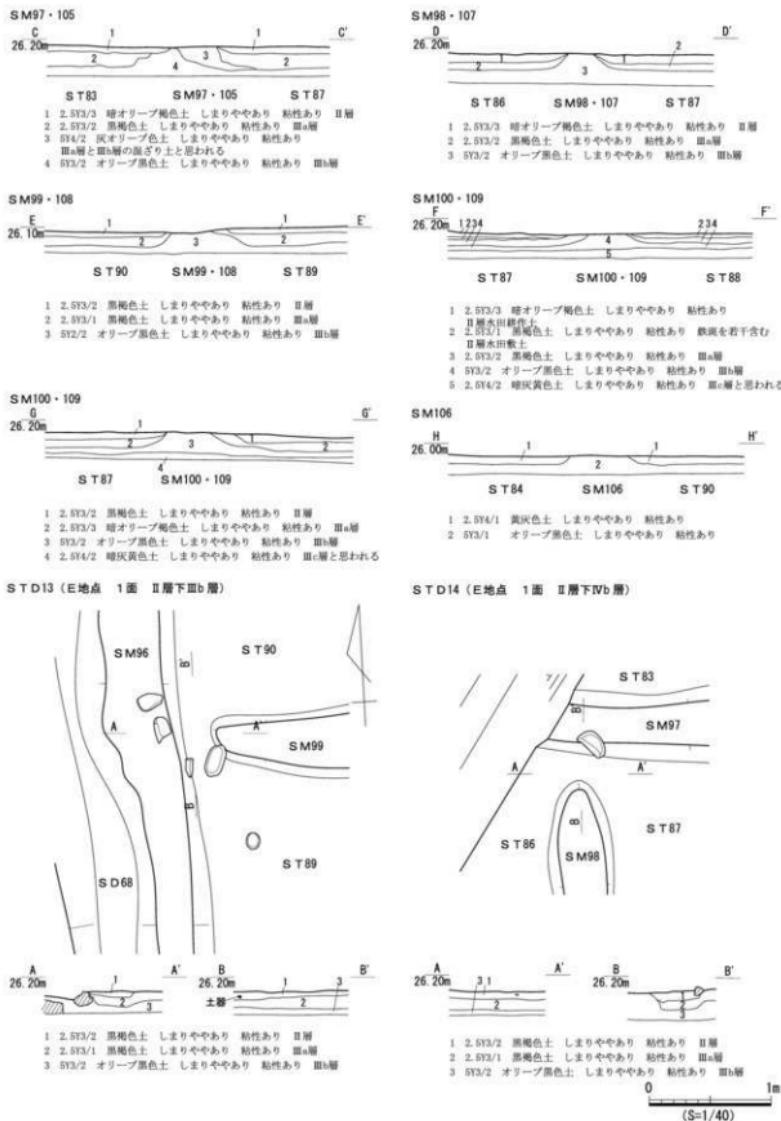


図 149 S M97 ~ 100 · 106 遺構図

SM110～118, ST91～100 (E地点 2面 IIIc層)

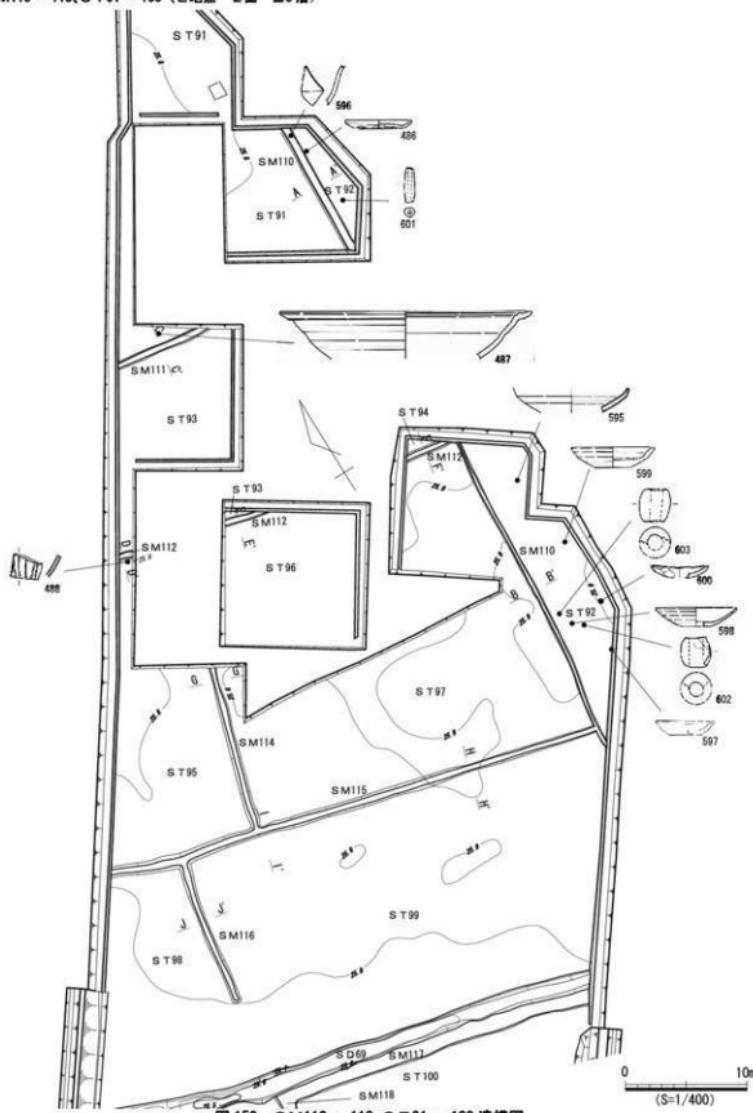


図150 SM110～118, ST91～100 造構図

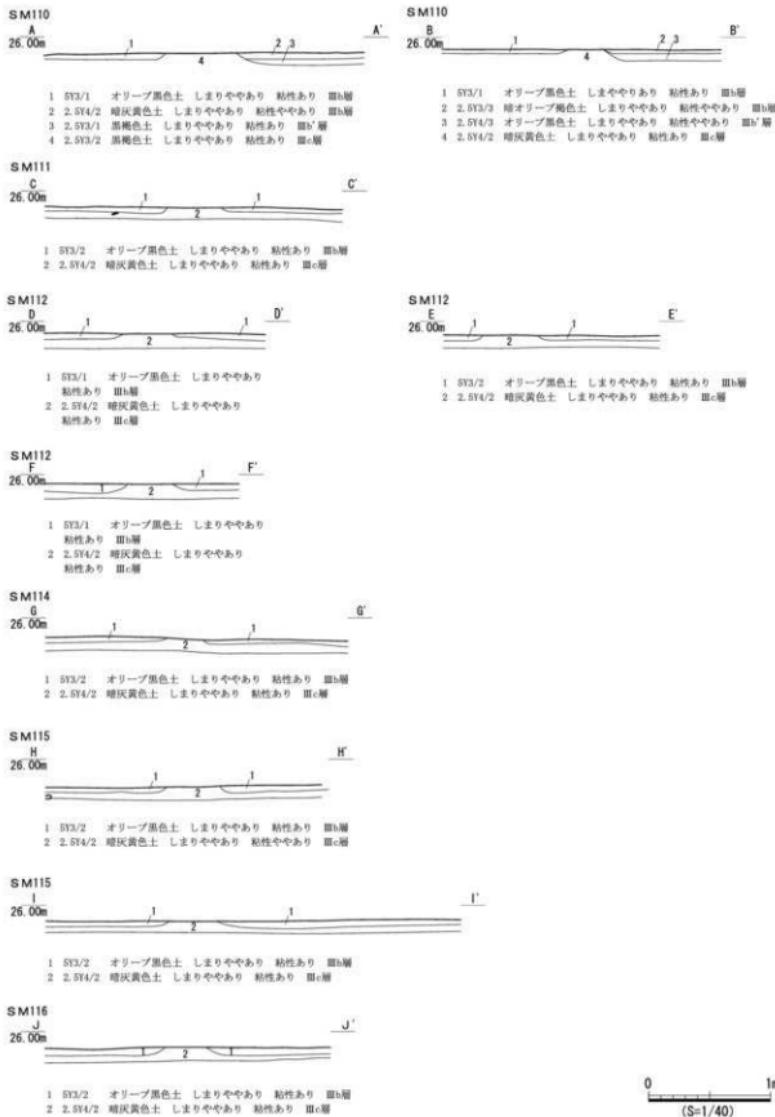


図 151 SM110～112・114～116 遺構図

SD69、SM117～SM121 (E地点 2面 IIIc層)
 ST100～103 (E地点 2面 IIIc層)

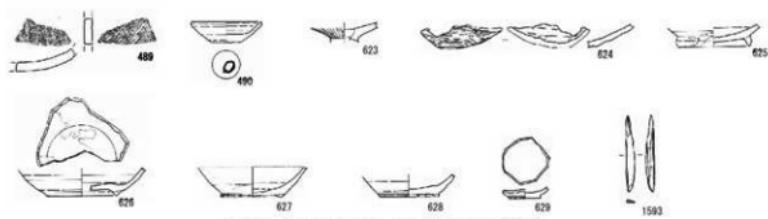
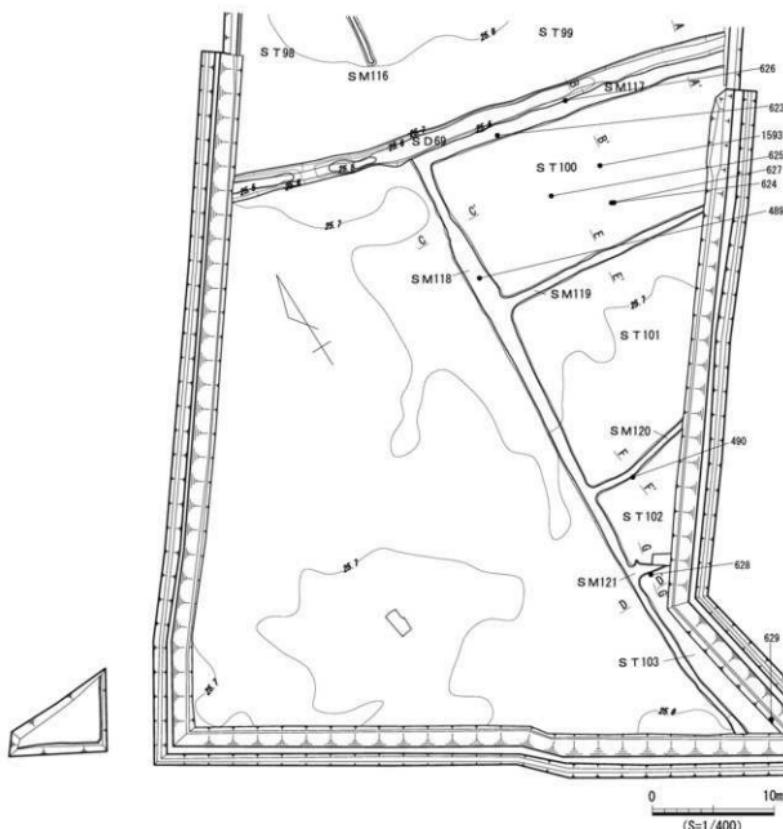


図152 SM117～121, ST100～103 造構図

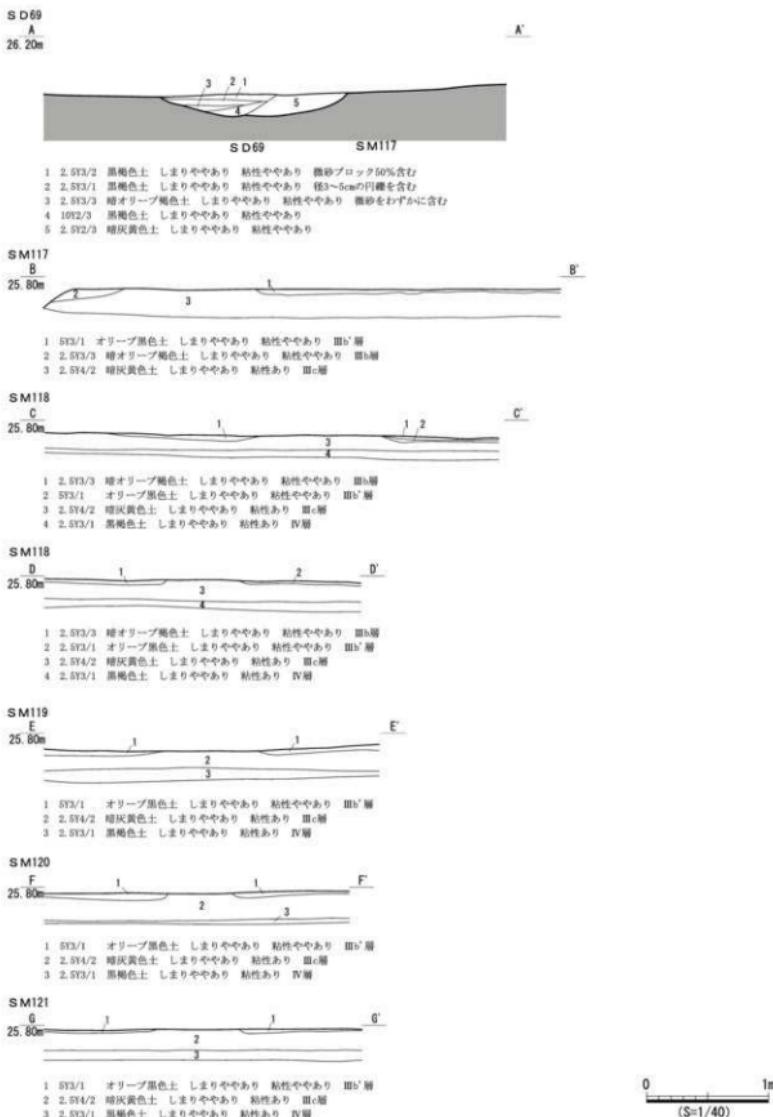
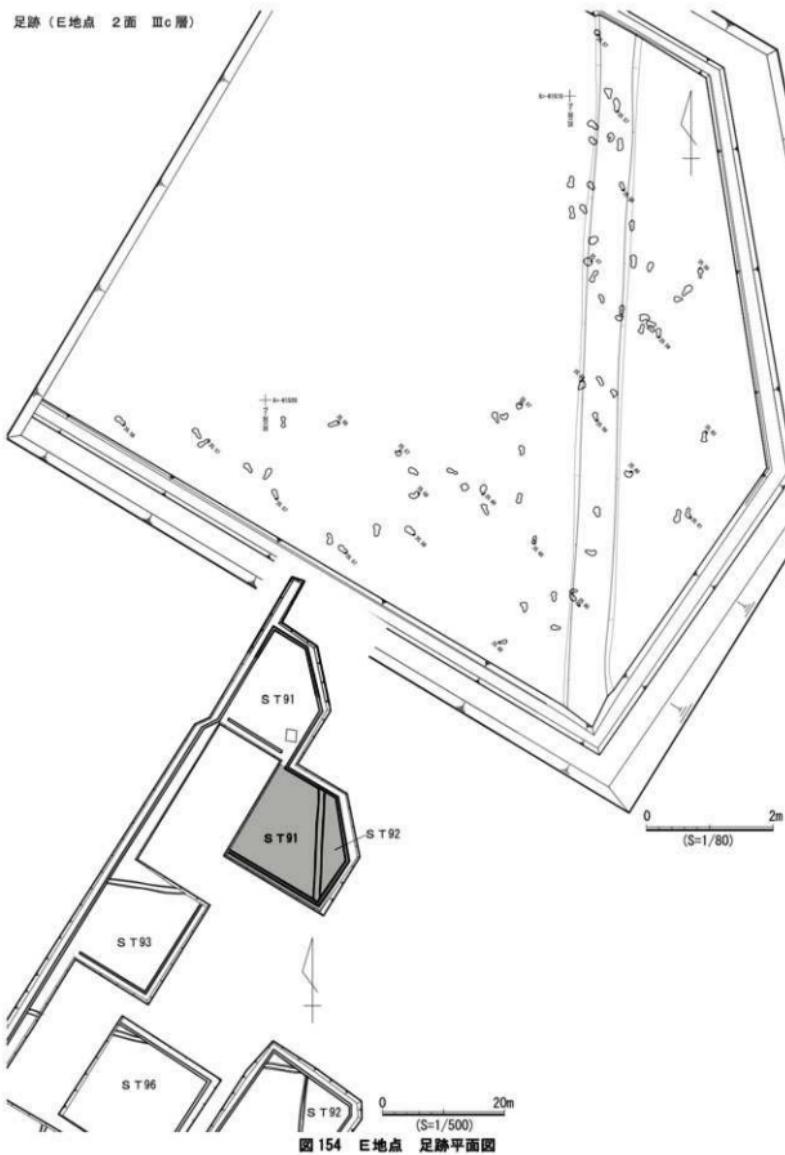


図 153 S D69、SM117～121 遺構図



第6節 遺物（古墳～江戸時代）

ここでは各時期に属する遺構出土及び包含層出土で図版に掲載したものについて述べる。各時期及び種別毎の遺物概要については、第3章3節遺物概要に、各遺構出土の遺物の概要及び遺構の時期決定については第3章第4・5節遺構本文にそれぞれ記載している。

水田関係以外の遺構出土遺物

A 地点3面（古墳時代）

S D 1・3（図155） S D 1からは古墳時代中期の甕（1）が出土しており、それを図示した。

B 地点1面（近世）

S K 24（図161） 出土遺物8点のうちの2点を図示した（83～84）。83は大窯第3段階の擂鉢、84は登窯第4小期の菊皿である。

B 地点3面（古墳時代）

S A 2（図155） 出土遺物は3点のうちの1点を図示した（2）。2は古墳時代前期の松河戸式期の土師器甕の脚部である。

S D 27（図155） 出土遺物9点のうちの2点を図示した（3・4）。3は弥生時代中期中葉貝田町式と思われる甕、4は土師器高坏である。

S D 28（図155） 出土遺物21点のうちの1点を図示した（5）。5は7世紀後半代須恵器ミニチュア鉢である。

S K 25（図155） 出土遺物3点のうちの1点を図示した（6）。6は大洞東1号窯式期の山茶碗皿で、底部外面に墨書がある。

S K 28（図155） 出土遺物43点のうちの2点を図示した（7・8）。7・8はA 2類の丸底の土師器甕である。

S U 1（図155） 出土遺物19点のうちの2点を図示した（9・10）。9は廻間式期の土師器の壺で、10は古墳時代前期のS字状口縁台付甕である。

C 地点1面（近世）

S D 32（図161） 出土遺物140点のうちの4点を図示した（85～88）。85・86は7世紀中期後葉須恵器有台坏と盤、87は古瀬戸後IV期古の平碗、88は登窯第1・2小期の志野皿である。

S D 33（図161） 出土遺物217点のうちの4点を図示した（89～92）。89はA 2類の土師器甕、90は7世紀後葉～8世紀前葉の須恵器摘み蓋、91は8世紀代の須恵器長頸瓶、92は尾張第6形式の山茶碗である。

S K 29～33（図161） 出土遺物122点のうちのSK 29出土6点を図示した（93～98）。93～95は7世紀中葉の須恵器の坏身、96は7世紀後葉の坏身、97は7世紀代の須恵器壺、98はK-90号窯式期の灰釉陶器碗である。

C 地点2面（古墳時代・平安時代）

S B 1（図155） 出土遺物69点のうちの3点を図示した（11～13）。11はA2類の土師器甕、12は7世紀前半の須恵器高坏の脚部、13は7世紀代の須恵器横瓶である。

S H 1（図156・221） 出土遺物22点のうちの4点を図示した（34、1495～1497）。遺構別にみるとP14が9点、P15が3点、P16が5点、P17が3点、P18が2点である。34はP16出土7世紀須恵器甕、1495はP14出土柱、1496はP15出土柱、1497はP16出土柱である。

S H 2（図156・221） 出土遺物30点のうちの3点を図示した（35・36・1498）。遺構別にみるとP20が9点、P22が17点、P27が3点、P28が1点である。P20の須恵器は1層、土師器は4層の柱穴の掘形埋戻し土から、P22の土師器は2・4層からの出土である。そのうち、P20出土の土師器甕（35）、7世紀前半須恵器蓋1点（36）、P22出土柱（1498）を掲載した。

S D 35（図156） 出土遺物28点のうちの2点を図示した（14～15）。14は廻間式期の土師器壺、15は7世紀前半須恵器蓋である。

S D 41（図156） 出土遺物14点のうちの1点を図示した（16）。16は土錘である。

S D 44・45・47（図156） 出土遺物45点のうちのSD44出土の2点を図示した（17・18）。17は白土原1号窯式期の山茶碗、18は土師器伊勢型鍋である。

S D 46（図156） 出土遺物90点のうちの1点を図示した。19は尾張第6形式の山茶碗皿である。

S D 49（図156） 出土遺物5点のうちの1点を図示した。20はK-90号窯式期の灰釉陶器碗である。

S D 50（図156） 出土遺物15点のうちの2点を図示した（21・22）。21は8世紀末伊勢産と思われる須恵器壺で、野内遺跡B地区にも出土例がある。22は0-53号窯式期の灰釉陶器碗で使用痕がある。

S D 51（図156） 出土遺物118点のうちの6点を図示した（23～28）。23は7世紀後葉～8世紀前葉の須恵器無台壺、24は8世紀代須恵器鉢か瓶、25は0-53号窯式期の26はH-72号窯式期の灰釉陶器碗、27は美濃須衛窯VII形式（11世紀後半）の灰釉陶器輪花碗、28は三河産の土師器清郷型甕である。

S D 52（図156） 出土遺物177点のうちの5点を図示した（29～33）。29は7世紀前半の須恵器高坏、30は0-53号窯式期の灰釉陶器碗、31は白土原1号窯式期の32は明和1号窯式期の山茶碗、33は白磁碗である。

S K 52（図157） 出土遺物6点のうちの1点を図示した（37）。37は7世紀前半代須恵器高坏である。

S K 56～61・63・64（図157） 出土遺物はSK56から1点、SK59から2点、SK61から6点、SK62から2点が出土している。そのうちのSK61出土の1点を図示した（38）。38はK-90か0-53号窯式期の灰釉陶器碗で内外面前面にタールが付着している。

S K 70・77～79（図157） 出土遺物はSK70から2点、SK78から33点、SK79から8点が出土しており、そのうちのSK70出土のK-90か0-53号窯式期の灰釉陶器瓶（39）を掲載した。

S K 81（図157） 出土遺物7点のうちの1点を図示した（40）。40は7世紀前半須恵器壺身である。

S K 82（図157） 出土遺物8点のうちの1点を図示した（41）。41は世紀前半須恵器壺身である。

S K 84（図157） 出土遺物131点のうちの3点を図示した（42～44）。42は7世紀前半の須恵器返

り蓋で乳頭状の摘みを持つ佐波理の写しである。43はK-90号窯式期の、44は0-53かH-72号窯式期の灰釉陶器碗である。

S X 1 (図 157) 出土遺物 184 点のうちの 3 点を図示した (45~47)。45~47 は A 2 類の丸底の土師器甕である。

D 地点 2 面 (古墳時代)

S D 60 (図 158) 出土遺物は 54 点のうちの 8 点を図示した (48~55)。48 は 6 世紀後半～7 世紀前半の伊勢型甕、49 は土師器瓶、50~54 は 7 世紀前半の須恵器でそれぞれ蓋・坏身・高坏脚部・横瓶・壺である。50・51 はセットの可能性がある。55 は 7 世紀代の須恵器甕である。

S D 61 (図 158) 出土遺物 38 点のうちの 2 点を図示した (56・57)。56 は 7 世紀後半の須恵器鉢で S D 60 出土の破片と接合している。57 は A 1 類の丸底の伊勢型甕で搬入品である。

S D 64 (図 158) 出土遺物 4 点のうちの 1 点図示した (58)。58 は 7 世紀前半須恵器坏身である。

S D 65 (図 158・221) 出土遺物 15 点のうちの 2 点を図示した (59・1499)。59 は 6 世紀末～7 世紀初の須恵器高坏、1499 は木製品の壁板である。

S I 1・2 (図 159) 出土遺物は S I 1 から 49 点、S I 2 から 296 点のうちの 14 点を図示した (60~73)。そのうち、60~63 は S I 1 出土の 7 世紀後葉須恵器無台坏・巻・提瓶・瓶で、64 は S I 2 出土の土師器瓶、65~70 は 7 世紀後葉の須恵器摘み蓋・無台坏・盤で、69 は底部内面にヘラ記号がある。71 は 8 世紀末の須恵器長頸瓶、72 は 9 世紀前葉須恵器盤、73 は須恵器甕の胴部が付着した焼台である。

S K 115 (図 159) 出土遺物は中近世土師器 5 点であり、そのうちの鎌倉時代の土師器皿 (74) を掲載した。

E 地点 3 面 (古墳時代)

S D 73・74・75・77 (図 160・221) 出土遺物は S D 73~75 ではなく、S D 77 から 20 点が出土している。75 は S D 77 出土の谷迫間 2 号窯式期の山茶碗、1501 は板状木製品である。

S D 76 (図 221) 出土遺物は木製品 1 点で、杭 (1500) を掲載した。

S D 78 (図 160) 出土遺物 4 点のうちの 2 点を図示した (76・77)。76 は弥生時代中期甕、77 は 7 世紀後葉須恵器有台坏である。

N R 1 (図 160) 出土遺物 8 点のうちの 4 点を図示した (78~81)。78~80 は 7 世紀後葉須恵器返り蓋・提瓶・平瓶、81 は土錘、1502 は護岸材である。78 は内面にヘラ記号がある。80 の中からはスマモの種が 1 点出土している。

N R 2 (図 160) 出土遺物 8 点のうちの 1 点を図示した (82)。82 は S 字状口縁台付甕 A 類である。

水田関係遺構出土遺物

A 地点1面水田遺構（SM1、ST1・2）（図162・242） SM1出土5点、ST1・2出土120点のうちの6点を図示した（100～104・1745）。100はSM1出土古瀬戸擂鉢、102はST1出土登窯蓋・103は蟹盤・104は灯明皿、1745はST1から出土した淳化元寶である。

A 地点2面水田遺構（SM2、ST4・5）（図162・163・222・223・242） A地点2面水田遺構からの出土遺物1,296点のうちの37点を図示した（105～141・1503～1517・1746）。101はSM2出土白土原1号窯式期の山茶碗、105はST4出土の鎌倉時代の土師器皿、106は伊勢型鍋、107は鎌倉時代の陶丸、108は墨書のある山茶碗小皿、110・116・117は墨書のある碗、113は墨書のある皿、114は漆付着山茶碗、118はタール付着山茶碗、120は同安窯系青磁碗、121～123は青磁、124は青白磁、125は白磁、126～130は古瀬戸、131～141土錐を掲載した。1503～1517は枕である。1746はST4から出土した元豊通寶である。

B 地点1面水田遺構（SD5～17、SM3～24、ST6～20、STD1～3、STR2）（図164・166・167・226・234・240） B地点1面水田遺構からの出土遺物8,577点のうちの49点を図示した（142～144、148～151、186～219、1545～1549、1657～1721、1749～1752）。

142はSD6出土登窯志野菊皿、143は菊皿、144はSD15出土登窯天目茶碗、148はSM15出土登窯香炉、149はSM17出土大窯丸皿・150は登窯小杯、151はSM19出土丸碗、186はST6出土大窯天目茶碗、187は登窯水滴、188はST8出土大窯灯明皿、189は大窯擂鉢の加工円盤、190は登窯繩部皿、191はST9出土青磁の碗、192はST10出土登窯擂鉢、193はST11出土白磁碗、195はST12出土登窯天目茶碗、196はST13出土土鈴、197は登窯擂鉢、198は登窯志野皿、200はST15出土大窯黄瀬戸向付、201は登窯折縁鉄絵皿、202はST16出土の古墳時代のものと思われる大型土製模造品、202は近世のものと思われる土人形、204は登窯菊皿、205はST18出土白磁皿、207は登窯折縁皿、208・209は折縁鉄絵皿、210は登窯擂鉢、211はST19出土青磁盤類、212は鎌倉時代の土師器皿、214は肥前の碗、215は登窯折縁鉄絵皿、218は登窯擂絵皿、219は登窯汁次である。1749はST11出土皇宗通寶、1750はST13出土開元通寶、1752はST14出土元祐通寶である。1657はST13出土砥石で、1518はSD22出土の杭である。

B 地点2面水田遺構（SD18～23、SM25～38、SS1、ST22～34、STD4～6）（図164・166・167・168・224・234・240・242） B地点2面水田遺構出土遺物4,838点のうちの88点を図示した（145、152～157、220～274、1518～1529、1550～1554、1655、1722、1747、1753～1760）。

152はSM30出土古瀬戸平碗・153は古瀬戸瓶子、154はSM32出土大窯擂鉢、156はSM35出土漆継ぎ有中国製染付け皿、261はST30出土窯壁、265はST33出土青磁稜花皿、273はST34出土古瀬戸擂鉢・274は登窯志野丸皿、156はSM35出土漆継ぎ有中国製染付け皿、231はST23出土中国製染付皿、235は漆継ぎのある大窯天目茶碗である。254の土師器皿は破片であるが、全体が二次焼成で灰色に変色し、外面には銅と思われる付着物がみられる。1519～1524はSM30出土杭、1525～1529はSM32出土杭、104はST24出土漆器小杯、1553はST27出土糸巻きの横木である。ST23出土咸平通寶1753・皇宗通寶1754・1755、ST26出土元祐通寶1756、ST27出土開元通寶1757、ST33出土嘉祐通寶1758・元豊通寶1759、ST34出土元豐通寶1760、1655はSD18出土火打石である。

B地点3面水田遺構（S D24・29・30、SM39～44）（図164・166・167・168、224～226、242）

B地点3面水田遺構出土1,077点のうちの46点を図示した（146・147、158～185、1530～1544、1748）。

147はSD30出土弥生土器甕、158はSM39出土7世紀代須恵器長脚高坏、159は須恵器短頸壺、160・161は古瀬戸、163は16世紀前半の土師器皿、164はSM43から出土した7世紀中葉須恵器高坏、165は8世紀代須恵器長頸瓶、166は9世紀前葉須恵器有台坏で底部内面に墨書有、169と176は山茶碗で底部外面に墨書有、167は0-53号窯式期の灰釉陶器の転用硯で底部外面に墨付着。168は0-53号窯式期の灰釉陶器碗の加工円盤、169は山茶碗で底部外面に墨書がある。173は尾張第9形式の片口鉢、176は大烟大洞4号窯式の山茶碗皿で底部外面に墨書がある。177は古瀬戸袴形香炉、178は古瀬戸四耳壺、182は15世紀前半の土師器皿、183～185は土錘、1531～1544は杭である。

C地点1面水田遺構（SD31・34、SM45～60、SS2、ST35～51、STD8・9）・D地点1面**水田遺構（SD53～57、SM63～87、SS3～8、ST52～73、STD10・12）（図169～174・227**

・228）C地点1面水田遺構からの出土遺物1,498点のうちの26点を図示した（275～293、1555～1561）。

D地点1面水田遺構からの出土遺物7,877点のうちの184点を図示した（294～424、1562～1576・1658・1659、1723～1741、1761～1776）。

278はSM53出土織部向付、281はST37出土土馬、288はST49出土山茶碗入子、296はSD55出土肥前皿、297はSD56出土肥前湯呑、307はSM78出土登窯丸碗の加工円盤、314はST52出土肥前碗・315は登窯菊皿、316は登窯丸碗の加工円盤、317はST53出土漆継ぎのある大窯茶入、322はST54出土登窯志野鉄絵皿、327・328はST55出土土製模造品・329は織維痕のある土製品、337はST56出土龍泉窯青磁小鉢、340・341は志野鉄絵皿、348はST58出土8世紀後半須恵器平瓶・352肥前湯呑、355はST59出土7世紀前半須恵器坏身、365はST60出土犬形土製模造品、366は同安窯青磁、1557～1560・1563～1573はSS2～8出土の杭、1561はSS2出土屋外施設（井戸等）の柱である。1726はST55出土の飾り金具である。1728はST57出土の筈で薄く魚々子が入り室町時代のものである。1729はST58出土の水滴である。1735はST62出土の銅鉈で猪目がくっきりしていることから中世のものと考える。1740はST68出土の小柄である。1761はST54出土の古錢束で溶けている、1766はST55出土太平通寶、1767はST56出土皇宗通寶、1770はST59出土の1776はST70出土の皇宗通寶、1768はST56出土治平元寶、1769はST57出土元豐通寶、17771はST59出土元豐通寶、1773はST62出土元祐通寶、1762～1765はST54出土の、1772はST60出土の、1774はST62出土の寛永通寶である。1658はST61出土墓石、1659はST62出土火打石である。

E地点1面水田遺構（SD66～68、SM88～109、ST74～90、STD13・14）（図175～181、241）

E地点1面水田遺構からの出土遺物6,845点のうちの171点を図示した（425～463、475～485、491～592、1577～1592、1656・1660、1742～1744、1777～1780）。遺物が多く出土しているのは、SD66とST84で、SD66からは1,082点、ST84から1,585点出土している。種子34点のうち18点はSD66から出土している。

SD66からは加工円盤が6点（428・429・449・453・454・455）出土しており、そのうちの5点はSD68からSD66へ水が流れ込むところから出土している。428は灰釉陶器、429は山茶碗、453は登窯丸碗、454は登窯小皿の加工円盤である。この他に加工円盤はSM95から登窯輪禪皿（477）、S

M104 から山茶碗皿（482）、S T74 から大窯中皿（494）・播鉢（495）の2点、S T79 から登窯丸碗（505）、S T81 から登窯天目茶碗（521）、S T82 から大窯天目茶碗（532・533）の2点、S T83 から登窯丸碗（548・549）の2点、S T84 から登窯丸碗（569）、S T87 からは古瀬戸天目茶碗（584）・登窯天目茶碗（585）・登窯丸碗（586）の3点出土している。加工円盤の多くは碗等の底部高台を残すように打ちかいて加工しているものが多いが、495・584・585は陶器の胴部を加工している。

434はS D66 出土の墨書土器、479はSM103 出土の墨書土器である。S T84 から出土した16世紀前半～中頃の土師器皿の口縁部にはタールが付着している（557、560～563）。436はS D66 出土白磁の四耳壺、437はS D66 出土古瀬戸豆天目茶碗、447はS D66 出土登窯志野鉄絵皿、500はS T75 出土登窯織部向付（500）、537はS T82 出土漆継ぎのある登窯志野皿、547はS T83 出土登窯志野丸皿、580はS T87 出土登窯志野皿、590はS T90 出土登窯黄瀬戸皿である。1743はS T87 出土溶けた銅、1783はS T87 包含層IIIb 層出土銅錘、1784は同位置出土銅鈴である。1577はS D66 出土器具部材把手、1588はS T81 出土樽の栓である。1780はS T87 出土景祐元寶、1777はS T84 出土皇宗通寶、1778は同遺構出土洪武通寶、1779は同遺構出土寛永通寶である。1656はS D69 出土砥石、1660はS T87 出土砥石である。

E地点2面水田遺構（S D69、SM110～121、S T91～103）（図176・181・182） E地点2面水田遺構からの出土遺物は、1,819点のうちの55点を図示した（464～474、486～490、593～630、1593）。墨書土器はS D69 から2点（468・470）SM120 から1点（490）出土している。489はSM118 出土の古代瓦の平瓦である。619はS T99 出土の古瀬戸四耳壺である。626は灰釉陶器、627は山茶碗で2点ともS T100 出土の転用硯である。629はS T103 出土の山茶碗皿の加工円盤である。

包含層出土遺物（図183～220、230～233、235～239、244～246） 包含層出土遺物は、A地点から1,549点、B地点から3,919点、C地点から7,739点、D地点から9,086点、E地点から8,994点で合計31,287出土している。

包含層出土よりも遺構出土が多いものは中近世陶磁器・中近世土師器・近世以降の瓦・木製品・金属製品・種子・炭化材で、遺構出土よりも包含層出土の方が多いものは土師器・須恵器・古代瓦・灰釉陶器・土製品・石器である。

631～639は弥生土器、640～669は土師器、670～692は土製品、693～700は古代瓦・中世瓦、701～710は陶錘、711は綠釉陶器、712～831は須恵器、832～842は美濃須衛産灰釉陶器、843～847は美濃須衛産山茶碗、848～890は猿投窯他産の灰釉陶器、903～1015は猿投窯他産の山茶碗、1016～1142は美濃窯産の山茶碗、1149～1194は青磁、1195～1221は白磁、1222・1223は青白磁、1224～1227は中国産の染付け等、1228～1231は瓦質陶器等、1232～1287は中近世土師器、1288～1353は古瀬戸、1354～1358は常滑、1359～1414は大窯、1415～1427は肥前、1428～1493は登窯、1594～1654は木製品、1661～1715は石器、1781～1822は金属製品である。石器は中近世の時期のもの以外は包含層出土として掲載している。

687は瀬戸内式の土錘、693は古代瓦の重弧文軒平瓦、695は斜格子目叩きのある平瓦、711は碗と思われる綠釉陶器である。750は7世紀後葉の須恵器返り蓋と甕の胴部が付着しており焼台と思われる。765・766は7世紀後葉～8世紀前葉の須恵器鉄鉢、772は7世紀代の須恵器横瓶、775は7世紀

後半～8世紀代の須恵器陶臼である。796は須恵器で百万塔のようなものと思われる。799は8世紀後半代の美濃須衛産須恵器の火舍香炉蓋で雲文等が線刻され、外面には自然釉が付着している。800は8世紀後半須恵器の坏類で佐波理の写しである。813・814は須恵器円面硯、815は須恵器の無脚円面硯でいずれも8世紀のものである。802は8世紀後葉の須恵器有台坏で底部外側に墨書がある、821は9世紀前葉の須恵器摘み蓋で内側に墨書がある。830は9世紀前葉の須恵器有台盤の転用硯で底部外側に墨が付着している。714・717・718・754・764・805・811はヘラ記号のある須恵器である。

834は美濃須衛産の灰釉陶器輪花碗で0-53号窯式併行期、843は12世紀美濃須衛産山茶碗の六器、857は0-53号窯式の灰釉陶器段皿、885は美濃須衛産灰釉陶器段皿H-72号窯式併行期、892は美濃須衛産灰釉陶器片口鉢で百代寺窯式期併行、921は尾張第4型式山茶碗の子持器台である。840は灰釉陶器碗で底部外側に赤彩がある。842・852・881・882は灰釉陶器の加工円盤、966・1148は山茶碗の加工円盤である。879は灰釉陶器の転用硯である。871は灰釉陶器で底部外側に「大」の墨書がある。山茶碗で墨書があるものが63点ある。なかには花押のようなものもある(912・929・964・982・)。

1149～1175は系の青磁でほとんどが碗であるが、1149は鉢で底部内側にある双魚文を意識的に残した加工円盤になっている。1178は青磁断面に漆継ぎのある中国産の端反碗、1192は青磁小鉢にも漆継ぎがあり、1199の中国産白磁皿にも漆継ぎがある。1182は同安窯系の青磁皿、1221は白磁の四耳壺、1224～1226は中国産の染付碗・皿である。1219は白磁碗の加工円盤である。

1232～1236はロクロ土師器皿、1237～1240は鎌倉時代土師器皿、1241～1257は15～16世紀土師器皿、1257は内側に銅が付着し二次焼を受け灰色に変色していることから铸造トリベと思われる。

1258～1263伊勢型鍋、1264～1272羽釜、1273～1277茶釜、1278～1284内耳鍋、1285～1287焙烙鍋。

1228～1230は瓦質陶器の火鉢で、1229は室町～安土・桃山時代、1231は中世の鍋に付く足である。

1288は古瀬戸前II期の梅瓶で漆継ぎがある。1290は古瀬戸前III～中II期の入子、1291は古瀬戸中IかII期の梅瓶で外側に草花文がある。1294は古瀬戸中期の合子の蓋、1295は古瀬戸中II期の合子、1298・1299は古瀬戸中期の1324は後IV期の四耳壺、1305は古瀬戸後期の合子の蓋、1306・1307は古瀬戸後I期の1312は後II期の1315は後III期の1325・1326は後IV期古の天目茶碗、1309～1311は古瀬戸後期の燭台、1347・1348は古瀬戸後期の祖母懐茶壺である。1318は古瀬戸後II期の縁釉小皿で口縁部外側と底部内側に朱墨が付着している。1322は古瀬戸後期の小瓶で内側に朱墨が付着している。1331は古瀬戸後IV期古の縁釉小皿で外側前面にタールのような付着物がある。1352は古瀬戸後IV期新の天目茶碗の加工円盤、1353は古瀬戸後III・IV期の平碗で体部を加工円盤にしている。

1320は大窯第2段階の1381は大窯第3段階後半の1396・1397は大窯第4段階の天目茶碗である。1398は志野小天目茶碗、1399～1402は志野皿、1403は志野鉄絵皿、1404は志野向付でいずれも大窯第4段階後半のものである。1360は大窯第1段階の端反皿で内側に漆が付着。1375は大窯第2段階の稜皿、1405は大窯第4段階の折縁皿で断面に漆継ぎがある。1409は大窯第4段階の丸皿で二次焼成を受け釉薬が変色している。1411～1414は加工円盤で、1411は大窯第1段階の天目茶碗、1412は大窯第2段階の天目茶碗、大窯第3段階の丸碗、大窯第4段階の天目茶碗で高台が残るように打ち欠いて加工している。

1430は登窯第1小期の志野小碗、1431・1432は同時期の志野皿、1433は同時期の織部向付である。

1439 は登窯第1小期の黄瀬戸皿、1440・1441 は登窯第1～2小期の黄瀬戸鉢である。1442 は登窯第2小期の天目茶碗、1444 は同時期の志野皿、1447 は登窯第3小期の白天目茶碗、1451 は登窯第3・4小期の菊皿、1458～1461 は登窯第4小期の菊皿である。1464 は登窯第5小期の鬱盥、1466 は登窯第5・6小期の水滴、1468 は登窯第5～7小期の志野皿、1469 は同時期の繪絵皿、1471 は同時期の十能、1474 は登窯第6・7小期の壺の蓋、1477 は登窯第8小期以降の文様のある徳利の胴部破片、1479 は登窯8・9小期の鍾湯呑、1480 は同時期の火入れ、1481 は登窯第10小期の広東茶碗である。1483 は登窯の碗で底部外面に墨書きがある。1470 は登窯第5～7小期の徳利で体部を加工円盤にしている。1485～1493 は加工円盤で、1485 は登窯第1小期の鉢鉢体部を加工している。1486 は登窯第3～4小期の小碗、1487～1492 は同時期の丸碗、1493 は登窯第5・6小期の丸碗を加工円盤にしており、いずれも高台を残すように加工している。加工円盤の多くは打ち欠いた部分が摩耗している。

1595 は輪かんじき田下駄の足乗せ板で方形の穴があいている。1625 は出臍のある器具部材である。1661 は縄文時代草創期の有舌尖頭器で石材は珪質頁岩か流紋岩、1662 は縄文時代草創期の神子柴型の打製石斧で石材はホルンフェルスである。1663 は縄文時代草創期の有溝砥石で石材は砂岩、1664・1665 は縄文時代前期の石鎌で石材はチャート、1666 は椎木成品で石材は下呂石である。1670・1671・1673 は石鎌で石材は下呂石、1676 はスクレイバーで石材は下呂石、1678 は楔で石材はチャート、1679・1689 は縄文時代晩期の石刃で 1679 の石材は粘板岩、1680 の石材は安山岩である。1681～1683 は下呂石のフレイクで 1681・1683 は自然面から山付近の露頭の石材使用し、1682 は自然面にクラックがあり川で拾った転礫を使用している。1684 は安山岩のフレイクであるが奥美濃の石材を使用している。1685・1686 は板取系珪質流紋岩のフレイクである。1687 は露頭の下呂石を使用した石核である。1693～1696 は弥生時代の石鎌で、石材は 1693 がチャート、1694～1696 は下呂石である。1697・1698 弥生時代の打製石包丁で石材はホルンフェルスである。1699・1700 は弥生時代の粗製刀器で 1699 は泥岩、1700 は砂岩である。1701～1703 は弥生時代の打製石斧である。

1704 は滑石製の管玉、1705 は碁石である。1706・1707 は火打石で、石材は 1706 が石英、1707 がチャートである。1708～1714 は砥石である。1781 は 14世紀後半～15世紀後半の擬漢式鏡で、外区の幾何学模様がみえる。1782 は紐掛けの環座の環台で菊の花弁の模様があることから仏教物と考えられる。1783 は銅錐で重量が 50.5g である。1784 は銅鈴で猪目がくつきりしていることから中世と考えられる。1785 は頭に穴があき菊目鑿があり針のような細い先端が曲がっているが、何に使用したかは不明である。1785 と同様のものが ST53 と ST59 から出土している（1724・1731）。1786 はハバキが付着しており、刃部の残りが悪いが、長さや真っ直ぐなところから短刀と考える。1787 は切羽である。1788 は目貫で桐文が 2つある。桐文は銅の打ち板を鑄で打った膨金で葉脈が出ておりとても薄い。1789・1790 は笄で文様がある。1791・1792 は小柄で模様が無い。1793・1794 は大刀の鞘尻金具である。

1803・1804 は開元通寶、1805 は祥符元寶、1806 は景祐元寶、1807・1808 は皇宗通寶、1809 は治平元寶、1810 は熙寧元寶、1814 は洪武通寶、1816 は永楽通寶、1820 は寛永通寶で D 地点から出土している。1812・1813 は紹聖元寶、1817～1819 は寛永通寶で B 地点から出土している。1811 は元豐通寶、1815 は永樂通寶、1821・1822 は寛永通寶で E 地点から出土している。

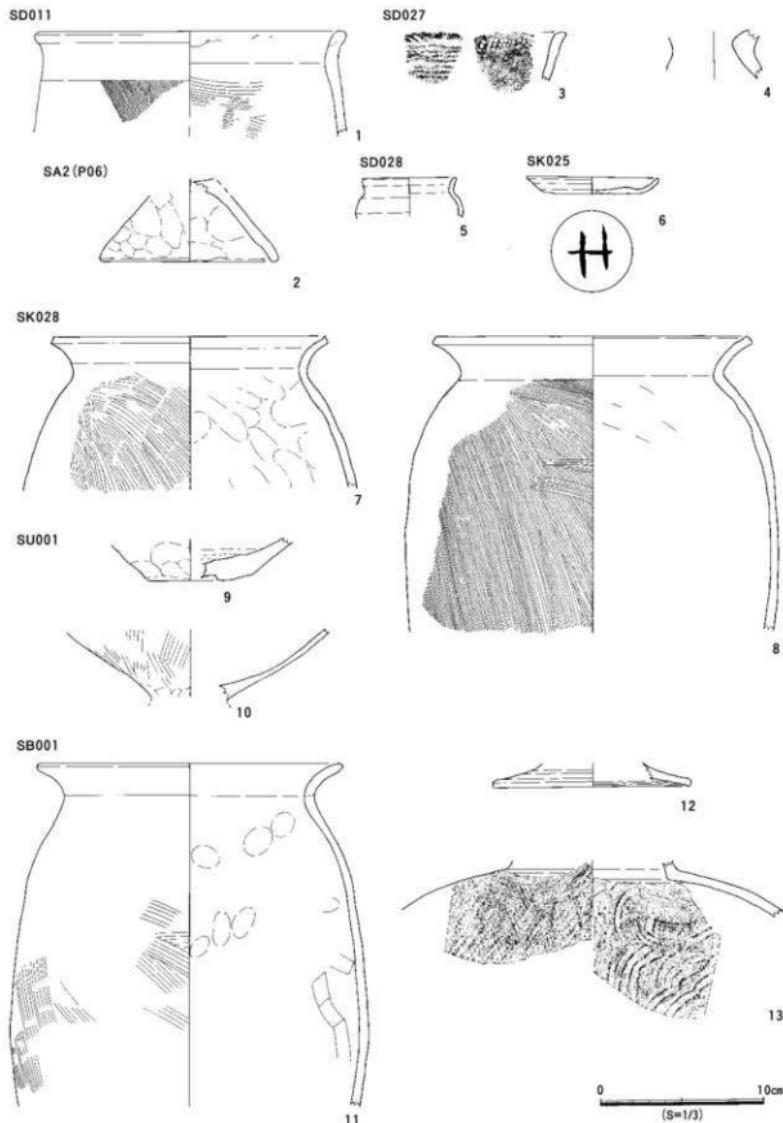


図155 土器 遺構出土（1）

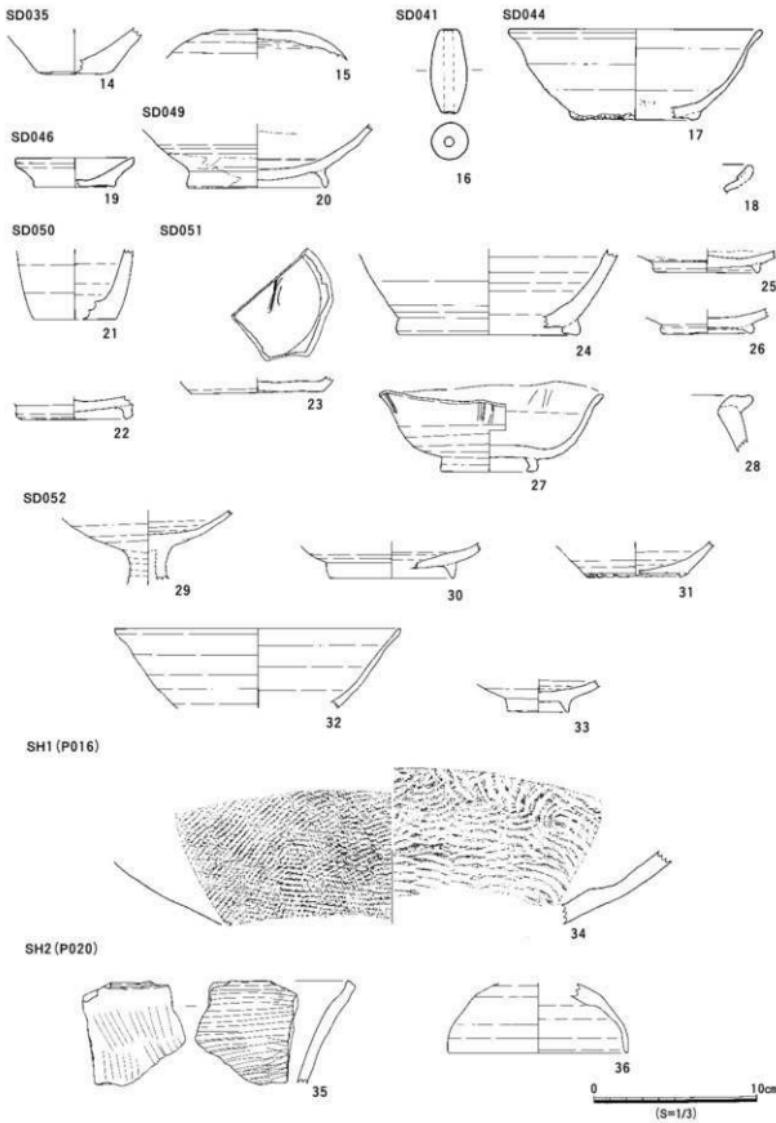


図156 土器 遺構出土（2）

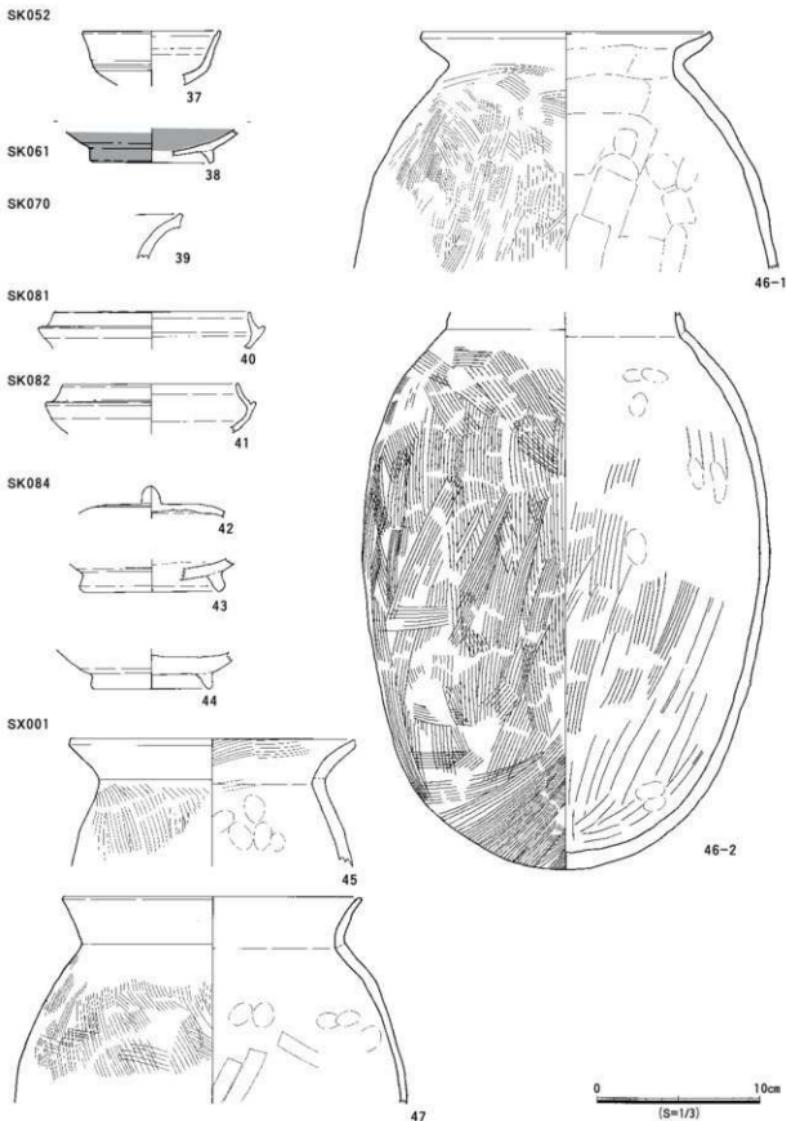
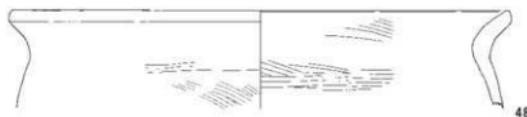


図157 土器 遺構出土（3）

SD060



50

51

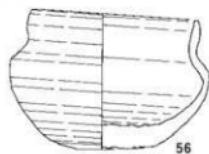
52

54

55

53

SD061



56



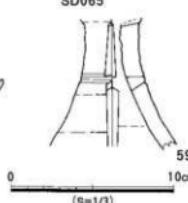
SD064



58

0

(S=1/3)



10cm

図158 土器 遺構出土 (4)

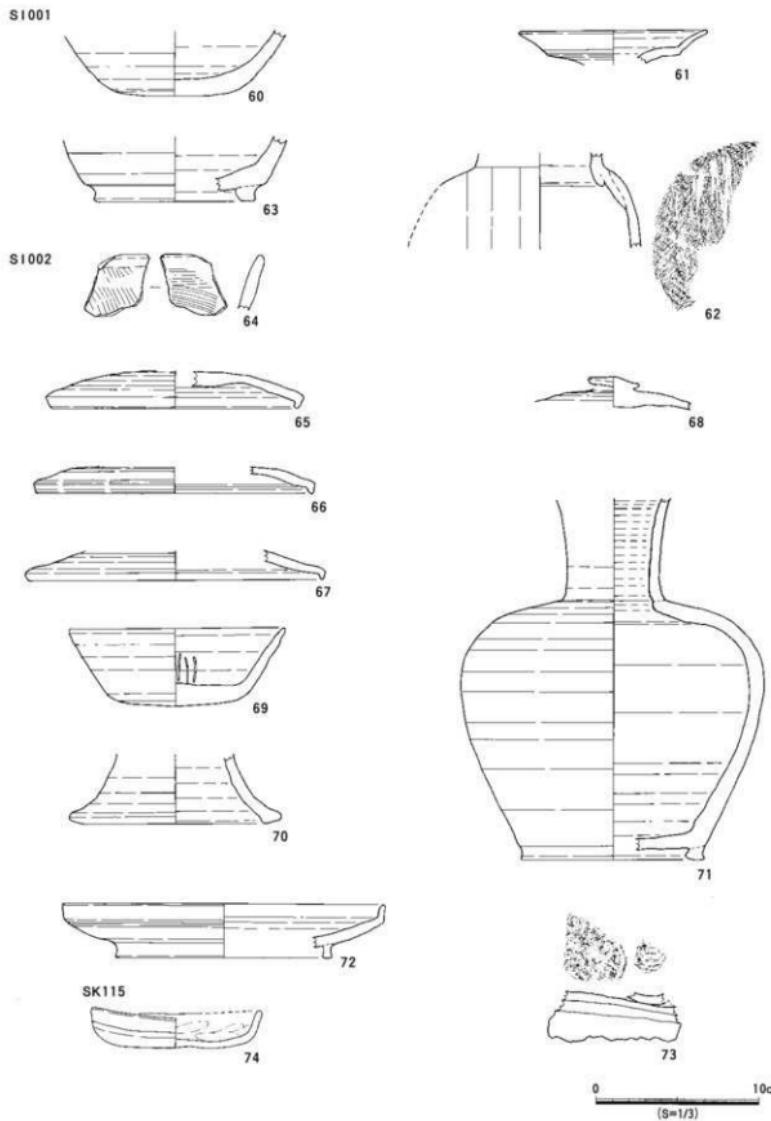
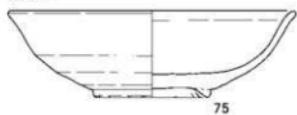
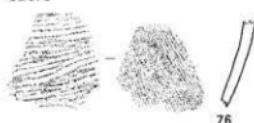


図159 土器 遺構出土（5）

SD077



SD078

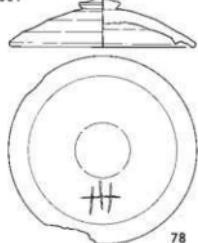


76

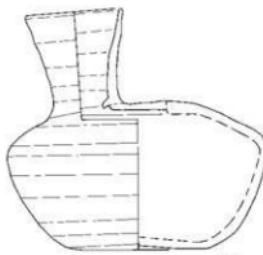


77

NR001



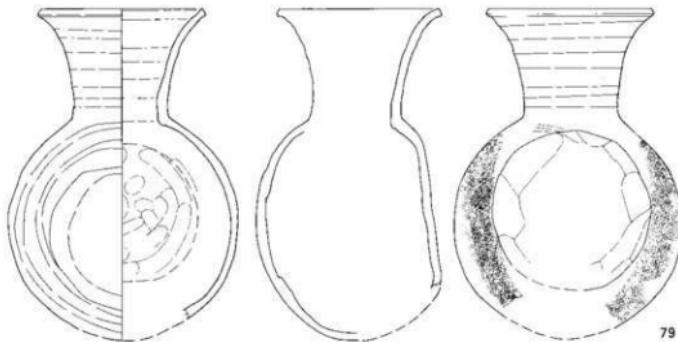
78



80



81



79

NR002



82



図160 土器 遺構出土（6）

SK024



83



84

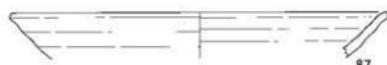
SD032



85



86



87

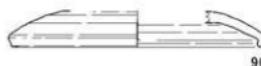


88

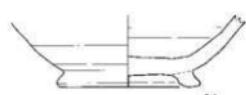
SD033



89



90



91



92

SK029



93



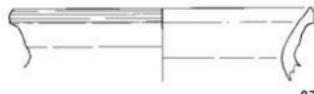
94



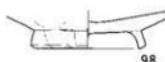
95



96



97



98

SK049



99

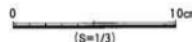


図161 土器 遺構出土（7）

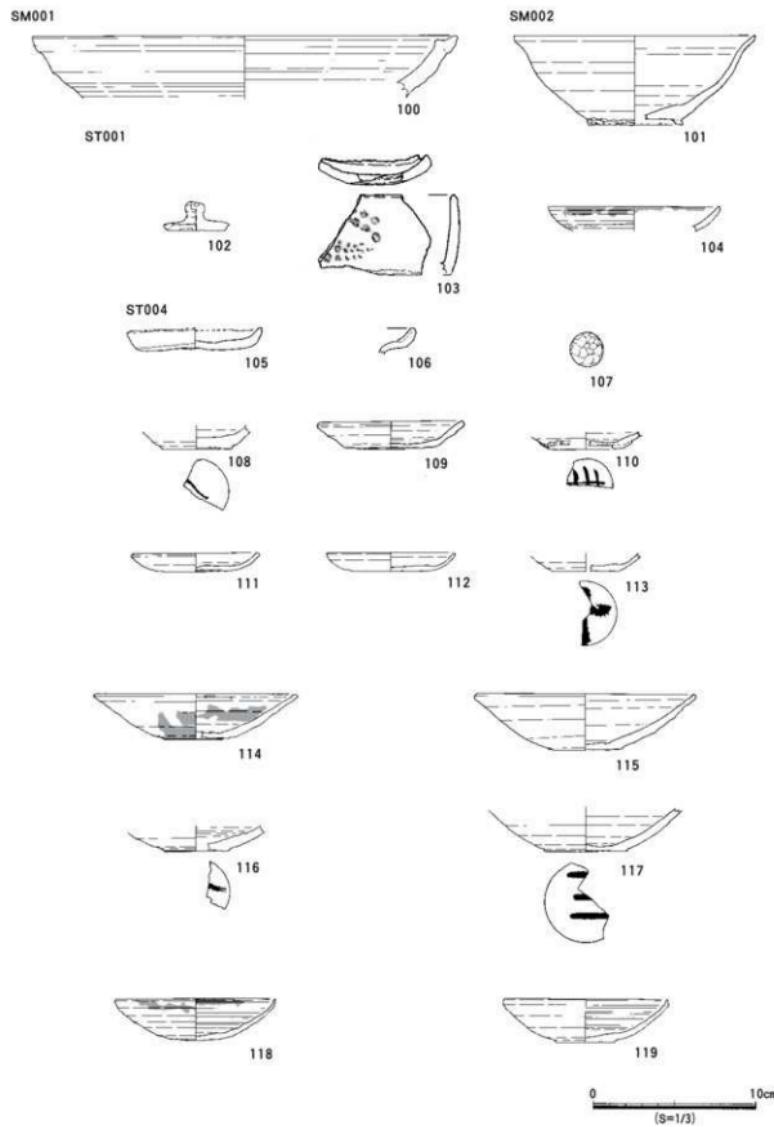


図162 土器 遺構出土（8）

ST004

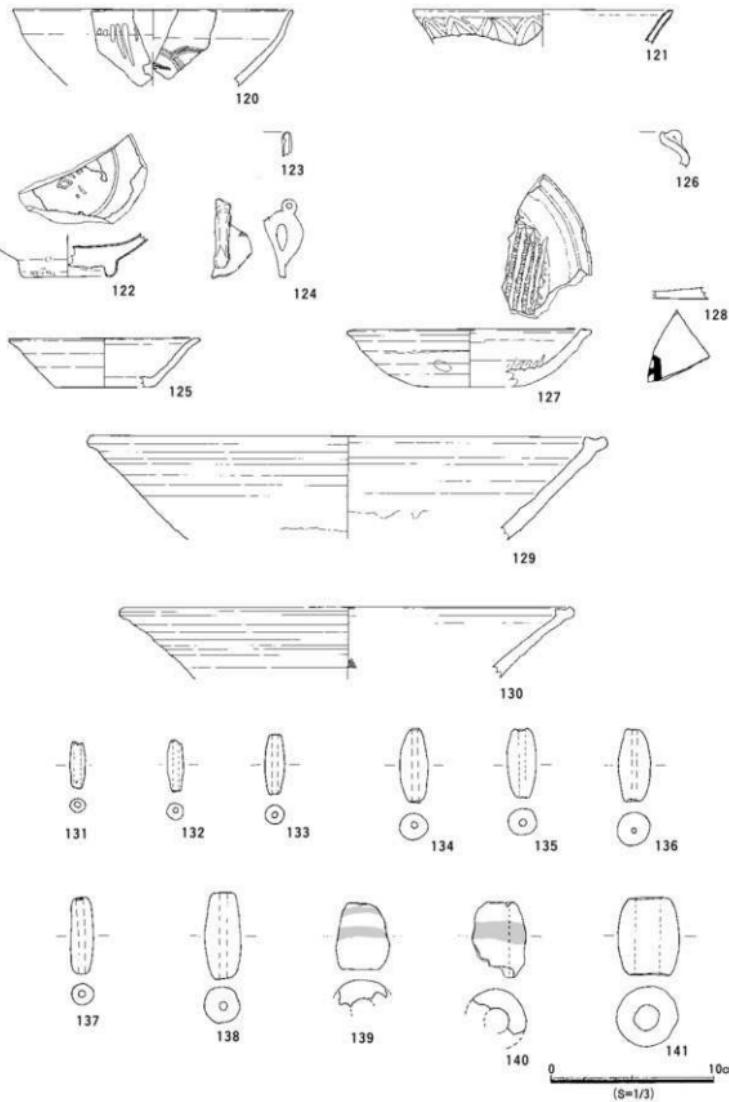


図163 土器 遺構出土（9）

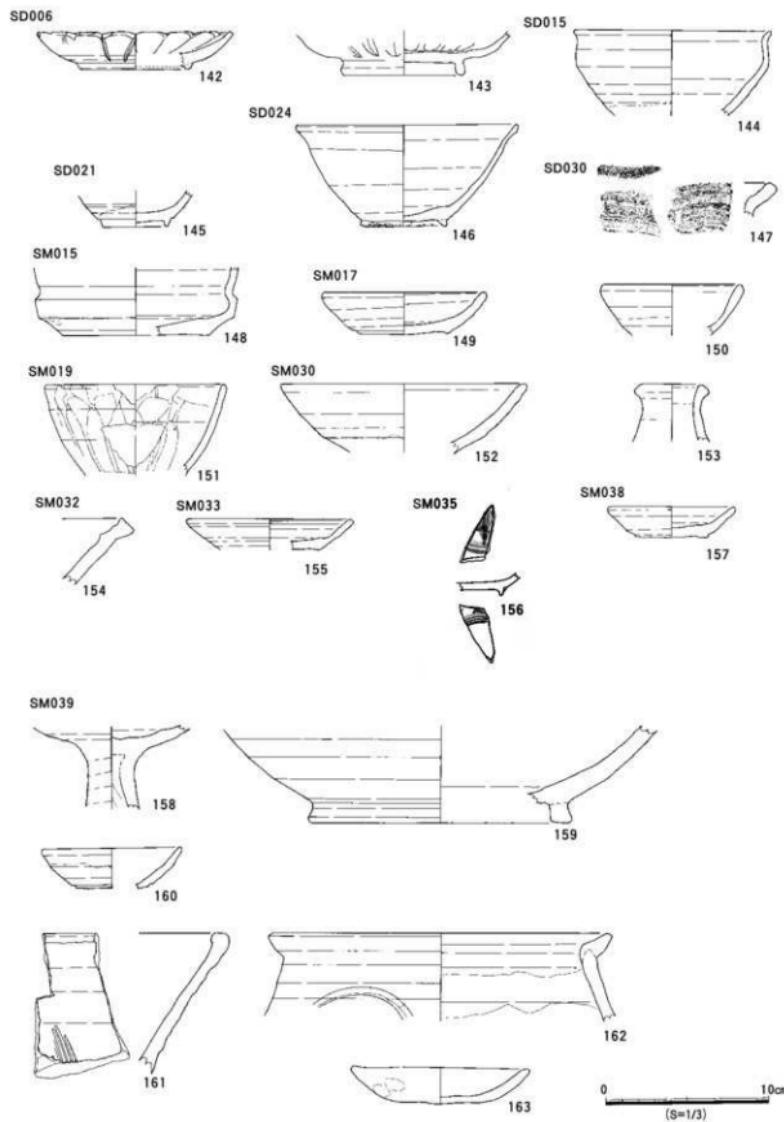


図164 土器 遺構出土 (10)

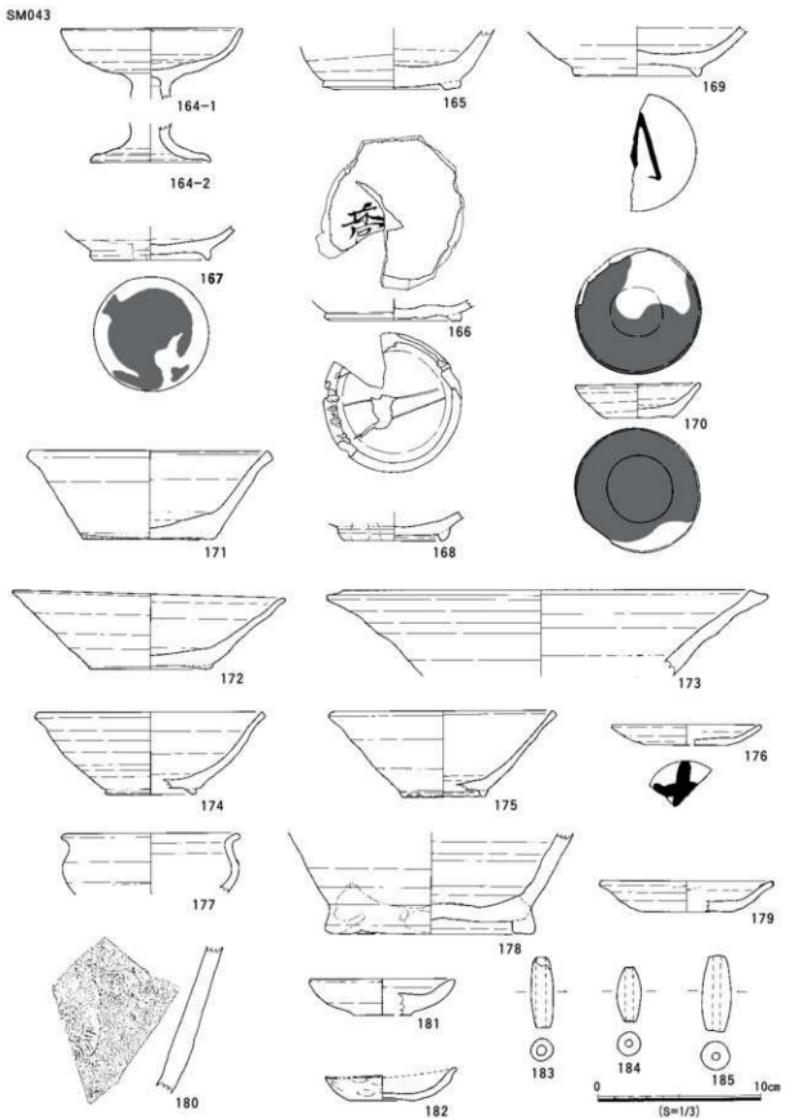


図165 土器 遺構出土 (11)

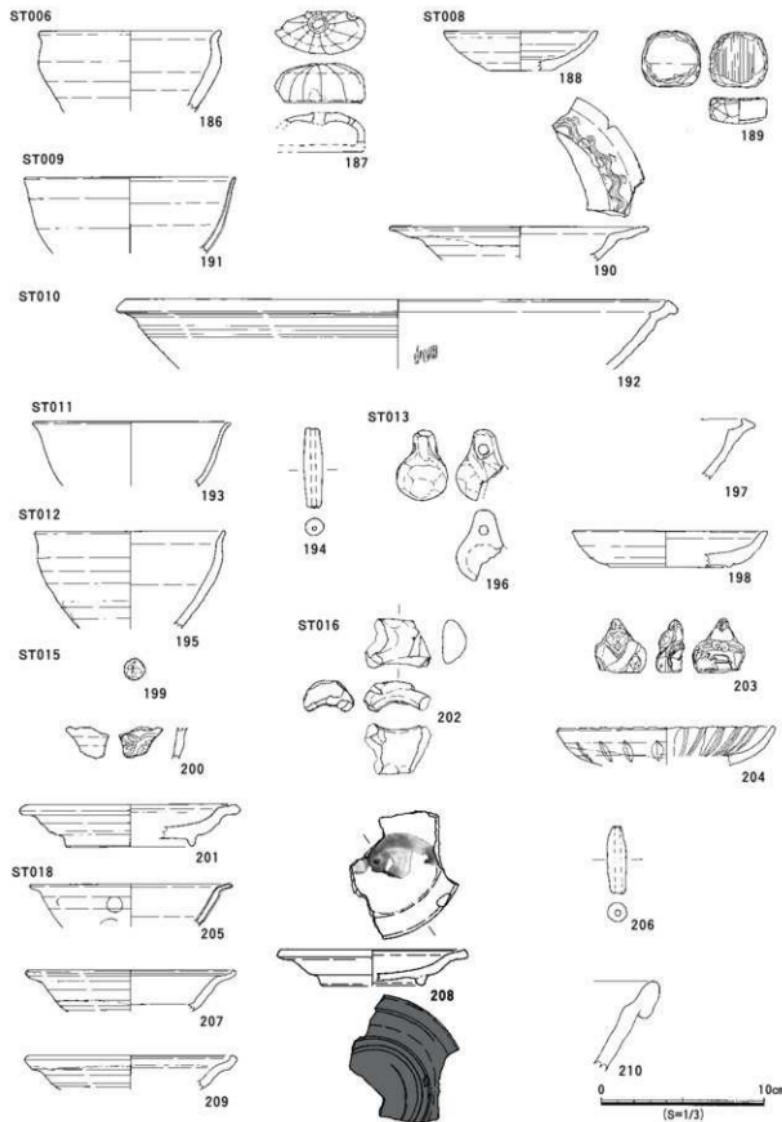


図166 土器 遺構出土 (12)

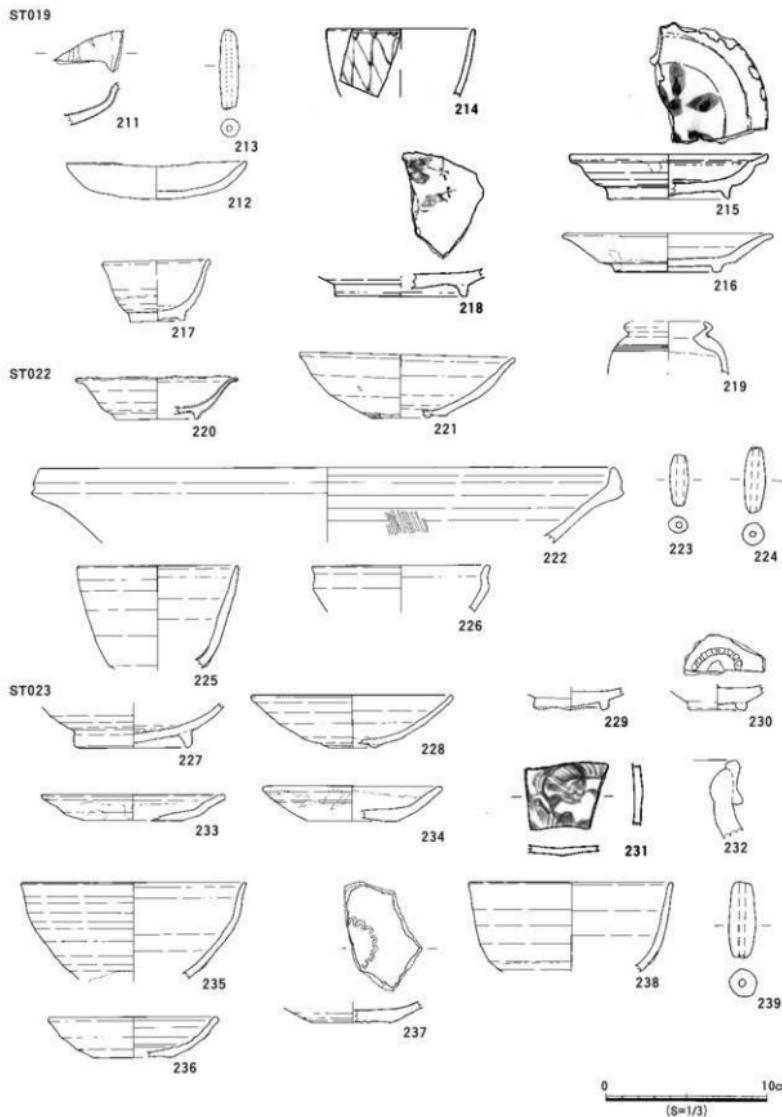


図167 土器 遺構出土 (13)

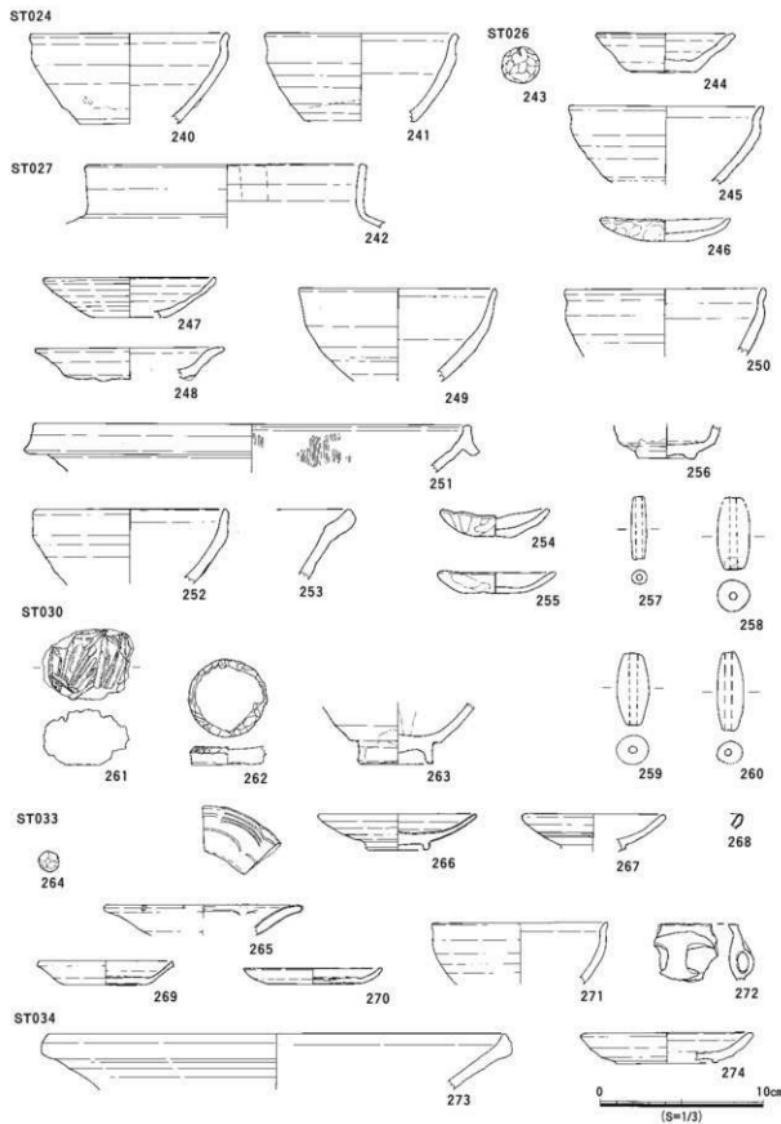
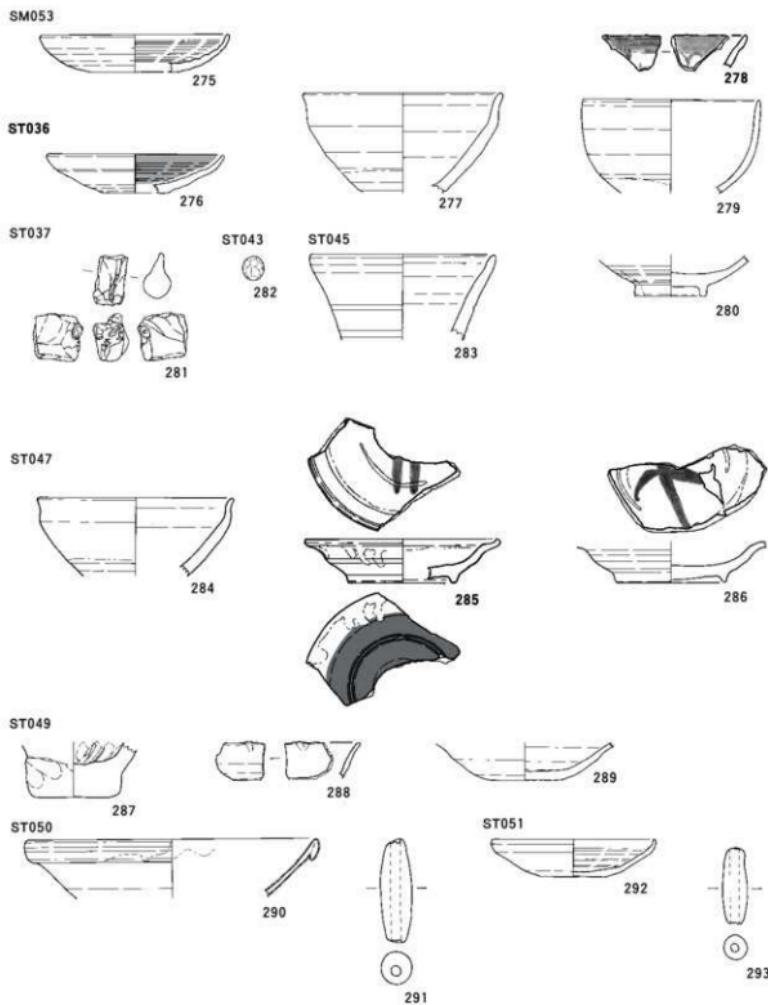
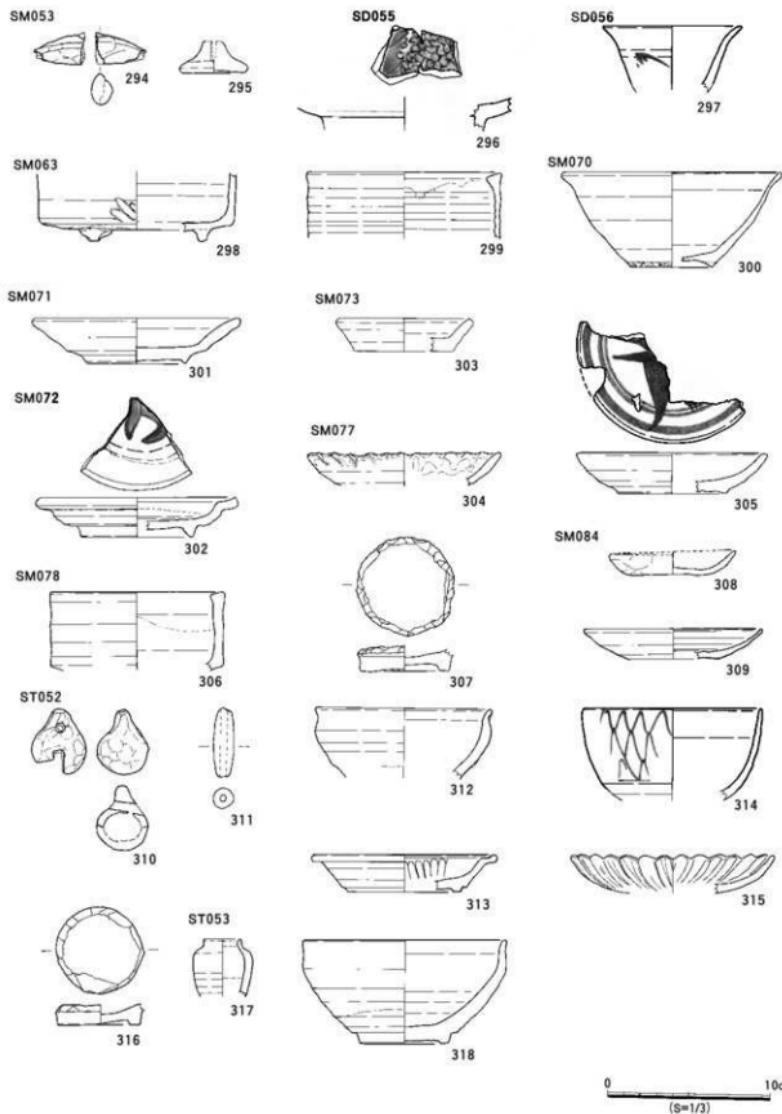


図168 土器 遺構出土 (14)



0 10cm
(S=1/3)

図169 土器 遺構出土 (15)



0
(S=1/3) 10cm

図170 土器 遺構出土 (16)

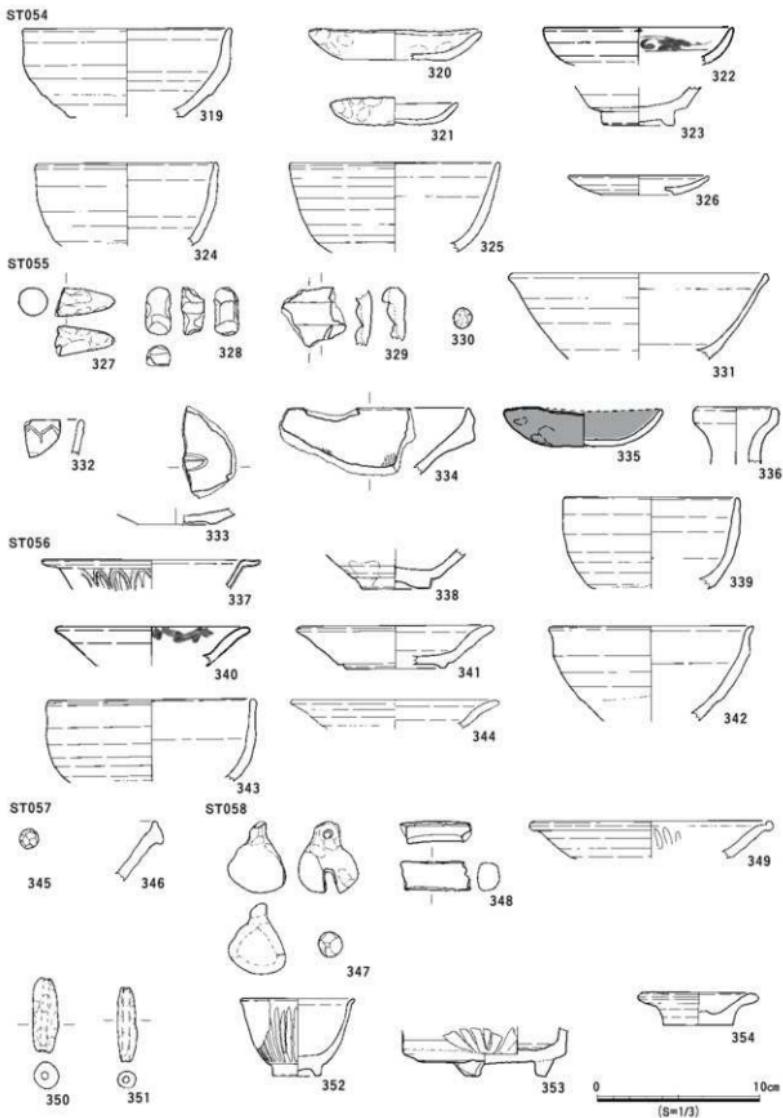
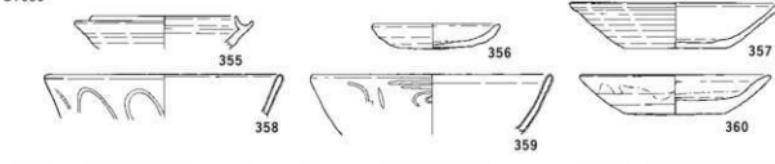
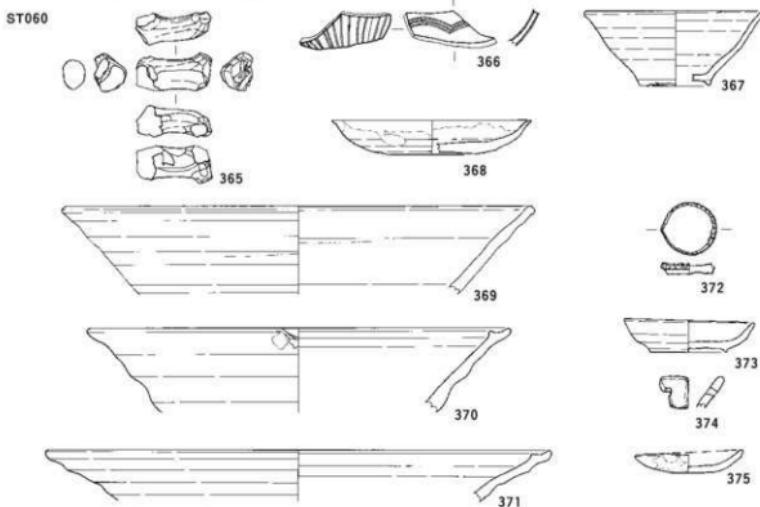


図171 土器 遺構出土 (17)

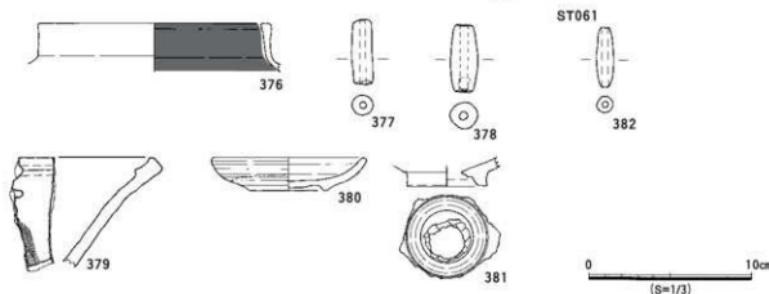
ST059



ST060



ST061



0
(S=1/3) 10cm

図172 土器 遺構出土 (18)

ST062

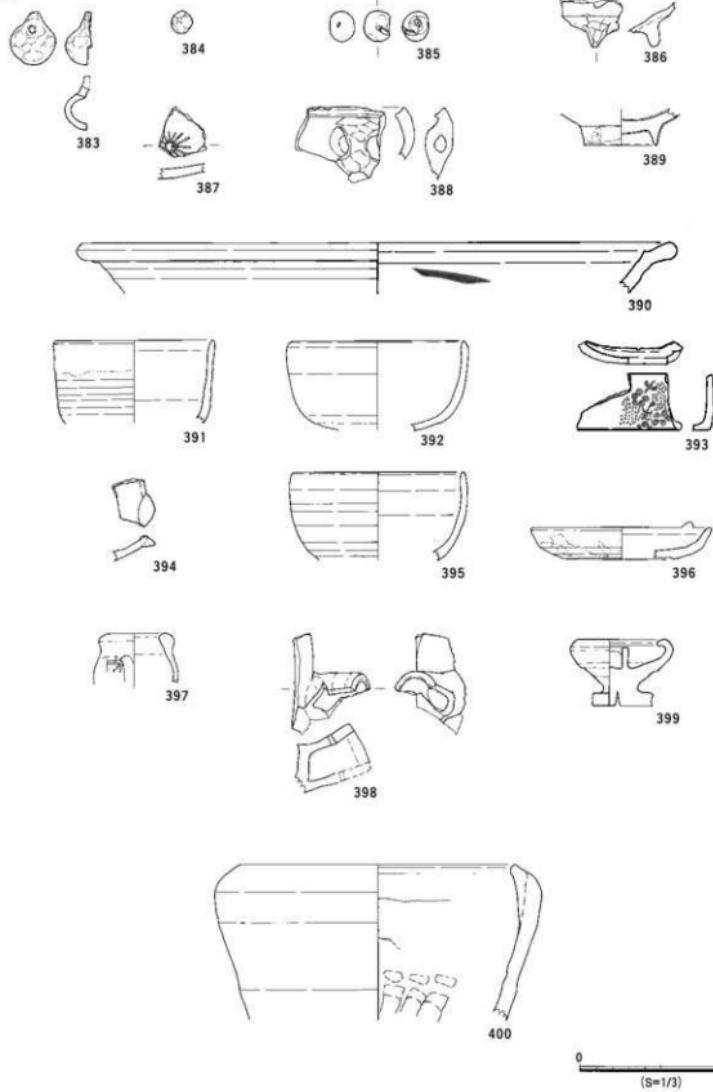


図173 土器 遺構出土 (19)

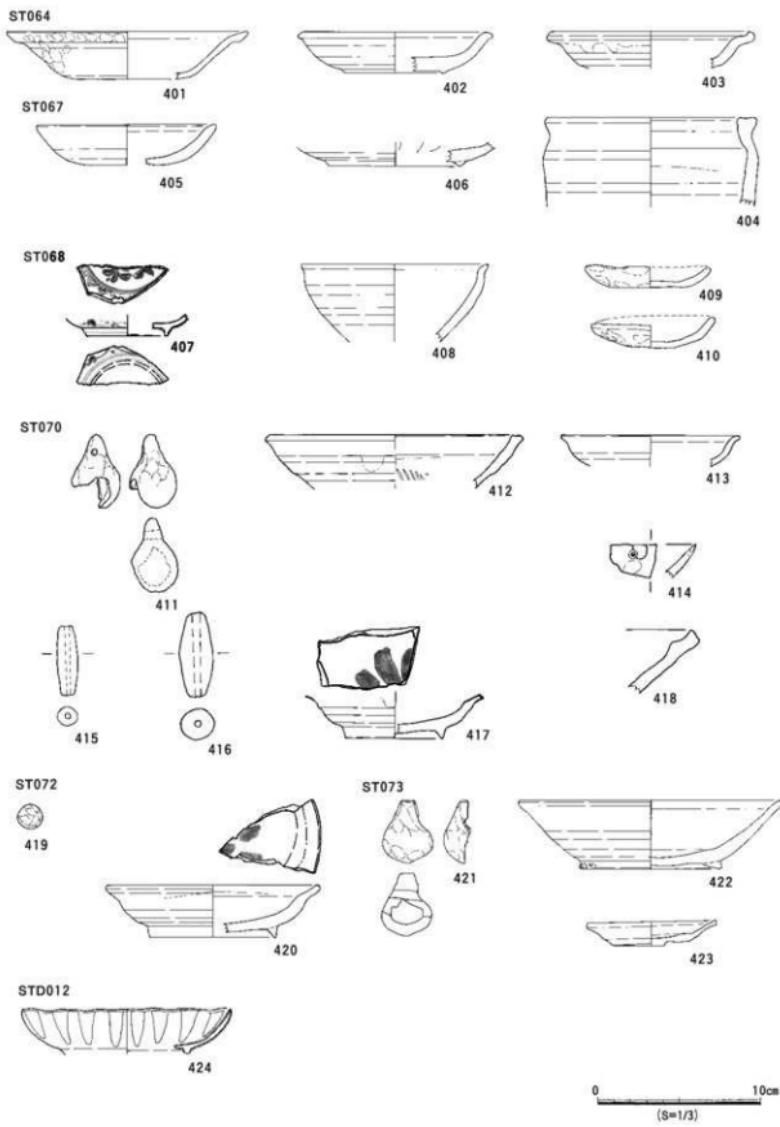


図174 土器 遺構出土 (20)

SD066

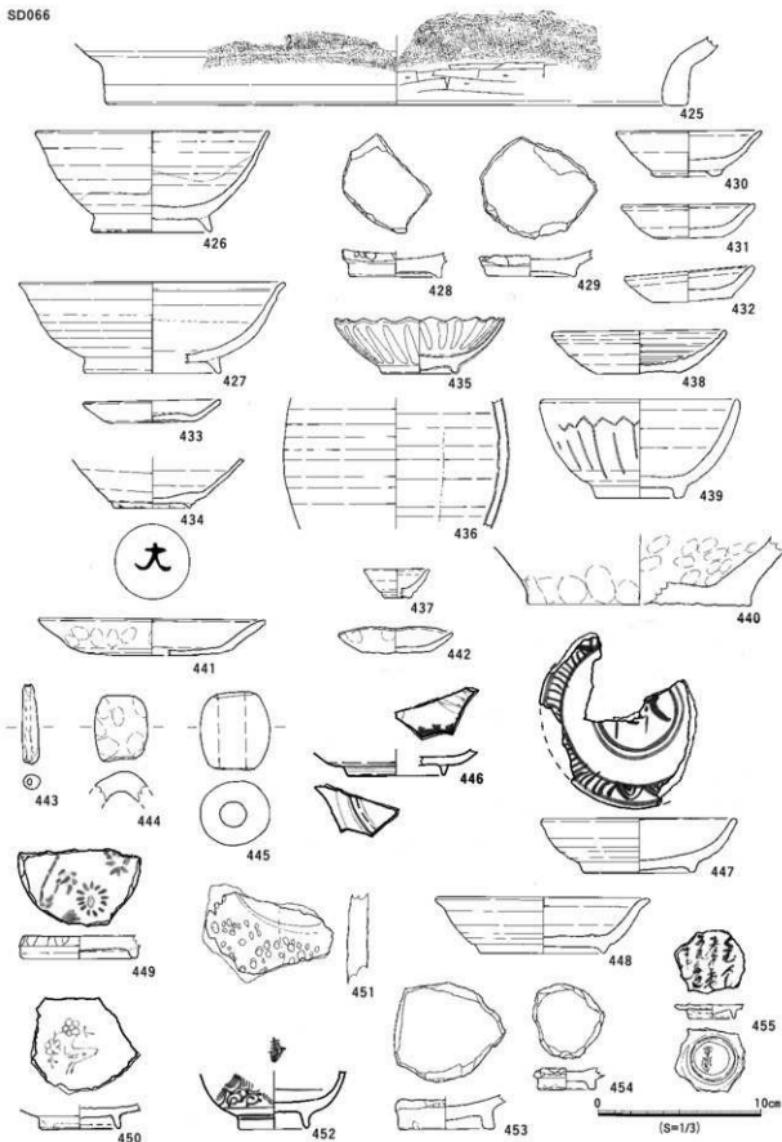
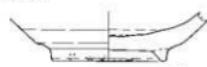


図175 土器 遺構出土 (21)

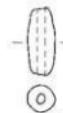
SD067



456

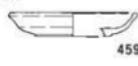


457



458

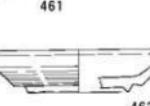
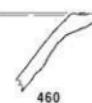
SD067



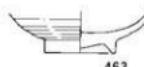
459



460



462

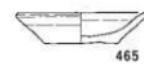


463

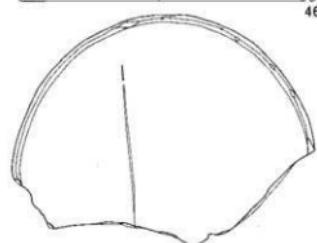
SD069



464



465



466



467



468



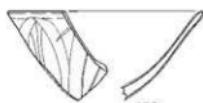
470



471



469



472



473



474



(S=1/3)

図176 土器 遺構出土 (22)

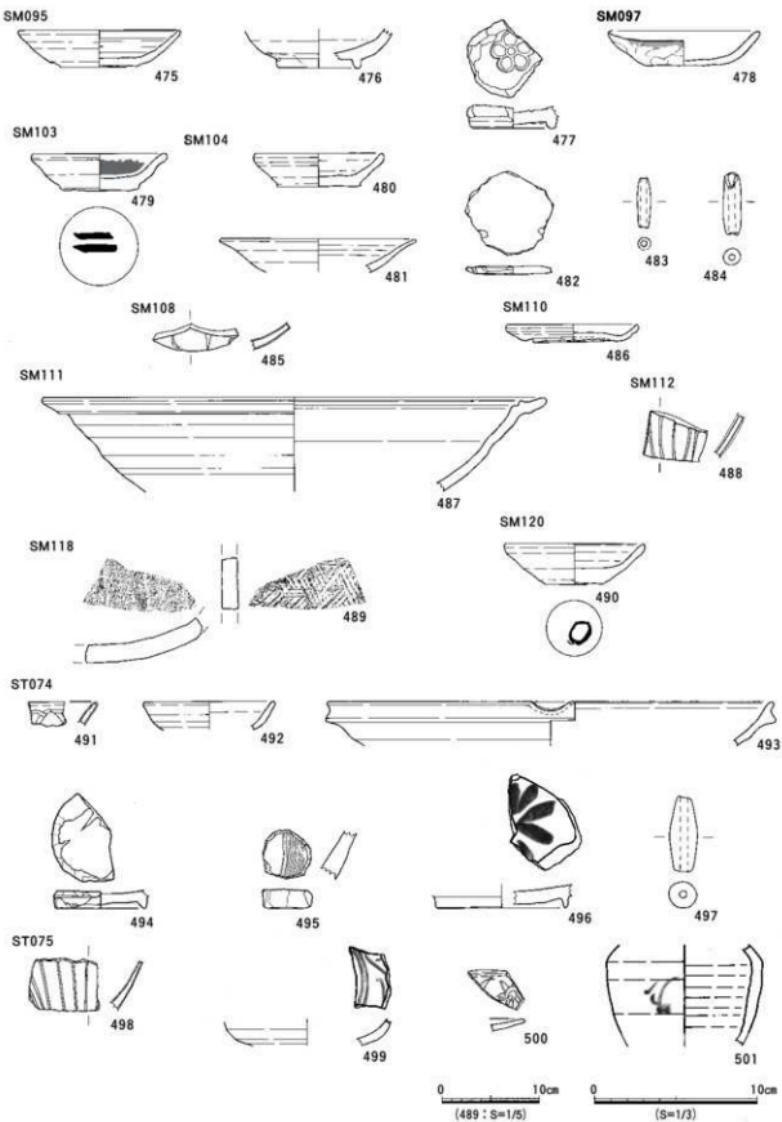
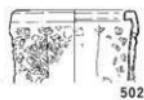


図177 土器 遺構出土 (23)

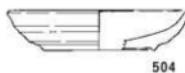
ST077



502

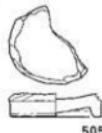


503



504

ST079



505

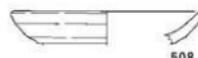


506

ST080

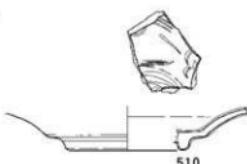


507



508

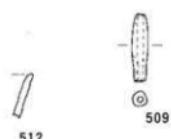
ST081



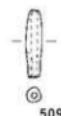
510



511



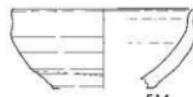
512



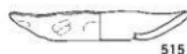
509



513



514



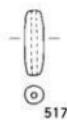
515



516



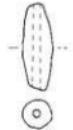
521



517



518



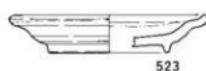
519



520



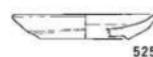
522



523



524

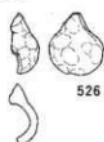


525

0
10cm
(S=1/3)

図178 土器 遺構出土 (24)

ST082



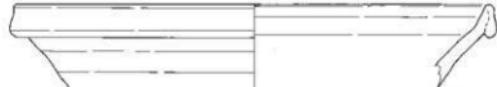
528

529

530



527



531



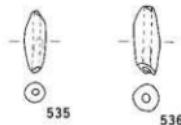
532



533



534

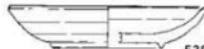


535

536



537



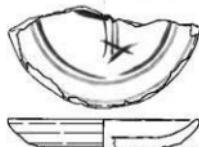
538



539

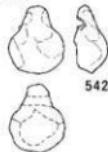


540

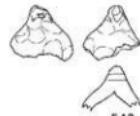


541

ST083



542



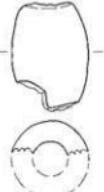
543



544



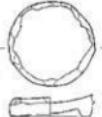
545



546



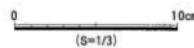
547



548



549



(S=1/3)

図179 土器 遺構出土 (25)

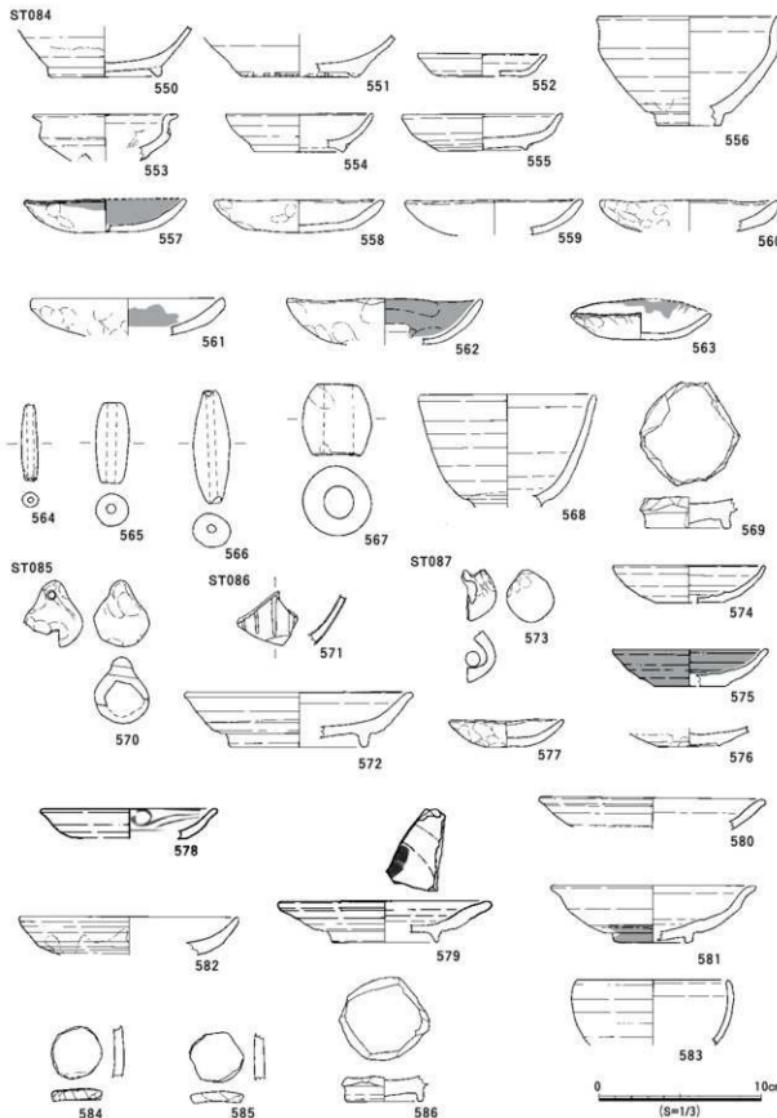


図180 土器 遺構出土 (26)

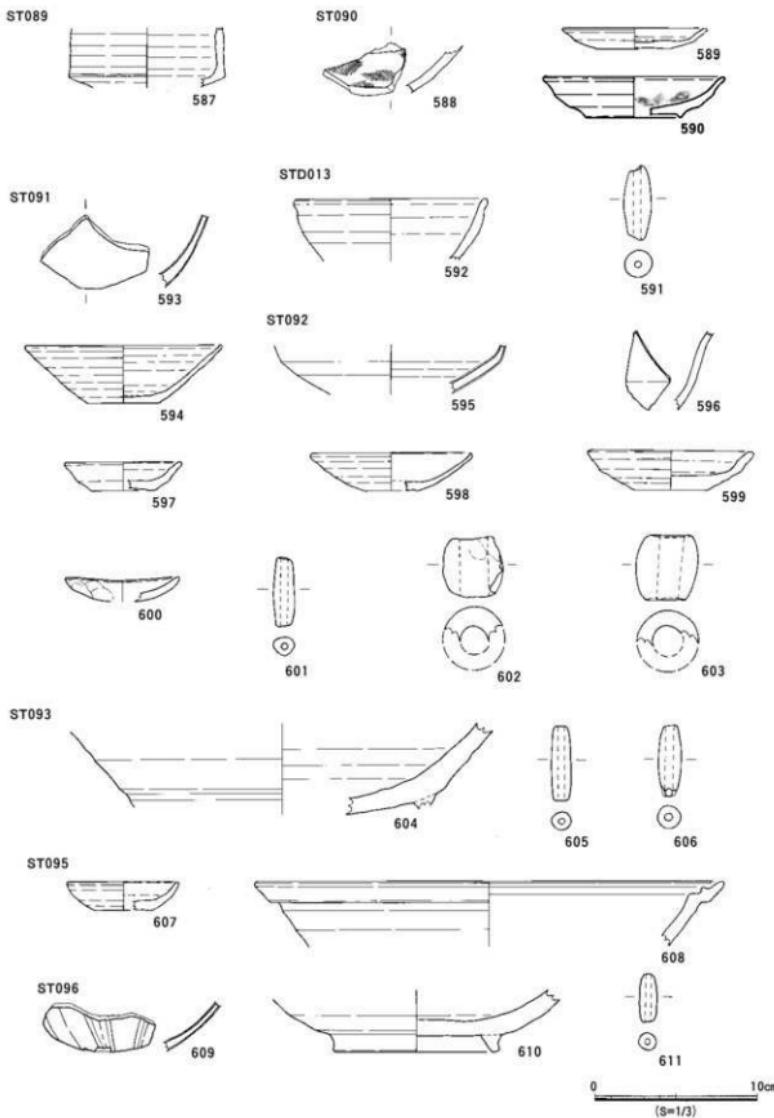


図181 土器 遺構出土 (27)

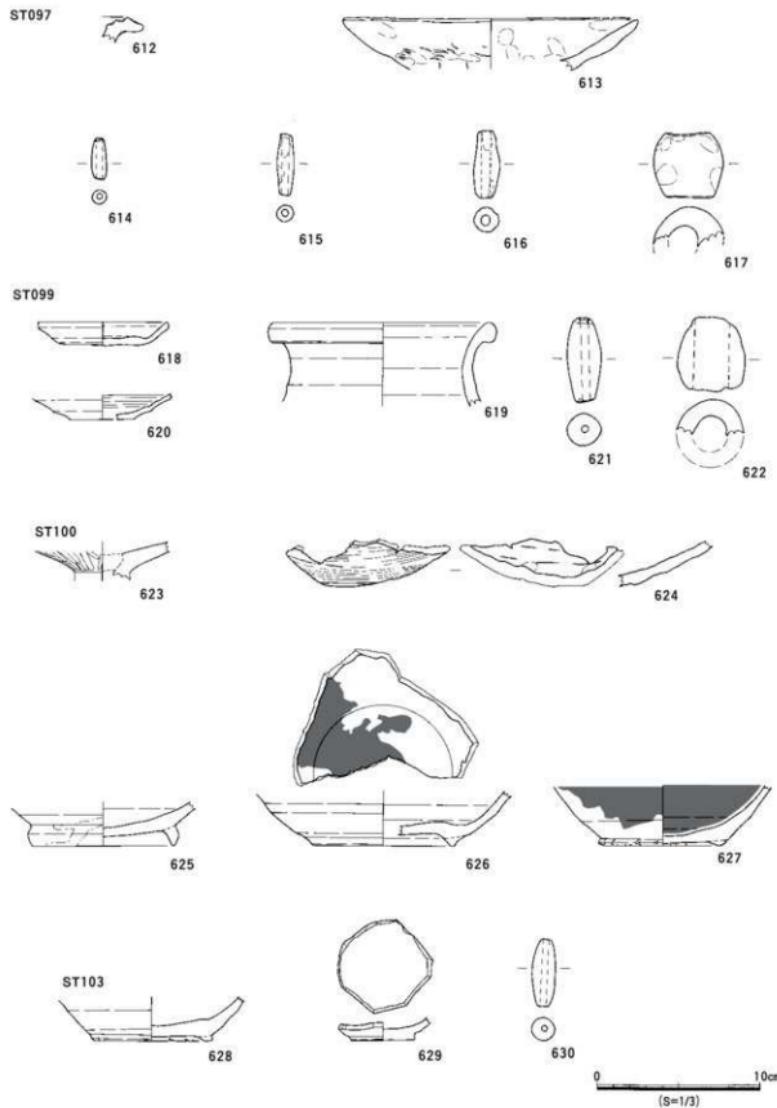


図182 土器 遺構出土 (28)

包含層

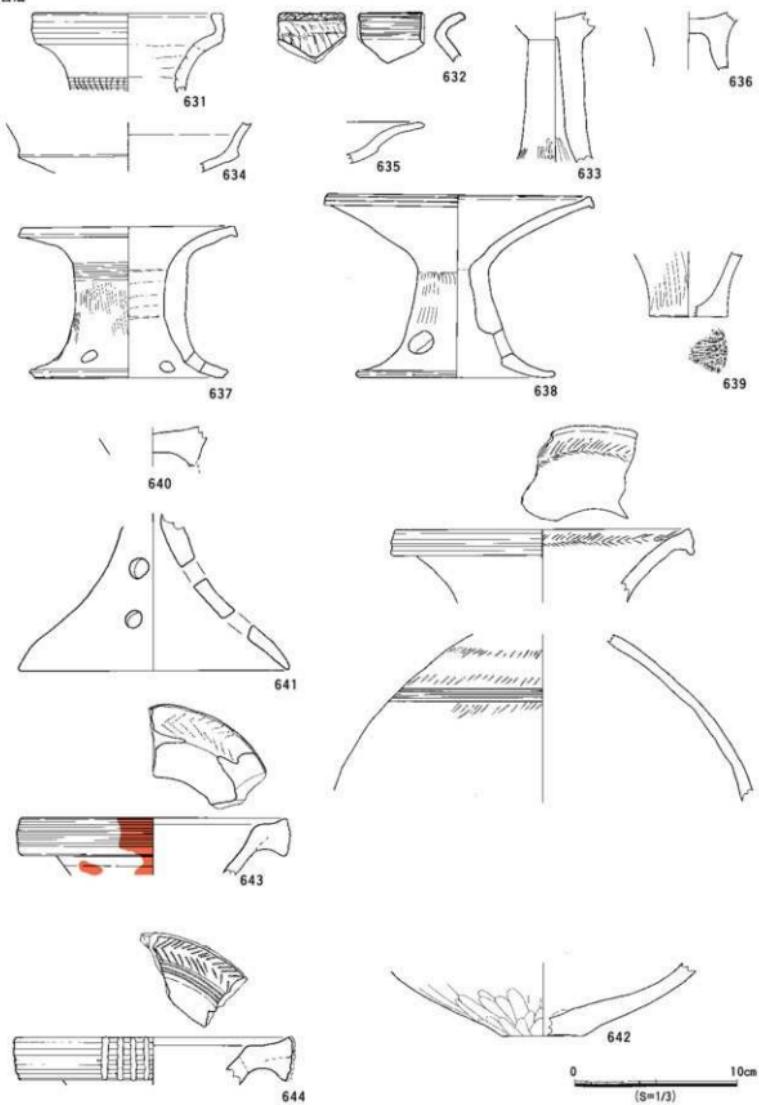


図183 土器 包含層出土（1）

包含層

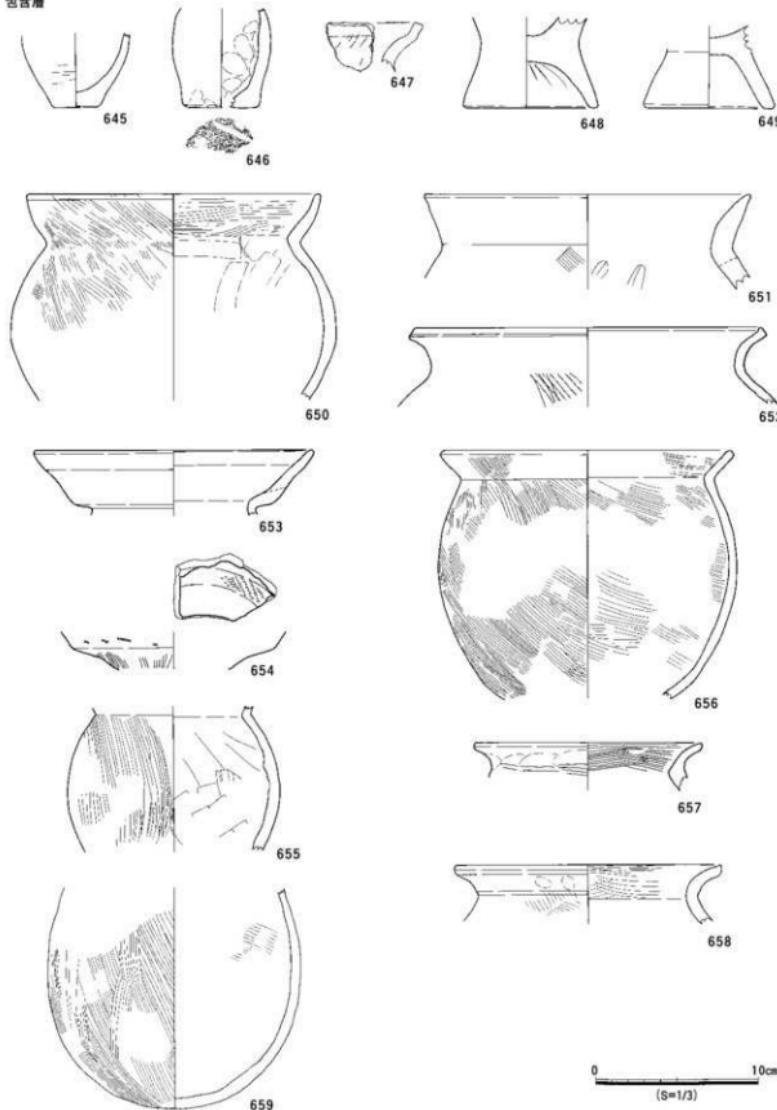


図184 土器 包含層出土（2）

包含層

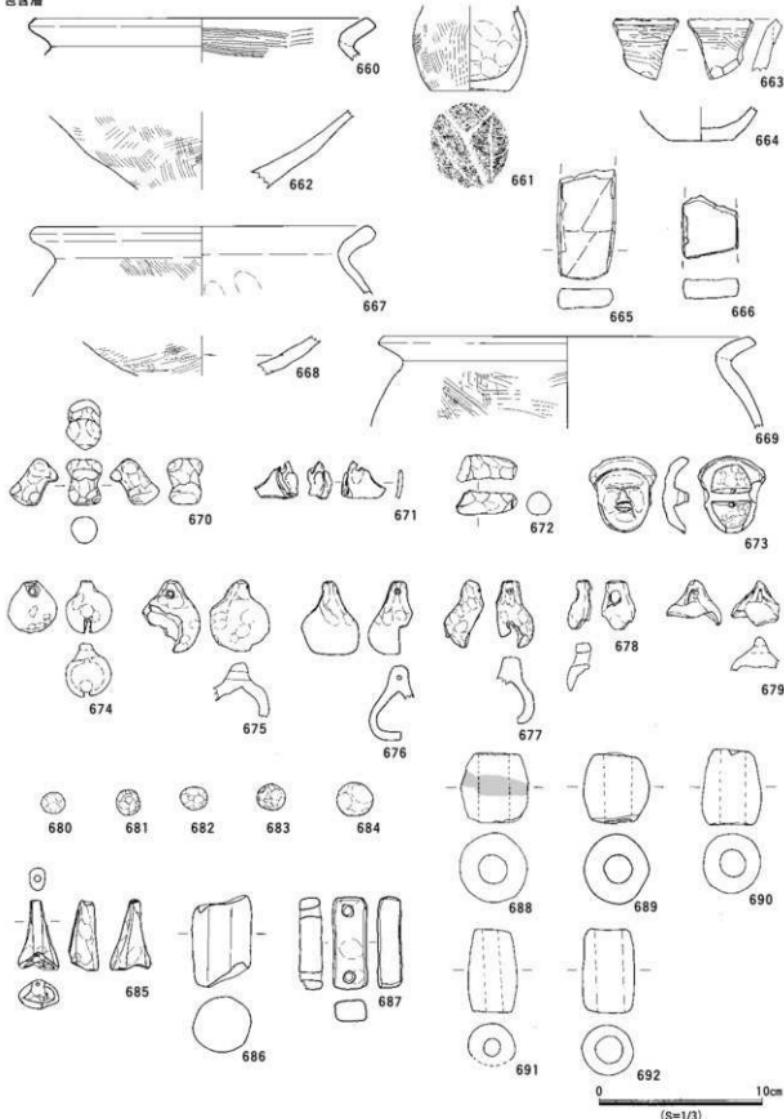


図185 土器 包含層出土 (3)

包含層

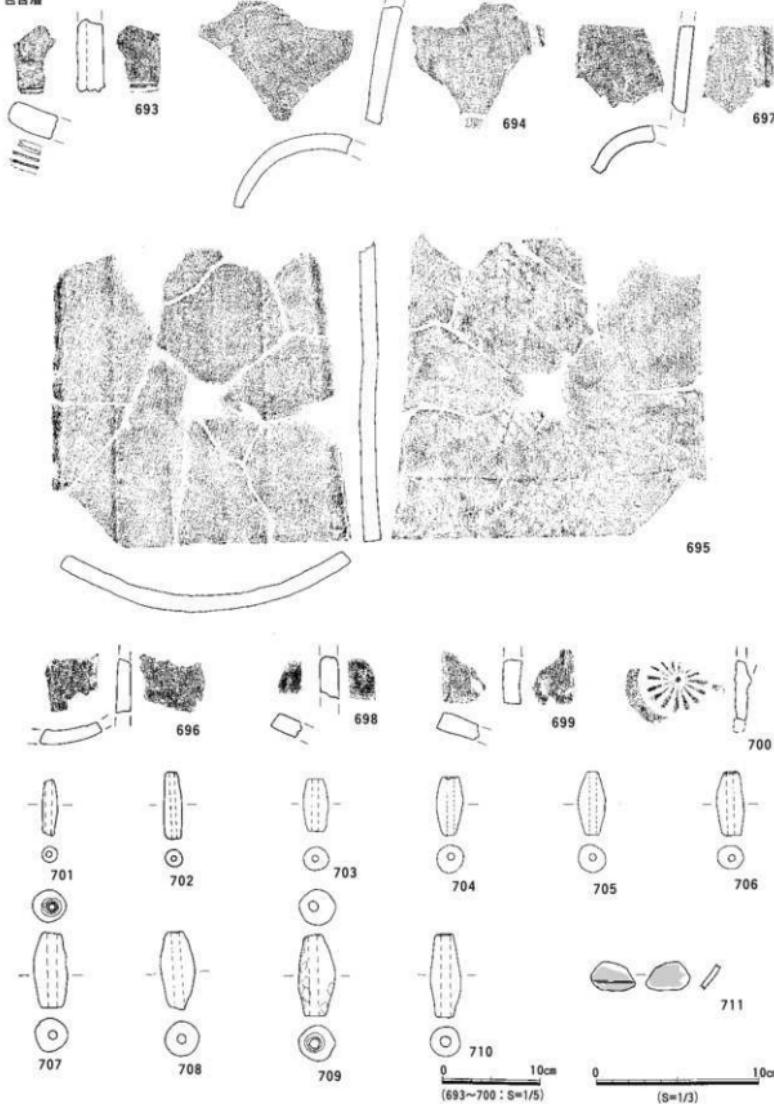
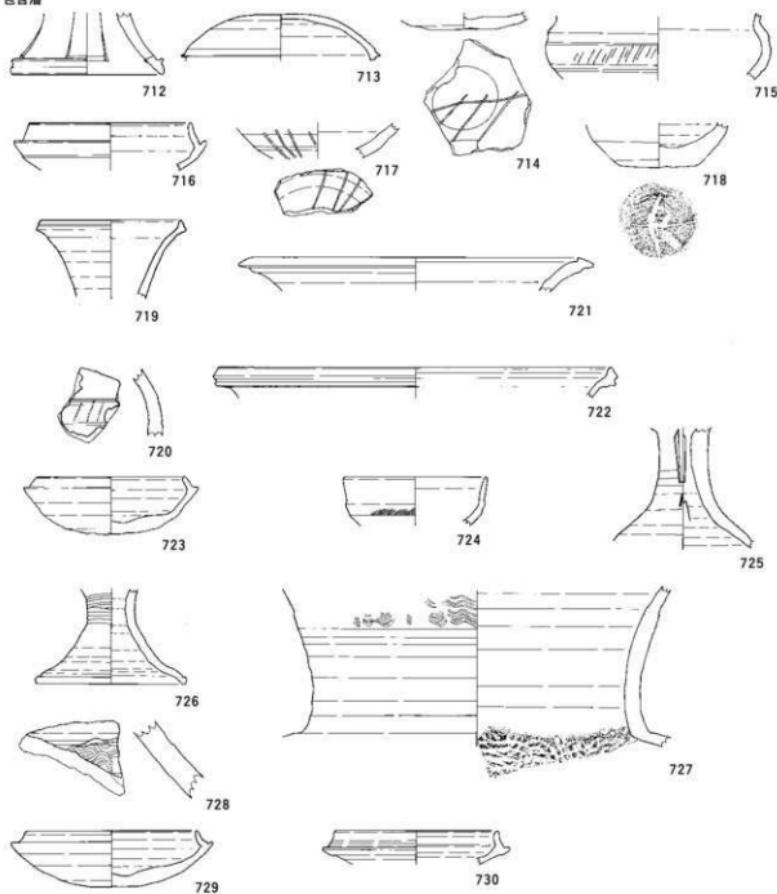


図186 土器 包含層出土（4）

包含層



0
(S=1/3)
10cm

図187 土器 包含層出土（5）

包含層

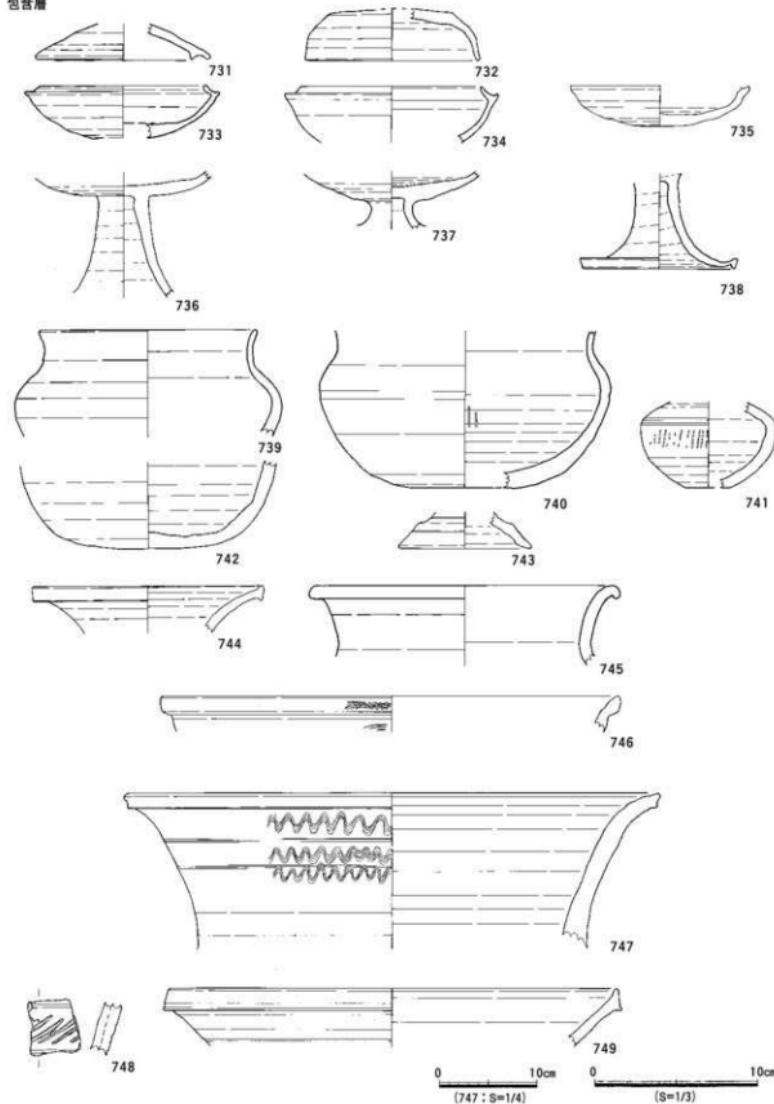


図188 土器 包含層出土（6）

包含層

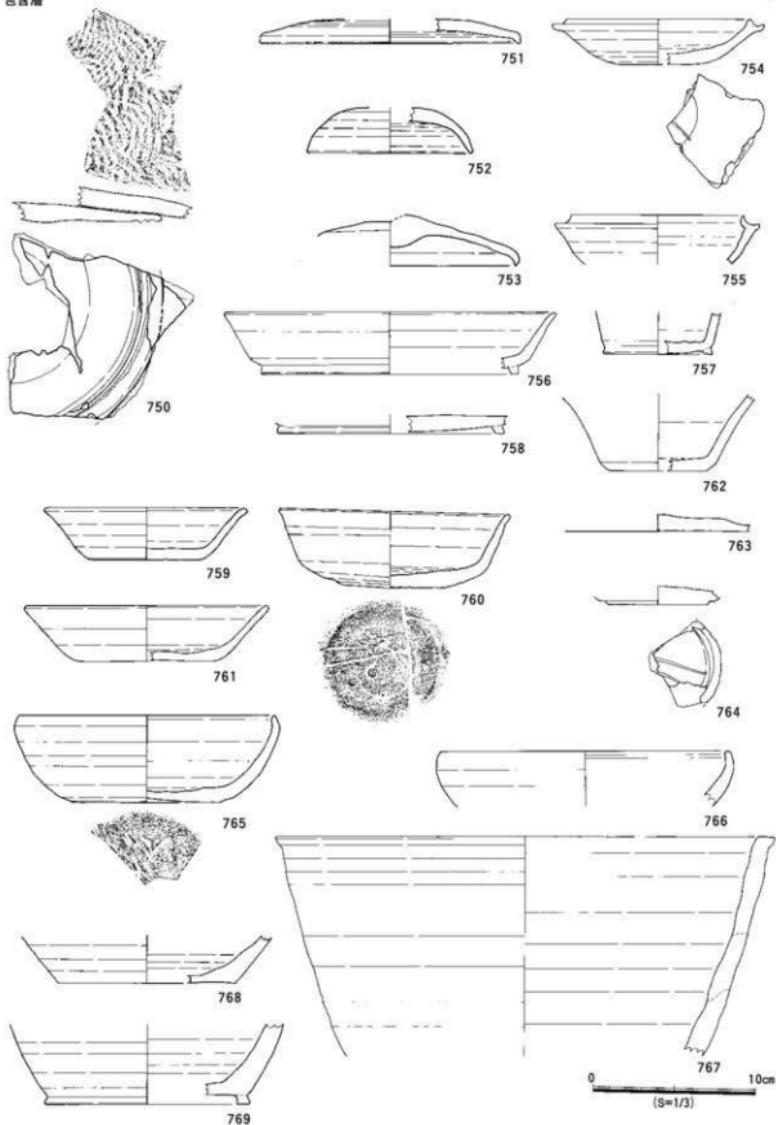


図189 土器 包含層出土 (7)

包含層

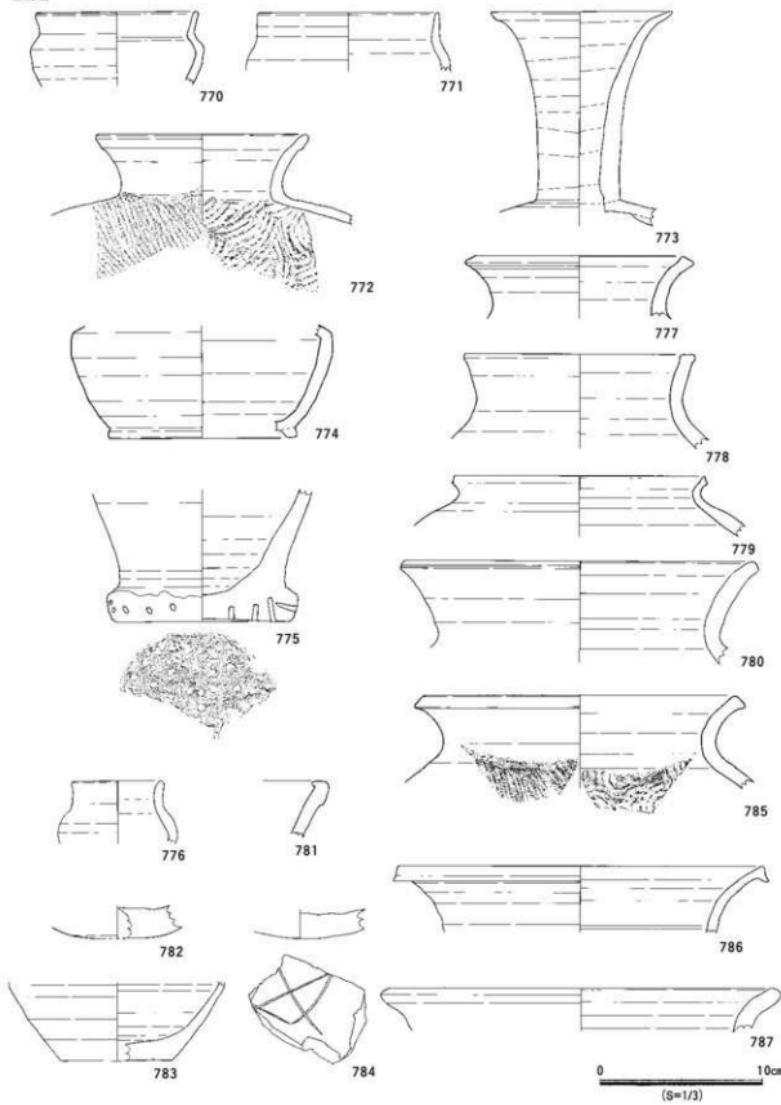


図190 土器 包含層出土（8）

包含層

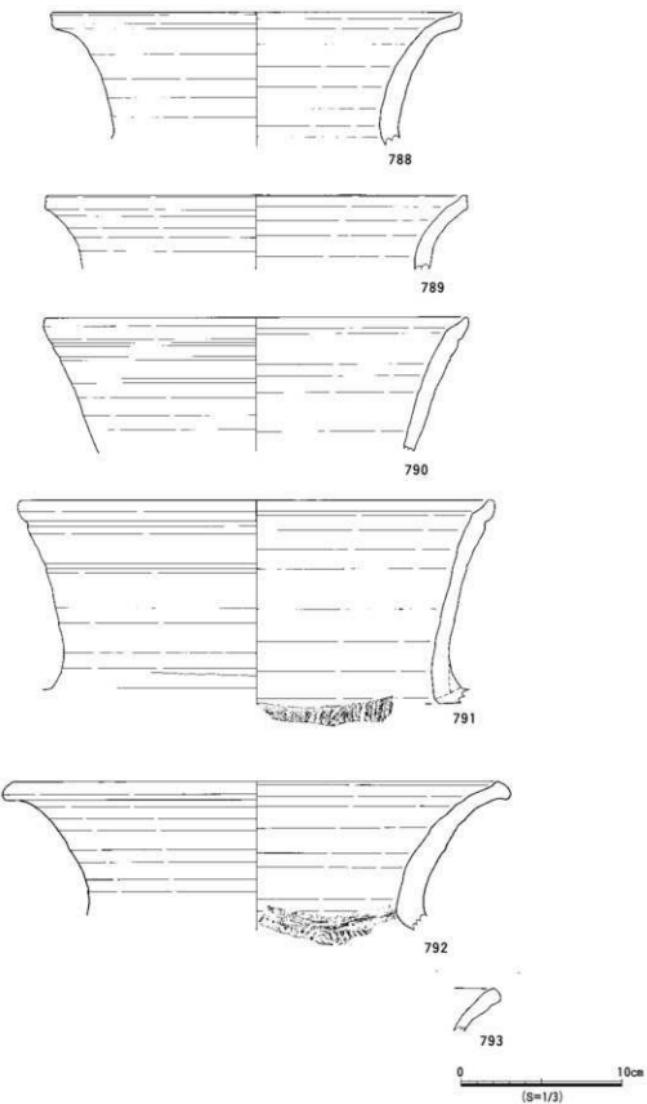


図191 土器 包含層出土（9）

包含層

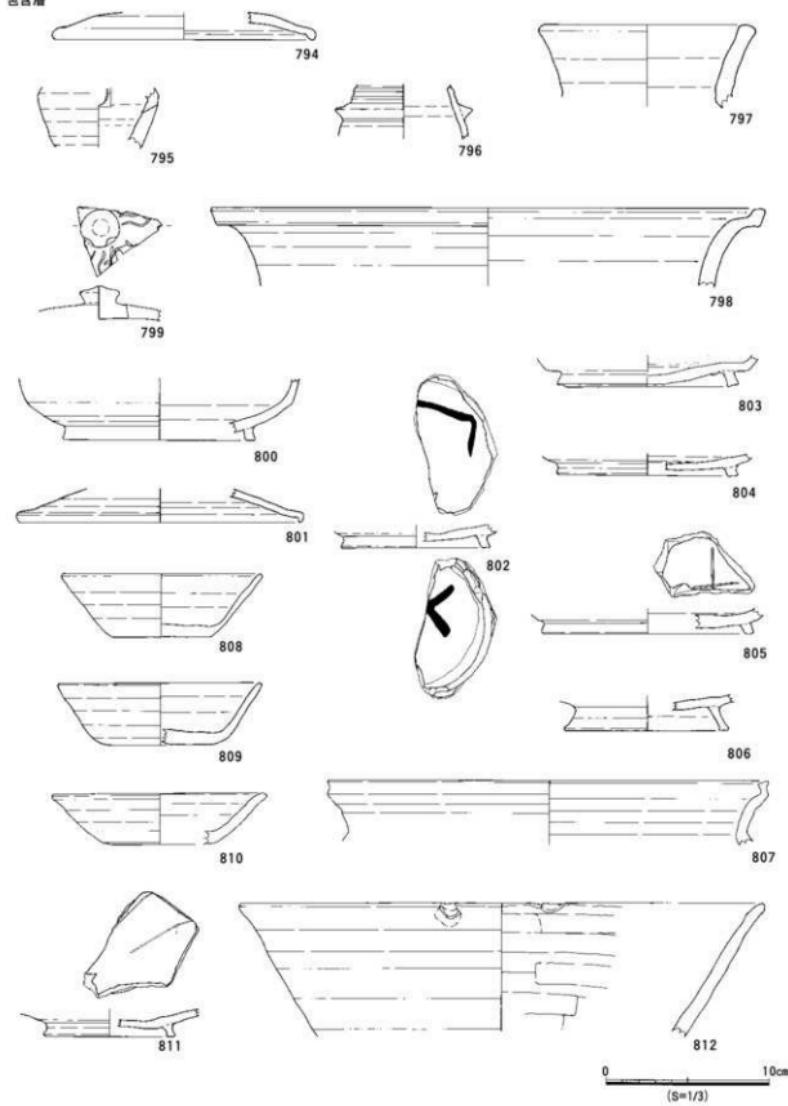


図192 土器 包含層出土 (10)

包含層

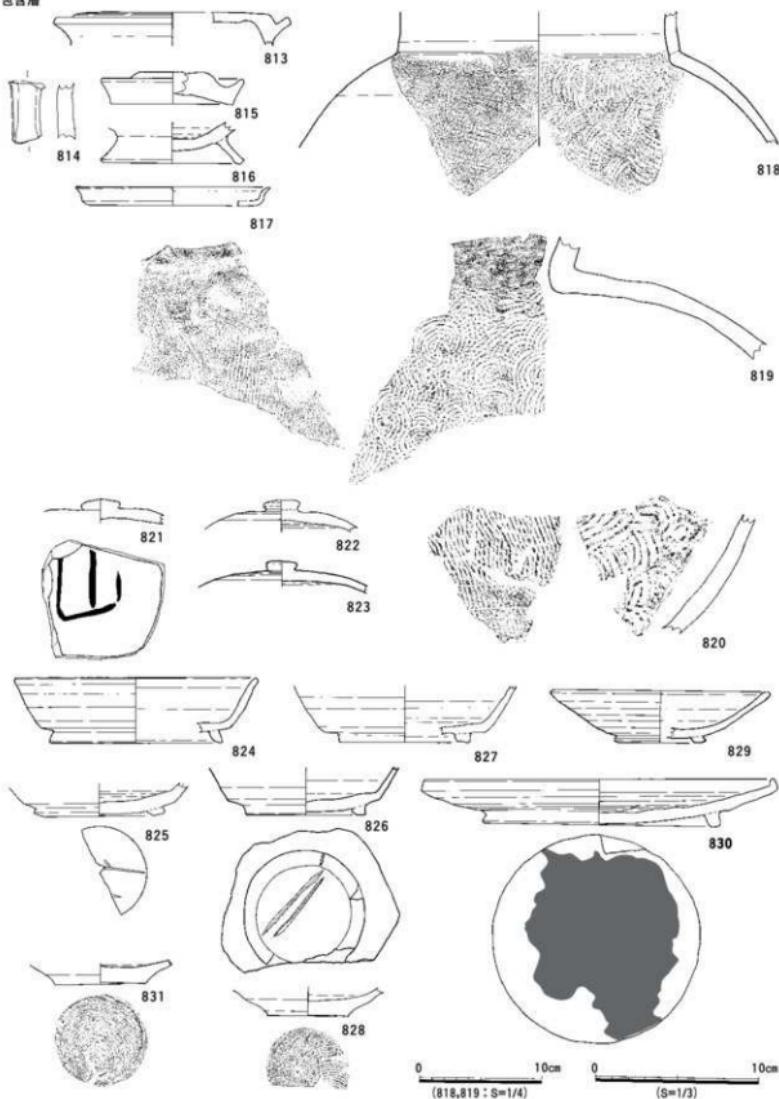


図193 土器 包含層出土 (11)

包含層

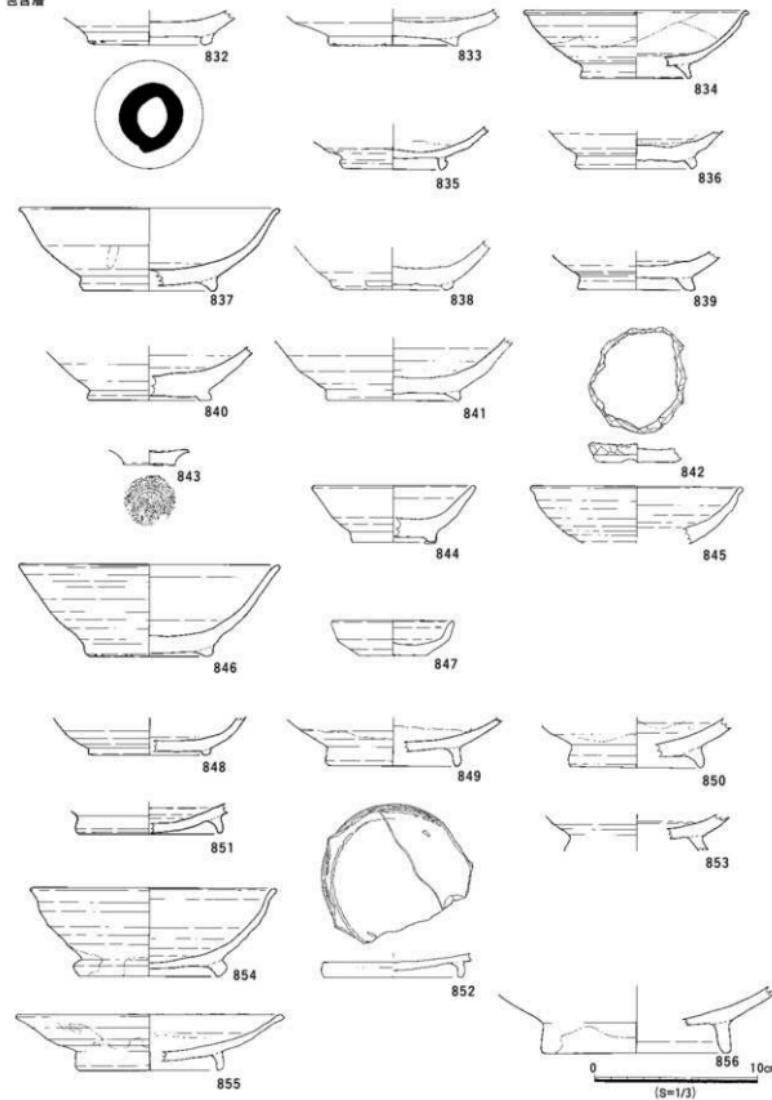


図194 土器 包含層出土 (12)

包含層

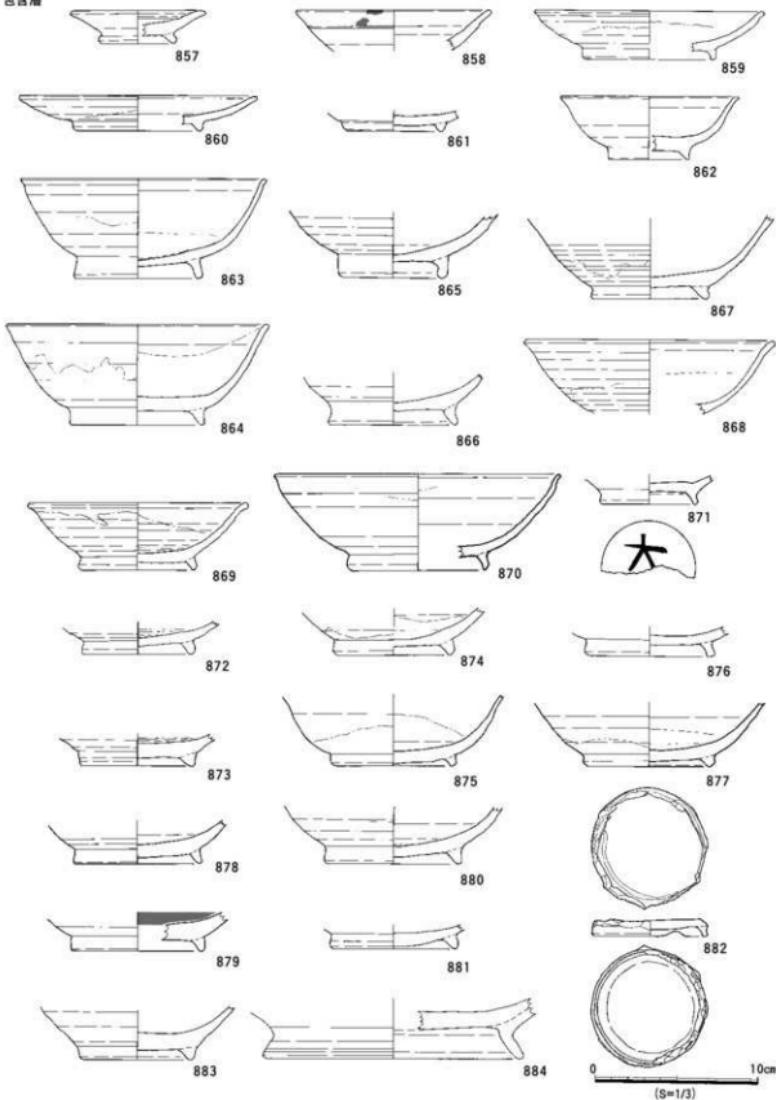


図195 土器 包含層出土 (13)

包含層

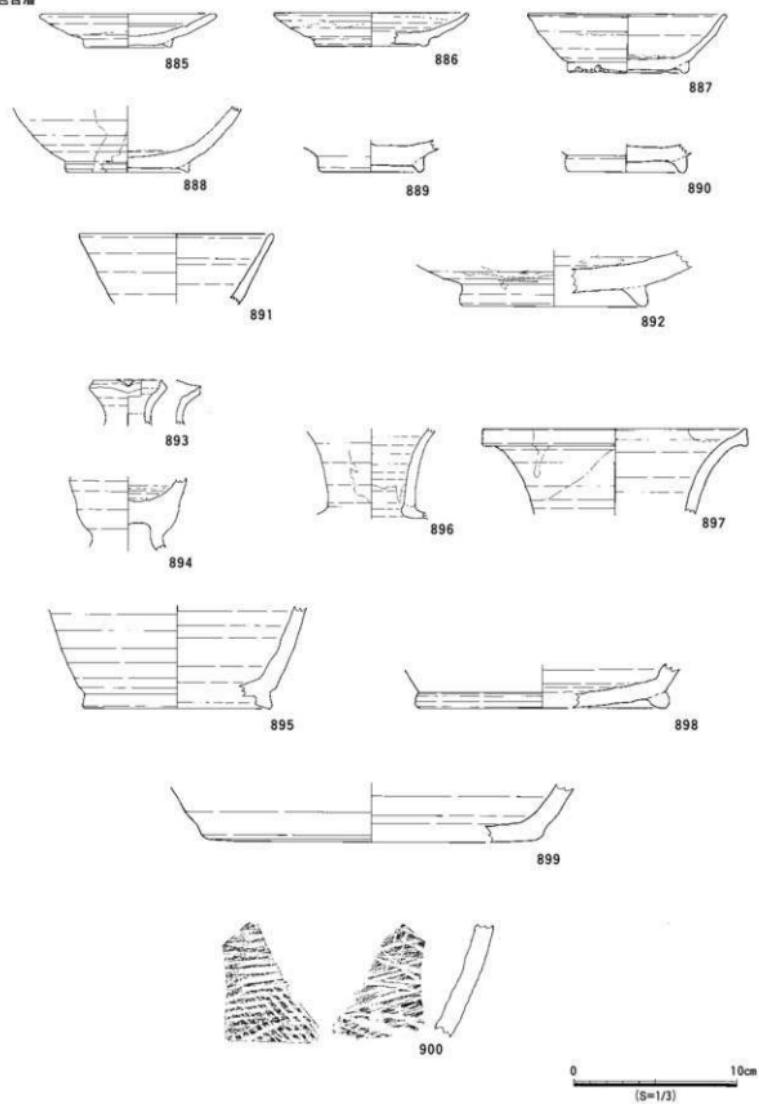


図196 土器 包含層出土 (14)

包含層

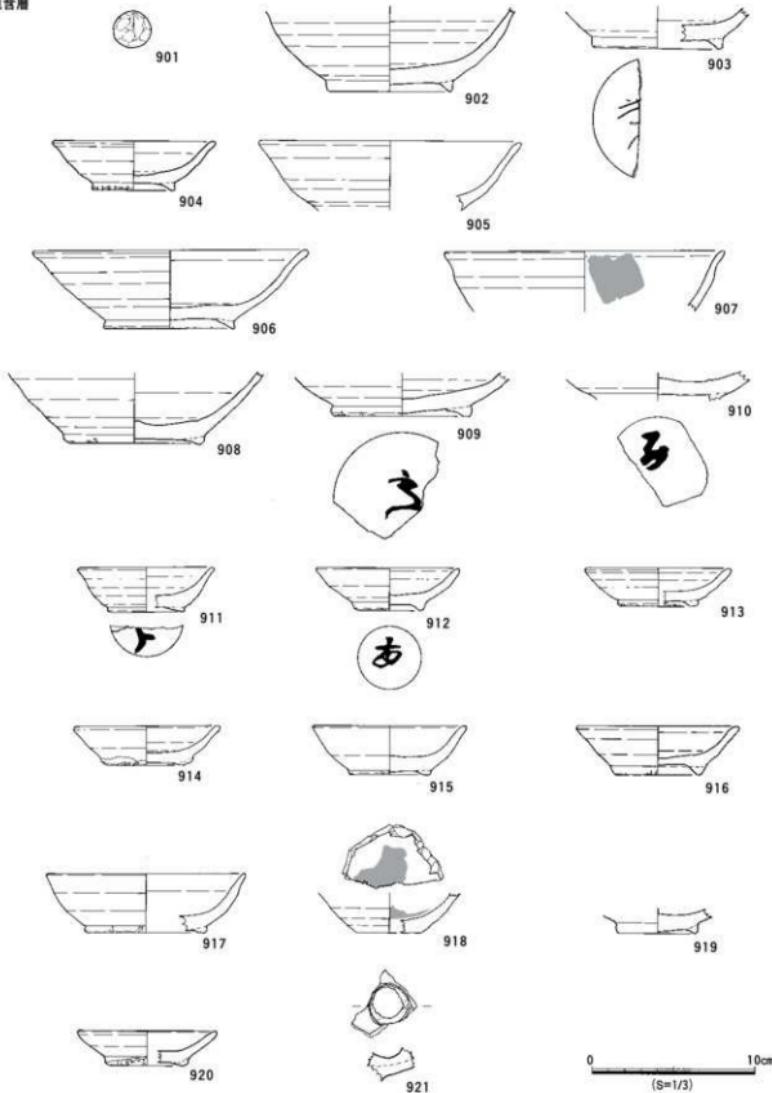


図197 土器 包含層出土 (15)

包含層

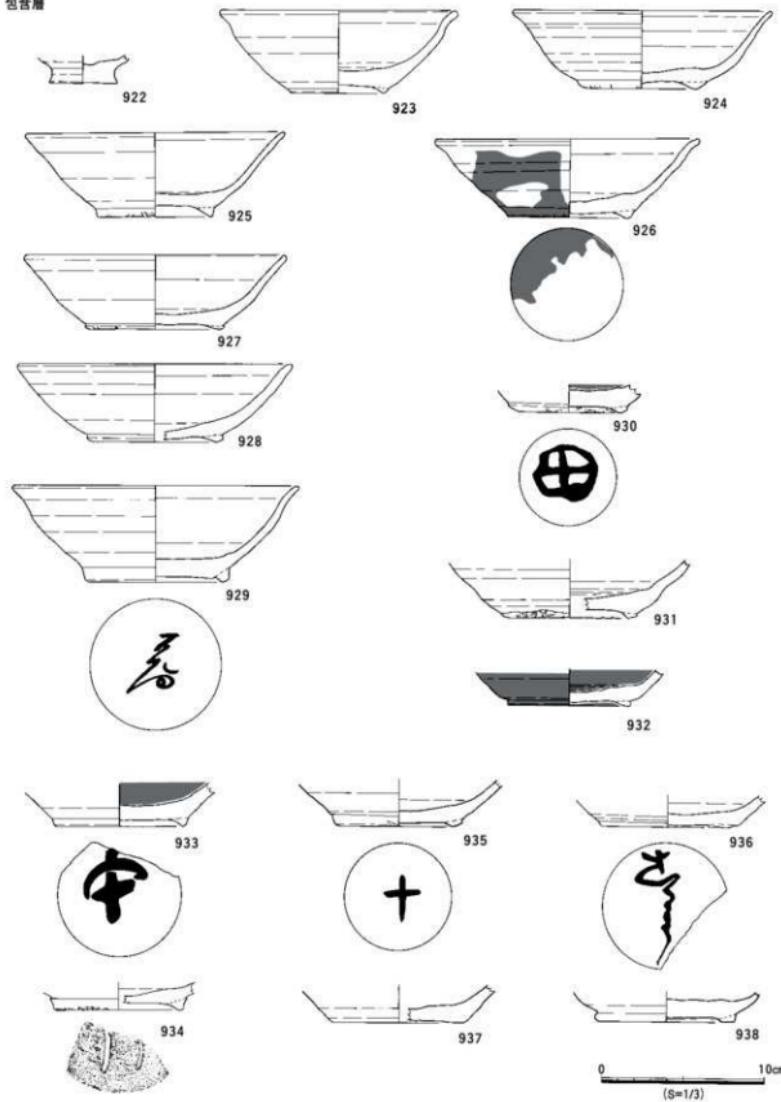
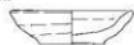


図198 土器 包含層出土 (16)

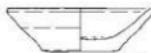
包含層



939



940



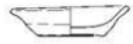
941



942



943



944



945



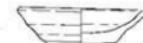
946



947



948



949



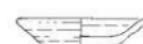
950



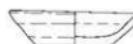
951



952



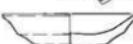
953



954



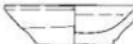
955



956



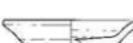
957



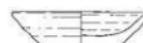
958



960



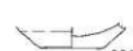
961



962



963



964



965



966

0 10cm
(S=1/3)

図199 土器 包含層出土 (17)

包含層

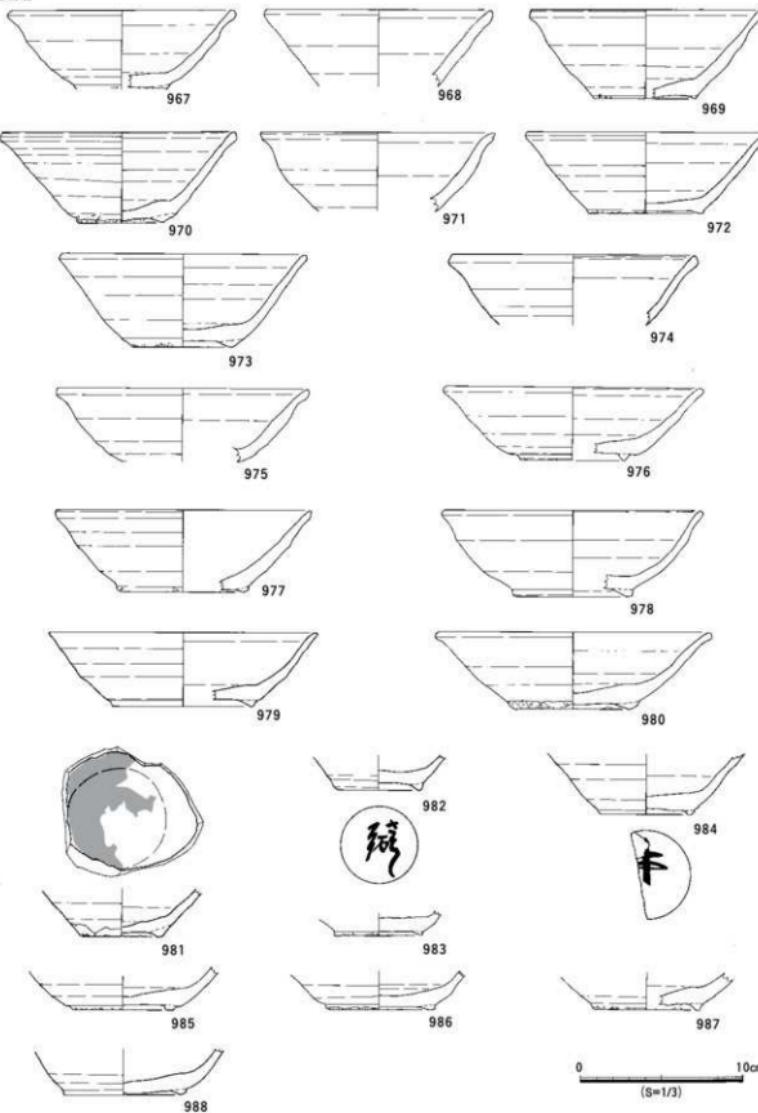


図200 土器 包含層出土 (18)

包含層

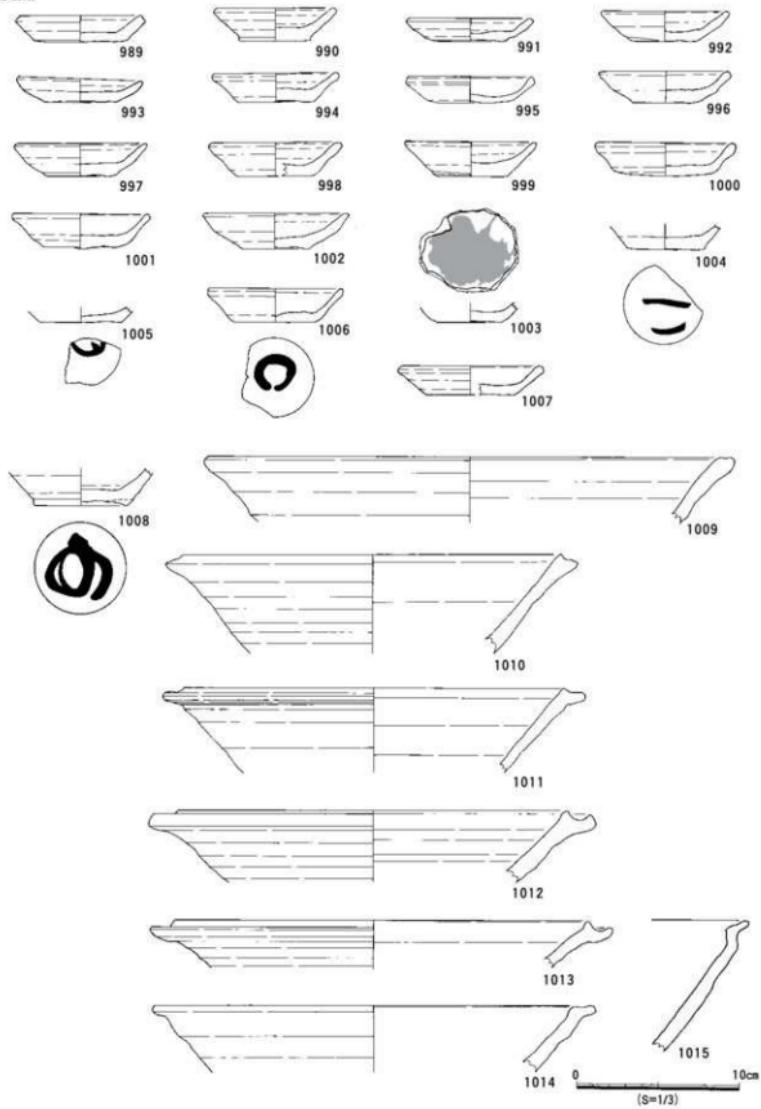


図201 土器 包含層出土 (19)

包含層

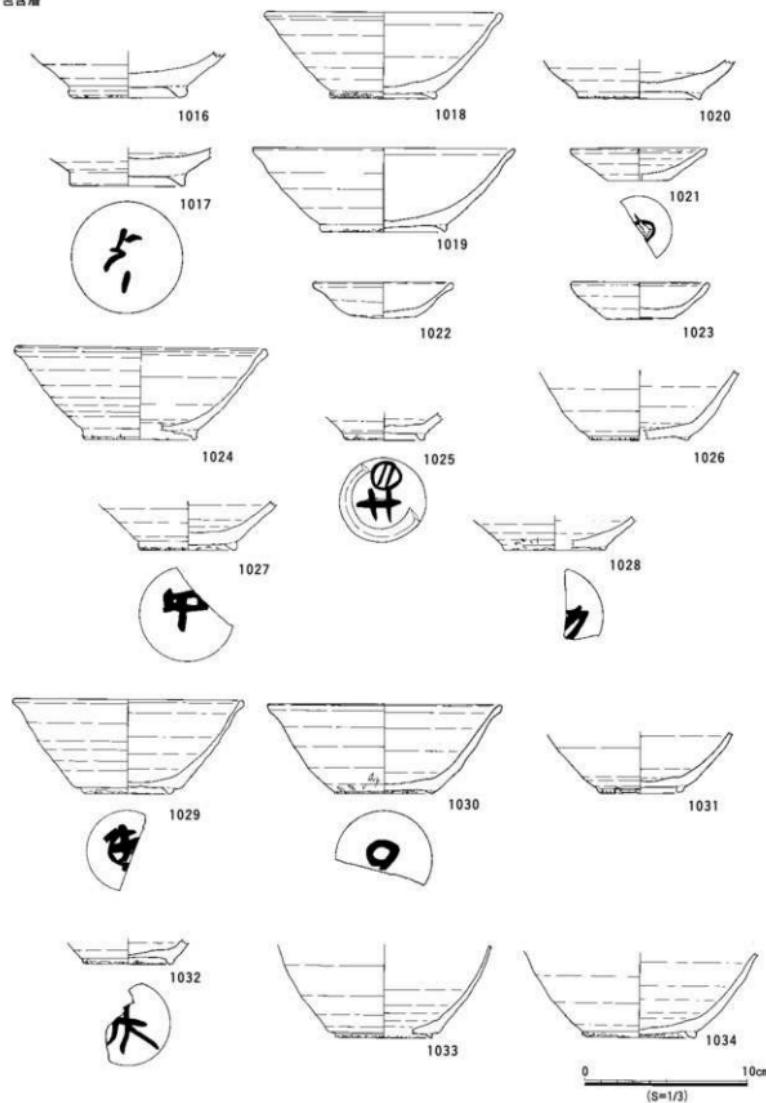


図202 土器 包含層出土 (20)

包含層

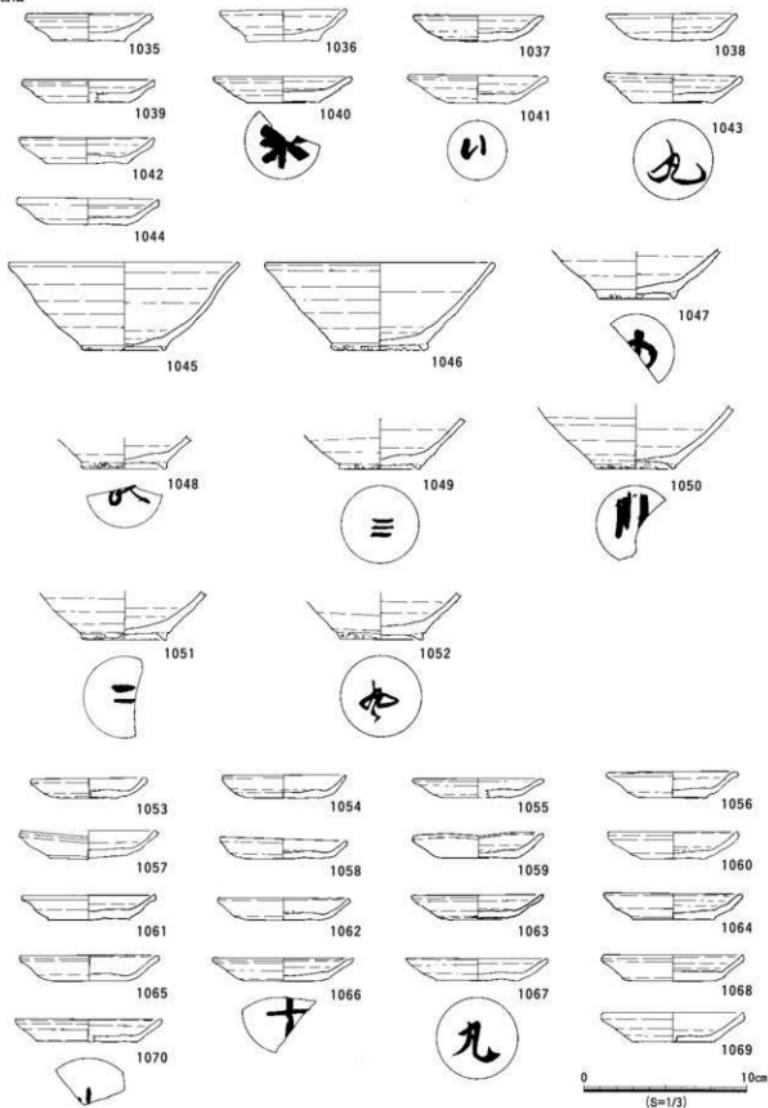


図203 土器 包含層出土 (21)

包含層

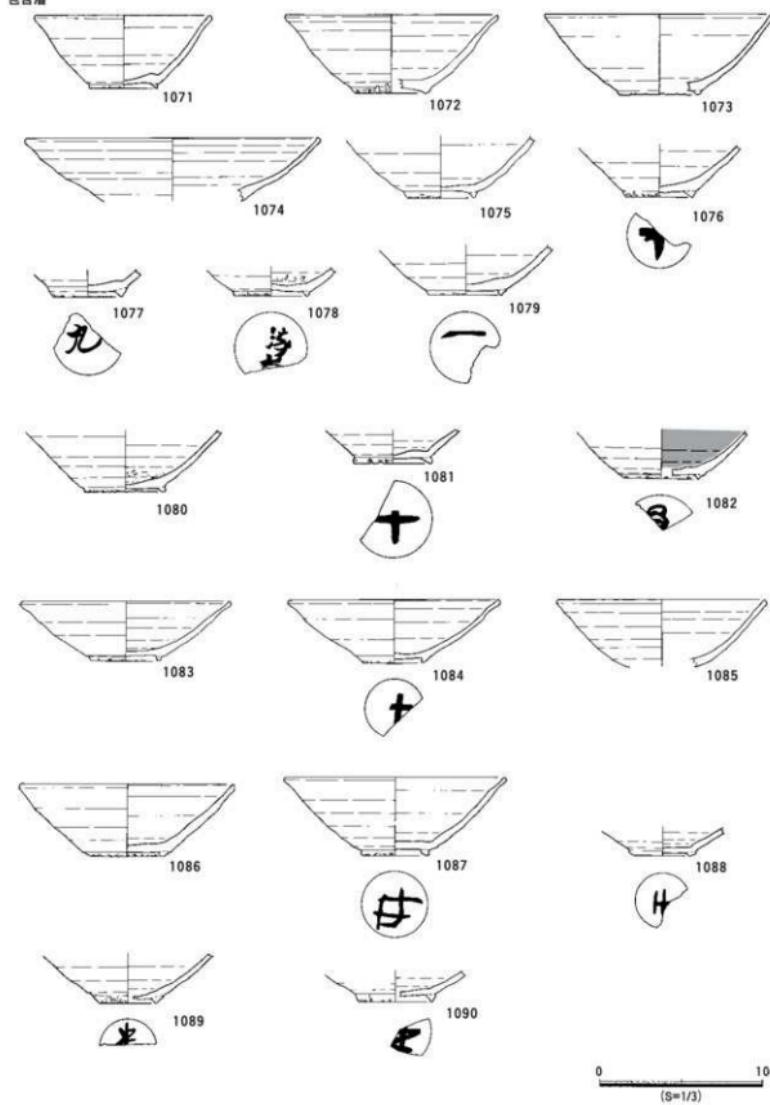


図204 土器 包含層出土 (22)

包含層

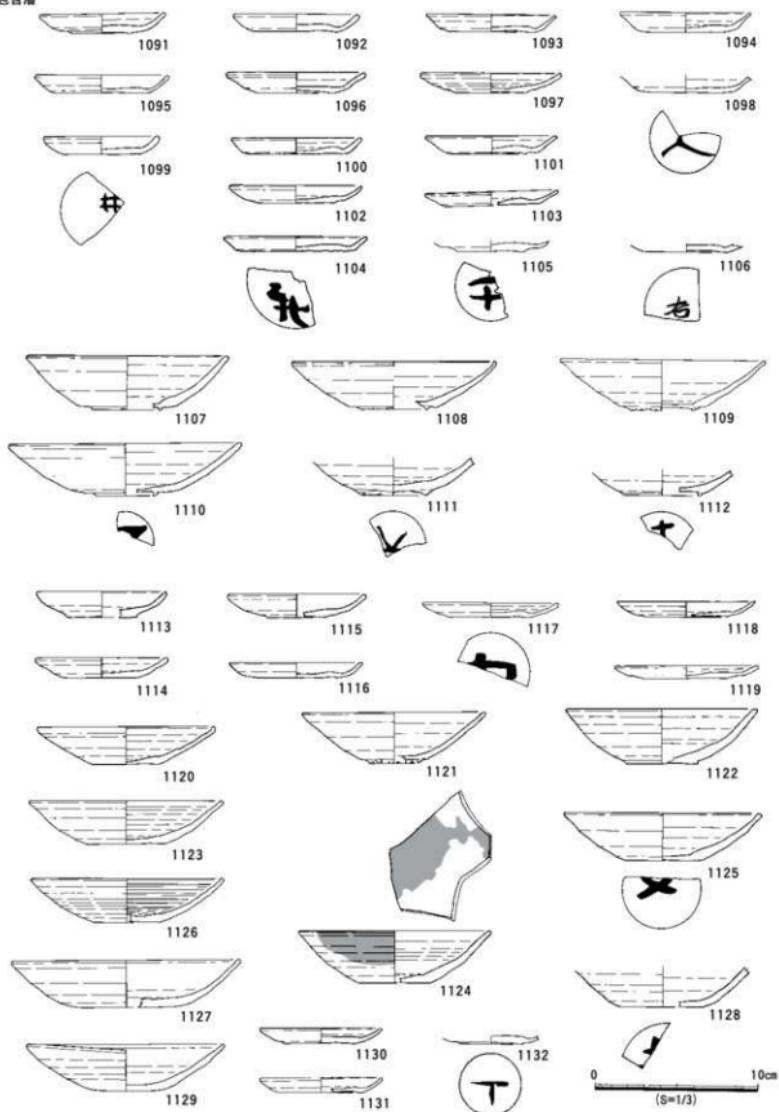
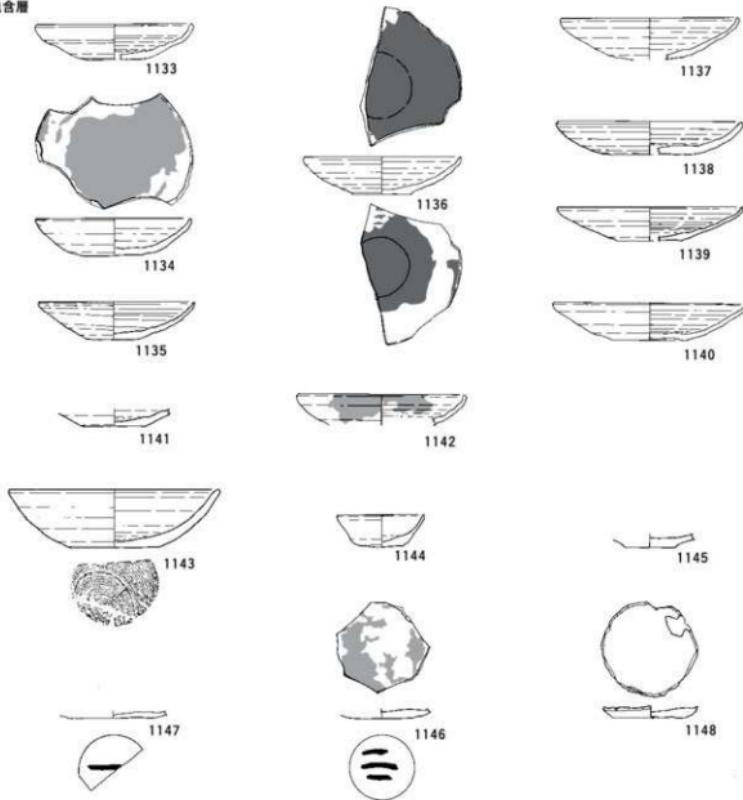


図205 土器 包含層出土 (23)

包含層



0 10cm
(S=1/3)

図206 土器 包含層出土 (24)

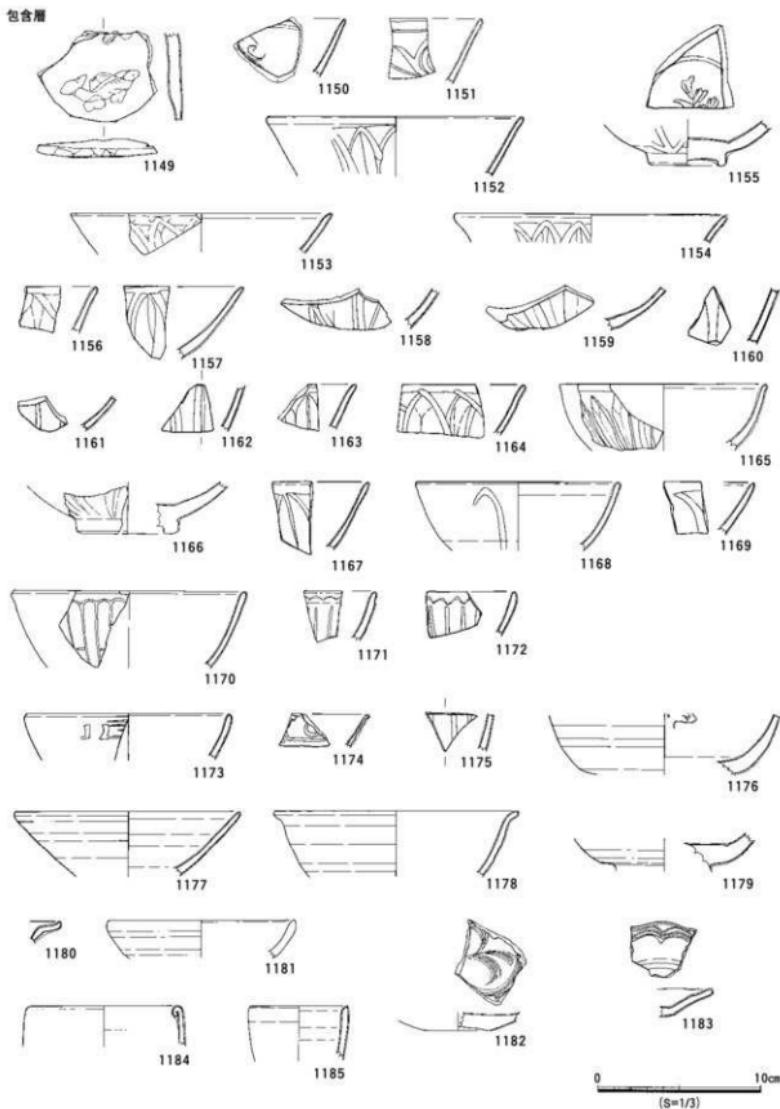


図207 土器 包含層出土 (25)

包含層

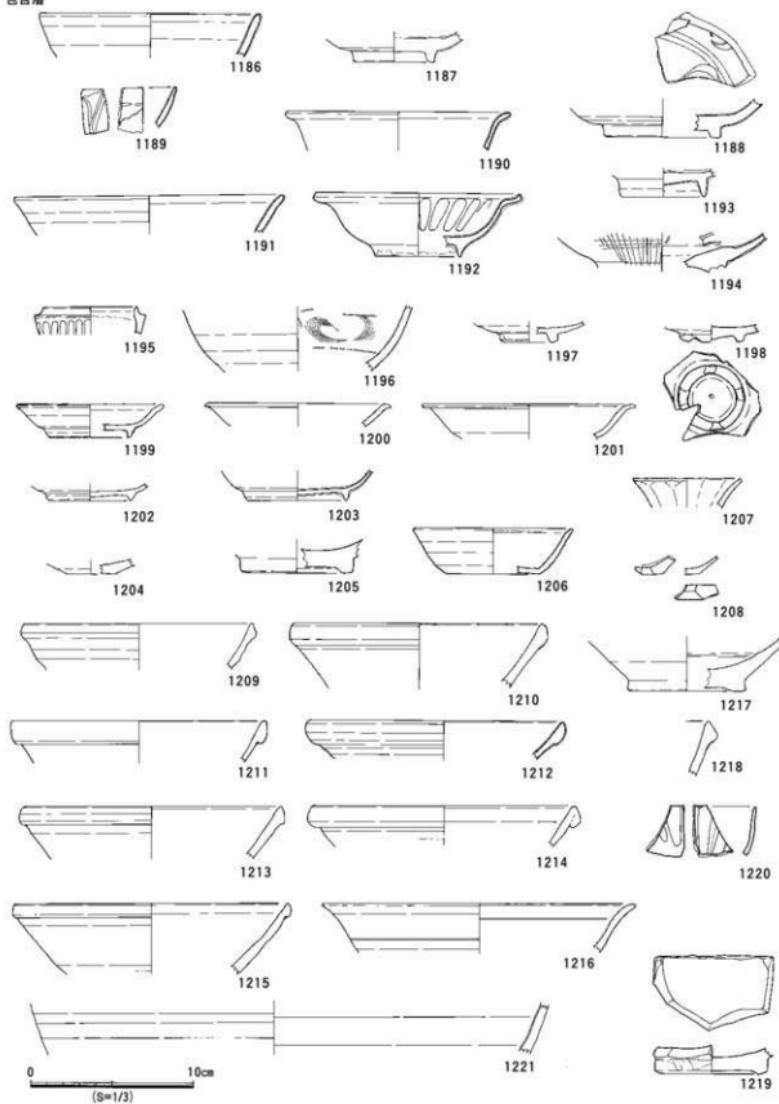


図208 土器 包含層出土 (26)

包含層

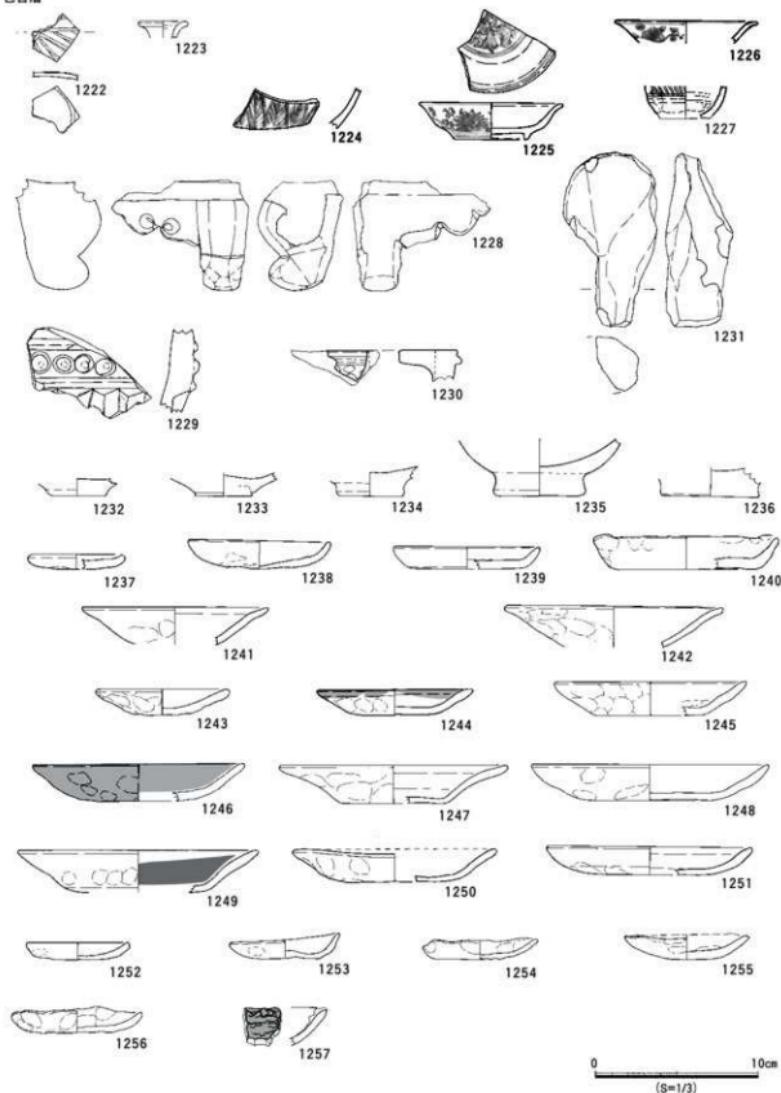


図209 土器 包含層出土 (27)

包含層

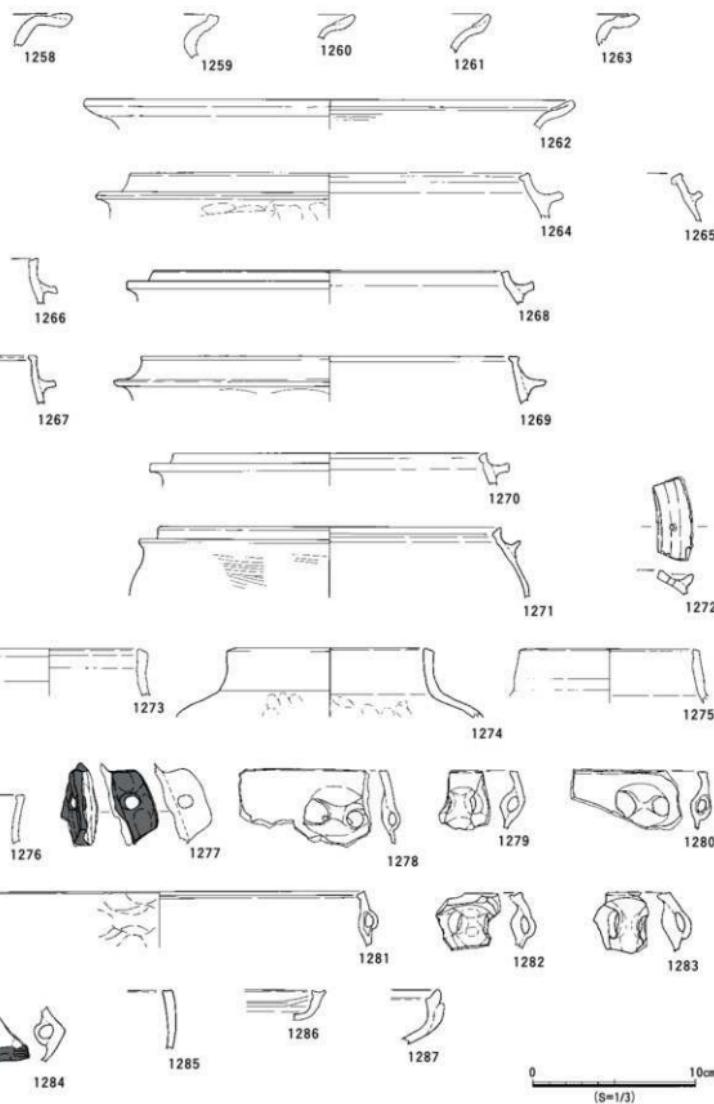


図210 土器 包含層出土 (28)

包含層

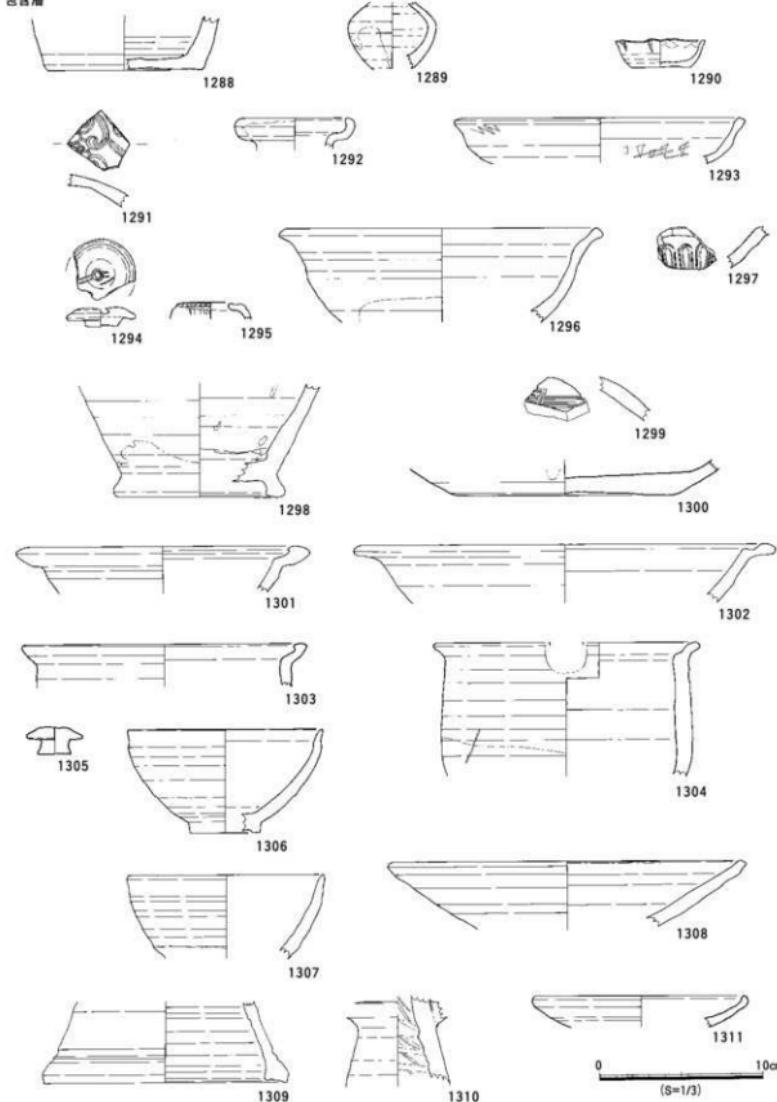


図211 土器 包含層出土 (29)

包含層

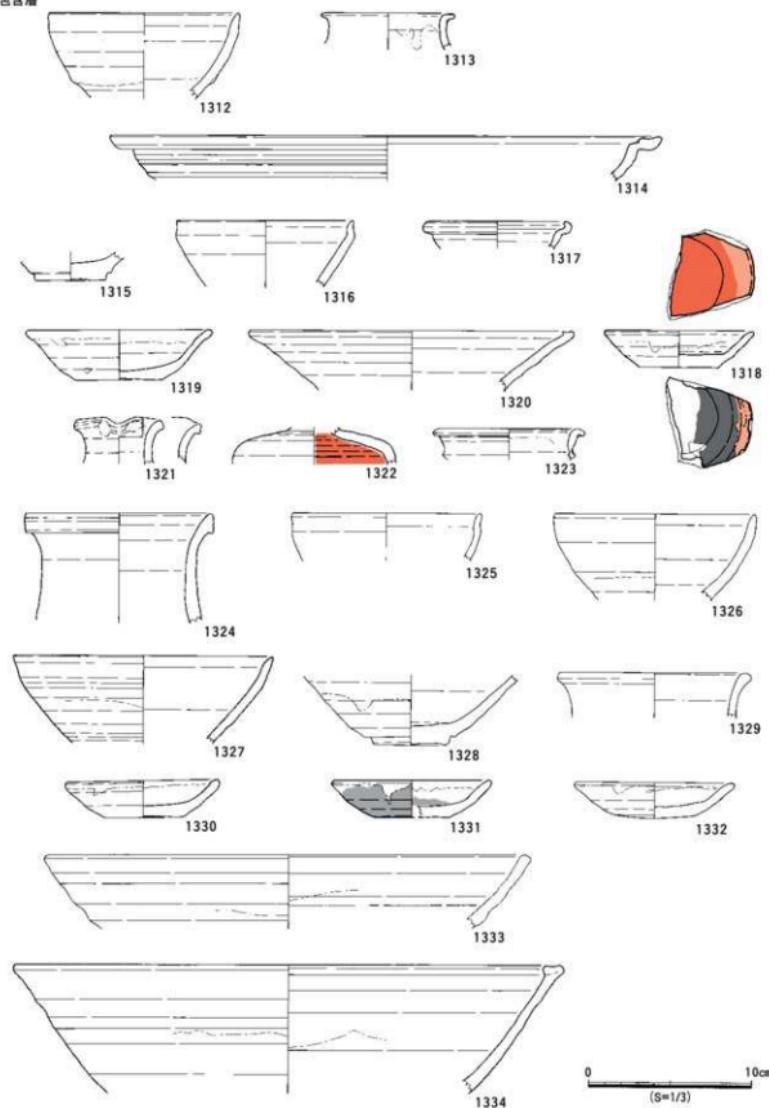


図212 土器 包含層出土 (30)

包含層

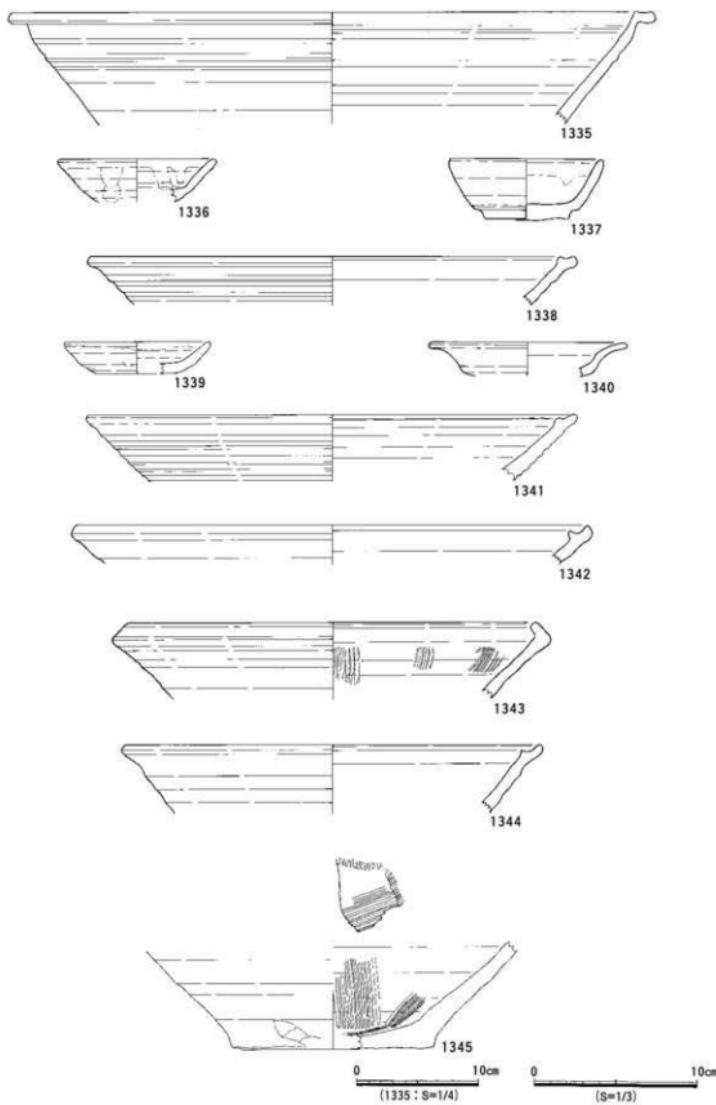
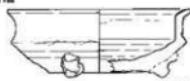


図213 土器 包含層出土 (31)

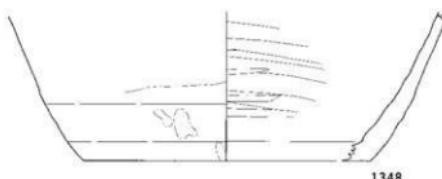
包含層



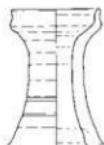
1346



1347



1348



1349



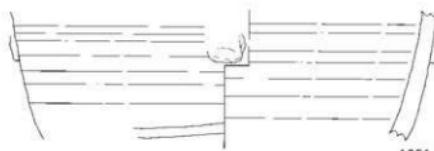
1350



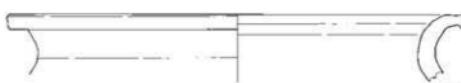
1352



1353



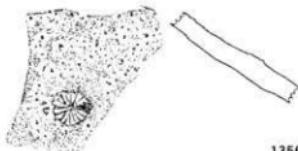
1351



1354



1355



1356



1357

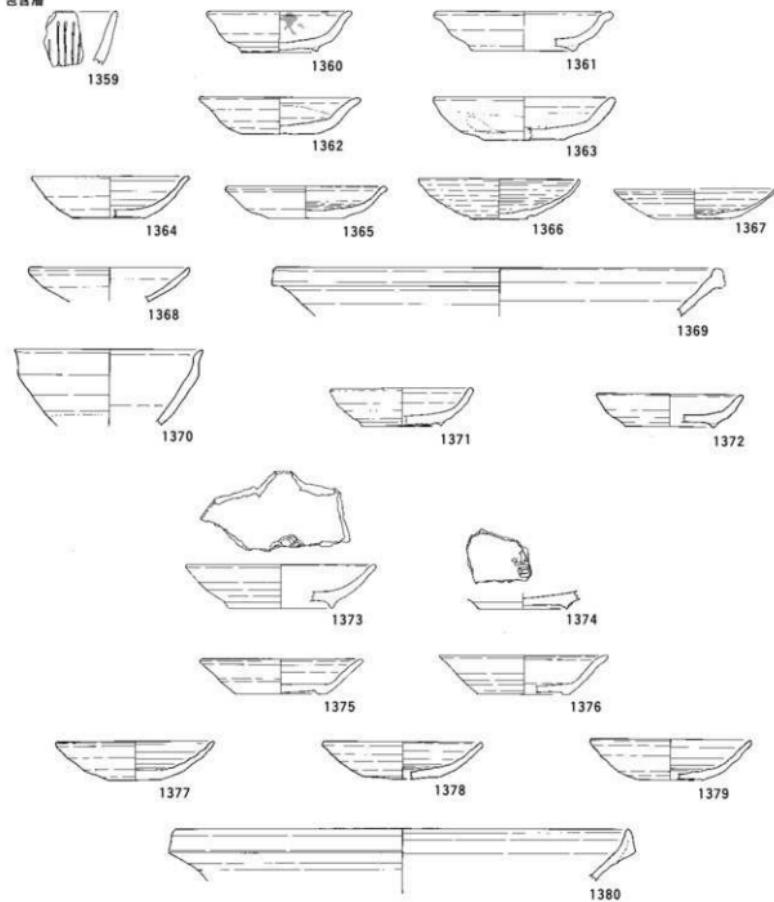


1358

0
10cm
(5=1/3)

図214 土器 包含層出土 (32)

包含層



0
10cm
(S=1/3)

図215 土器 包含層出土 (33)

包含層

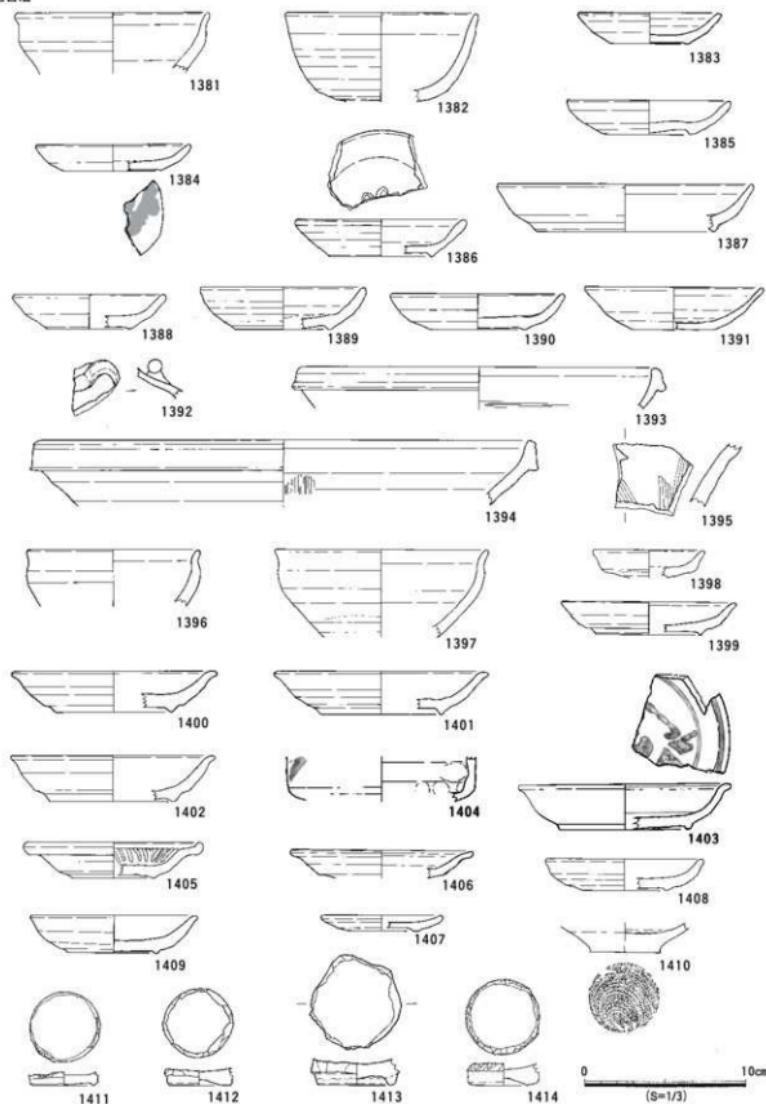
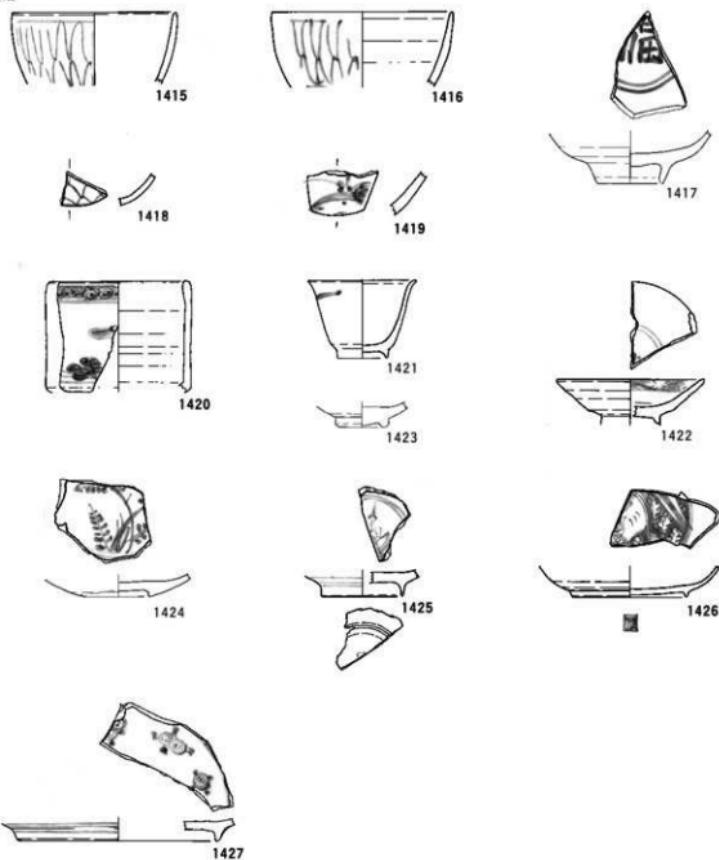


図216 土器 包含層出土 (34)

包含層



0 10cm
(S=1/3)

図217 土器 包含層出土 (35)

包含層

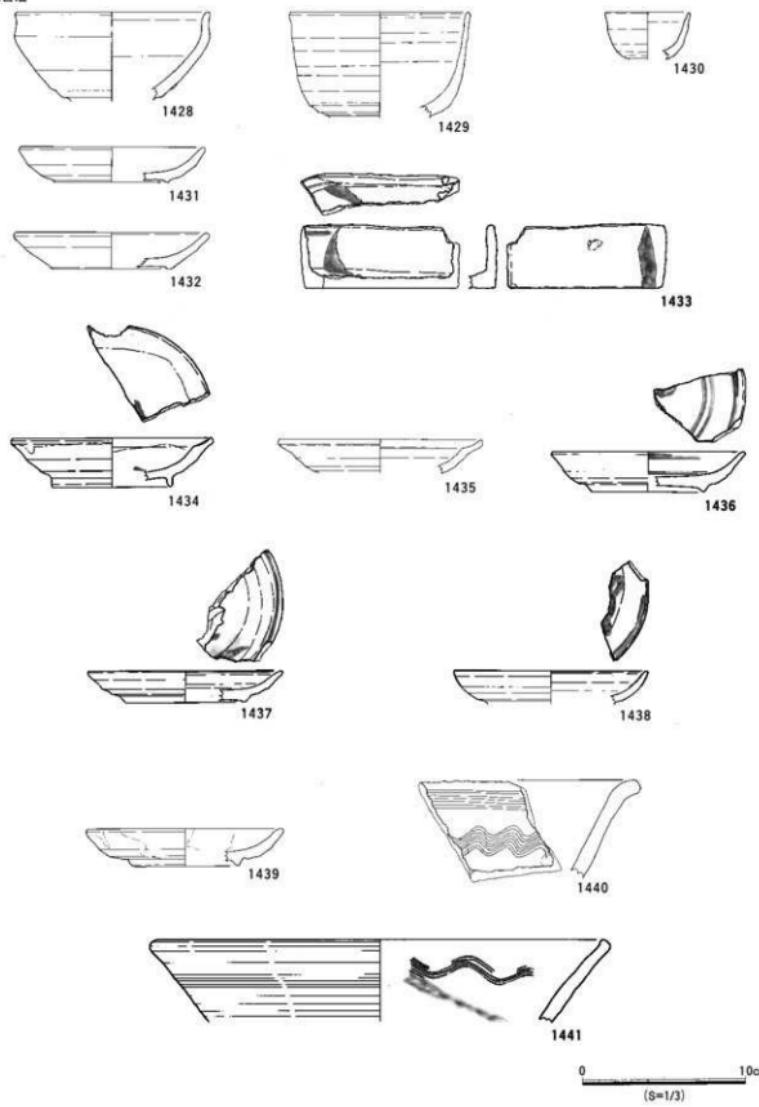
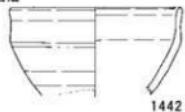


図218 土器 包含層出土 (36)

包含層



1442



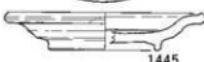
1443



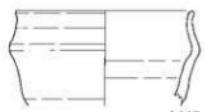
1444



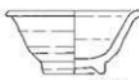
1446



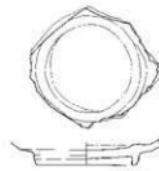
1445



1447



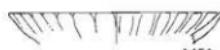
1449



1450



1448



1451



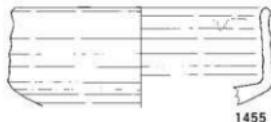
1452



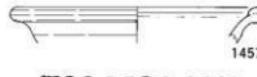
1453



1454



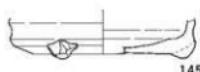
1455



1457



1458



1456



1459



1462



1460



1463



1461

0 10cm
(S=1/3)

図219 土器 包含層出土 (37)

包含層

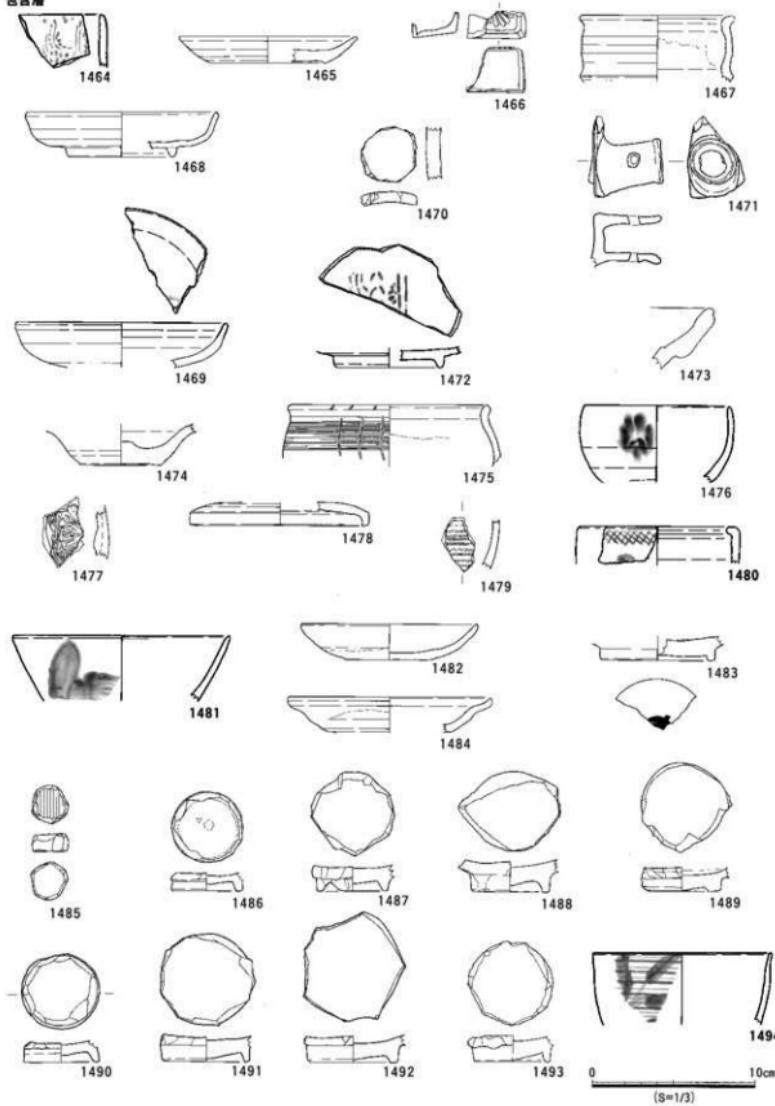
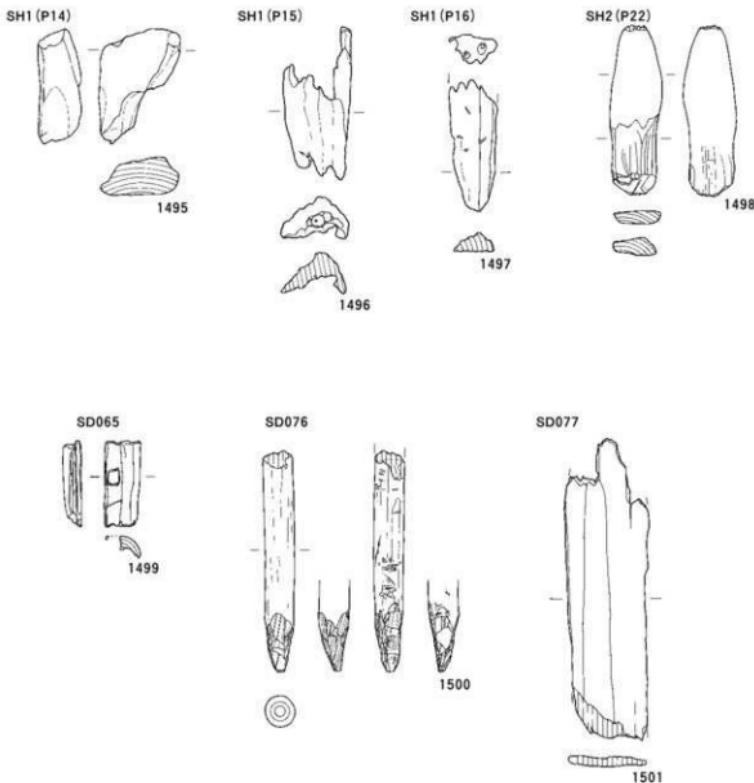


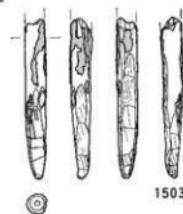
図220 土器 包含層出土 (38)



0 10cm 0 20cm
(1501: S=1/4) (1495~1500: S=1/8)

※1502はNR001遺構図に掲載
図221 木製品 遺構出土（1）

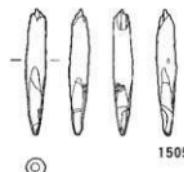
SM002



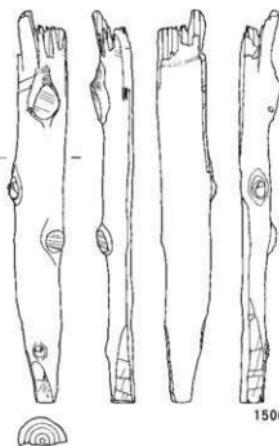
1503



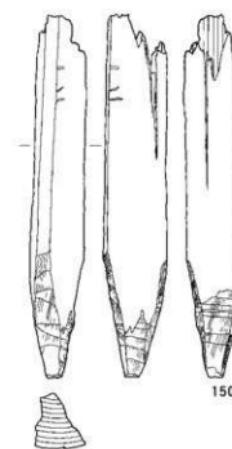
1504



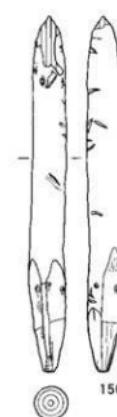
1505



1506



1507

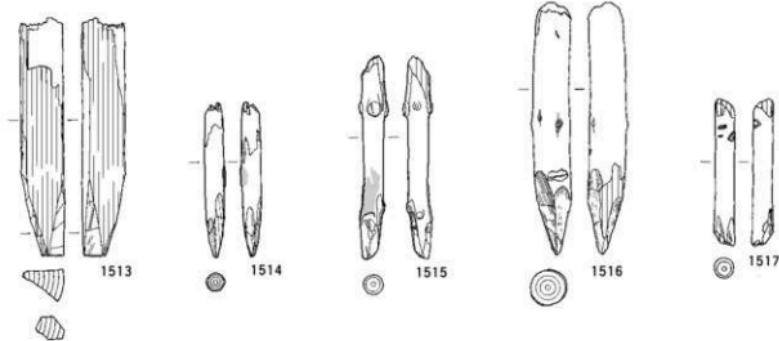
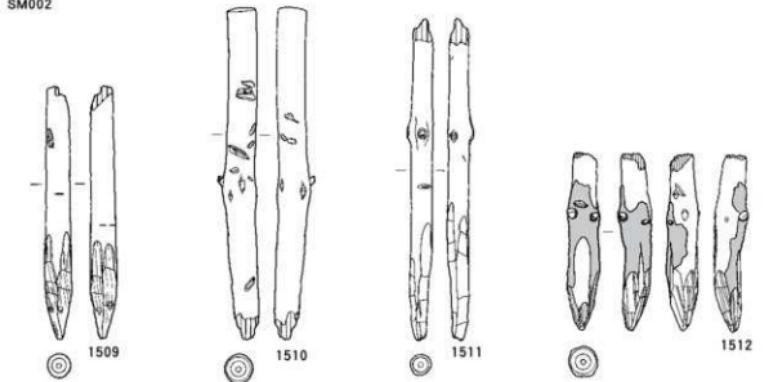


1508

0
20cm
(1503~1508 : S=1/8)

図222 木製品 遺構出土（2）

SM002



0 20cm
(S=1/8)

図223 木製品 遺構出土 (3)

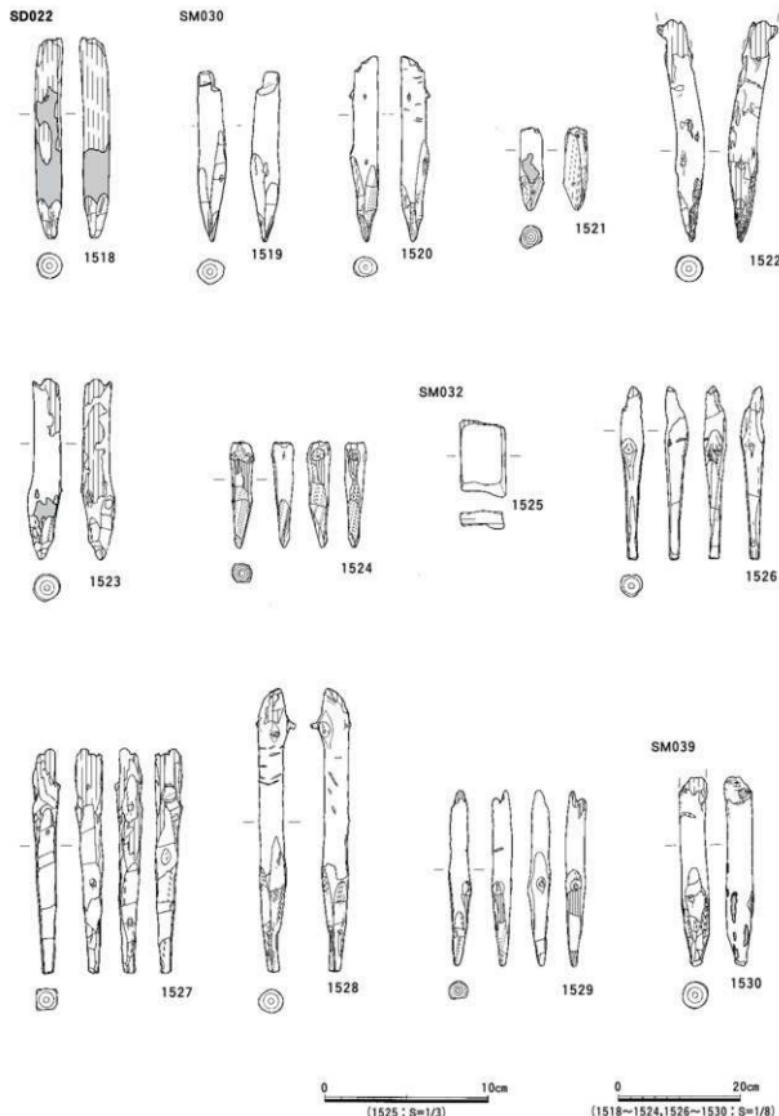


図224 木製品 遺構出土 (4)

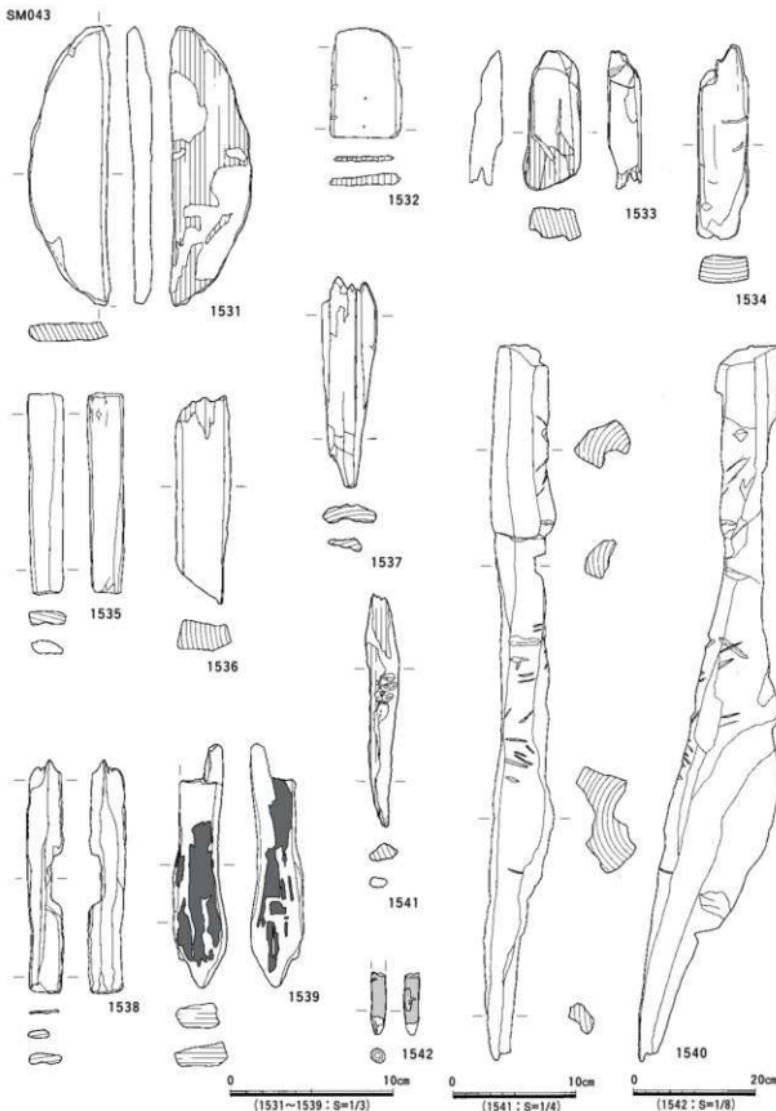


図225 木製品 遺構出土 (5)

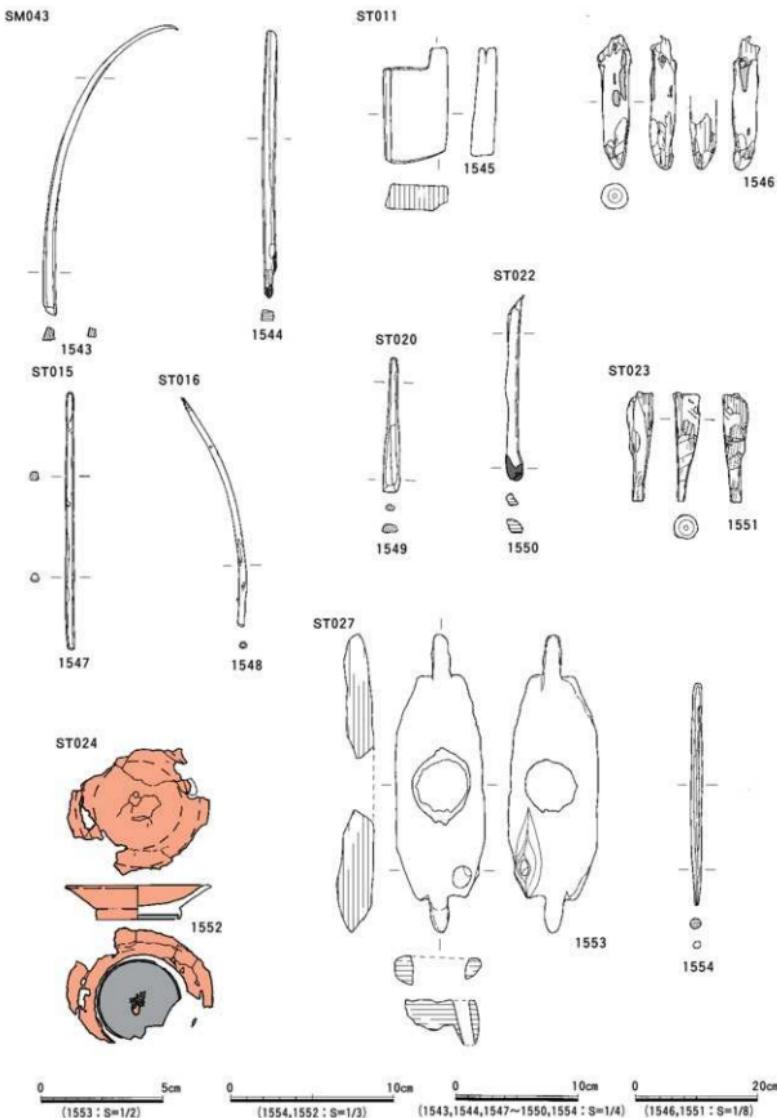
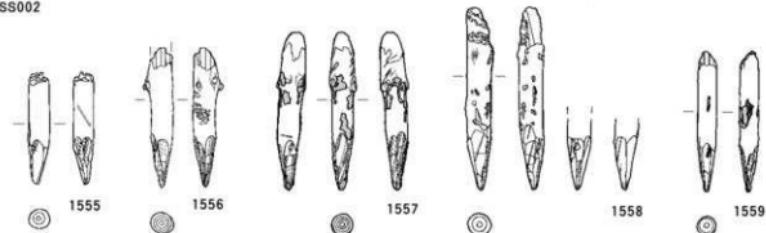
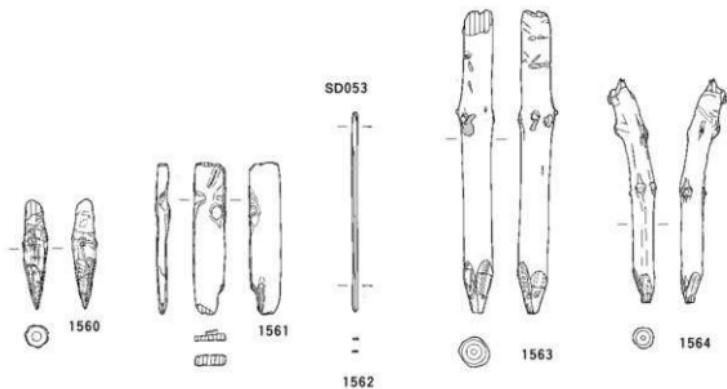


図226 木製品 遺構出土（6）

SS002



SD053



SS004

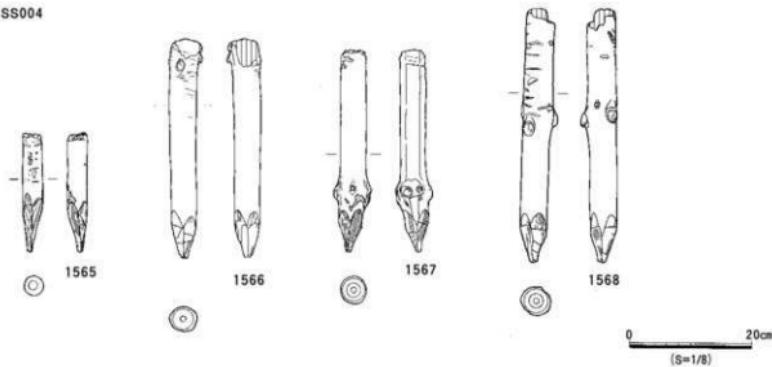
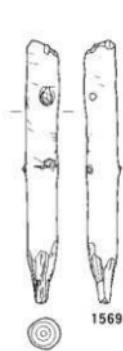
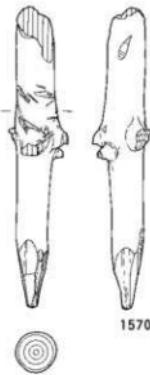


図227 木製品 遺構出土（7）

SS006



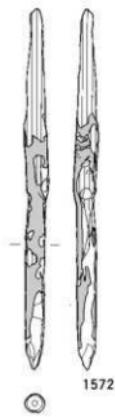
1569



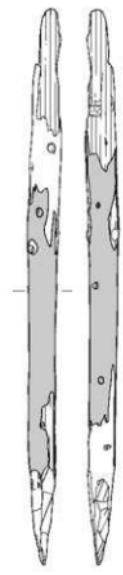
1570



1571

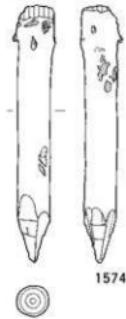


1572



1573

STD055

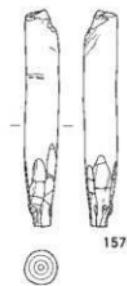


1574

STD10



1575



1576

0
(S=1/8)
20cm

図228 木製品 遺構出土（8）

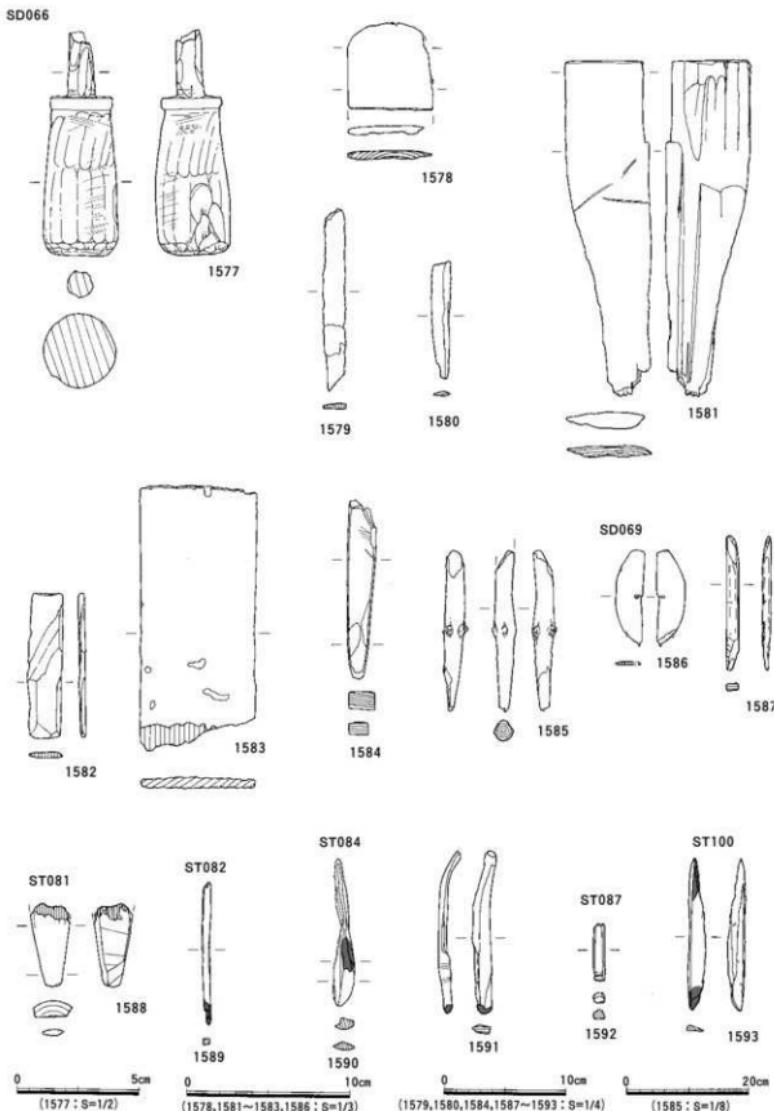


図229 木製品 遺構出土 (9)

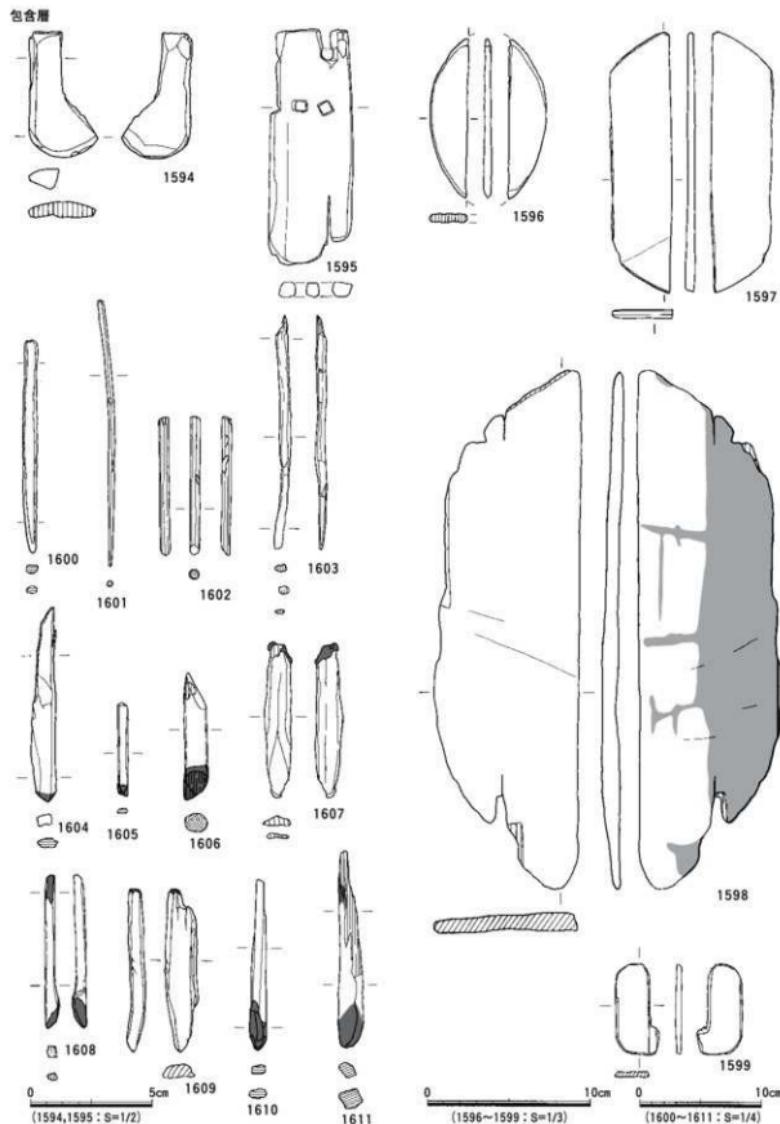


図230 木製品 包含層出土 (1)

包含層

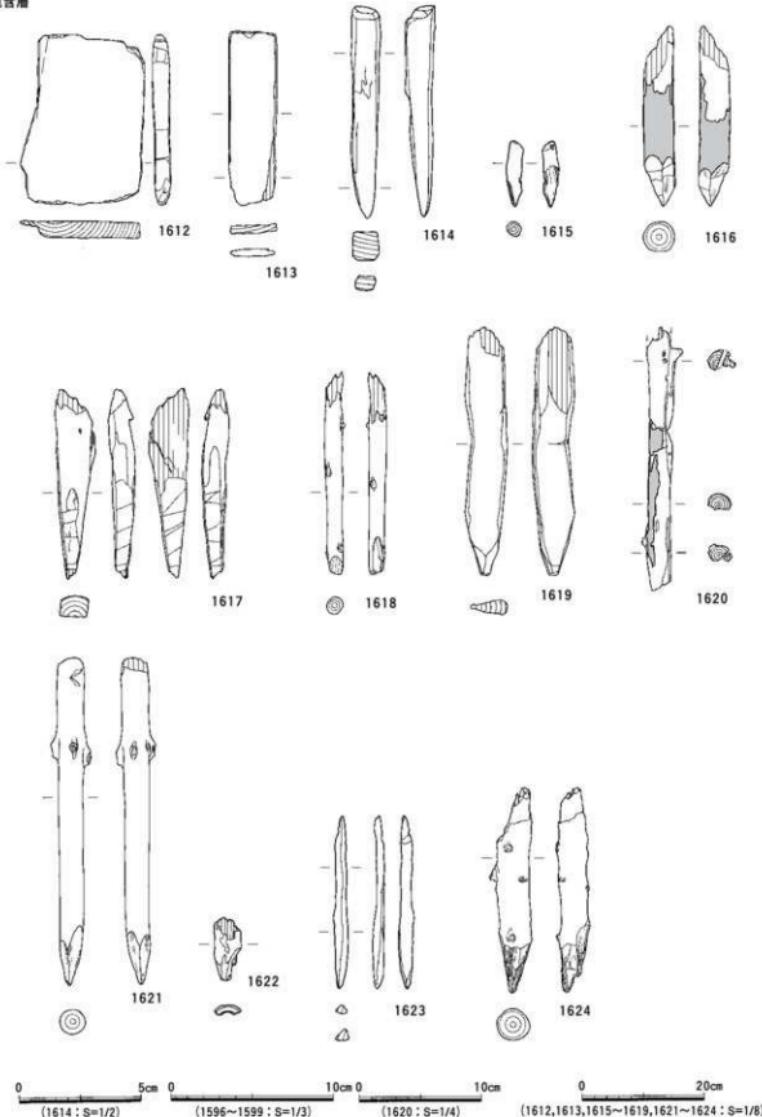
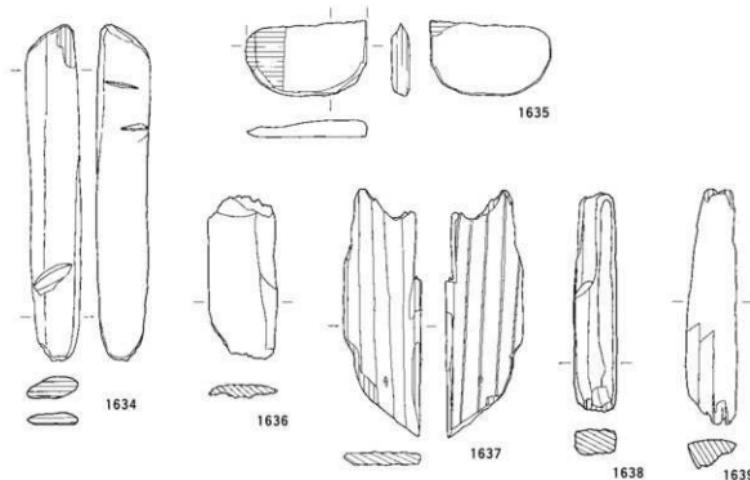
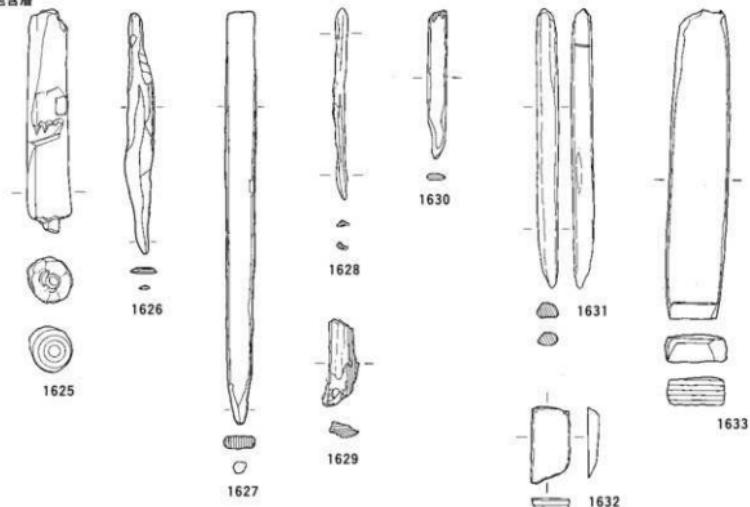


図231 木製品 包含層出土（2）

包含層



0 10cm
(1632~1639 : S=1/3)

0 10cm
(1625~1631 : S=1/4)

図232 木製品 包含層出土（3）

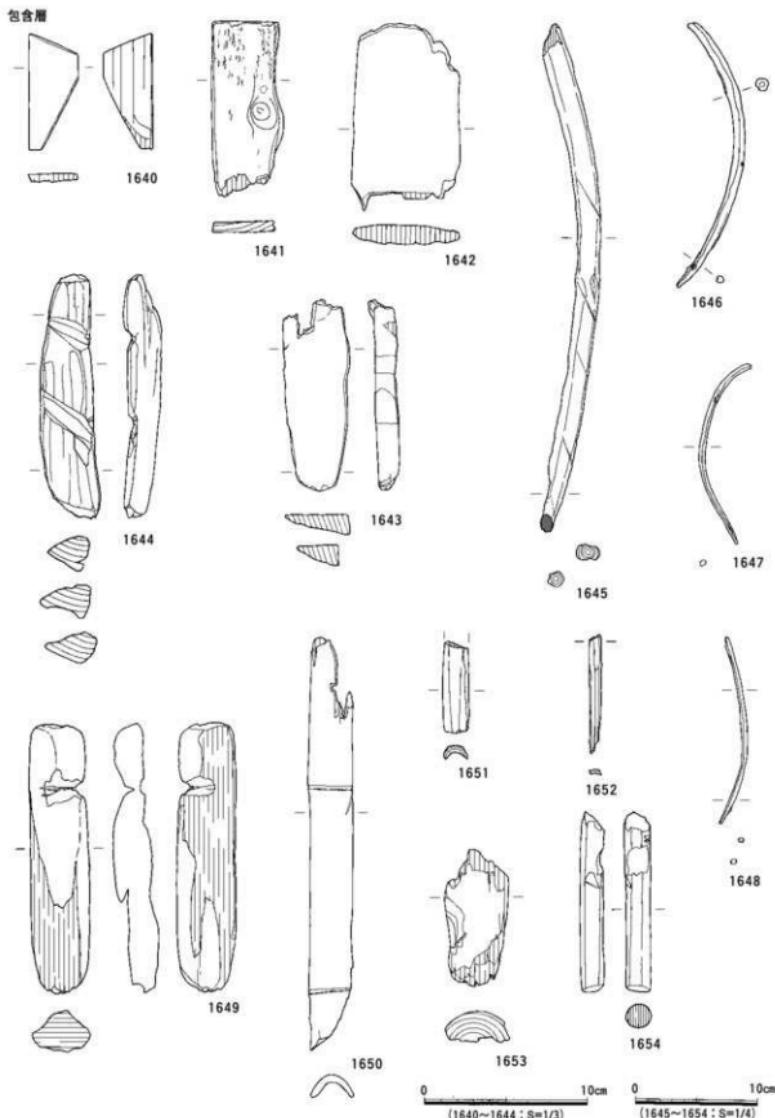
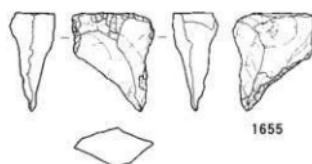


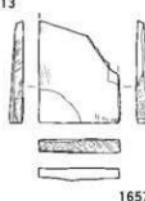
図233 木製品 包含層出土 (4)

SD18



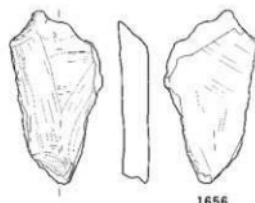
1655

ST013



1657

SD069



1656

ST061



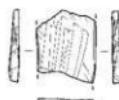
1658

ST062



1659

ST087



1660

0 5cm
(1655,1658,1659 : S=1/2)

0 10cm
(1656,1657,1660 : S=1/3)

図234 石器・石製品 遺構出土

包含層

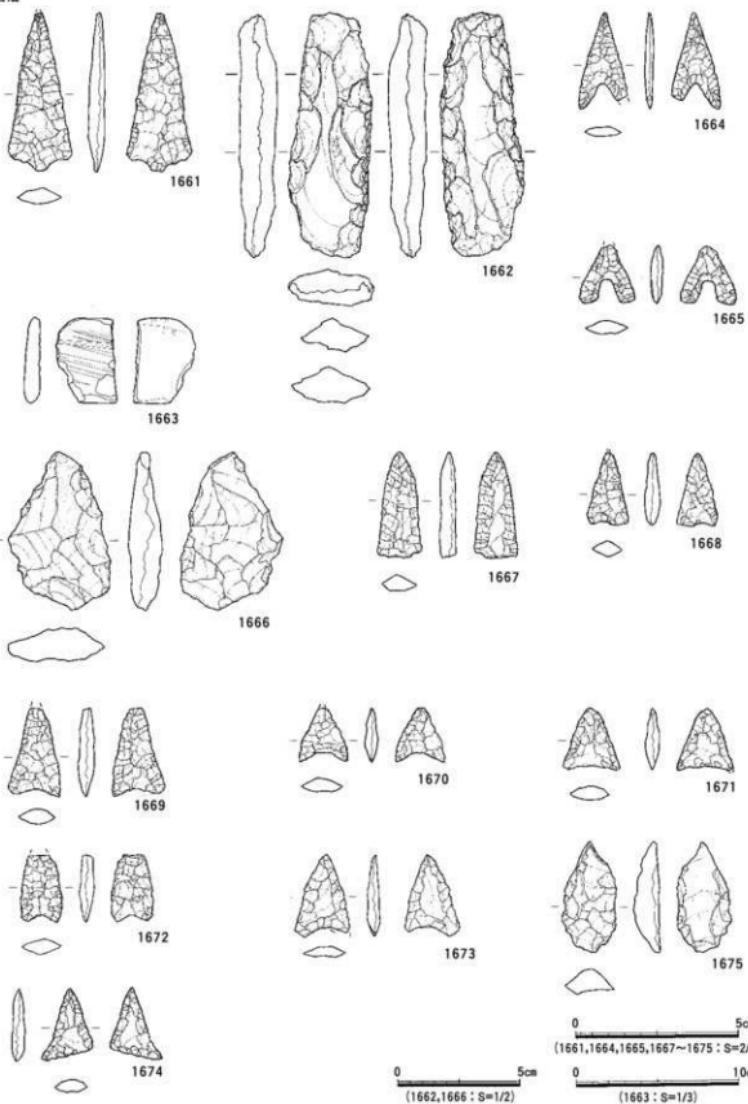


図235 石器・石製品 包含層出土（1）

包含層

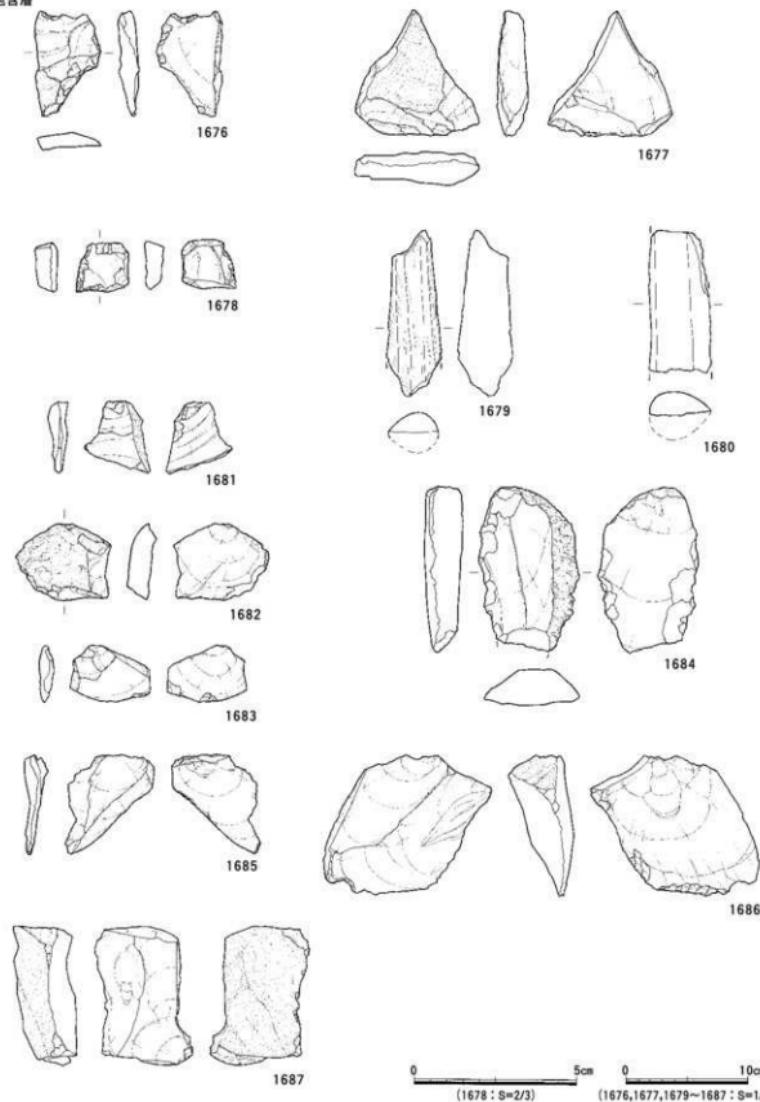
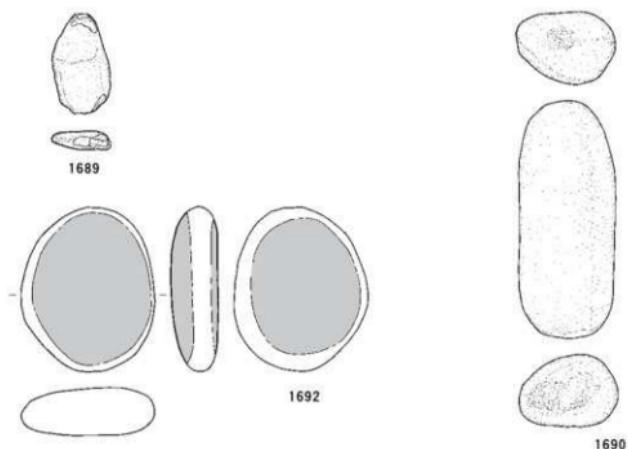
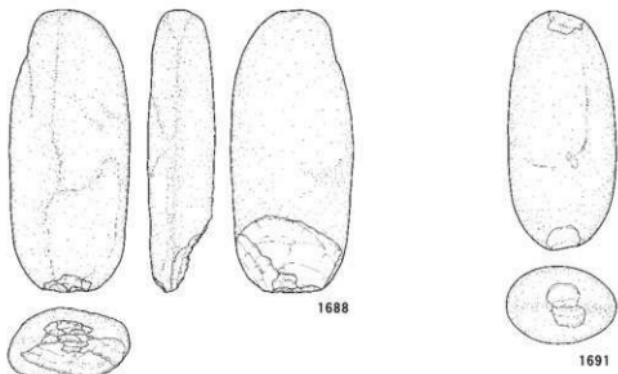


図236 石器・石製品 包含層出土（2）

包含層



0 5cm
(1689 : S=1/2)

0 10cm
(1688, 1690~1692 : S=1/3)

図237 石器・石製品 包含層出土 (3)

包含層

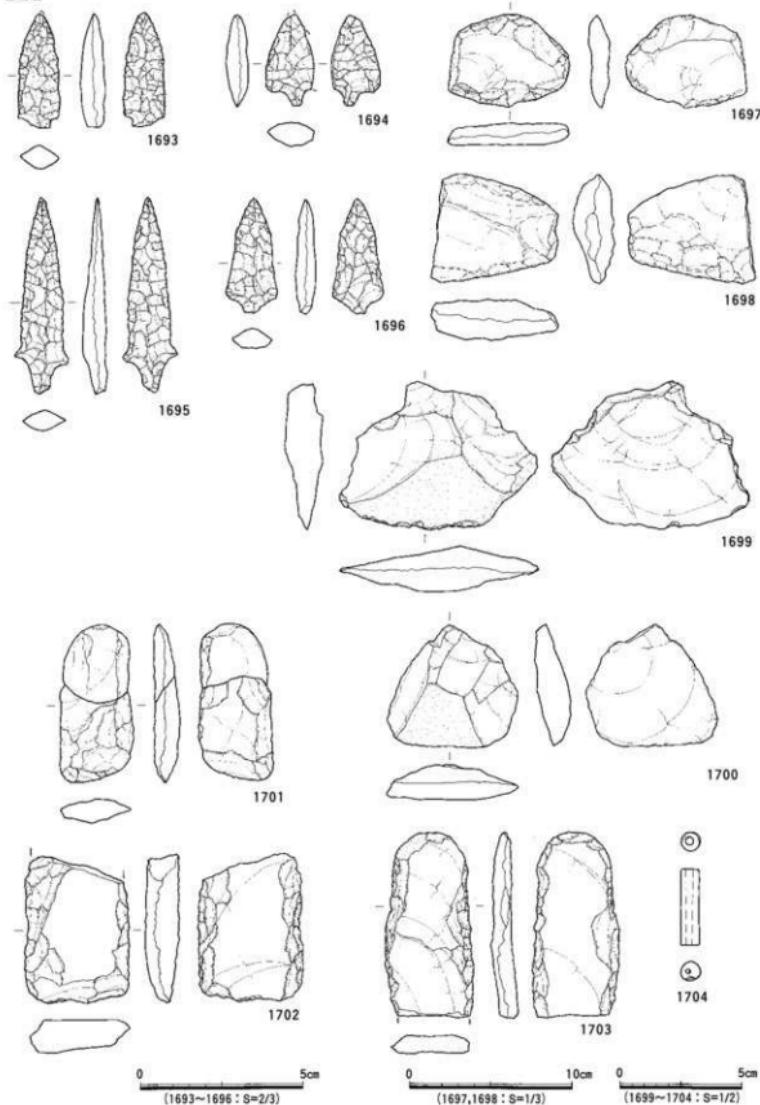


図238 石器・石製品 包含層出土 (4)

包含層

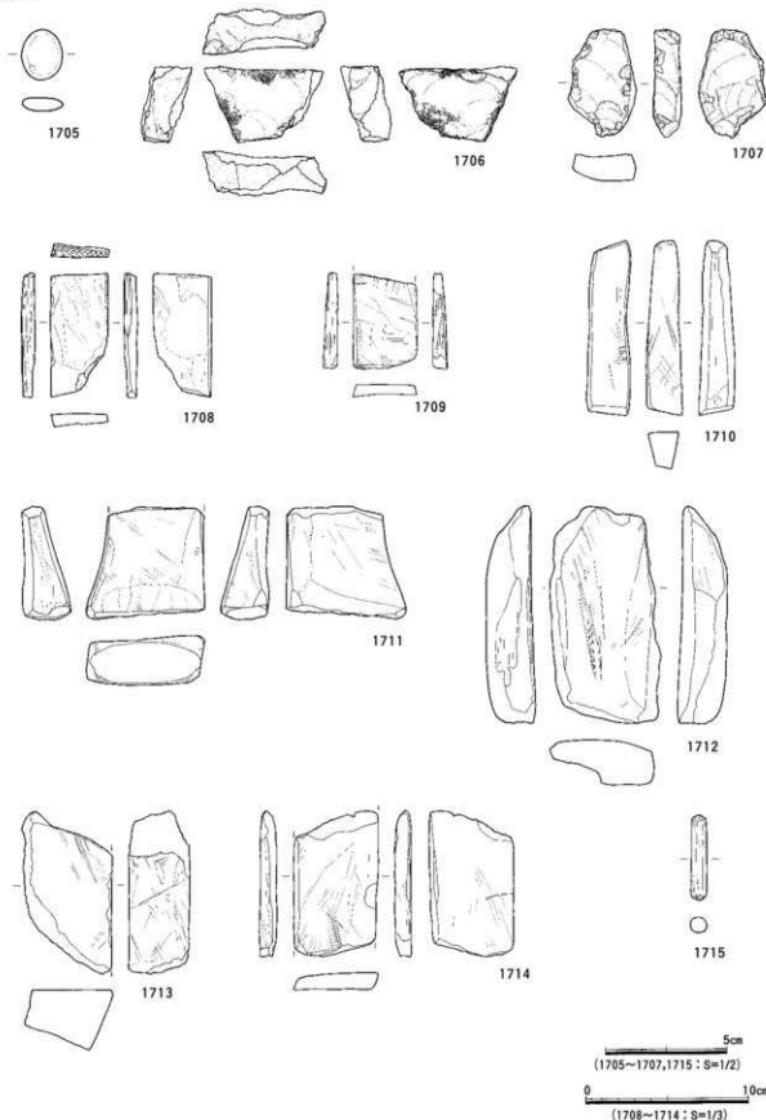


図239 石器・石製品 包含層出土（5）

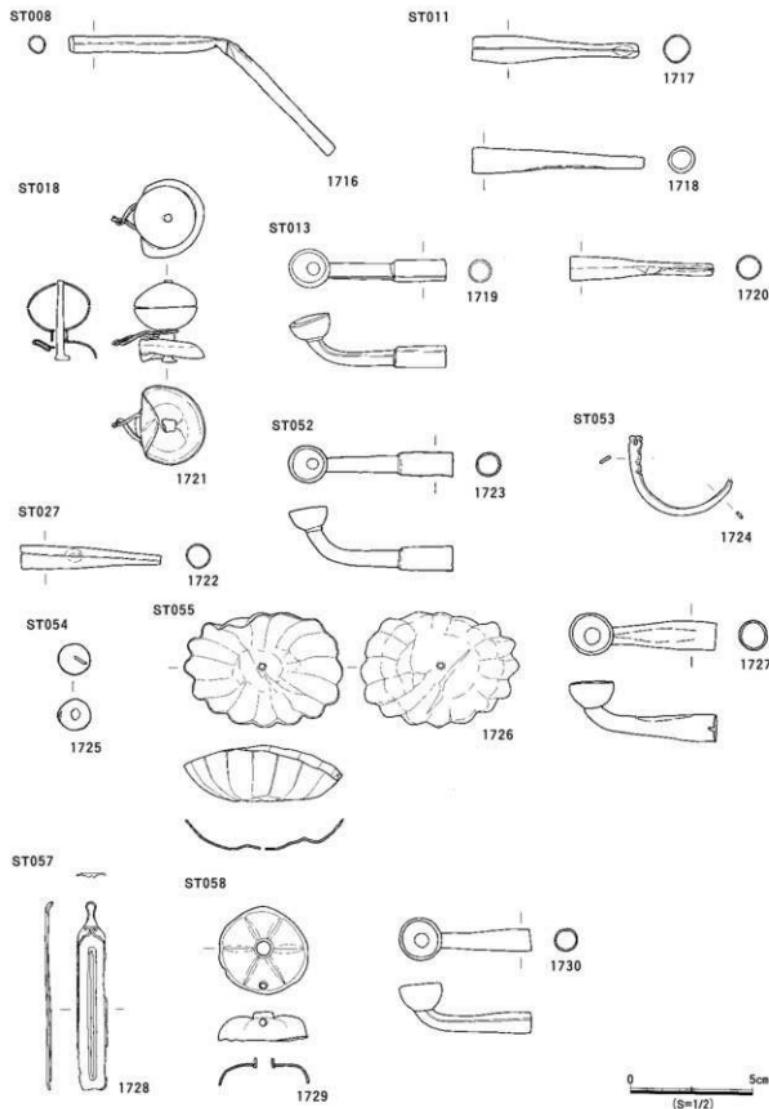


図240 金属製品 遺構出土（1）

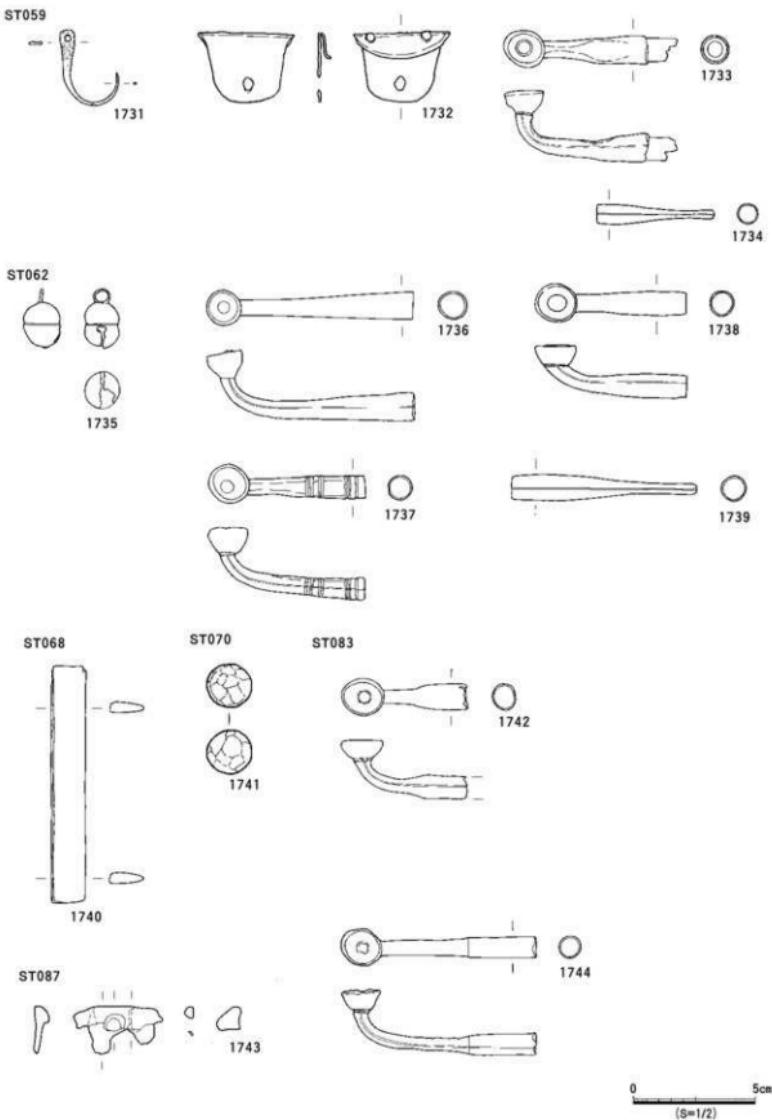


図241 金属製品 遺構出土（2）

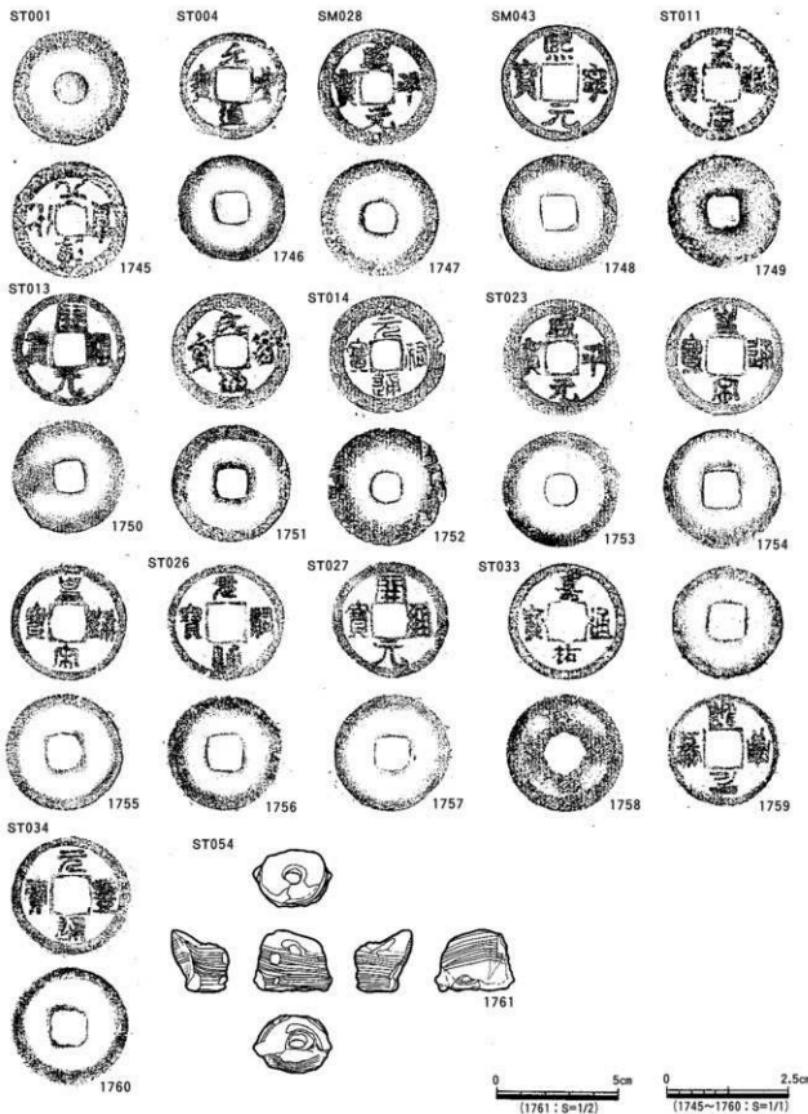


図242 金属製品 遺構出土（3）

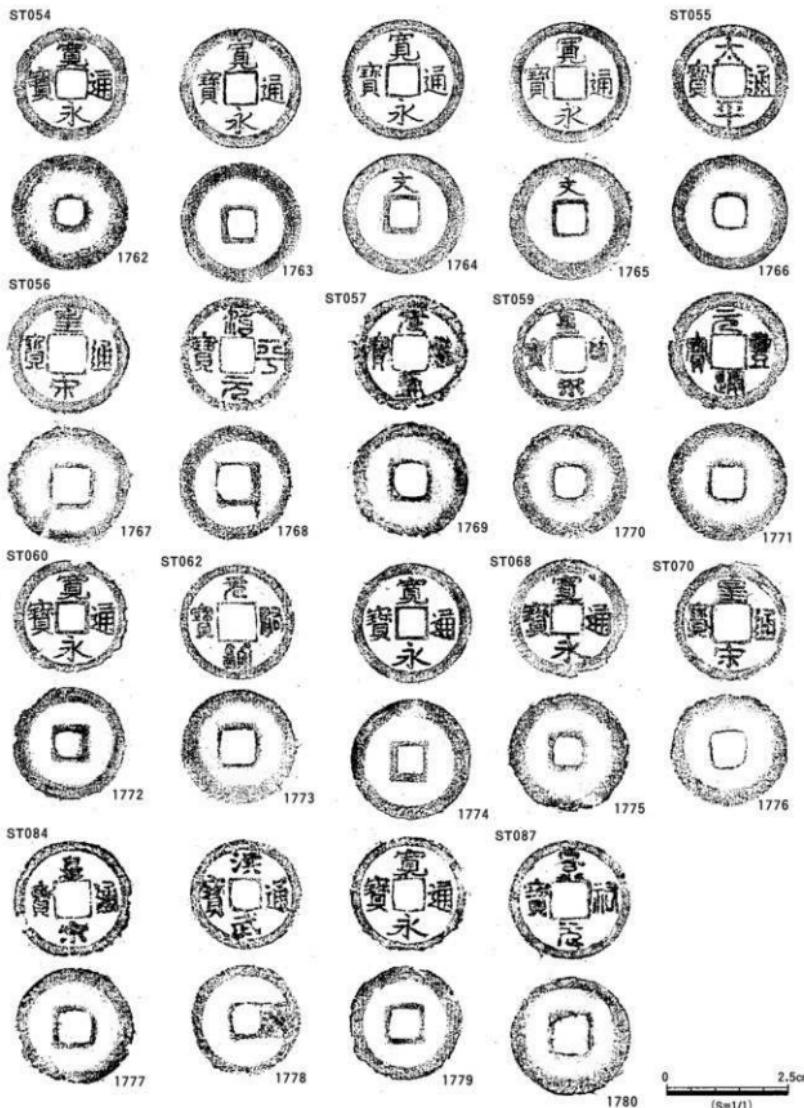


図243 金属製品 遺構出土（4）

包含層

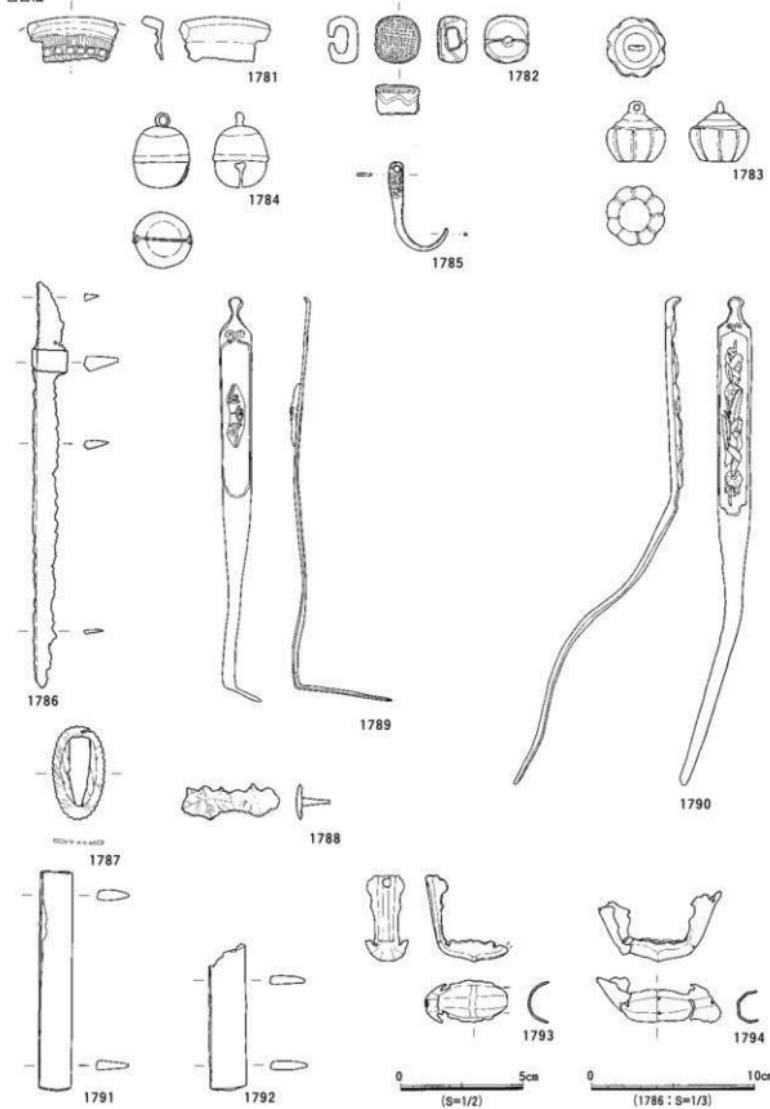


図244 金属製品 包含層出土 (1)

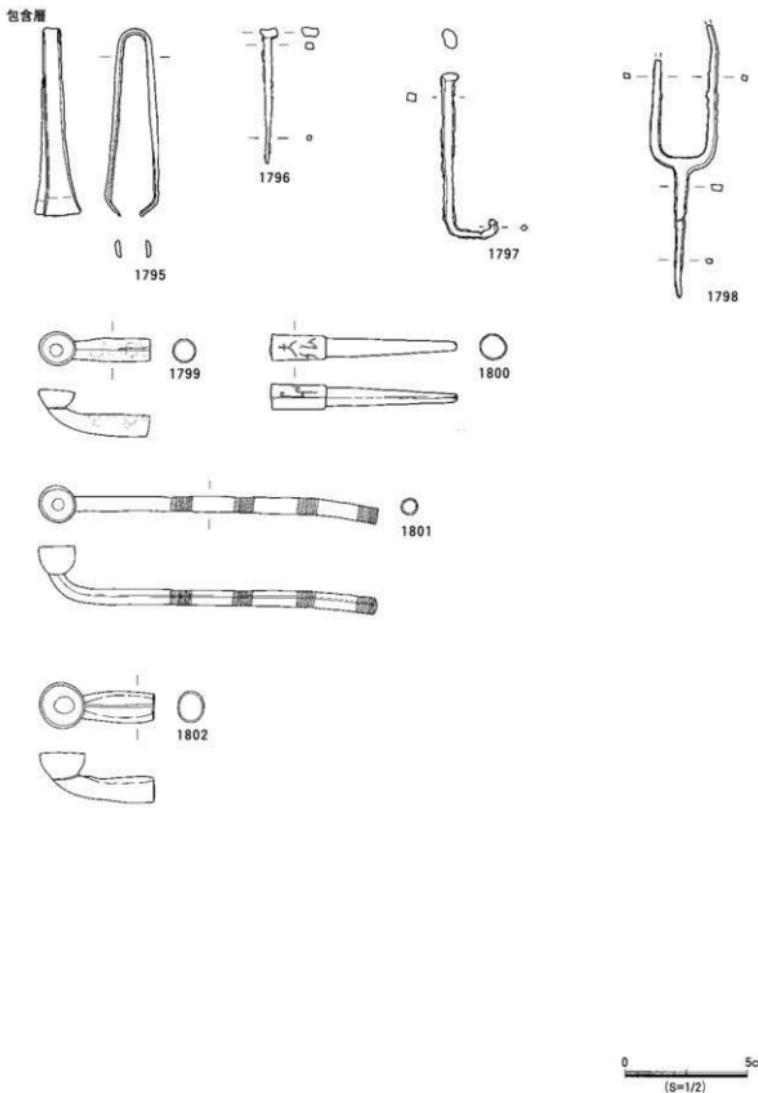


図245 金属製品 包含層出土（2）

包含層

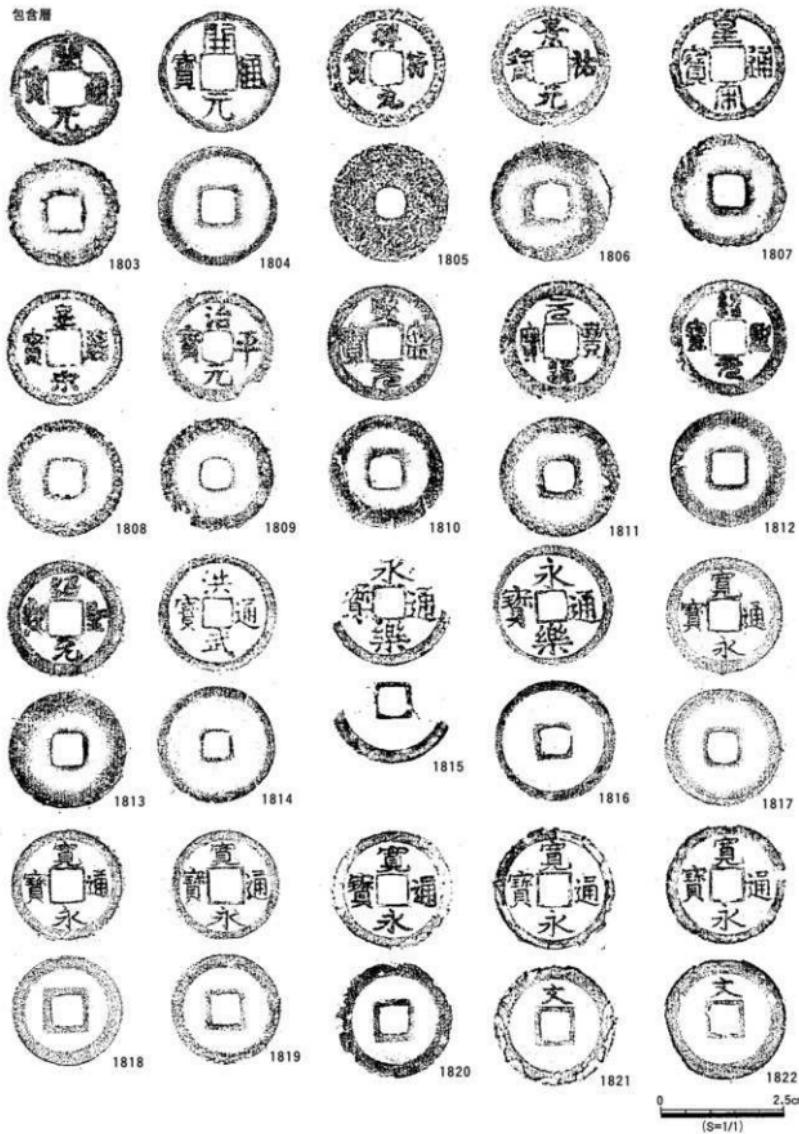


図246 金属製品 包含層出土（3）

報 告 書 抄 錄

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第126集

岩田西遺跡

2013年3月25日

編集・発行 岐阜県文化財保護センター

岐阜市三田洞東1-26-1

印 刷 株式会社 もとすいんさつ